夢の註釋

フロイド
精神分析
学全集 L



T·I·P·A·

精神分析学研究所

フロイド精神分析學全集

夢の註釋

大槻憲二譯

精神分析學研究所

春陽堂

フロイド精神分析學全集

夢の註釋

大槻憲二譯

精神分析學研究所

春陽堂版

譯者序文

只今諸氏の手にせられてゐる書物は、『フロイド精神分析學全集』の第一卷として世に送られたものであつて、その最初の卷を受持つた譯者としては、抑々フロイドとは何者であるか、抑々精神分析學とは何物であるかに就いて大體でよいから正確な概念を提供しておくことが、その任務の一端であるやうな氣がするのであるが、その事は既に本全集刊行の趣意書にも大要を盡されてゐることでもあるからして、私は只今それ等の責務からは免れてゐるものと自ら見なして、直ちに本原書の紹介と、本譯書の說明とに移つて行くことを許されたいと思ふ。

『夢の註釋』„Die Traumdeutung"はオーストリーのヸインのジグムンド・フロイド博士 Prof. Dr. Sigm. Freud が一九〇〇年に第一版を刊行し、一九二二年に第七版を刊行し、その間フロイドの高弟たるオットー・ランク博士、ハンス・ザックス博士等を始め、幾多の人々の助力に依つて今日我々が有する如き體を具ふるに至つたものであつて、實にフロイドが多數の著書の內、質的に最も重要なるものゝ一つであると共に、量的に最も浩翰なるものゝ隨一である。このやうに重要浩翰なるものであ

ると共に、また最も『踏破しがたい困難』な個所を多數に含むものであることは、フロイドが權威的英譯者たるブリル氏 A-A-Brill, Ph. B-M. D. も、その英譯『夢の註釋』の序文中に告白した通りであるからして、邦譯者は、寧ろこの書の代りにこの書を簡明にし、撮要したる『夢の心理』(アンドン・トリドン André Tridon 氏序文) "Dream Psychology" 1921 を以てこれに代へようかと思つたほどであるが、それは如何にも殘念なことであり、折角譯する以上はこの千古の名著をなるべく原のまゝの形に近く邦文讀者の前に提示したく思つたので、やはり原著に就くことにしたのであるが、併しブリル氏の所謂『踏破しがたい困難』な道を、いきなり一般の人々の前に展げることは、斯學未だ普及せざるわが國の現狀に鑒み、好ましからぬことであるからして、なるべくその『踏破しがたい困難』の數を、能ふべくんば減少しておきたく思ひ、そのために本譯書の一小部分は、卽ち最初の三四章は『夢の心理』に依ることゝし、その後の大部分を、原著のまゝにしたのである。それ等の大部分に於いては、英譯者ブリル氏の抄略してゐる個所をも補ひ、また多數興味ある夢の分析實例を復活せしめておいたのである。この書は、實際、難解の個所もあるが、ブリル氏の云ふやうに、一般の人々の讀んで興味ある部分もまた甚だ多いのである。

併しながら、先に斷つたやうに、『夢の註釋』はフロイドの著書中、最も浩翰なるものであるからし

て、全部を一卷に纏め上げることは、本全集中の他の諸書との釣合上均等を缺く不便あるために、一先づその半分だけを飜譯して一卷とし、他の部分は、後に『補説（エルゲンツング）』として別卷に纏めることにしたのであるから、讀者これを諒し、本書を讀まれたる後には、同『補説』をも必ず竝讀せられむことを希ふ次第である。

×

右は昭和四年十二月に公刊せられた第一版の譯者自序の一節である。その後昭和七年三月に第二版を出し、今またこゝに第三版を重刷することゝなつた。この書は本全集の第一卷として、初版當時の或る事情のために、非常に急いで譯せられ、註文の獨文原書がヰインから來着するのを待つの暇なくトリドンの英譯から重譯せられたものであつた。それ故、獨文原書と參照してやゝ不滿の個所少なからず、第二版の時には必ず改訂したいと思つてゐたところ、重版は出版者側に於いて譯者に無斷でなされたのでその機會を得ず、遂に今日に到つた。只今、紙型象嵌の可能なる限り、相當の程度にまで改訂を加へ得たことを、譯者は滿足に思ふものである。やがて大著 „Die Traumdeutung“ の譯が完成して本全集中に位置を占める事になれば、本書の後半は更にフロイドが別の夢の研究を加へて面目を一新するに到るであらう。譯者はその期の一日も早からむことを自分のためにも原著者のためにも、

更に讀者諸賢のためにも饒望して已まざるものである。

昭和十一年九月

譯者識

原著者序文

夢の註釋の論を試みるに就いて、私は神經病理的興味の埒外に乘超えたとは信じてゐない。何となれば、一聯の變態的精神機構の諸々の部分たるヒステリー的恐怖症、强迫觀念、妄覺などは、實際上の根據からして、醫者達の關心を要求するものであるが、夢はこれを心理學的に研究して見ると、それ等變態的精神機構の第一の部分であることが分るからである。それ等と似たやうな實際上の意義を、夢は——やがて見らるゝごとく——要求し得ないが、併し範例としての理論的價値は愈々大であつて、夢の影像の起源を說明し得ずして、恐怖症、强迫觀念、妄覺觀念を、並びに同樣にそれ等の療法學上の影響を、理解することは到底出來ないのである。

併しながら、これ等の事情のために、吾人の主題はいよ〳〵その重要さを得て來てゐるのであるが、また本書の缺陷はその責を這般の事情に歸すべきである。本書所論の中に見らるゝ數々の破片面（ブルーフフレツヘ）はみな、夢の構成が精神病理學の一層廣汎な諸問題に交涉する接觸面に外ならないのであるが、それ等の問題はこゝで論及することは出來ないから、もし時日と根氣とが許し、別の好材料が得られたならば、これを他日の仕上げに期したいと思つてゐる。

私が依つて以て夢の註釋を說明したところの材料が特殊なものであるがために、これを公刊することがまた困難となつたのである。文献に現れた夢、他人の蒐集した夢が、すべて何故に私の目的に役立たなかつたかと云ふことは、本書を見れば自ら分ることである。實例としては、私自身の夢、又は私が分析取扱をした患者の夢を擇ばざるを得なかつた。後者の方の材料は夢の過程に神經症的性質が混ずるためにいろ〳〵込入つて好ましくない事になると云ふ事情のために、私はつとめてこれを利用することを避けた。一方、私自身の夢に關しては、私が公表したいより以上に、また詩人ではなく自然の一探究者としての著者の一般的任務より以上に、私の精神生活の祕事をさらけ出さねばならないと云ふ事情が、必然的に伴うてゐた。これは甚だ困つたことだが已むを得ないことであつた。私は自分が心理學上研究し得たところの眞であること證明するのを全然放棄しないためには、仕方のないことは我慢するより仕方がなかつたのだ。勿論、私は多くの不面目なことは省略したり置換へたりしようとの企てを超越することは出來なかつたが、その度に私の用ゐた實例の價値は減損せらるゝことになつた。で、私は本書の讀者諸氏が私の苦しい立場に自分を置いて見て、私を寛容せられ、またこゝに報ぜられた夢の何れかに不快を感ずる人があつても、少くとも夢の生活には思想の自由を許容して頂きたいと希ふことが出來るだけである。

目次

附　錄

夢の註釋

第一章

夢に意味あり

『科學前期』とも云ふべき時代に於いては、人々は夢の判斷に就いて何等遲疑するところはなかつた。覺醒後に夢を思ひ出した時には、それ等の夢は何か人間以上の力——惡魔か神か——の好意ある又は敵意ある顯現と考へられた。科學思想の勃興と共に、このやうな剴切な神話は全部、心理學に委讓せらるゝことゝなつた。今日では敎育のある人々の間では夢が夢見た人自身の心的行爲であることを疑ふやうなものは殆ど稀である。

けれども神話的假說の沒落以來、夢の註釋と云ふことはなくなつてしまつてゐた。夢の起源の條件、覺醒時に於ける我々の心理生活に對する夢の關係、睡眠狀態の間に騷がれてそのために注意を强ひられるやうに思はれるが、夢はそれには關係がないといふこと、或る夢の影像がそれとは似ても似つかぬ感情を惹起すこと、それから夢の消え易いこと、覺醒後に我々の意識が夢を何か奇體なものとして押除けるその押除け方、また我々の回想が夢を改刪したり拒否したりすること——總てこれ等の、並

びに他の多くの諸問題は幾百年の間答案を要望して來たが、その答案は今日まで未だ嘗て滿足なものはなかつたのである。何よりもまづそこに夢の意味に關する問題がある。これはそれ自身に二方面を持つ問題である。第一に夢の心理的意義である、心理的過程に於ける夢の位置である、何か一つの生物學的機能に於ける夢の位置である。第二に、夢には一つの意味があるか、他の心的綜合からは意味が汲めるやうに、個々の夢から意味が汲めるか。

夢の評價に於いては三つの傾向が見られる。多くの哲學者はこれ等の諸傾向の一つを流行せしめてゐる。その一つは同時に、昔ながらの夢の買被りを幾らか保存してゐるのである。夢の生活の基礎は彼等にとつては、心理的活動の一つの特殊の狀態であつて、その狀態に依つて或るより高い狀態に登攀するのだと云ふので、彼等は非常に大切にするのである。例へばシウベルト Schubert の如きは、『夢は精神を外的自然の壓迫から解放することであり、物質の桎梏から靈性を脫却せしむることである』と云つてゐる。總ての哲人がこの通りだと云ふのではないが、併し大抵の人は夢が現實の精神的亢奮にその起源を有し、晝間に自由に發動することを遮ぎられた精神力が外部に顯現したものだと主張するのである。(『夢のファンタシー』、シェルネル Scherner フォルケルト Volkelt) 多くの觀察者は、夢の生活が、少くとも或る分野(記憶)に於いては、異常な働きをなし得るものであることを承認してゐる。

これとはまた正反對に、大部分の醫學者たちは夢が抑々心理的現象であると云ふことを認めないのである。彼等に依れば、夢は感官又は肉體から來る刺戟に依つて、專ら惹起されるものである。その刺戟と云ふのは外部から睡眠者に達するか、或はその人の內的器官が偶然に擾亂せらるゝことなのである。夢が何らの意味や重要さを持たないことは、宛も音樂のヅブの素人が樂器の鍵盤の上に十指を走らせて搔立てた音響と同じである。夢は『常に無用な、屢々病的な肉體的過程として』考ふべきだとビンツ Binz は云ふ。夢の生活の一切の特殊性は或る器官の、又は夢見てゐる以外の點では眠つてゐる頭腦の皮質的要素の、纒まりもない骨折り（何か生理的刺戟に因る）だと解せらるゝ。

併し科學者の意見には頓着なく、また夢の起源などには煩はされずに、一般人は夢が實際に一つの意味を持ち、何とか未來を豫言するものであると共に、またその意味は屢々奇體で且つ謎のやうな夢の內容から何とか彼とかほぐし出すことが出來るものだと云ふことを固く信じてゐるのである。夢判斷とは夢の出來事を、記憶してゐる限りに於いて、他の出來事に置換へることであるのだ。これはいいいいいいい何等かの嚴密な要訣に依つて、場面と場面とを置きかへたり、或は夢全體をその夢に依つて象徵せられてゐる何物かに置換へたりしてやるのである。眞面目な御仁たちはかう云ふ努力を嗤笑する――『夢なんか海の泡さ！』

嘗て私は發見して驚いた次第だが、迷信に基く一般の見解が、醫者の見解よりも、夢に關しては眞理に近いのである。私は心理探究の新しい方法を用ふることに依つて、夢に關する新結論に到達したのである。その方法に依つて私は恐怖症、强迫症、錯覺などの研究に甚だ獲るところが多かつた。さうしてその方法は『精神分析』の名に依つて或る一派の研究者の全體に採用せらるゝことになつたのであつた。夢の生活が覺醒狀態に於ける精神病の各種雜多な狀態といろ〳〵に類似してゐることは、多くの醫學者に依つて正しくも主張せられてゐる。であるから、精神病理學上の過程で試驗せられた研究の方法を、夢の註釋に適用することは有望であるやうに、先驗的(アプリオリ)に考へられたのである。强迫觀念や、さまざまな特殊の不安觀念などが常態(ノルマル)の意識にとつて奇異であることは、夢が我々の覺醒意識に奇異であるのと同じである。それ等恐怖の起源が意識に知られざることは夢の起源と同じである。これ等の病氣に於いて、我々は實際上の目的に强要せられてその起源と構成とを測定するやうになつたのである。經驗の結果、吾人には、强迫觀念の治癒、竝びにその結果それを支配することは、病的觀念と自餘の心的內容との連結環たるそれ等の强迫觀念が、一朝意識面に（これまでは匿れてゐたのが）出て來た時に於いてゞあることが明となつた。夢の註釋のために私の用ゐた方法は、このやうに精神治療法から起つて來たのである。

その手續きは、それを實施するには訓練と經驗とを要するけれども、說明することはわけはない。まづ、病者が激烈な病的恐怖に惱んでゐると假定せよ。吾人は病人に問題の觀念に注意を向けさせる。が、併し、これまで屢々して來たやうに、その觀念に關して瞑想するのではないのだ。これに關して彼に起る一切の印象は、一つの例外もなく、醫師に告げさせる。その時恐らく病人は全く何物にも注意を集中することは出來ないと云ふであらうが、それに對してはそのやうな心の空白狀態は全然あり得ないのだと云ふことを具さに說きさとさねばならぬ。實際、幾多の印象が直ちに生じて來る、それと共に他の印象もそれに關聯して生じて來る。これ等の印象には必ず觀察者としての意見の表白がつきまとふものである、つまり無意味な印象だとか、重要でない印象だとか云ふ――。で、この自己批評のために病人がその觀念を吐き出すことを妨げられてゐるのであり、またそのために既に意識から除外されてゐるのだと云ふことが直ちに分るのである。もしも病人がこの自己批評を捨て、注意を集中することに依つて得らるゝさまざまな思想の連結を追及することが出來るやうになるならば、最も重要な事柄を捉へることが出來るのである、卽ち問題の病的觀念に明かに連結してゐると直ちに分るであらう事柄を捉へることが出來るのである。その事柄が他の觀念と結合してゐることが明白となり後にはその病的觀念に代ふるに新鮮な、精神の連續性に完全に適合する新鮮な觀念を以てするやうに

なるであらう。

只今我々はこの實驗が依つて以て立つところの假定を、或はこの實驗がいつも必ず成功することから引出せる推論を、十分に檢覈してをる場合でない。たゞもし吾人が我々の思想を擾亂するところの招かれざる聯想へと吾人の注意を特に向けるならば、一切の病的觀念を解體せしむるに足る事柄を獲得するのだと云ふだけで滿足せねばならぬ。もしこの手續を自分自身に實施するのならば、この實驗を助くる最上の方途は、自分の一切の最初の判然せぬ空想を直ちに書き止めるのである。

さて、私はこの方法を夢の檢覈に適用した場合にはどうなるか、それを示さうと思ふ。どのやうな夢でもこの方法で行けば役に立つのである。併し或る動機から、私は私自身の夢を探らうと思ふ。私の記憶には混亂し無意味のやうに思へるが、併し簡單であると云ふ取柄がある夢を採らうと思ふ。多分私の昨夜の夢がその要求に協つてゐる。その內容は眼覺めて後直ちに書きとめたのだが、次のやうである。

『食堂、卓（テーブル・ドート）又は共同食卓に向つて。……ほうれんさうの皿が出てゐる。ＥＬ夫人が私の隣に掛けて、私の方に專念注意を向けてゐる。さうして手を私の膝の上に馴々しくかける。それを防ぐために私は彼女の手を除ける。その時彼女は云ふ。「だつて貴方はいつもそんな美しい眼をお持ちなんですもの。」

……私はその時、素描畫(スケッチ)のやうな、または眼鏡のレンズの輪廓のやうな、二つの眼のやうなものを漠然と見た。……』

　これが全體の夢である、或は少くとも、私の思ひ出し得る總てゞある。それは私には甚だ漠然としてをり、無意味であるばかりでなく、それ以上に特別にをかしいのである。ＥＬ夫人と云ふのは訪問し合ふ間柄でさへない人物である。それにこれ以上親密になりたいと思つた覺えもない。私は彼女とは久しく會つた事はない、また彼女のことを近頃考へて見たとも考へられない。何の情緒も夢の過程に伴ひはしなかつた。

　この夢を反省して見たゞけでは、この夢は少しも私の心に明白にはなつて來ない。併しこれから、私は豫考も批判もなしに、内省の結果得た觀念を呈示して見よう。私はこの夢を要素に分解して、各斷片に自らを連結してゐる觀念を探索するのが得策であることに氣付くのである。

　食堂、卓又は共同食卓に向つてゐる。昨晩の終りに起つたさゝやかな出來事の追懷が直ちに呼出される。私は或る友人の會社の小集から辭去した。彼は私を彼の馬車(カップ)に乘せて送らうと申出た。『僕はタクシの方が好きなんだ』と彼は云つた。『タクシは坐り場所が愉快で、何か見るものがいつもあつてね』我々は馬車に乘込んで、馭者が圓板(ディスク)を轉じて最初の六十ヘルレル(錢)が見えるやうにした時に、私は

冗談を續けた。『我々は乘つたかと思ふと、早六十ヘルレルを借りてゐるのだね。タクシはいつも僕に共同食卓（テイブル・ドート）を思はせる。タクシは絶えず僕に僕の借りを思ひ起させる事に依つて、僕を食慾にし利己的にする。僕にはそれがあんまり早く昇りすぎるやうな氣がする。さうしていつも僕は不利益に陷るやうな氣がする。それは丁度共同食卓（テイブル・ドート）では自分があまりに少ししか喰べないやうな、自分を警戒してゐなければならないやうな、滑稽な不安を感ずることを拒み得ないのと同じだ。』これと遙かな聯關もあるから、この詩を引用しておく。

『地上に、この慘めな地上に、そなたは我々を連れて來た。
そなたは人類に罪（シュルド）(借金)をさせるのだ。』

共同食卓に關して、も一つの想起がある。數週間前にティロールの養生園で晝食の時に、私は自分の愛妻と啀み合つてゐた。と云ふのは、彼女が、私の絶對に交渉したくないと思つてゐる或る隣人たちに對して十分な隔意を保つてゐなかつたからである。私は彼女に他所の人と一緒にゐるよりは、寧ろ私と一緒にゐて貰ひたいと乞うたのである。それは丁度共同食卓で不利益に會つたやうなものである。食卓での妻の行動と夢の中でのＥＬ夫人の行動との對比が今や私に首肯けた。『私の方に專念注意を向けてゐる。』

更らに、今や、この夢が、私のひそかに彼女を口說きつゝあつた時分に、妻と私自身との間に起つた一小場景の再寫である事が、私に分つて來た。テーブルクロースの被ひの下で抱きかゝつた事は、求情者の熱烈な手紙に對する應答である。夢の中では、併し、妻は馴染の淺いＥＬ夫人で置換へられて居る。

ＥＬ夫人は私の借金してゐた人の娘である。私はこゝにおいて夢の內容と私の思想との間の思ひもかけぬ連結が暴露せられてゐる事を氣付かないわけに行かない。もしも夢の或る一要素から出てゐる聯想の鎖を追うて行つたとしても、我々は直ちにその夢の他の要素へと連れ戾される。夢の惹起す思想は、夢それ自身に於いては氣付かれなかつたところの聯想を呼覺ますものである。

他人が彼等自身の利得にはならないのに、たゞ自分の利益を求めて呉れると期待してゐる人がある場合には『これが貴君の美しい眼のためになされるのだと思つてゐるのですか』と無邪氣な質問を皮肉に云ふのが普通ではないだらうか。夢の中でのＥＬ夫人の言葉はこゝから來てゐる。『貴方はいつもそんな美しい眼を持つてゐらつしやる』は『人々は貴方を愛するために、いつも一切の事をしてゐる。貴方は何もしなくて一切を得てゐる。』と云ふ事に外ならぬ。その反對は勿論本當である。私は他人が私に示してくれた如何なる親切に對しても、いつも厚く報いて來た。けれども、昨日友が彼の馬車に

乘せて私を家に送つてくれた時に、一文も拂はずに馬車に乘つたと云ふことは、私に一つの印象を與へたに違ひない。

何れにもせよ、昨日我々が訪客となつたその友からは、屢々私は好意の受け越しになつてゐた。近頃、私は彼に報ゆべき機會を一つ遣過した。彼は私から唯一つの贈物を受けたゞけである。それは昔の肩掛けで、その上には一面に澤山の眼が描いてある。それは所謂 Occhiale(一) であつて、Malocchio に對する禁壓としてゞあつた。それに、彼は眼科專門醫で、その同じ晩に、私は嘗て彼のところへ眼鏡の事で遣つた患者の事を尋ねたのであつた。

〔註〕(一)ラテン語の oculus (眼)から來た語であるらしい。眼のお守りと云ふ程の意か。Malocchio は凶眼とでも譯すべきか。その眼に睨まれゝば、睨まれたものに不幸が來ると信ぜられてゐる眼。(邦譯者)

私の述べた通り、この夢の殆ど總ての部分はこの新しい關係に持來たされたのである。併しなほ私は調べて見たい、何故この夢に於いて卓に出てゐたのはほうれんさうであつたのかを。何故と云ふにほうれんさうは、我が家の食卓で近頃起つた一小場景を呼び覺ます。本當に賞讃に價する美しい眼を持つた一人の子供が、ほうれんさうを喰べることを拒んだ。私も子供時代には丁度その通りで、永い間私はほうれんさうが嫌ひであつたが、後年になつて私の嗜好が變つてからはそれは私の好物の一つ

となつた。ほうれんさうが出たので私の子供時代とこの子供のそれとが近接させられたのである。『ほうれんさうが戴けるのはうれしいと思はなければなりませんよ』と母親はこの小さい美食家に云つたのであつた。『はうれんさうを戴くのを非常に喜ぶ子供もゐるんですよ。』かうして私は兩親の子供に對する義務を思ひ出すのである。ゲーテの言葉たる

『地上に、この慘めな地上に、そなたは我々を連れて來た。

そなたは人類に罪(借金)をさせるのだ。』

はこの夢に關しては、また別の意味を採るのである。

こゝで一先づ止めておいて、私は夢の分析の結果を約說して見よう。その前後のものから切離されてゐる夢の單一要素に連つてゐる聯想を辿つて行つて、私は一團の思想と回想とに到達したが、そこに私は自分の精神生活の興味ある表現を認めざるを得ない。夢を分析することに依つて獲たものは夢の內容と密接な關係にある。併しこの關係は甚だ特殊的で、直接夢自體から新發見を推論し得なかつたほどである。その夢は無情熱で、無聯關で、而も不可解なものであつた。夢の背後にある思想をほぐしてゐる間に、私は强烈な、充分に根柢のある情緖を感ずる。思想自體は互に美しく調和して鎖狀となり、その鎖は常にそれ自身を繰返すところの或る中心的觀念と論理的に互に結ぼれ合つてゐる。

そのやうな觀念は夢それ自身の中には現れずして、この場合には利己的と非利己的、貰ひ越しになつてゐると只働きをしてゐるなど、相反するものとなつてゐる。分析に依つて明となつた織絲をもつて丁寧に引出すことも出來ようし、またさうしてそれ等の絲が如何に互に絡り合つて一つの結ばれとなつてゐるかをも明かにし得るやうになりたくも思ふが、併し學問的性質の顧慮からでなく、私的性質の顧慮から私はこの仕事を公にすることを憚る。自分のものと認めたくない多くの事を明かにした後には寧ろ私の祕密として殘しておきたかつたやうなことも啓示しなければならないであらう。では、どうして私はその分析を公表するに適したやうな夢を選ばなかつたか。さうして分析に依つて暴露せられた結果の意味と脈絡とのより公明な納得を得させるやうにしなかつたか。その答へは、何となれば私の調べる一切の夢は同じ困難に導き、私に同じやうな遠慮の必要を感ぜしむるからである。まして他人の夢を分析した場合にはかう云ふ困難はなほさら無視するわけには行くまい。それをなし得るのは、私を信頼してゐる人々を傷けることなしに、一切の祕密を放擲し得るやうな機會が來た時のみである。

で、今や私の與へなければならない結論と云ふのは、夢が完全な分析の後に私の到達した情緒的、知力的思想系列に對する一種の代償であると云ふことである。私は未だその夢が如何にしてそれ等の

思想から生じたかの過程を知らないけれども、併し私はその夢を精神的に重要ならざるものであり、睡眠のために眼覺めた孤立的な皮質的要素の活動から生じた純粋に物的過程であると考へることの誤りであることは知つてゐる。

更にまた私は、夢が、夢に依つて置換へられてゐる（と私の斷ずる）思想よりも、遙かに短いものだと云ふことを云つておかねばならない。分析の結果、その夢は、結夢前夜のつまらない出來事のために惹起されたことが發見されはしたが……。

勿論私は、もしたゞ一つの分析だけが私に知れてゐるのであつたならば、そのやうな遠大な結論を引出さうとは思はないのだ。經驗に依つて私は、如何なる夢の連絡でもこれを正直に追及して行くならば、そのやうな思想の鎖が引出され、夢の構成部分が正確に歷々と互に結合して再現するものだと云ふことを知つたのである。このやうな連續はたゞ一寸觀察した時の單なる偶然ではないかと云ふやうな考へは、だから、絕對に放棄しなければならぬ。であるから、私はこの新しい見解を一つの固有の術語に依つて確立することを私の權利として考へる。私は、私の記憶が呼出す夢と、夢竝びに、分析に依つて引出された他の附加物とを對比する。前者を私は夢の顯在內容と呼び、後者を（始めの內はこれ以上小分けせずに）その潛在內容と呼ぶ。で、私はこれまでに決定しなかつた二つの新問題に

到達する。(一)夢の潛在内容を顯在内容に變改する精神的過程は何であるか。(二)そのやうな變改を必要とする動機は何であるか。潛在内容から顯在内容へと變化される過程を、私は夢の仕事と名付ける。これに對比するものは分析の仕事であつて、これに依つて反對の變改が生ずる。夢の他の問題——夢への刺戟物に關する、夢の材料の根源に關する、夢の可能なる目的に關する、夢の機能、夢の忘却に關する探究——これ等は私は夢の潛在内容に關聯させて論じようと思ふ。

顯在内容と潛在内容との混同は、私は極力これを避けようと思ふ、何となれば、夢の生活に就いての一切の矛盾した、また不正確な話は、分析に依つて今や始めて明かとなつた此の潛在内容を知らぬために生ずると思ふからである。

夢の潛在思想が顯在思想へと轉換する事は、心的材料が一つの表現形式から他の形式に變改する、最初に知られた實例として、吾人の嚴密なる研究に價する。つまり、直ぐに分る表現方法から、我々がたゞ努力と指導とに依つてのみ透視し得る別の表現形式へと變改するのだ、尤もこの新方法は我々自身の精神活動の一つの努力として同等に評量せられなければならないものではあるが——。夢の潛在内容と顯在内容との關係と云ふ見地から、夢は三種に分類することが出來る。我々はまづ第一に、意味があつて同時に分る夢、それ以上骨折らずに我々の精神生活に潛入せしむるやうな夢を擧げるこ

とが出來る。そのやうな夢は數は多いが、短いのが常である。また概して非常に注意すべきもの〻如くには思へない、何となればそこには凡そ著しいもの、驚かせるやうなものは一切缺如してゐるからである。それにまた、さう云ふ夢があると云ふことは、夢を或る皮質的要素の孤立的活動から引出す學說に反對する强い論證となるのである。低下した、叉は小さく分裂した精神活動の徵證は全然見られない。けれども吾人はそれを夢と認めることに何等の異議を申立てないし、またそれを吾人の覺醒時の所產と混同もしないのである。

第二の夢は、實際はそれ自身に脈絡あり、また判然たる意味を持つてゐるが、併し我々がそれ等の夢の意味を我々の心的生活と一致せしむることが出來ない故に、不思議に見えるやうな夢である。例へば、或る近しい親戚が、惡疫で死んだ夢を見たとして、我々がそのやうな期待、杞虞、臆測の何の根據も知り得ないやうな場合がそれで、我々はたゞ『何だつてあんなことが頭に浮んで來たらう?』と不思議がつて自問するばかりである。第三類には意味もなく分りもしない夢が屬する。それ等の夢は脈絡もなく、錯亂してをり、且つ無意味である。我々の夢の大多數はこの性質を帶びてゐる。さうしてこのために夢を輕視する態度が起るやうになり、また醫學上でも夢の精神活動を限定する說が生じて來たのである。殊に一層長い錯雜した夢に於いては、支離滅裂の徵證は殆んど缺けたことはない

のである。

夢の顯在內容と潛在內容との對比は、第二類の夢に對して、また一層特別に第三類の夢に對して、明かに價値があるばかりである。これ等の問題は顯在的の夢がそれの潛在內容に依つて置き換へらるる場合に於いてのみ解決せらるゝ。我々が分析に附した夢は、この種の錯雜した、わけの分らぬ夢の一例であつた。ところが我々の期待に反して、我々は、夢の潛在思想の完全な認識を妨げたところのさまぐ\な理由に逢着したのであつた。この同じ經驗を繰返してゐるうちに、我々は、そこに、夢のわけの分らない錯雜した性質と、夢に關聯してゐる思想の探索に附隨する困難との間に、それ自身の法則を持つ一つの密接な關係があると云ふことを假定せざるを得なくなつたのである。この關係の性質を探索する前に、第一類の、より容易にわけの分る夢へと我々の注意を向ける方が便宜であらう、何となれば、第一類の夢に於いては顯在內容と潛在內容とが同一であるからして、夢の仕事が省略せられてゐるらしく思へるからである。

かう云ふ夢を檢べることは、今一つの立場からもまた甚だ結構なことである。子供の夢がこの性質である。子供の夢には意味があつて奇體ではない。序ながら云ふが、この事も、夢を睡眠中に於ける大腦の活動の分裂のせゐにしてしまふ事に反對する今一つの理由となるのである、何となれば、精神

機能のそのやうな低下が成人の睡眠の性質に屬して、子供のそれに屬さないのであらうか。併しながら子供の精神過程（は本質的に單純なものではあらうが）の說明が、成人の心理學への缺くべからざる準備として役立つであらうと我々の期待するのは、十分に理由のある事である。

それ故に、私は自分の集めた子供の夢の實例を二三擧げるであらう。十九ヶ月の一女兒が朝から氣分が惡かつたので一日中食事をとらずに過させられたところ、乳母の云ふところに依ると、苺を喰べたゝめに、とう〳〵病氣になつてしまつた。ところが斷食の一日の後、夜中に彼女は睡眠中に自分の名を呼び、さうして『苺、卵子、パップ(二)』と附加へた。彼女は食事中の夢を見て、彼女の獻立表の中から確かに彼女が今は澤山に喰べたいと思つてゐるもの選び出してゐるのである。

〔註〕(一)パンを牛乳又は水に入れて煮たるもの。幼兒、病人等に與ふ。

禁斷された食膳の同種の夢は、二十二ヶ月になる一男兒のそれであつた。その前日に彼はその叔父さんに櫻桃の一籠を贈物にするやうに云はれ、その子はその內、勿論、たつた一つだけを賞味する事を許された。彼は眼が覺めると共に嬉しげに叫んだ。『ヘルマンは櫻桃をみんな喰べちやつたよ。』

三歲半になる一女兒が晝間の中、海上で舟遊びをしたが、それは彼女にはあまりに短くて舟から出なければならなかつた時に泣き出してしまつたのであつた。その次の朝、彼女の物語るところに依る

と、夜中に彼女は海上にあつて舟遊びの續きをやつてゐたと云ふのであつた。

五歳半の一男兒がダハシュタイン地方に遠足してゐる間、彼の仲間に加はつてゐるのをあまり面白く思つてゐなかつた。新しい山巓が眼に見えるや否や、それがダハシュタインかどうかを尋ねた、さうして遂に瀧行の仲間に加はつてゐる事を拒んだ。彼のこの行爲は疲れたゝめだと云ふ事にされたが併しもつとよい説明がその翌朝になつて出て來た。翌朝彼の物語つた夢に、彼はダハシュタインに登つたのであつた。明かに、彼は遠足の目的がダハシュタインに登ることだと期待してゐた。ところがその山の瞥見をだに得なかつたので面白くなかつたのである。晝間彼の得損つたものを、夢が彼に與へたのである。六歳の一女兒の夢も同樣である。彼女の父はもう遲くなつたと云ふので、約束のところへ達するまでに散歩を切上げてしまつた。歸り道に、彼女はまた別の遊び場所の名の出てゐる看板を見た。彼女の父は何れその内にまたそこへも連れて行かうと約束した。その翌日起きた時に彼女は父に、昨夜お父さんに連れられて兩方の場所へ行つて來た夢を見たとの挨拶をした。

總てこれ等の夢の共通なるものは明かである。彼等は晝間遂げんとして遂げ得なかつた願望を、夢で充分に滿足させてゐるのである。それ等の夢は單に、明瞭に、願望の實現である。

次の子供の夢は、一見したところでは全く理解出來ないが、願望の實現に外ならぬのである。四歳

未滿の一女兒が脊髓角炎（小兒痲痺）のために田舍から町へ連れて來られ、さうして徹宵、子供のない叔母と一緒に大きな――彼女にとつては勿論、巨大な――寢臺の上に寢てゐた。翌朝彼女の語るところに依ると、彼女はその寢臺が非常に小さくて自分の寢る場所がないほどであつたと夢みた。この夢を一つの願望として說明することは、總て子供が『大きく』なることの願望を屢々洩すものであることに想到すれば、容易である。寢臺の大きさは、小成人憧憬孃をして自分の小さゝをあまりに力強く自覺せしめたのであつた。この面白からぬ立場は夢の中で正され、かくて彼女は非常に大きくなつて、今や寢臺が彼女にとつてあまりに小さ過ぎるやうになつたのである。

子供の夢が錯雜し美化されてゐる場合でも、その內容が願望の實現であることは充分に明かである。八歲の男兒がディオメデスに導かれてアキレスと共に戰車に乘つて行く夢を見た。その前日に彼は偉大な英雄たちの話を一生懸命に讀んでゐたのである。彼がこれ等の英雄をその軌範とし、その當時に生きてゐないことを殘念に思つたことは、これを知るに容易である。

この僅かな蒐集からして、子供の夢の一層立入つた性質は明かとなる――つまり、それ等の夢が晝間の生活に關係あることである。これ等の夢の中に實現せられてゐる慾望は晝間から、或は槪して前日から、持越され、さうしてその感情は晝間の考への間に偏に强調せられ、定着せられたものである。

どちらでもいゝやうな事柄、又は子供にとつてさう思はれるやうな事柄は夢の內容として取容れられる事はないのである。

そのやうな嬰兒風の夢の無數の例は、成人者の間にも發見する事が出來るが、併し、旣に云つたやうに、これ等は殆んど確實に顯在內容に似てゐるのである。で、任意に人々を選んで調べて見ても、夜中に咽喉が渴けば水を飮んでゐる夢でこれに應じ、かくてその渴いた感覺を遁れて睡眠を續けようとするのが一般である。多くの人々は眼醒める前に、丁度必要な時に、かう云ふ慰撫的な夢を見るのが屢々である。それから彼等はもう起きてしまつた夢を見る、顏を洗つてゐる夢を見る、又は學校に、役所に、その他一定の時間に行つてをるべきところにゐる夢を見る。行きたくて仕樣のない旅行の前夜には、人々は屢々もう目的地に着いてしまつた夢を見る。芝居見物や宴會の前には夢は、まるで待ちきれないかのやうに、期待されてゐる快樂を豫め味ふことが一再でない。また夢が慾望の實現をいさゝか間接的に表現する場合もある。多少の關聯、多少の歸結が知悉せられねばならぬ――これが慾望認識への第一步である。さう云ふ次第であるから、或る夫からその妻が月のもの始まつた夢を見たと聞かされた時には、その若い妻は月のものがなかつたならば姙娠であると期待してゐたらうと私は考へざるを得なかつたのである。その夢はその場合、姙娠の一徵證である。その意味は、只今のよ

ころ姙娠になつてはいけないと云ふ願望の實現された事を示してゐる事である。普通でない極端な事情の下に於いては、これ等小兒型の夢は甚だ屢々起るのである。例へば、或る北極探檢隊の隊長の語るところに依ると、氷の間に冬籠りしてゐる間、船員たちは食物が單調であり量も僅かなものであるから、子供のやうに、素晴らしい御馳走を、タバコの山を、家庭を、必ず夢見たとの事である。

分析の仕事に依つて、成人の無意味な錯雜した夢を辿つて子供の型に、その日の中に經驗された何等かの强烈な慾望の實現に、到達することが出來ると云ふのならば、それは僅かにこの謎に對する單純簡便な解釋方法であらう。併しさう云ふアテの付くやうな證據は少しもないのである。成人の夢は槪して非常につまらない、奇體なものに滿ちてゐて、願望實現らしいものは一向其の內容に見出されない。

實現せられざる慾望に相違ないこれ等子供の夢に關して語るに就いて、云ひ忘れてはならない今一つの主な夢の特徵がある。それは久しい間注意せられて來たものであつて、また最も明かにその種の夢に見らるゝものである。私はこれ等の夢の何れをとつても、願望を表はす句を以てこれに置換へることが出來る。海の舟遊びがも少し長く續けたら、顏を洗ひ衣服を着更へてさへゐたらば、櫻桃を叔父さんに遣らずにみんな持つてゐてもよかつたのであつたら。併し夢にはかうしてほしいと云ふだけ

ではなく、それ以上のものがある。何となれば夢では願望は既に實現せられてゐるのだから、その實現は實在的であり、本物である。夢の表象は主として（全然ではないまでも）場景から成り、またおもに視官的影像から成つてゐる。そこで、一種の變形が此の種の夢に全然缺如することはないのである。さうしてこの變形を當然、夢の仕事と名付ける事が出來るのである。**たゞ願望の領域に存在するに過ぎない觀念**が、**その實現の幻想に依つて置換へらるゝのである**。

第二章

夢の機構

そのやうな場面の變形はまた込入つた夢に於いても起ると云ふ事は、吾人もこれを假定せざるを得ない。尤も、吾人はそれが何等かの願望に呼應して起つてゐるものかどうかは知らないが。始めに擧(きょ)例して多少とも十分に分析したあの夢に就いて、吾人はさう云つた種類の變形が起つてゐるのではないかと感ずる機會を持つたのである。分析に依つて、私の妻が他の人々と同じ卓子(テーブル)に就き、且つ私がそれを好まなかつたと云ふ事が分つた。夢それ自身に於いては正反對の事が起つてゐる。何となれば妻の代りになつてゐる人物は私に對して專念注意を拂つてゐる。けれども吾人は一つの不愉快な出來事の後にそれの正反對の事が起る（件の夢が正にそれだが）ことより以上に愉快な何事を願望し得よう。私は何のわけもなくして何物をも得たことはないとの激勵的な考へが分析中に起きた事は、夢の中で女の云つた『貴方はいつもそんな美しい眼を持つてゐらつしやる』との言葉に同じく關聯してゐる。この夢の潛在内容と顯在内容との間の相反の或る部分は、それ故に、或る願望

の實現から引出して來なければならない。

夢の仕事の今一つの顯れは總て脈絡なき夢に共通的に存するものであるが、それはなほ一層注意に價する。如何なる例をとつて見てもよい、その中にある別々の要素の數を、又はもし夢が書きつけてあるならばその範圍を、分析に依つて得た夢の思想（併しその思想のほんの痕跡ぐらゐしか夢それ自身の内には見出せないが）と比較して御覽なさい。そこに夢の仕事が異常な壓縮（コムプレツシヨン）、又は凝縮（コンデンセイシヨン）となつて結果してゐる事は疑ふべくもない。始めは凝縮の範圍に就いて意見を定めることは容易でない。愈々深く分析して行けば行くほど、愈々深くその印象を受ける。夢の素因にして、それから聯想の鎖が二つ以上の方向に進んでゐないものはなく、また場景にして二つもしくはそれ以上の印象や事件から組成されてをらぬものは見出せないであらう。現に、私は嘗て一種の水泳浴槽の夢を見た事があるが、浴者たちは突然八方に散らばつてしまつた。一方の隅で或る人物が立ち、浴者たちの一人の上に身を屈め、宛も彼を引上げるやうな風にしてゐた。この夢は複合的で、思春期の頃に起つた或る事件と、二つの繪畫（その内の一つは夢の直ぐ前に私が見たものであつた）とから成り立つてゐた。二つの繪畫と云ふのはシユヰンドの(一)『メルジン物語』から來てゐる『浴者の驚き』（浴者たちの忽ち四散しつゝあるところに目をとめられよ）と、或るイタリー畫人の『洪水』とであつた。或る小事件

と云ふのは、或る婦人が水泳浴槽中にぐづ〳〵してゐて男子の時間になつてしまつたので水泳長に六中から引出されてゐるのを見たことがある、それなのである。夢の中のその場景を選んで分析してゐる內に、それ〴〵夢の內容に寄與してゐるところの囘想の全群に達した。まづ最初に出て來たのは、前にも旣に云つた私の情事の時からの小挿話であつた。卓子の下で手を握つた事は夢の中で『卓子の下で』の現れる因となつてゐる。これはあとで考へて見て、なるほど囘想の中にある事が分つたのである。勿論その當時には『專念注意を拂ふ』ことに就いては一語もなかつた。分析の結果、この素因は正反對の事に依つての一つの慾望の實現であり、また共同食卓に於ける私の妻の行動にも關係してゐる。我々の情事の全然同樣なさうして遙かに重要な挿話は、つまりそのために全く一日中我々が別れてゐたその挿話は、この近頃の囘想の中に祕められてゐる。膝の上に手を置くと云ふ仲のよさは、全く別な事で、これは全然他の人物に關係した事である。夢の中のこの要素はまた、二つの異つた囘想群の出發點となつて居り、以下この通りである。

【註】（一）シユヰンド Schwind, ドイツ又はオーストリーの現代畫家なるべし。
メルジン Melusine はフランス傳說中の妖精。

夢の場景の構成のために集積せられたところの、夢の思想の材料は、勿論この適用に相當したもの

でなければならぬ。そこには一つもしくはそれ以上の共通要素がなくてはならぬ。夢の仕事はフランシス・ゴールトン(一)とその家族との寫眞のやうな風に進められるものだ。違つた要素が一つ〳〵積み重ねられる。組合せられた畫に共通なものは明白に目立つて、相反する各部分は相殺し合ふ。かう云ふ風な過程で再製せらるゝ事を思へば、夢の非常に多くの要素に於いて、叙述の動搖定まりなきことも特殊の曖昧さのあることも、部分的に說明がつく。夢の判斷にはこの方則が適切である――分析の結果あれかこれか(entweder oder)に就いて不確實になつた場合には、それを及び(und)とお讀みなさい。一見してあれかこれかと見ゆる各々の部分は一聯の印象の別々の出口であると考へなさい。

【註】(一) Francis Galton (1822—1911) 英國旅行家にして遺傳論者。(譯者)

夢の諸思想の間に共通なる何物もない場合には、夢の仕事が何物かを創るやうに骨を折る。夢の中で行ひ得るやうな一つの共通的表象を作るやうに骨を折る。未だ何等の共通物を持たぬ二つの夢の思想を近似させる最も簡單な方法は、一つの觀念を實際的に表現するに當つて、他の觀念の形に呼應していさゝか改鑄するやうに變化せしむるに在る。この過程は、和音が共通の素因を供給するところの韻文の過程にさも似てゐる。夢の仕事と云ふのは多くはそのやうな屢々甚だ機智的な、併し大抵の場合誇張せられた、脫線である。この脫線にもいろ〳〵あつて、夢の內容中の普通の影像から、夢の思

想に到るまでである。この夢の思想は、これを惹起す原因が形や本質に於いて異るにつれてさまぐ〵である。我々が實例にとつた夢の分析に於いて、一つの思想が他の本質的に無縁な思想と一致せんがために變形する一つの同樣な場合が發見される。分析を進めて行く内に私は一つの思想に打つかつた。卽ち『私は何にもせずして何物かを得たい』と。併しこの定式ではこの夢には役には立たない。で、それはまた別の定式で置換へられた。卽ち『私は味ふことなくして何物かを享受したい』(一)と。ところがこの『味ふ(コステン)』"Kosten" と云ふ語は二重の意味があつて、共同卓子(テーブル・ドート)には適用される。そればかりでなく、これはまたこの夢に於ける特別の意義に依つて現れて來てゐるのだ。家庭に於いて、もし子供が喰べないと云ふ料理があると、母親はまづ大人しく勸めて『まあ、喰べて(コステン)御覽』と云ふ。夢の仕事が躊躇なく二重の意味ある語を用ふると云ふのは慥(たしか)に驚くべきことであるが、併し多くの經驗に徵して見るに、この事は全く普通である。

【註】(一)原語では ,,Ich möchte gerne etwas geniessen ohne 'Kosten' zu haben.‘‘ Kosten には『味ふ』と『費え』との二重の意味がある。で、この場合地口になつてゐる。『夢の註釋』,,Die Traumdeutung‘‘ 第三版、七一頁の脚註中にフロイド敎授は曰つてゐる、『古代人に依つて我々に殘されてゐる夢判斷の最も立派な實例は地口に基いてゐる。』それのみならず、夢は言語と密接に結びついてゐて、フエレンシがいみじくも指摘したやうに、總ての國語はそれ自身の夢の言葉を持つてゐるほどである。夢は槪し

て他國語に飜譯出來ないものである。』（トリドン）

夢にのみ特有であつて覺醒狀態には見出せない夢の內容の或る構成部分は、夢の凝縮と云ふことを以て說明することが出來る。その構成部分とは合成的、混合的人物、異常な混合形體、東洋人の空想する合成動物にも比すべき生物などである。一寸考へて見ればこれ等は單位にまで還元される。而も夢の妄想は盡くるところなきまで豐富に、永久に新たな形を形作つて行く。萬人は彼自身の夢に於いてそのやうな影響を知つてゐる。それ等の夢の起源は多種多樣である。私は夢の中に於いて一人物から一特徵を借り來り、他人物から他特徵を借り來つて別の一人物を造り上げ、または一人物の姿に他人物の名前を與へて別の一人物を造り上げることも出來る。私はまた一人物をありくと視、これを他人物に起つた立場に置く事も出來る。別々の人物が化合せられて一代償となる。これ等總ての場合には一つの意味があるのである。これ等の場合は『……と……』、『丁度……のやうな』など、ある點から見た元の人物の比較を、夢自身の內にまた實現され得る比較を、表してゐる。併しながら槪して、混合せられた諸人の認知はたゞ分析に依つてのみなされ得る。さうしてたゞ『合成人物』の形成に依つて夢の內容中に指示せられてゐるのみである。

夢の形成の仕方と同じ多樣さが、またその解體のと同じ規則が、夢の內容の無數の混雜にも見られ

る。その實例は敢へて玆に提示するにも及ぶまい。夢の內容を我々が覺醒時に認識する對象と同列に置かないやうに心掛け、それ等は不必要な細部を切捨てることに依りその凝縮の技術を示すものである事を忘れないやうにするならば、夢の內容の不思議は全く消失する。分析はまた多くの場合、共通特徵を與へるものである。夢は單に『總てこれ等のものはXを共通的に持つてゐる』と云ふのみである。これ等の混合した影像を分析に依つて解體せしむることは屢々、夢判斷の最捷徑である。ところが私は嘗てかう云ふ夢を見たことがある。私は大學の舊師の一人と同じベンチに腰かけてゐたが、そのベンチは他のベンチの間にあつて急速に、連續的に動搖しつゝあるのである。これは講義室と動く階段との複合である。私はその思想の歸結を追及する事はよさう。また別の夢では、私は車中に坐してゐたが、膝の上には高絹帽のやうな形で、併し透明の硝子製のものが載つてゐた。その場景は忽ち私に『帽子を手に保つ者は安全に國中を旅行するであらう』との格言を思ひ起させた。

一寸した具合で、硝子の帽子は私にアウエル燈を思ひ出させた。で、私はわが同國人なるエルスバツハのアウエル博士が、その發明に依つて金持となり自立出來るやうになつたやうに、私も何か發明しようとしてゐた事を知つたのであつた。さうすれば私もヰインには居据つてゐなくて、旅行する事が出來るだらう。夢の中では私は自分の發明物を持つて、さうだ、非常に不恰好な硝子の帽子を持つ

て旅行してゐた。夢の仕事は二つの矛盾した考へを同一の混合影像を以つて表すと云ふ妙技に練達してゐる。さう云ふ次第で、現に或る婦人は、自分が受胎告知の畫に於けるやうな高い花の莖を持つて歩いてゐるところを夢見た（純潔なるマリアは彼女自身の名である）、併しその莖には椿のやうな白い花が一面についてゐた（純潔と椿姫の對比）。

吾人が『夢の凝縮』と呼んだところの多くのものはこのやうにして定式化することが出來る。夢の內容の各要素は、夢の思想の材料に依つて過度決定されてゐる。夢の內容の各要素は、これ等の思想の一要素から引出されたものではなくして、諸要素全體から引出されたものである。これ等全體の諸要素は必ずしも何等かに相互連結せられてゐるものではなく、思想の最も類を異にした分野に屬してゐるかも知れないのである。夢の要素は夢の內容に於ける總てこの異類の材料を忠實に表象するのである。更らにまた分析は夢の內容と夢の思想との間の關係を今一つの方面から明示する。宛も夢の一要素が數個の夢の思想との聯絡に導くやうに、概して一つの夢の思想は一つ以上の夢の要素を表してゐる。聯絡の絲は單に、夢の思想から夢の內容に湊會するのみならず、またその途上に於いてその絲はさまぐ\に重なり合ひ絡れ合ふ。

一つの思想がその場景中に於いて變形すること（その『戲曲化』）に次いで、最も重要にして最も特質

ある夢の仕事は凝縮である。併し吾人はそのやうな內容壓縮を必要とする動機の何たるかに就いては未だ何の手掛りも持つてをらぬのである。

吾人は今や錯雜した込入つた夢を問題とする事になつてゐるのだが、それ等の夢に於いては凝縮と戯曲化とだけでは未だその夢の內容と夢の思想との間の相違を十分に說明するに足らぬ。そこに慥に第三の素因がある、さうしてそれは細心考究して見るに價するものである。

私が分析に依つて夢の思想の理解に到達した時、私は何よりも、夢の顯在內容の材料が夢の潛在內容のそれと甚だ異つてゐる事に氣がついたのである。それは併し、ほんの外見上の差違であつて、仔細に檢覈すれば消失するものである事は承認する。何となれば、夢の全內容は夢の思想となつて實施せられ、殆ど總ての夢の思想は再び夢の內容中に表象せらるゝ事を私は遂に發見するからである。而もなほ、そこに相當の差異が殘存してゐるのである。

夢の中に明白に廣汎に持續する本質的內容は、分析の後には、夢の思想の間に甚だ從屬的な役割を持つて滿足してしまふものである。これ等の夢の思想そのものは、私の感情に就いて云へば、最も重要視さるべきものであつて、全然夢の內容中に現れないこともあるし、また夢の或る漠たる領域中に或る遠廻しな暗示に依つて表象せらるゝ事もある。私はこれ等の現象をかう云ひ表はすことが出來る

——夢の仕事の間、本來精神的激しさを具へてゐるそれ等の思想や考へから、それ等の強力を具へてゐない（と私の斷ずるところの）他の思想や考へとその激しさが流入する。夢の意味を匿し、夢の内容と夢の觀念との間の連結を端倪知るべからざるものとならしむるに與つて力あること、この過程にまさるものはないのである。この過程を私は夢の轉位と呼ばうと思ふが、この過程の間にも私は精神的激しさを、意義を、換言すれば、官能的生彩に置き換へられた思想の情緒的性質を、認めるのである。夢に於いて最も明白であつたものが、贅言するまでもなく、私には最も重要なものに思へるのである。けれども屢々、夢の或る漠とした要素の中に、主要なる夢の思想の最も直接的な派生を認めることが出來るのである。

この夢の轉位を私は精神的價値の價値轉換と名付けることが出來るのみであつた。かう云ふ轉位なり價値轉換なりは、他の夢に於いても極端にさま〴〵な程度で現れるものだと云ふ事を斷つておかなければ、これ等の現象に就いてあらゆる方面から考究したと云ふことにはならないであらう。夢には殆ど何等の轉位も起さないものもある。これ等には同じ時日、意味、分りよさのあること、恰も慾望を示す夢に於いて我等の發見した如くである。その他の夢に於いては些少の夢の觀念たりとも、それ自身の精神的價値を保留してゐない事もあるし、またこれ等の夢の觀念に於ける一切の本質的なもの

が非本質的なものに依つて置換へられてをり、而もこれ等の狀態の間の一切種類の變移が見られ得るものもある。夢が愈々漠とし、愈々込入つてをればをるほど、その形成に當つて轉位の衝動に歸せらるる役割は大となるのである。

我々が分析のために擇んだ實例は、この轉位の多く――即ちその內容が夢の觀念の中心とは違つた中心を持つてゐると云ふ事――を示してゐる。夢の內容の最前線に於いては、主要なる場景は、一婦人が私に云ひ寄らうとするかの如くに現れてゐる。夢の觀念に於いては主要なる興味は『何物をも味はざる』無私なる愛を享受しようとの慾望に懸つてゐる。この觀念は美しき眼に關しての話や『ほうれんさう』に就いての遙かな暗示の背後に横たはつてゐる。

若し我々が夢の轉位を廢絕するならば、我々は分析に依つて、夢に就いて最も多く論議せられて來た二つの問題に關して全く確かな結論に到達するのである。その二つの問題とは抑々何が夢を惹起すかと、夢と我々の覺醒時の生活との連結とである。夢には直ちにその日の出來事との聯關を示すものもあるが、またそのやうな連絡を全然示さないものもある。分析の力に依つて、一切の夢は、例外なく、その日の――と云ふよりは、もつと正確には、夢の前の日の――我々の印象と連結してゐると云ふことを示すことが出來る。夢を刺戟した印象は非常に重要であるらしく、覺醒時にはそれ等の印象

に捕はれてゐる事を不思議に思はないほどである。この場合に於いては、夢は我々の覺醒生活の主要興味を持續すると云つて我々は正しいのである。併しながら、夢がその日の印象に關した何物かを含んでゐる場合にも、それは非常につまらない、重要でない、從つて忘れてしまつて支障へのなく、纔かに努力して漸く思ひ出し得るに過ぎないほどであるのが、もつと普通であるのだ。して見ると、夢の內容は脈絡があつてわけの分る場合でも、我々の覺醒時の興味には價しないやうな、どちらでもよい、つまらない思想に交渉のあるに過ぎぬものと思はれる。夢の輕視は多くは、夢の內容としてどちらでもよい、無價値なものが巾を利かせてゐるのに職由するのである。

分析は、このやうなぶちこはしな判斷が依つて以て立脚するところの外見を打破するのである。夢の內容が夢の原動者として何等かのどちらでもよい印象をしか示さない場合でも、分析して見れば常に何等かの重要な出來事があつて、それが何等かのどちらでもよいやうなもの（それに伴つて重要な出來事が澤山な聯想の中へ這入り込んで來たのであるが）に依つて置換へられてゐる事が分るのである。夢が興味のない、重要ならぬ思想に關係してゐる場合でも、分析して見ればそこに幾多の相關的道路があつて、それがその個人の精神的評量に於いてのつまらないものと重大なものとを連結してゐる事が分るのである。もしどちらでもよいやうなものが、實際上の刺戟者であるところの諸々の印象

の代りに、眞に興味あるものゝ代りに、夢の內容に於いて認識せられるとすれば、それは轉位作用であるに過ぎない。何が夢を惹起すか、日常生活と夢との關係如何などの問題に答へて、吾人は夢の顯在內容に置代ふるに潛在內容を以てする事に依つて得た洞察力に依つて、かう云はなければならぬ。夢は晝間我々の關心に價しないやうな事に對して拘泥しないし、また晝間に我々を煩はさないやうなつまらない事柄は睡眠時間中の我々を追及するだけの力を持たないと。

我々が分析した實例に於いては、何があの夢を惹起したか。一友が彼の馬車に只乘りをさせようと私を誘つたと云ふ、眞につまらない出來事である。夢の中の共同食卓(ティブル・ドート)の場面は、このどちらでもよい動機への一つの暗示を含んでゐる。何となれば會話の中に私はタクシと共同食卓とを相竝べて持出してゐるからである。併し私は、つまらない事件をその代償としてゐるところの重要な事件を指示することが出來る。數日前に、私は非常に可愛く思つてゐる家族の一員のために多額の金錢を出したのであつた。もしその人物がそれに對して私に感謝してゐるならば、この愛は費え(賞味)なしではない、と夢の思想は云つてゐるが不思議でない。何物をも費え(賞味)せざる愛と云ふのが夢の最高思想の一つである。この少し前に私が件の親族の者と二三度馬車を驅つた事があつたと云ふ事實のために、友と馬車に同乘した事が他の人物との關係を思ひ出させるやうな次第になつたのである。重要ならぬ印

象がそのやうな派生枝出に依つて夢を惹起す場合には今一つの條件（夢の本當の源泉に對しては必ずしも眞ならぬ條件）に從ふものである——卽ち、その印象は近頃のものでなければならぬ、總ては夢のその日から起つて來ざるを得ない。

夢の轉位の問題を論ずる以上は、夢の形成に於ける著しい過程を考究せずして濟ますわけには行かない。それはその過程に於いて凝縮と轉位とが一つの目的に向つて協働することである。凝縮に於いては、吾人は旣にかう云ふ場合を考究した。そこでは、何か共通物を持ち、何か接觸點を有する夢中の二つの考へが、夢の內容中に於いて一つの混合影像に置換へられ、またそこでは判然獨自の（夢の）芽が共通的なものに內應し、不判然な第二義の變化が判然獨自のものに內應する。もし轉位が凝縮に附加せられると、そこには混合影像は形成せられずして、一つの共通仲介が形成せられる。この共通平均の個的要素に對する關係は平行方形（パラレログラム）の合成力のその組成要素に對する關係と同じである。現に私の見た或る夢の中で、プローピル（一）注射の話があつた。最初に分析した時に、私はつまらない、併し眞實の出來事を發見した。その出來事に於いて（二）アミルが夢への刺戟者として一つの役割を果してゐるのである。私はアミルがプローピルに入替つたのだと主張することはまだ出來ない。ところが、その同じ夢の諸觀念の群の中に、私が初めてミューニッヒへ行つた思ひ出があるのだ。その時私は（三）

寺院（プロピリーア）の入口に感動したのであつた。その分析の從屬的事情に依つて、この第二群の考へがアルミをプローピルに轉位したのだと云ふ事を容認することが出來る。プローピルは、云はゞ、アミルとプロピリーアとの間の仲介觀念である。それは同時に凝縮と轉位とを起させる一種の妥協として夢の中に這入つて來たのである。

【註】（一）Propyl, 藥名。

（二）Amyl, 一種のアルコール根。

（三）Propylaea, 拜殿の如きもの、ギリシアのアクロポリスのはその典型。（總て譯者）

夢のこの不思議な仕事への何等かの動機を發見することの必要は、凝縮に於いてよりも寧ろ轉位の場合に於いて一層甚だしいのである。

夢の思想が夢の內容中に發見も認識もせられない場合には（かゝる變化の動機が察知せられねば）、主としてそれは夢の轉位のせゐであるとせられねばならないが、夢の思想に關して考へらるゝのは、また夢の仕事の新しいが併し直ちに理解せらるゝ行爲の發見にまで導くのは、他のもつとおとなしい種類の變形である。分析に依つて暴露せらるゝ最初の夢の思想は、その風變りな言葉の用ひ方に依つて驚かせるのが屢々である。それは我々の思惟が好むやうな正氣（しやうき）の形で表現せられないらしく見え、

寧ろ詩人の譬喩的言辭のやうな寓意や隱喩に依つて象徴的に表現せらるゝ。夢の觀念の表現にこの程度の無理のある動機は、これを發見するに困難でない。夢の內容は主として視覺的場景から成立つてゐる。そこで、夢の觀念はまづ、かう云ふ表現形式を用ふる準備をしてかゝらねばならない。政治上の指導者又は辯護士の演說が默劇に置換へられねばならなかつたとお考へなさい。さうすれば夢の仕事がこの夢の內容を戲曲化するために、如何にしてこの變形を餘儀なくされたかゞ容易に理解されるであらう。

夢の思想の精神的材料の周りには、常に印象（早期年少時代のものも一再でないが、とにかく概して、視覺的に把握せられた場景）の追憶が見出される。それが可能な場合には何時でも、この部分の夢の觀念が夢の內容の形態構成に決定的な勢力を及ぼすのである。それは夢の思想の材料を牽引し再整理する事に依つて、結晶の中心の如き働きをする。夢の場景は昔の事が多少變形せられて繰返され而もそのやうな印象を殘した諸事件の混入によつて錯雜になつてゐるものに外ならない。夢が實際の場景を正確に、混合なしに、再製せらるゝ事は殆ど稀れである。

併しながら、夢の內容は專ら場景からばかり成り立つてゐるものではなく、また視覺的影像、會話の散々になつた斷片、また不變な思想の細片すらもが、包含せられてゐる。恐らくこの點を要領を得

しむるためには、夢の仕事が夢の思想を夢特有の言葉で反覆するに當つて自由に用ふる戲曲化の手段を最も簡單に例示するにしくはないであらう。

我々の夢の思想を分析して見ると最も錯雜した組立ての心的復合(コムプレックス)である事が分る。それら各部分は互に最も多種多様な關係に立つてゐる。それ等は前景と背景、協約、脫線變化、說明、證明、抗議などを形成してゐる。一連の思想があればそれに反對するものがその後に續くと云ふのが殆ど常であると云ひ得よう。覺醒中に我々の理性に知られてゐる如何なる特徵もなくなりはしない。もし夢が總てこれ等から生ずるものであるにしても、心的材料は壓縮に附せられる。するとこれはその材を極端に凝縮せしめ、內的の收縮と轉位とを起さしめ、同時に新たな外觀を創つて、これ等の構成に最も適した組成要素の間に選擇的の相互編合せを生ぜしむる。この素材の起源を尊重して、退行と云ふ言葉を以てこの過程を呼ぶのが公正であらう。これまで精神的素材を繫ぎ合せてゐた論理的の鎖は、この變形が生ずるに際して夢の內容にまで失はれる。夢の仕事は、云はゞ、たゞ夢の思想の本質的內容をのみ採つて、これを仕上げする。夢の仕事が破壞した結合を復舊せしむるのは分析の役廻りである。

それ故に、夢の表現手段は、我々の想像の手段に比すると貧弱であると云はねばならぬ、尤も、夢は夢の思想に對する論理的關係の取戾を一切斷念してゐるわけではないのだが――。夢は寧ろ、それ

自身の形式的特質に依つて、これ等の思想を置換へることに可成り屢々成功してゐるのである。

夢の思想のあらゆる部分の間には疑ひもなく關係が存する故に、夢はこの材料を單一の場景に體現することが出來る。夢は論理的關係を時處に於ける近接として認める。恰も、パルナサスの畫を描く畫家が、嘗て一山嶺上に立つた事はないが、而も觀念的には一社會を形成してゐるあらゆる詩人を群集せしめるが如くである。夢は個々の夢に於いてこの表象方法を續ける、さうして夢の內容に於いて二つの要素を密接せしめて表す場合には、屢々夢は、夢の思想の形で、二要素の代表するものゝ間に何等かの特別な內的關係ある事を保證する。それのみならず、同一夜の夢は總て同一領域の思想から發源してゐる事が、分析の結果、分ると云ふことも斷つておかねばならない。

二觀念間の因果關係は何等の表示なしにそのまゝになつてをることもあれば、また相前後する二つの長い夢の部分に依つて置換へらるゝこともある。この表示は屢々逆になつてゐるもので、夢の始めが結論であり、終りが假定であつたりする。夢の中で一物を他物に直接變形することは、原因結果の關係に從ふらしく思はれる。

夢は決して『あれかこれか』を語るものではなく、兩者を同一關係に於いて同權を有するものとして受容する。『あれかこれか』が夢の寫しの內に用ゐてあれば、それは旣に私の云つたやうに、『及び』

と置換ふべきである。

互に相反するいろ〱な考へは、同一要素に依つて夢の中に見事に表現せられてゐる。(二) 夢の中には『ない（ニヒト）』はないやうである。二觀念間の相反、轉位の關係は、夢の中で甚だ著しいやり方で表されてゐる。それは夢の内容の今一つの部分の轉換に依つて、恰も附錄のやうな風にして、表される。吾人は後章に於いて、不快を表はす今一つの形式を論ずるであらう。遮止せられた言動の普通の夢の感情は衝動の不快を――意志の葛藤を――表はす目的に役立つ。

【註】(一) 茲で一寸斷つておかねばならない事は、優秀な言語學者達が、古代語に於いては同一語が全然相反を表す爲に用ゐられてゐると論じてゐる事だ。アーベル C. Abel の論文『原始語の相反意義に就いて』"Ueber den Gegensinn der Urworter"(1884)には、英語としては、次のやうな實例が擧げられてゐる。"gleam-gloom"; "to lock—loch"; "down—The Down"; "to step—to stop." 『言語の起原』"The Origin of Language," ("Linguistic Essays," p. 240) に關する彼の論文中に、アーベルはかう云つてゐる。『英國人が 'with' out と云ふのは、二つの相反たる 'with' と 'out' とを比較し並置してそれに基いての判斷ではない。'with' それ自身は元來 'without' の意味があつたのだ。その證據に、現在なほ 'withdraw' などゝ云ふ語もある位だから。'bid' にも與へると申込むとの相反意義を含んでゐる』 Abel, "The English Verbs of Command", "Linguistic Essays," p. 104. またフロイドの『原始語の相反意義に就いて』Freud "Ueber den Gegensinn der Urworte" (Jahrbuch für Psychoanalitische und Psychopathologische Forschungen, Band II., part

i., P. 179)―(トリドン)。

論理的諸關係の內たゞ一つだけ――同化、同一、一致の關係だけ――が夢の機構の內に非常に高度の發展を見せてゐるのである。夢の仕事はこれ等の場合を、凝縮への出發點として用ひ、新たな統一へとそのやうな一致を示す一切のものを搔き集める。

このやうな短い、ざつとした說明だけでは、夢の諸思想の論理的關係を示すための、夢の形式的手段が如何に饒多であるかを評量するものとしては、固より十分でない。この點に關しては、個々の夢は或は見事に或は杜撰に出來てゐるのだから、我々の題目は或は細かく或はぞんざいに調べて行き、夢の仕事の幇助者も或は細く或はぞんざいに考量の中に入れるのである。夢の仕事の幇助者は漠としてをり、込入つてをり、また脈絡なきものゝ如くに見える。夢が公然矛盾して見え、またその內容に明かな逆說を含んでゐる場合には、それはわざとさうなつてゐるのである。一見あらゆる論理性を無視したかの如くに見えて、實は夢の觀念の知的內容の一部分を表はしてゐるのである。夢の中の矛盾は夢の思想に於ける不快、嘲笑、拒否を示してゐる。この說明は、夢が無連絡な、沒批判的な、大腦の活動にその起源を負ふとする見解と全然一致しないが故に、私は一つの實例に依つて私の見解を强調しようと思ふ。

『私の知人の一人なるM——君がゲーテらしい人物に依つて或る論文の中で攻撃されたが、それは保證し難い亂暴である事は我々の總てが認めるところである。M——君は勿論この攻撃に依つて死滅させられた。彼はこの事に就いて甚だ痛ましく、或る會食の席で喞した。併し彼のゲーテに對する尊敬は、この個人的經驗に依つて輕減されなかつた。さて私はこれから、どうも私にをかしいと思はれる時代的關係を淸算して見よう。ゲーテは一八三二年に死んでゐる。彼のM——君への攻撃は勿論、M——君がまだ極若かつた時分に起つたに相違ない。どうやら彼は十八歳であつたらしい。併し實際は何年に我々がゐたのか、その點は私も確かでない。で、計算ごとは總て曖昧なものになつてしまふ。而も、その攻撃はゲーテの有名な論文「自然」の中にあるのだ。』

夢の矛盾性は、M——君が一介の若き事務家で、何等詩的文學的興味を持たない人である事を云ふに及んで、愈々以て甚だしいことになる。私の夢の分析法に依ると、この狂氣浸みたことの內にどんな方法があるかゞ分るであらう。この夢はその材料を三つの根源から得て來てゐる。

一、M——君には或る會食の席で紹介されたのだが、彼はその時、いつかその內、兄を試驗して見てくれぬかとの事であつた。彼の兄は頭の具合が惡いらしい徵候を示してゐたのである。その病人と對話中一つの不愉快な事が起つた。何のはずみもないのに、彼はその兄の若氣の惡戲の一つを暴露し

た。私は病人に彼の誕生の年（夢の中では死の年）を尋ね、かくしてさま〴〵な計算に導いて行つて彼の記憶の缺乏を示さうとした。

二、他の人々の名と共に私の名をもその表紙に出してゐる或る醫學雜誌が、ベルリンにゐるわが友F――の或る著書に對する破滅的評論を載せた。その文はまだ極若い評論家の筆に成つたものであつた。私はその編輯者に手紙を出したが、編輯者は遺憾の旨を實際に示して來たが、何等取消の約束をしない。そこで私はその雜誌との關係を斷つたが、その絕緣狀に於いて、私はこのために我々の個人的關係にまで累を及ぼしたくないとの希望を述べた。こゝに夢の眞實の根源がある。わが友人の新業に對して毀損的な挨拶をしたことは私に深い印象を與へた。私の見るところでは、その著述には根本的な生物學上の發見があつて、數年後の今日となつてやうやく專門學者の間に好意ある批評を聞くやうになつた。

三、少し以前に、或る病婦がその兄の醫療上の歷史を物語つて聞かせた。その兄は『自然！自然！』と叫びつゝ發狂して行つたのであつた。醫師たちはその叫びはゲーテの美しい論文から起つたものと考へ、その病人はあまり仕事をし過ぎてゐたものと指定した。私はそれに對して『自然！』との叫びは、わが國に於いてあまり敎育のない人々の間にも知られてゐる、あの性的な意味にとるべきであら

うとの意見を述べた。この見解には相當の見所があつたやうに私には思へた。何故ならば、その不幸な青年は後になつてその性器を切斷してしまつたからである。發病したのはその病人が十八歳の時であつた。

自我の背後にある夢の思想の第一人稱は、あんな亂暴な目に會つた私の友であつた。『私は今や時代的關係を淸算しようと試みた。』わが友の書は生活の時代的關係を取扱ひ、また就中、ゲーテの生活期間を、樣々な方面で生物學にとつて重要な多くの時期と聯連せしめた。併しながら、自我は一般的の痲痺患者として現はされてゐる。(『私は實際我々が何れの年にゐるのか確實でない。』)この夢ではわが友は一般的の痲痺患者のやうに振舞つたやうに現れてゐる。それでこのやうに矛盾の中に混雜が生じて來たのだ。併し、夢の思想は皮肉に進んでゐる。『勿論、彼は氣狂ひである、馬鹿である、さうして君はそれについて一切を承知してゐる天才者である。併しそれは全く別の道であつてはならぬか？』この逆轉は明かに夢の中に起つてゐる。現に、ゲーテが若者を攻擊してゐる、これが矛盾である。今日では如何に若い者でも何人でも大ゲーテを攻擊することが出來るのに――。

如何なる夢でも自我的情緒に依つて刺戟せられないものはないと私は主張し得る多少の根據がある。夢の中の自我は、實は、わが友人をば代表するばかりではなく、また私自身をも辯護するもので

ある。私は私自身を彼と同化する、何となれば、彼の新發見の受けた運命は私自身のそれと同型待遇であると思はれたからである。もしも私が、私自身の學說――神經症の異狀の原因學に於いて、性慾を主要視する學說（かの十八歲の患者が『自然！自然！』と叫んだ事に就いての暗示參照）――を公表したとすれば、同じ非難は私に向けられるであらう。さうして今でも私の學說は同じ輕侮に會ふことであらう。

夢の思想を仔細に檢べて見ると、夢の矛盾に相關させて嘲笑と輕侮とだけを常に發見するのである。ヴェニスのリドオ上で龜裂の入つた羊の頭蓋骨を發見して、ゲーテは謂ふ所の頭蓋の椎骨說への暗示を得た事はよく知られてゐる。わが友は學生時代に、或る老教授を辭職させるために騷動を起したことを誇りとしてゐる。その老教授はよい仕事（その內には同じ比較解剖學に關するものもあつて）をした人であるが、併し、老朽のために教授することが全く出來なくなつてゐたのである。わが友の捲き起した運動は非常に成功した。何となればドイツの大學では停年制なるものは學的事業に對しては要求せられてならぬからである。高齡は愚蒙の庇護とはならぬ。當地の病院に於いて、私は幾年もの間或る院長の下に奉仕するの榮に浴したのであつた。その院長は既に永く化石してしまひ、幾十年來心氣衰へてゐる事は評判の話であつたが、而もなほその責任ある職務を續ける事を許容せられてゐた。

リドォに於ける發見の次第に倣つて、私にもその時チラと思ひ當つた事があつた。病院內の若い同僚たちが當時一般的になつてゐた流行言葉『ゲーテはそんな事は書いてゐない。』『シルレルにはそんな文はない』などを適用したのは、この人に對してゞあつたのだ。

吾人は夢の仕事の評價をまだ十分にやらないでゐた。凝縮、轉位、竝に精神的材料の影像的整理の外に、吾人はなほ夢の仕事に今一つの活動のある事を主張せねばならぬ。その活動は、實は、あらゆる夢に見られると云ふわけではないのだ。夢の仕事のこの方面を私は十分に論じ盡さうとは思はない。私はたゞこの活動の一面觀に達する最捷徑は、これが旣に建造せられた夢の內容にたゞ後になつて影響を及ぼすのみだと云ふ事を、多分不公正にではあるが、臆斷してしまふにある事を指示するに留めよう。それの活動方法は、かう云ふ風に、夢の各部分を同列に竝べて、一全體に合致せしめ、一組織の夢にするにあるのだ。夢には一種の表構へのやうなものがあつて、それは實は、夢の全內容を匿しはしないのだ。それはさま〴〵な入雜りや些細の變更に依つて分りよくせらるゝ一種の豫備的說明である。夢の內容のそのやうな仕上げはあまりに明白にしてはならぬ。その仕上げのために夢の思想に就いての誤想を生ずるが、それは單に上つ面なものであつて、我々が夢の分析に於いて最初になすべきことは、早期の解釋へのこれ等の試みに囚はれぬことである。

夢の仕事のこの方面の動機は容易に測定することが出來る。この窮極的の、夢の仕上げは理解し得ることを考慮してゞある。この事實たるや、實際の夢の內容の方へと立向ふ行動の起源を直ちに暴露するものである、恰も我々の常態の精神の行動が我々に好ましい何等かの提供物へと立向ふのと同じである。夢の內容はこのやうに、確實な期待の假面の下に獲得せらるゝ。それが理解せられ得ると云ふ假定に依つて知覺上の分類がせらるゝ。が、そのためにそれをうそのものにすると云ふ危險を冐すことになる。而も實際に於いて、もしその夢を何の親熟したものにも關聯せしめ得ない場合には、最も異常な誤想が生ずる。誰でも知つてゐる通り、我々は親熟せざる記號の何等かの連續を見たり未知の言葉についての論議を聽いたりする場合には、我々は理解し得ることを考慮することに依り、親熟せるものに復歸することに依り、直ぐに變化を起してばかりゐなければならないものである。

あらゆる點で我々の覺醒生活の心的行動に類似した仕上げの結果であるところの夢を、我々は正當に組立てられたものと呼ぶことが出來る。それ以外の夢にはそのやうな行動はない。秩序と意味とを生ぜしめようとの試みすらない。我々は夢を『全然狂つた』ものと考へる、何となれば、眼が覺めた時に、我々が我々自身を取戾すのは、夢の仕事のかの最後に名を擧げた部分、つまり夢の仕上げを以てするのだからである。併しながら、我々の分析に關係ある範圍內では、無關係な斷片の混淆にも似

たやうな夢も、滑らかな美しく磨きたてた表面を持つ夢と同じだけの價値を持つてゐる。前の場合に於いては、我々は或る程度まで、夢の內容の過度仕上げを剝ぎ落す勞だけを助かつてゐるのである。

何れにもせよ、夢の表構への中には、我々の心理生活の命に依つて生じた夢の誤解せられた、またいさゝか氣まぐれな仕上げだけしかないものと思ふのは間違ひであらう。願望と空想(ファンタシー)とはこの表構への築造に一再ならず使役せられてゐるのだ。またその表構へも旣に夢の思想中にその形が出來てゐたのだ。夢の思想は我々の覺醒生活のそれ――『白日夢』といみじくも呼ばれてゐるが――と似たものである。これ等の願望や空想は我々の夜中の夢に於いて分析が闡明するものであるが、屢々嬰兒時代のさま〴〵の場面の繰返しや再形成として出現する。このやうにして、夢の表構へは、他物の混入に依つて引歪められてゐる夢の眞の核心を、直接我々に呈示するのである。

これ等四つの活動以外には、夢の仕事には別に何も發見されない。もし我々が、夢の仕事とは夢の思想を夢の內容に轉嫁することを意味するとの定義に固執するとすれば、夢の仕事は創造的でないと云はざるを得なくなるのである。夢の仕事はそれ自身の空想を少しも發展させず、何物をも判斷せず、何物をも決定しないことになる。それは凝縮と轉位のために材料をしつらへ、戲曲化のために材料を再形成する以外に何もしない。なほその上にする事は、最後に名を擧げた機構――說明的仕上げの機

構――である。成程夢の內容中には他のもつと知的な所業の結果と解せられ得る多くのものが見出さるゝ。併し分析して見ると、結局いつもこれ等の知的所業は旣に夢の思想中に嚴存し、さうしてたゞ夢の內容中に採り入れられたに過ぎないのだと云ふ事が分る。夢の中の三段論法は夢の思想中の三段論法の反復に外ならないのである。もしそれが何の變更もなしに夢の中に移されたならば不都合はないやうである。もし夢の仕事の中でそれが他のものに移されると矛盾を生じて來る。夢の內容中での計算は、たゞ夢の思想中に計算のあつたことを意味してゐるに過ぎない。然るに夢の中での計算は、その素因の凝縮と、同じ所業が他物に轉位せらるゝことに依つて、非常に馬鹿々々しい結果を示すことが出來ると云ふのは、常に正しいのである。夢の中で發見せらるゝ話しすらもが、新しく創つたものではなく、嘗てなした、聽いた、讀んだ言葉のつぎはぎである事が分る。言葉だけは忠實に寫されてあるが、これを吐いた場合は全く無視せられ、その意味は甚だ亂暴に變更せられてゐる。

これ等の斷定を次のやうな實例に就いて支持することは、恐らく淺見ではなからう。

一、或る患者の一見不都合のない、よく出來た夢。彼女は料理番に籠を持たせ、彼を連れて買物に行くところであつた。彼女が何か欲しいと云ふと、肉屋は彼女に云つた。『それはもうすつかりなくなりました』と云つて、さうして何か他のものを與へたいと思つて『これは非常によい品です』と云つ

た。彼女は斷つて、八百屋へ行つた。八百屋は束にした、黑くなつた奇妙な靑物を彼女に賣らうと思つてゐる。彼女は云ふ、『私はそれを知りません、それは頂きません。』

『それはもうすつかりなくなりました』と云ふ言葉は診療から來てゐるのだ。數日前に、私が自分で患者に云つたのであつた、子供時代の最も早期の回想はそのまゝではもうすつかりなくなつてゐる、併し轉嫁と夢とに依つて置換へられてゐると。つまり、私が肉屋になつてゐるわけである。

第二の言葉『私はそれを知りません』はすつかり別の關係から來てゐる。その前日に彼女は自分で料理番（それに、彼もやはり夢の中に出て來てゐる）を難じて呼んだ。『もつとちやんとおやりなさい。私はそれは知りません。』――つまり『私はさう云ふやり方は知りません。私はそんなことは好かない』と云ふことなんである。この話しのより無害な部分は夢の內容の轉位に依つて達せられたのである。夢の思想に於いてはこの話しの他の部分だけが役割を果してゐるのである、何となれば夢の仕事は想像的な場景を變へて全然認識すべからざる、全くさしさはりのないもの（ところが、或る意味に於いて私はその婦人に對して不都合な態度をとつてゐるのであるが）にしてゐるからである。この空想中に結果してゐる場景は、併しながら、實際起つた場景の編み變へに外ならないのである。

二、一見無意味な夢が數字に關係してゐる。『彼女は何程かを支拂ひたいと思つてゐる。彼女の娘は

その金入れから三フロリン六十五クロイツェルを取出す。併し彼女は云ふ。『何をしておいでだい？あれはたゞ二十一クロイツェルだよ。』

この夢を見た婦人は他の町の人で、その女兒をヰィンの學校に置き、その兒がヰインに留つてゐる間は、私の診療を受け續けることが出來た人である。夢の前日、學校の女教師がその兒をもう一年學校に置くやうに婦人に勸めた。この場合、彼女はその診療を一年だけ延してもよかつたのである。夢の中の數字は時は金なりと云ふ事を思ふと、甚だ重要になつて來る。一年は三百六十五日で、これをクロイツエルで云ひ表はすと、三百六十五クロイツェルとなる。つまり三フロリンと六十五クロイツェルになる。二十一クロイツェルは三週間に當る。これは夢の日から學期の終りまでの日子で、また診療の終りまでの日子である。婦人として女教師の申出を拒ましめたものは財政上の考慮である事は明かで、これはまた夢の中の細々した勘定の答案にもなる。

三、まだ若いが、併し結婚してもう十年になる一婦人が、自分とほゞ同年配の一友エリーゼ・エル——孃が婚約したと聞いて、次のやうな夢を見た。

彼女は劇場の中で自分の夫と一緒に腰掛けてゐた。桝の一方はすつかり空いてゐた。彼女の夫は云ふ、エリーゼ・エル——と彼女の許婚者とも來たいと云つたが、併し彼等は安い座席を、一フロリン

五十クロイツェルで三つだけを取ることが出來るだけだが、それ等の座席は彼等は取りたがらないと。彼女の意見では、(註二)そんなことは大した事ではなかつた。

　夢の思想の材料から數字が發生し來つたこと、また、その數字が變化したことが重要である。一フロリン五十クロイツェルとは何處から來たか。前日の一寸した出來事からである。彼女の義妹が彼女の夫から贈物として一五〇フロリンを貰つた。ところが何かの飾りを買つて直ぐその金をつかつてしまつた。一五〇フロリンとは一フロリン五〇クロイツェルの百倍であることを注意せねばならぬ。何となれば三は切符の數で、唯一の連結はエリーゼ・エル——が夢見た婦人よりは正に三ヶ月年若であると云ふことだ。夢の中の場面は、彼女が夫から屢々いぢめられてゐる一小冒險の反覆である。彼女は嘗て或る出し物に間に合ふやうに切符を買ふとて非常に急いだことがあつた。ところが劇場へ來て見ると、桝の一方は殆んど空すいてゐた。だから、彼女としてはそんなに急ぐ必要は全くなかつたのである。また我々は、二人の人間が劇場への三つの切符を取ると云ふ矛盾を看過してはならない。

　さて、夢の觀念はどうか。そんなに早く結婚したのは馬鹿なことであつた。妾はそんなに急ぐ必要はなかつたのだ。エリーゼ・エル——の實例に依つて見ると、妾はもつと遲くても良人を獲ることが出來たのだ。實際、も少し待つてゐたなら百倍もよい良人を獲ることが出來たのだ。私は金(持參金)で

そのやうな男の三人だけは買ふことが出來た筈だ。

【註】本章の內、第二十六頁及び四十頁に『あれかこれか』と『及び』の問題が出てゐるが、精しくは『夢の忘却』の章の中頃を參照ありたし。（譯者）

第三章

何故に夢は願望を扮装するか

以上述べ來つたところに依つて、吾人は今や夢の仕事に就いて多少知るところがあつた。夢の仕事は吾人の知る限りでは、他の何ものにも類似しない全く特殊な精神過程であると考へねばならない。夢の仕事の所産たる夢を見て我々は何の事やら譯が分らなくなるのであるが、それは夢の仕事のせゐにせられた。が、實際に於いて、夢の仕事は、ヒステリー徵候、病的恐怖の觀念、强迫症竝びに錯覺などの起源とせらるべき一群の精神過程を始めて認識したものに過ぎないのである。凝縮作用、殊に轉位はこれ等の他の精神的過程に於いて決して缺くることのない特徵である。他方にまた、發現への顧慮と云ふことは夢の仕事に特有なものである。もしこのやうな說明を下すことに依つて夢が精神病の構成と同一になるやうならば、夢の建造の如き過程の本質的條件を測定することは愈々益々重要となるのである。ところが睡眠狀態も病氣もこの缺くべからざる條件の內にないと聞いては、恐らく何人も驚くことであらう。健康者の日常生活の諸現象の全體は、例へば忘却、云ひ損ひ、考へ違ひ、竝

びに或る種の誤謬の如きは、夢竝びにこの群の他のもの等の機構に類似した精神的機構に職由するのである。

轉位こそは問題の核心であつて、またあらゆる夢の所業の内、最も著しいものである。この題目を完全に調べて見ると、轉位の本質的條件は純粹に心理的であることが分る。それは一種の意志（モーチヴ）の如き性質を具へてゐる。吾人は夢の分析に於いて避けることの出來ない經驗を拂ひのけることに依つて道を進んで行く。私は第七頁に於いて、私の夢の分析に當つて、私の夢の思想間の關係を打破らなければならなかつた。何となれば、私は未知の人が知ることを欲しない經驗を、また重要な事柄に對して少なからぬ打擊を與へることなしには述べ得ないやうな經驗を、多少發見したからである。私は更に附言しておいた、特にその夢でなく、他の夢をその代りに選んだならば、さう云ふ必要はなからうと。が、その內容が冈氣であるか、又は錯雜してゐる一切の夢に於いては、私は祕密を必要とする夢の思想にぶつゝからなければならないのである。ところが、もし私が自分で分析を續けるとすれば——實際、私の夢のやうなそんな個人的な出來事は問題となし得ないやうなさう云ふ他人には頓着なく、分析を續けるとすれば——私は遂に我乍ら驚くやうな觀念に到達するのである。私が自分のものとは知らなかつたところの、私には他所事としか思へないところの、併し不愉快であつて猛烈にそれに反對

したく思ふが、而も觀念の鎖は分析を通じて私の上に頑强に闖入して來るところの、觀念に到達するのである。私はこれ等の思想が實際に於いて、私の心的生活の一部分であり、或る心的の激しさ又はエネルギーを有するものであることを容認することに依つてのみ、これ等の狀態を考へつくことが出來るのだ。ところが或る特殊の心理的條件の力に依つて、これ等の思想は私にまで意識せられなかつたのである。私はこの特殊の條件を『抑壓(レプレッシオン)』と呼ぶのである。それ故に、私としては、夢の內容が明白でないと云ふ事と、この抑壓の狀態——この意識し得ざること——この間に何等かの偶然的關係を認めないわけには行かないのである。そこで私はかう結論する、明白でない原因はこれ等の思想を匿さうとの願望であると。かくて私は夢の仕事の所業としての夢の歪みと云ふ考へに、この對象を扮裝するに役立つところの轉位と云ふ考へに、到達するのである。

私はこれを私自身の夢に於いて試驗し、私自身に訊いて見ようと思ふ。その歪んだ形に於いては全く支障がないのに、それの實際の形に於いては私の最も活潑な反對を喚起するところの思想とは何であるかと。私は無料で馬車に乘つたゝめに、この前に家族の一員と乘つて非常に高くついたのを思出した事を覺えてゐる。その夢の判斷はかうである、私は一度でも金の懸らないやうな愛情を經驗して見たい、また夢の直ぐ前に私はこの人物のために非常な散財をしなければならなかつたこと。この事

に關しては、私はこの散財を遺憾に思ふことから脫し切れないのである。私がこの感情を承認した時に於いてのみ、私が夢の中で何等の支出にからまれない愛情を望むことに何等かの意味が生ずるのである。而も私は私の名譽のために陳べることが出來る、私はその金を費ふ必要が生じた時には一瞬間たりとも躊躇はしなかつたと。反對の流れたる遺憾の情は私には意識されなかつた。何故それが意識されなかつたかは全く別問題で、これは當面の答へから遙かに隔つた方へ吾人を導いて行く。その答へは私の知識の內にあるにはあるが、他のところで述べよう。

もし私が私自身の夢の代りに、誰か他の人の夢を問題としたとしても、その結果は同じである。併し他人を說伏しようとする動機は變つてゐる。健康者の夢に於いて、本人をしてこの抑壓觀念を受容するを得しめる唯一の途は夢の思想に聯絡あることである。彼はこの說明を拒否することは自由である。併しもし我々が何かの神經症――例へばヒステリーのやうな――で惱んでゐる人を扱つてゐるならば、これ等の抑壓觀念を認識することは强迫的となる。何となれば、それ等の觀念は本人の病氣の徵候と關聯してゐるからであり、またそれ等の徵候を以て抑壓觀念に代へてゐるために多少快方に向つてゐるからである。さきに最後に擧げた、一フロリン五十クロイツェルで切符三枚を買つた夢を私に云つたあの患者を採つて見よう。分析して見ると、彼女は夫を高く買つてゐないこと、彼と結婚し

たのを後悔してゐること、誰か他の人と代へたいと思つてゐることが分る。成程、彼女は自分の夫を愛してゐると考へてゐる、彼女の情緒生活は何等この見縊りに就いて知るところがない（百倍も結構なことだ！）併し彼女の總ての病徴はこの夢と同じ結論に導くのである。彼女の抑壓せられた記憶が、彼女の夫を愛してゐない事を意識してゐた或る時代を再覺醒させた時に、彼女の病徴は消え失せ、それと共に夢の註釋を拒否することもなくなつたのである。

このやうに抑壓と云ふ考へも定まり、またそれと共に被抑壓の心的材料に關聯して夢の歪みと云ふ考へも定まつたのであるから、我々は夢の分析が供給するところの主要結果を概說すべき位置に立つてゐるのである。吾人は最も判りいゝ、意味のある夢は實現せられざる願望である事を知つた。それ等の夢に於いて實現せられたものとして描かるゝ願望は意識に知られてをり、晝間から持越されたものであり、また非常に興味の强烈なものである。明白ならぬ錯雜した夢を分析して見るとやはりこれと甚だ似通つた何物かを呈露する。夢の場景は、夢の觀念から規則的に進出し來る何等かの願望を實現せられたものとして再び描く。併しその描かれたものは再認識せられず、さうしてたゞ分析に於いてのみ明瞭にせられる。欲望それ自身は抑壓せられて意識に知られないものであるが、或は抑壓觀念と密接に結合してゐるものである。これ等の夢を定式にして述べて見るとかうなる――これ等の夢は

抑壓せられたる欲望の祕かなる實現である。夢は未來を豫言するものだと考へてゐる人々は正しいと云ふのも興味あることである。夢が我々に示す未來はこれから生起するものではないが、併し我々が生起することを好むところのものである。民族の心理は、例に依つて、こゝから出發する。民族は自ら信じたいと思ふことを信ずるのである。

夢は欲望の實現への關係に應じて三種に分類することが出來る。第一に非抑壓の、祕められざる欲望を表はす夢がある。これ等は嬰兒型の夢で、成人の間に行くほど稀になる夢である。第二に、面紗を被けられた形で何等かの抑壓せられた欲望を表はす夢である。これ等の方は遙かに多く成人の夢を成してゐる、さうしてこれ等は、それを理解するためには、分析を必要とするのである。第三に、抑壓は存在するが、併しかすかな祕めかくしをしか持つてゐない夢、又は持つてゐる夢である。これ等の夢には必ず恐怖の感情が伴ふ、さうしてその感情のために夢が終るのである。恐怖の感情がこゝでは夢の轉位の代りを勤めるのである。私は夢の仕事が第二種の夢に於いてこれを妨げたものと考へたのである。夢の中に於いて今や烈しい恐怖として現れてゐるものは嘗ては欲望であつたが、今では抑壓の幇助者となつてゐることは、これを證明するに甚だ困難ではないのである。

また苦しい内容の夢でありながら、夢の中で何等の不安の表れないものがある。これ等は恐怖の夢

の中に數へるわけには行かない。併しながら、それ等の夢は夢なるものが如何につまらぬものであり、また心理的に空虚なものであるかを證明するために常に用ゐられて來た。そのやうな一實例を分析して見るとそれが我々の謂ふ第二種の夢——被抑壓欲望の完全に祕められた實現——に屬することが分る。分析に依つて同時に、如何にうまく轉位の仕事が欲望の祕めかくしに適用せられてゐるかゞ分るのである。

或る若い女が、數年前に自分の姉の最初の子が死んで横はつてゐるのを見たと同じ周圍の狀態の中に、姉の唯一の生殘つてゐる子供が死んで横たはつてゐるところを夢に見た。彼女は別に何の苦痛をも感じなかつたが、その場景は彼女の欲望を示してゐるのだとする見解には勿論反對した。それにその見解とても必然的ではなかつた。數年前、その子供の葬式の時に、彼女はその愛する男を最後に見、且つ彼と話し合つたのであつた。二番目の子供が死ぬことになれば、彼女は慥にその男にまた姉の家で會ふやうになるであらう。彼女は彼に會ふことを憧憬してゐるが、併しこの感情に抗爭してゐるのである。その夢の日に彼女は或る講演の切符を手に入れたが、その切符に彼女の常々愛してゐる男の出席することが報じてあつた。この夢は、旅行、芝居その他ひたすらに待ち設けられてゐる逸樂の前に起る夢に共通な焦慮の夢であるに過ぎないのだ。その憧憬は、そのやうな喜ばしい感情などのない、

而も一度は慥に存したところの機會へと場景を轉變することに依つて秘め匿されてゐるのだ。更に注意せよ、夢に於けるその情緒的の行動が轉位せられた夢の觀念へ適用せられずして、實際上の而も禁壓せられたる夢の觀念へと適用せられてゐることを。その場景は久しく待ち焦れた會合を豫想してゐる。こゝでは何等苦痛な情緒の必要はないのである。

これまでは哲學者たちにとつては抑壓の心理に就いて考へを繞らす何の機會もなかつたのである。吾人は夢の起源に關する何等かの明白な觀念を、この未知の領域への第一歩として、建設することを許されねばならぬ。我々の計畫は單に夢の研究からばかり目論だものではないが、勿論旣にいさゝか錯雜したものではあるが、併し役に立つ方法としてこれより簡單なのは見出し得ないのである。我々の精神的裝置は思想構成のために二つの作用を包含してゐると我々は斷ずるのである。第二の作用はその所産が意識への通路を發見してゐると云ふ便利があるが、第一の作用の活動はそれ自身にも知られず、たゞ僅かに第二の作用を通して意識に到達し得るのである。これ等二つの作用の境域のあたりでは第一が第二に變移するのであつて、その境域に於いては檢閲が立つてゐて、そのお眼鏡に協つたものだけは通すが、それ以外のものは總て追返すのである。檢閲に依つて却下せられたものは、吾人の定義に從へば、抑壓の狀態にあるものである。或る狀態の下に於いては、（睡眠狀態の如きはその一

つてゐるが）、二つの作用間の力の均衡が非常に變つて來、抑壓せられてゐるものがもう押返されてをらなくなるのである。睡眠狀態に於いては、これが檢閱の弛緩に乘じて起つて來るやうになるのである。これまで抑壓せられてゐたものが今や首尾よく意識界への進路を發見するのである。併し檢閱は決してなくなつてをるわけではなくて、たゞ弛緩してゐるだけであるから、檢閱をなだめるためには多少の變更をするだけの讓步はしなければならないのである。この場合に於いて意識的となるのは一つの妥協である――一つの作用の考へと他の作用の要求との間の妥協である。抑壓、檢閱、弛緩、妥協これ等は夢の基礎である如く、また多くの他の心的過程の發源の基礎である。そのやうな妥協の内に、吾人はさきに夢の仕事の内に發見した凝縮、轉位の諸過程を、皮層的聯想の受容を、見ることが出來るのである。

夢の仕事に就いての我々の說明を建てるに當つて、そこに魔訶不思議な要素が働いてゐることを、我々とても否定しようとは思はない。明瞭ならぬ夢の形成は、宛も何事かを云はうとする一人物が、それを好まぬ他の人物の吩咐をどうしても聽かねばならぬかのやうな風に進捗してゐると云ふやうな感じがする。かう云ふ擬人的方法を用ゐることに依つて、吾人は夢の歪みや檢閱と云つたやうな考へを描くやうになり、また吾人の感じを一つの寧ろ生硬な、併し少くとも確定的な心理說にまで結晶せ

しむる事を敢へてしたのであつた。これ等の第一及び第二の作用に就いて、如何なる說明が未來に與へられるやうにならうとも、吾人は第二の作用が意識への入口を扼し、第一を意識から除外することが出來るとの吾人の相關說を固めてくれるものと期待してゐるのである。

一度睡眠狀態が終ると、檢閱はその力を完全に回收し、力の弱つてゐた瞬間に讓渡してゐたものを取返すのである。夢の忘却がこの事を少くとも部分的には說明すると云ふことは、吾人が經驗に徵して確信するところであつて、その事は繰返し〳〵確信することを得たのである。夢の話をしてゐる間に、またはその分析をしてゐる間に、その夢の或る斷片が忽然忘れられると云ふことは稀でない。かうして忘れられた斷片こそは、その夢の理解へと近づく最上最捷の道程を必ず包含してゐるのである。恐らくその故にこそそれは忘却の中へ――新に甦つた禁壓の中へ――沈下してしまつたのである。

夢の內容を實現せられたる欲望の表象と見なし、その漠としてゐるのは檢閱のために被抑壓物に變化が加へられたゝめであるとするならば、夢の機能を把握することは最早困難でない。睡眠は夢のために妨げらるゝと云ふ說に根本的に對比して、吾人は夢が睡眠の守備者であると考へるものだ。子供の夢に關する限りでは、吾人の見解は直ちに承認せられなければならない。

睡眠狀態又は睡眠への心的變化（それは何であらうと）は、寢かしつけられた子供、又は疲勞に依

つて睡眠の餘儀なくなつた子供（その際たゞ精神裝置へ他の目的物を導きさうな一切の刺戟物を忌避すると云ふだけが、補助的の條件であつて）に依つて呈示せらるゝ。外的刺戟を遠ざけるに役立つ手段は知られてゐる。併　睡眠を妨げる内的の心理的刺戟を抑へるに用ふべき手段は何であるか。子供を寢かしつけてゐる母親を御覽なさい。子供はいろ〳〵と歎願してゐる。も少し接吻してほしい、も暫く遊んでゐたいなどと。彼の要求は一部分は容れられるが、一部分は次の日まで峻嚴に遲延せらるる。明かに、これ等の欲望なり必要なりは子供を刺戟して睡眠の妨げとなるものである。あの惡童の魅力ある話（バルドヰン・グロルラー Baldwin Groller の）を知らないものはなからうが、この惡童は夜中に眼を醒まして『犀が欲しい』と怒鳴つたのであつた。本當によい子供は怒鳴つたりする代りに、犀を持つて遊んでゐる夢を見たであらう。何となれば、彼の欲望を實現する夢は睡眠中は信ぜられ、さうしてその欲望を取除き睡眠を可能ならしめるからである。この信念は夢の影像と調和するものであることは否定出來ぬ。何となれば、この信念は本當らしいものが心内に顯現したことに依つて組成せられてゐるからである。子供は、後になつて獲得するやうな、幻覺又は空想を實在から區別する能力は持合せてをらぬからである。

成人はこの區別を知つてゐる。彼はまた欲望の空しさを知つてゐる。で、ぽつ〳〵と實行すること

に依つて彼の憧憬を延ばし、遂ひにその願望が外的世界の變化につれ、何等かの廻りくどい方法に依つて容れらるゝまで待つてゐる。この故に大人にとつては、その欲望を短い心內的のやり方で睡眠中に實現させることは稀である。かう云ふことは決して起らぬといふことも、またまるで子供の夢のやうに見えるものでもみな遙かに込入つた說明を要するといふことも、可能な位である。かう云ふ風にして成人に對しては――例外なく、一切の正氣の人間に對しては――子供の知らない、精神的內容の區別と云ふことが出來上つたのである。そこで、一つの精神的作用に到達することになつたのであるが、その作用は生活の經驗に依つて形を得て、熱烈な力を以つて支配的、制限的の勢力を精神的情緒の上に振ふのである。その作用の意識に對する關係に依つて、それの自發的言動能力に依つて、その作用は精神力の最も偉大な手段を賦與せられてゐる。嬰兒的情緒の一部分は生活には不用なものとして、この作用から差控へた。さうしてこれ等の情緒から流れ出る一切の思想は抑壓の狀態の中に發見せらるゝのである。

我々の常態の（覺醒時の）自我が依存する精神作用は睡眠に依つて失はれるが、睡眠の精神的生理的狀態に强ひられて、晝間はその力に依つて被抑壓物を抑へる慣はしになつてゐたエネルギーの或るものを放棄するの已むなきに立到つたやうに思へる。この放棄は實際上無害である。如何に子供の精

神の情緒の多くが掻き立てられようとも、それ等の情緒は意識に近付くことの困難になつてゐることを、また睡眠狀態の結果として言動への道を阻止されてゐることを、發見する。併しそれ等の情緒が睡眠を攪亂する危險は避けられねばならぬ。なほその上、吾人は深い睡眠中に於いてすらも若干量の自由な注意が（眠りを續けるよりは一層起きてしまつた方が利巧だと多分思はせるやうな）感覺刺戟に對する庇護として拂はれてゐる事を容認しなければならぬ。でなければ、吾人は或る性質の刺戟に依つて常に眼を醒まさせられる事實を何とも說明の仕樣があるまい。老生理學者のブルダッハ Burdach が指摘したやうに、母はその子の鼻で泣く聲にも眼を醒まし、水車番は已が水車の停止に眼を醒まし、大抵の人間はその名を小聲に呼んでも眼を醒ますものである。このやうに油斷のない注意は抑壓せられた欲望から起るところの內的刺戟を使用し、これを夢の中に混入する。さうしてこの內的刺戟は一つの妥協として同時に二つの手續きを滿足させるのである。夢は願望を實現せられたものとして呈示するが故に、願望が抑壓の力に依つて禁壓せられてゐようと或は形成せられてゐようと、夢は願望に對して心的緩和の一形式を造るのである。他の手續きも、眠りの繼續が確保せらるゝ以上、また滿足させらるゝのである。我々はこの場合喜んで子供のやうに行動する。自我は夢を信じ得べき繪畫となし、さうして『結構々々、併し私は眠らせて貰ひたいよ。』と云ふかのやうである。一度眼覺めて我々

が夢に對して抱く輕蔑感は夢の矛盾性とその一見非論理的なのに職由するのであるが、その輕蔑感は恐らく我々の眠れる自我が、抑壓せられたものに對する感情に就いて推理しつゝあるに外ならぬであらう。併しこの我々の眠りの攪亂者が無力であるためにこの輕蔑感が起きると云ふ方が一層正しいのである。眠りの中に於いても我々は時々この輕蔑感を承知してゐるのである。夢の內容は檢閱を寧ろあまりにも超越し、我々は『それは夢に過ぎないんだ』と考へて、さうして眠りを續けるのである。

よしんば夢には境界線があつて、そこでは、睡眠の妨害を防ぐために、夢の機能が維持されないのだ——振り懸つた恐怖の夢に於ける如く——と云つたからとて、以上の見解に反對することにはならないのである。こゝでは夢の機能は他の機能のために——正規の時間に睡眠を中絕させるために——變化せられてゐる。それは良心ある夜番のやうに振舞ひ、最初は市民の眠を醒まさせないやうに騷ぎを鎭めるが、併しもし厄介な事件が起きて彼には重大問題と思へ、而も一人では何とも取計ひかねる場合にはまた同樣に義務を果して街中を眼醒ませるのである。

このやうな夢の機能は、感覺知覺に對する何等かの刺戟物が生じた場合には、殊によく分るのである。睡眠中に喚醒まされた感覺が夢に影響することはよく知られてゐるし、また實驗して證明することも出來ることである。それは醫學の方から夢を檢査して見て確實な、併しあまり買被られた結果の

一つである。これまではこの發見に關聯して一つの解き難い謎があつた。檢査者が睡眠者の感覺に與へる刺戟は夢の中では正當に認識されないで、若干の不確實な解釋と混淆してゐる。その不確實な解釋を確定することは偏に心理上の自由意志に一任されてゐると思はれる。が、勿論そのやうな心理上の自由意志などはない。外部からの感覺刺戟に對しては、睡眠者はさま〴〵に反應するものである。眼を醒ましてしまふこともあれば、またそのまゝ眠り續けてゐることもある。後の場合に於いては、睡眠者は外的刺戟を放逐するために夢を使用することが出來る。併し、これとてもまたその遣り方が一樣ではない。例へば、睡眠者は自分に絕對に堪へられない場景を夢見ることに依つてその刺戟を停めることが出來る。これは痛みのひどい膿瘡に惱んでゐる者が用ゐた方法である。彼は馬背に跨り、彼の痛みを緩和するための糊藥を鞍に見立て、かくて苦痛の原因を遁れたのであつた。また、更に屢屢起る場合を擧げるならば、外部からの刺戟は新たな變化を受けて、それに導かれて睡眠者はそれを實現されたがつてゐる被抑壓欲望に結びつけ、かくて睡眠者はその實在性を忘れて恰もそれを心理的なものゝ一部分のやうに取扱ふやうになる。かう云ふ次第で、或る人の如きは確實な題材を持つた喜劇を書き、それが上演され、第一幕は熱烈な賞讃の中に終り、そこに盛んな拍手があつたと云ふ夢を見た。この瞬間に於いては、夢見てゐる人は騷ぎに拘らず彼の眠を長びかせることに成功したに相違

ない。何となれば彼が眼を醒ました時には、最早その騒音を聽かなかつたから。彼は誰かゞ絨氈か寢臺を叩いてゐたに相違ないと考へたさうだが、それは尤もである。眼の醒める丁度前に騒々しい音と共に現はれた夢は、眼を醒まさせさうな刺戟を何等かの他の說明で被ひ、かくして少しでも眠りを長びかせようと企てたのであつた。

凡そ誰でもこの檢閱を以て夢の歪みの主要動機と確認した者は、夢を註釋した結果、成人の大抵の夢は色情的欲望への分析に依つてつきとめられると云ふことを知つても別に驚きはしないだらう。この斷定は明らかに性的な性質を具へてゐる夢から引出されたものではない。さう云ふ夢ならば、總ての夢を見た人に、彼等自身の經驗に徵して分つてゐる。それ等はたゞ普通に『性的な夢』と云はれてゐるものに過ぎないのだ。これ等の夢はいつも十分に神祕的である。何となれば、その性の對象とせられた人物の選擇や、また覺醒狀態に於いてならば夢見た人の性的必要を蹴飛ばしさうな一切の障害が除去せられてゐることや、到錯（バアーシヨン）と呼ばれてゐる細々した事を思ひ出させるものが澤山で不思議であることなどが呑込めぬからだ。併し分析の發見するところに依れば、『性的な夢』以外の多くの夢に就いて、その顯在內容に於いては何等色情的なものを發見し得ないやうな夢に就いて、それを註釋して見ると、事實上性的欲望の實現である事が暴露せらるゝのである。而も他方に於いて、覺醒時の思

想の多くが晝間からの剩餘として我々に殘された思想が、抑壓せられた色情的欲望の助力を俟つて夢の中に發現するのである。

かう云ふ論述の說明をすることは、何等理論的の要件ではないが、この說明をするには、如何なる他種類の本能と雖も、性的本能ほど、文明化のためには、禁壓を必要としたものはないと云ふことは忘れてはならない。而も最高の精神作用を以てしてもこれの支配は最も容易に放棄せらるゝのである。吾人は既に嬰兒の性慾を——屢々その發現が甚だ漠としてをり、非常に看過せられ、誤解せられ勝ちな嬰兒の性慾を——理解してゐるのであるから、殆んど總ての文明人は何等かの點に於いて嬰兒型の性慾生活を保有してゐるものだと云つても至當であるのだ。かくて吾人は、抑壓せられた嬰兒型の性的慾望が夢の構成に對して最も有力な衝動を最も屢々與へるものであることを了解するのである。(二)

【註】(一) フロイド『性慾說に關する三論文』,,Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie'' 參照。この論文はブリル氏 A.A.Brill の英譯がある。本全集中に包含せられてゐる。(譯者)

何等かの色情的慾望の表現たる夢がその顯在內容を無邪氣に非性的に首尾よく見せおほせるならばそれは、たゞ一つの遣り方でのみ可能である。これ等の性的表象の材料はそのまゝでは展示せられない。暗示とか示唆とか、その他同樣な非直接的な方法に依つて置換へられねばならぬ。間接的表象の

他の場合とは違つて、夢に用ゐらるゝ間接的表象は直接的に理解せらるゝものであつてはならない。かう云ふ註文に應ずる表象の方法は普通に『象徴』と名付けられてゐる。一つの特殊な興味がこれ等の象徴に向けられてゐる。と云ふのは、同じ言語の人々の夢では同じやうな象徴が用ゐられ、實際、或る場合に於いては、象徴の相似は言語の相似よりも大だからである。夢見る人が自分等の用ゐてゐる象徴の意味を自分では知らず、彼等が轉置し、意味したものと彼等との關係が何處から來たかゞ謎となつて殘つてゐるほどだからである。事實それ自身は疑ふまでもないのであるから、夢判斷の技術に對して重要となるのである。何となれば、この象徴の知識を持つことに依つて夢の諸要素、又は夢の諸部分、時としてはまた夢それ自身の全體の意味を理解することが出來るのである。その時、夢見た本人には彼自身の考へに就いては質問する必要はないのである。吾人はかくして、夢判斷の通俗的な考へに近づいて來るのである。また他方、古代人の技術を再び持つやうになるのである。古代人の間に於いては、夢判斷は象徴に依つて說明することに外ならなかつたのである。

夢の象徴の研究はまだ到るべきところに達してはゐないが、吾人は今や全く確實な一聯の一般的命題と特殊的觀察を有してゐるのである。象徵の內には實際上常に同じ意味を有してゐるものがある。皇帝と皇后（王と王女）とは常に兩親を、室は女を意味してゐると云ふ風である。性はさまぐ\な象

徴で表象されるが、それの多くは屢々他の間道から這入つてその意味の手懸りを獲るのでなければ、最初には全く不可解であらう。

同じ程度の言語や教育を有する總ての人々の夢に普遍的に流通してゐる象徴がある。その他また一個人が彼自身の材料から築き上げた最も狹い、個人的な意義の象徴もある。第一の種類に於いては、性的なものを共通的な言葉に置換へることに依つて直ちにその意を認識し得るやうな象徴(例へば農業から來た、再生としての種のやうな象徴)は、これを他の象徴――それの性的根元が最も早い時代にまで、我々の影像創造の最も仄暗い深みにまで、溯るやうに思へる象徴――から區別することが出來る。これ等二つの特殊の形で象徴を造り出す力はまだ死んでしまつてはゐない。近頃發明されたやうなもの、例へば飛行船の如きは、直ちに性的象徴として一般的に用ゐられるやうになつてゐる。夢の象徴(『夢の言葉』„Das Sprach des Traumes“)に就いての知識をもつと深めて行くと、夢見た人に對してその夢に關する彼の印象を訊ねたりしなくともよくなり、昔の夢判斷者の全技巧を囘復することが出來るやうになると思ふのは、全然間違ひである。個人的な象徴、竝びに一般的なものをまち〳〵に用うることは別として、吾人は夢の中の一要素が象徴的に理解さるべきものか、又はそれの固有の意味に於いて理解さるべきものかは決して知ることは出來ない。夢の全內容は慥かに、象徴的には解

釋されないものである。夢の象徵を知ればたゞ夢の內容の或る部分を理解する助けとなるだけであつて、前に與へた技術的法則を用ふる事が全然無用になると云ふわけではない。併し、夢の象徵を知つてをれば、夢見た人がその印象を語らず、又は不充分にしか語らない場合には、夢を解釋する上に非常に役立つことは慥かである。

夢の象徵はまた、所謂『典型的』な夢や『それ自身を繰返す』夢を理解する上には缺くべからざるものであることが分る。夢の象徵は夢よりも遙か彼方に我々を導いて行く。それは夢にのみ屬してゐるものではなくて、また同樣に、物語、神話、傳說、機智竝びに說話の內に勢力を張つてゐる。それは我々をしてこれ等の諸現象の中に於ける夢の內的意義を追及せしむる。併し、吾人はそのやうな象徵が夢の仕事の結果ではなくて、多分我々の無意識的思考の一特殊性である事を——夢の仕事に對して、凝縮、轉位、戲曲化の材料を供するところの一特殊性であることを——承認しなければならないのである。

第四章

夢の分析

吾人は從來、哲學が吾々の精神機構の組立てに就いて何物かを暗示して吳れるものと空しく期待して來たが、多分今や夢の註解もそれをなし得るかどうか怪しいと思はれることであらう。併しながら、吾人はこの方面を追及せずして、まづ夢の歪みの主題を片付けておいて、直ちに我々の本源の問題に返つて行かうと思ふ。不愉快な內容を持つた夢が如何にして願望の充足として分析せられ得るかと云ふ問題が起つて來る。吾人は今やこの事は、夢の歪みが起つた場合にはまた不愉快な內容が願望せられたものゝ扮裝としてのみ役立つ場合には可能であることを知つてゐる。これ等二つの精神上の場合に關する我々の假定を心に保つておいて、吾人は今や進んでかう云ふことが出來る。不愉快な夢は、第二の場合には不愉快であるが、而も同時に第一の場合の願望をも充足するところの何物かを、事實上包含してゐる。それ等の不愉快な夢は一切の夢が第一の場合に發源すると云ふ意味に於いて、而も第二の場合がその夢の方へ、創造的にではなく單に反發的に、働きかけると云ふ意味に於いて、願望

の夢である。もし第二の場合が夢に働きかけるものをのみ限つて考察するならば、吾人は決して夢を理解することは出來ない。もしそんなことをしてゐたならば、著者が夢の中に發見した一切の謎は解決せられずにしまつたであらう。

夢は實際に於いて一つの祕密の意味を持ち、願望の充足となるものであると云ふことは、新たにあらゆる場合に就いて、分析に依つて證明せられなければならない。私はそれ故に苦痛な內容を持つた夢を二三選んで、それ等の分析を試みる。それ等は部分的にはヒステリカルな主題の夢であつて、長い豫備的說明を要するが、時々にはまたヒステリー中に起る精神的過程に就いての試驗をも要するのである。併しながら、私はこの說明に於いて、このやうな附加的な困難を避けることは出來ないのである。

私が神經症の患者に分析的治療を與へる時には、既に述べたやうに、私はいつでも夢を問題にして議するのである。それ故に、さうして討議してゐる內に、患者は心理學上の說明を悉く聽くことになり、彼の助力を俟つて私自身は彼の病徵を理解するやうになるのである。また私はさう云ふ場合に苛責なき批評を受けるが、それ等の批評は私の學友に期待する批評にも恐らく劣らず、鋭いものである。一切の夢は願望の充足であるとの命題に對しては、私の患者の總てが殆ど申合せたやうに反對する。

こゝに擧げた夢の材料の二三の例は、このやうな立場を駁するために、私に提出せられたものである。『貴方はいつも夢が願望の充足であると仰せられますが』と或る悧巧な婦人患者は云ふ。『では、私はその內容が全然反對で私の願望は充足せられてゐない夢を申上げませう。かう云ふのは貴方の理論でどう御說明なさいますか。夢と云ふのはかうで御座います。

『妾は晚餐に人を呼ばうと思ふが、手許には燻製の鮭しかないので買物に出掛けようと思ふ。併し考へて見れば今は日曜日の午後で店はみなしまつてゐる。で、次に妾は或る食物屋へ電話を掛けようと試みたが、電話はくるつてゐる。……そこで妾は晚餐に人を呼びたいと云ふ願望を棄てなければならない。』

私はこれに答へて、勿論たゞ分析だけがこの夢の意味を決定することが出來る、よしんば一見したところではこの夢は意味あり脈絡あつて願望充足の反對であるかのやうに見えようとも、と云つた。『併し如何なる出來事がこの夢を起させたか。』と私は尋ねる。『御存知の通り、一つの夢を起す刺戟はいつも、前日の經驗の間に存してゐるのですから。』

分析——患者の夫は正しい、良心ある卸賣の肉屋であるが、彼は妻にその前日、自分はあまり肥るやうだから肥大症に對する治療をしなければならぬと云つた。彼は朝早く起き、運動をなし、嚴格に減

食をし、就中晩餐の招待には斷然應じないやうにしなければならないと云つた。彼女は進んで、笑ひながらかう述べた。彼女の夫は或る料理屋の食卓で或る美術家と知合ひになつたが、その美術家は彼ほどの表情的な顏を見たことがないから是非肖像を描きたいと主張した。併し彼女の夫は彼らしいざつくばらんな調子で答へた。それは甚だ光榮ではあるが、自分の顏全體よりは美しく若い娘の背の一部分の方が美術家にははるかにお氣に入ることを承知しきつてゐるからと。(二) 患者の云ふところに依ると、その當時彼女はその夫を非常に愛してをり、彼を非常に多くいぢめたものである。彼女はまた夫に鯡の鰯の鹽漬を送らないで呉れと頼んだ。

【註】(一) 畫家のモデルとなること。ゲーテの句に『さうしてもし彼に背がなかつたならば、どうしてその貴人はモデルに坐ることが出來よう』と云ふのがある。

それは何を意味してゐるか。

ところが實際はどうかと云ふに、彼女は長い間毎日午前中に鯡の鰯の鹽漬入りのサンドヰッチを喰べたいと思つてゐたのだが、その費用を惜んでゐた。勿論、彼女は鯡の鰯の鹽漬を呉れて欲しいと云へば、夫は直ぐにそれを呉れた。ところが、彼女はその反對に、鯡の鰯の鹽漬を送らないで呉れと頼んだのである。それは鯡の鰯の鹽漬に就いて、より長く彼にせびることが出來るためにである。

この說明は私にはこじつけのやうに思へる。容認せられざる動機が、そのやうな不十分な說明の背後に匿れてゐるのが慣はしである。それに就いて思ひ出すのはベルンハイムに催眠術をかけられた患者たちである。彼等は催眠術後に現はるゝ指圖に從つて實行し、さうして彼等の動機を尋ねられた時に、『どうしてさうしたか私は知らない』と答へる代りに、それは明かに不適當と思つたからと云ふ理由を發明したのであつた。私の患者の鮭の鰤の鹽漬も多分これに似たものがある。彼女は生活の中に一つの充足せられざる願望を創り出すやうに强ひられてゐる事を私は知るのである。彼女の夢はまた充たされたものとしての彼女の願望を示してゐるのである。併し何故に彼女は充足せられざる願望を必要とするのか。

これまで出された觀念だけではこの夢の註釋には不十分である。私はもつと欲しいと思ふ。暫く默つてゐたが、その間に反意が融けて、彼女は更に、その前日に一友を尋ねたことを告げた。その友を彼女は實は嫉妬してゐるのである。何となれば、彼女の夫は、いつも彼女にこの婦人を非常に褒めてゐるからである。幸にしてこの友は甚だ痩せて細りとしてゐるが、然るに彼女の夫は丸々肥つた女が好きである。さて、この痩せた友は何事を話したか。勿論、自分がも少し頑丈になりたいと云ふ事に就いてゞあつた。彼女はまた私の患者に尋ねた『いつお宅では妾たちをまた招んで下さるの？　お宅

の御料理はほんとに結構ですわ』と。

そこで夢の意味が明かになつた。私は患者に云ふことが出來る、『招んで吳れとの賴みのあつた時に、貴女は「勿論お招びしませう、だから宅へ來てどつさり召上つてお肥りなさい、さうして妾の夫に益々氣に入るやうにおなりなさい。私は寧ろ晩餐は出したくないのです。」とお考へになつたが、夢は正にその通りに出てゐる。その夢は、そこで、貴女が晩餐を出すことが出來ないので、貴女の友を肥らせることに何物かを貢獻することをしたくないとの願望が充足せられてゐることが分るのである。貴女の夫が肥るために晩餐への招待を一切斷るとの決心は、人は會で出されたもので肥ると云ふ事を貴女に敎へてゐる。』今はこの解決を信じさせるためにはたゞ二三の語を交せば十分である。夢の中に出て來る燻製の鮭の事はまだ調べてなかつた。『夢の中に出て來る鮭と云ふのはどうして貴方に起つて來たのです?』『燻製の鮭はこの友達の好物なのです』と彼女は答へた。私はこの婦人が分つて來た。さうして丁度私の患者が鯡の鰤の鹽漬を惜むやうに彼女の友は鮭を惜むのだと云ふ事に依つて、愈々分つて來た。

この夢は更にまた他の、もつと確實な解釋を下すことが出來るが、それには一つの從屬的な事情だけが必要なのである。二つの解釋は互に矛盾するものではなく、寧ろ互に重なり合つて、所謂夢の曖

昧さや、精神病成立の恰好な實例を供するのである。吾人はその事を同時に見てゐるのである。彼女が願望否定の夢を見てゐる事と、患者が實際に於いて充足せられざる願望（鮭の鮞（はらこ）の鹽漬の入つたサンドキッチ）を確保するに專念してゐることとを——。彼女の友もまた一つの願望を、つまりもつと肥りたいとの願望を表白したのである。で、こちらの婦人が、その友の願望の充足せられなかつた夢を見たからとて、我々は驚きはしないのである。何となれば、彼女の友の願望——體重を殖したいとの——が充足せられないやうにと云ふのが彼女自身の願望だからである。ところが、これの代りに、彼女は自分自身の願望の一つが充足せられないところを夢見てゐるのである。もし夢の中で、彼女自身でなく彼女の友が願望したとすれば、もし彼女がその友の位置に自分自身を置いたとすれば、又は我々の言葉で云へば、彼女が自分をその友と同一化（イデンチフィーレン）してゐるとすれば、この夢はまた別の解釋を下すことが出來るやうになる。

私は彼女が實際この同一化をやつてゐるのであると思ふ。さうしてこの同一化の一つのしるしとして彼女は現實に於いて一つの充足せられざる願望を創り出したのである。併しこのやうなヒステリカルな同一化の意味は何であるか。これを明かにしてしまふには、十分な暴露が必要である。同一化はヒステリカルな徵候の機構に於ける非常に重要な一素因である。この方法に依つて患者は彼等の病徵

の中に彼等自身の經驗のみならず、また多數他人の經驗をも表すことが出來、一戲曲の各篇に彼自身の個性だけを滿すことが出來るのである。それは誰でも知つてゐるヒステリーの模倣ではないか、ヒステリーの患者が他人に起きた病徴の印象を受けて、恰もそれを再製しなければ已まぬ程の懸みを感じたかのやうに、總てそれ等を模倣する能力ではないかとの反對がこゝで起きることであらう。併しこれはたゞ精神的現象がヒステリカルな模倣となつて發露せらるゝ方法を示すに過ぎないのである。人々はヒステリー患者の模倣が非精神的行動が進出する方途と行動そのものとは二つの別物である。常に錯雜したものだと思ひ勝ちであるが、精神的行動はそれよりもなほいさゝか錯雜したものである。精神的行動は一つの無意識的な、抑壓せられた過程に呼應するものである。その事は一つの實例に就いて明かにされるであらう。一つの特殊な種類の痙攣を有する婦人患者が、病院の室内に他の患者たちと同宿してゐたが、その患者を扱つてゐる醫師が、或る朝彼女の特殊な痙攣を模倣してゐる者がある事を知つても別に驚きはしないのである。彼はたゞから獨語するだけである、他の患者たちは彼女を見て同じやうなことを行つてゐる、あれは精神的感染と云ふものである。さうだ、併し精神的感染はいさゝか次のやうな遣り方で進んで行く。概して患者と云ふものは醫者が各自を知つてゐるよりもよく相互に知合つてゐるものである。で、醫者の來診が終つた時には彼等は互に氣にし合ふものであ

る。彼等の或る者は今日一つの病氣が加はつて來た。すると他の患者たちの間に、今日家から手紙が來たとか、戀煩ひの再發とか、何かさう云つた事が原因である事が直ぐに知れ渡る。彼等の同情は惹起され、意識には達せざる次のやうな三段論法が彼等の心の内に出來上るのである。『もしあのやうな原因からあゝ云ふ種類の病氣が起るものとすれば、私にもあゝ云ふ病氣が起りさうなものだ。私にも同じ理由があるのだから――』と。もしこれが意識的となり得べき考へであるならば、同じ病氣に罹るだらうとの恐怖となつて多分現れるであらうが、併しそれは他の精神的分野に於いて起つたことであるからして、從つて恐れられたる病徴の實現となつて終つたのである。同一化は、であるから、單なる模倣ではなくして、同病相憐むものであるのだ。それは一つの『恰も』を表はし、また無意識中に殘存する或る共通性質に關係してゐるものである。

同一化はヒステリーに於いて最も屢々性的の共通性を表はすために用ゐらるゝ。ヒステリーの婦人は自分が性的關係を有する人物、又は自分のと同じ人物と性行爲をなした人物と直ぐに――專らとは云はぬが――同一化するものである。言語はそのやうな考へを採り上げてゐる。二人の愛人は『同體(ひとつ)』であると。ヒステリカルな空想に於いても、夢に於いても、同一化にとつては性的關係を思ふだけで十分であつて、それが現實であるとないとはどうでもよいのである。そこで例の患者は彼女の友に對

は一つの病徴――否定せられた願望――を創ることに依つて彼女自身を友の位置におき、自分を友と同一化してゐると云ふ點で、その嫉妬が正當なものでないことを、彼女自身容認してゐるのである。）

私は更にその過程を、特殊の意味で、次のやうに説明することが出來ようと思ふ。彼女は夢の中で友の位置に自分自身を置いてゐる、何となれば彼女の友は夫に對する關係に於いて彼女自身の位置を取つてゐるからであり、また彼女は自分の夫を重んずることに於いて友の位置を取りたく思つてゐるからである。（二）

【註】（一）私自身としてはヒステリーの精神病理からこのやうな個所を紹介し來つたことを悔いてゐる。何となれば、これは我々の題目を斷片的にしか表してゐないし、またそれと一切の聯結を絶たれてゐるので、啓蒙的な效力を持ち得ないからである。もしこれ等の個所が、夢と神經症との密接な關係に就いて明かにし得る力があるならば、私がそれ等を採用した目的は達せられてゐるのである。

夢に關する私の説に反對した今一人の婦人患者があつたが、彼女は私に夢を提供した總ての人々の中で最も機智家である。彼女の反對はもつと簡單に解決せられた、尤もそれは一つの願望を充足せざることが他の願望の充足を意味すると云ふ式に依つてゞはあるが――。私は或る日彼女に夢は願望の充足であると説明したことがあつた。その翌日、彼女は私に夢を語つたが、それは彼女がその姑と

共に彼女等の共通の避暑地へ旅行しつゝあるところであつた。そこで私は彼女がその姑のゐるところで一夏を送ることに非常に甚だしい苦悶をしてゐる事を知つたのである。私はまた彼女が遠い田舍の避暑地に地所を借りることに依つて、幸にも彼女の姑を避けることが出來たことを知つたのである。

さてその夢はこの願つた事の協つたことを轉倒させてゐるのである。これは夢の中で願望を實現するとの私の說に對する最も平明な反對ではないか。慥に、この夢の判斷をするためには、この夢から推論を引出すことが必要なだけである。この夢から見ると、私は間違つてゐるのである。このやうに私が間違つてゐればよいと云ふのが彼女の願望であつたのだ。で、その願望はこの夢に依つて充足せられたものとして示されたのであつた。併し私が間違つてをればよいと云ふ願望は田舍家の條で充足されてゐるが、その願望はも少し重大な問題に關係してゐる。その時分、私は、彼女を分析して得た材料に依つて、彼女の病氣に對する意義の或るものは、彼女の生涯の或る時期に起つたに違ひないといふことに心を定めたのであつた。彼女はそれが記憶にないと云ふ理由でそれを否定した。併し間もなく、私の方が正しかつた事が分つて來た。私が間違つてゐればよいとの彼女の願望は變形せられて夢の中に現れ、かくて當時に於いてはたゞどうかなと思はれただけのそれ等の事が全然起らなかつたらばといふ、是認せられ得べき願望にその願望が呼應してゐるのである。

分析せずにたゞ認定の方法で、私は一友の場合に於ける一小出來事を敢へて解釋したことがあつた。彼は高等學校の八學年の間、私の同窓であつたのだ。彼は嘗て私が願望充足としての夢の新問題に關して、一小集會に於いて述べた講演を聽いたのであつた。彼は家へ歸つて、衣類をすつかり失くした夢を見た。――彼は法律家であつた。――で、それに就いて彼は私に不平を云つて來た。私は『人は自分の一切の衣類（シウフ）（求婚）を獲ることが出來ない』と云つて誤魔化してしまつたが、併し自分一人ではかう考へてゐた。『私が八學年の間、首席として第一の椅子に座して來たのに、彼は級の眞中どころをぶら〳〵して來たとすれば、彼は少年時代から私も一度ぐらゐは全然面目を失墜すればよいとの願望を持つて來たかも知れないではないか』と。

同樣にして、またもつと陰鬱な性質の夢が私の夢の願望說に反對するものとして、一婦人患者から提示せられた。患者は若い娘であるが、かう切出して來た。『覺えてお出で御座いませうが、妾の姉は今では男の子を一人カールだけを持つてをりますが、妾が彼女の家にまだ居りました間に長男のオットーを亡くしました。オットーは妾が大層可愛がつた子で御座いました。あの子は妾が實際育てたので御座います。カールの方も妾は好きですけれども、併し死んだ子ほどにでは御座いません。さて、妾は昨夜カールが死んで妾の前に横たはつてゐる夢を見たので御座います。彼は手を組んで彼の小さな

棺桶の中に横たはつてゐました。周りには一面に蠟燭が立つてゐて、つまり丁度小さなオットーの死んだ時のやうでした。それで、私は非常に深い衝撃を受けました。さアこれはどう云ふ意味か、仰言つて下さい。貴方は妾の事は分つてゐて下さいます。妾が姉に殘されてゐる唯一の子供を失ふことを願望するほど、實際そんなに惡い人間でせうか。それともこの夢は妾が寧ろ多く可愛がつてゐるオットーよりはカールの方が死んだ方がよいと願望してゐることを意味するのでせうか。』

私は彼女にさう云ふ解釋は出來ないと云つてやつた。多少考へた後に、私はその夢の解釋を彼女に與へることが出來た。さうして後にそれを彼女に信じさせることが出來た。

まだ幼い時分に孤兒となつて、その娘は遙かに年上の姉の家で育てられた。さうしてその家へ來る友達やお客に接する中に一人の男があつて、その男が彼女の心に消えやらぬ印象を與へた。一時は、こんな單なる行きずりの關係であるから結婚すれば終るやうに見えたが、併しこの幸福の絕頂は壞されたが、それが何の動機からであるかは嘗て十分な說明を見出すことが出來ない。その斷絕の後、我等の患者に愛せられてゐる男はその家を避けてゐた。彼女自身も小さいオットーの死後暫くして獨立するやうになつたが、彼女の愛は今はオットーに向けられるやうになつてゐた。彼女の矜持は彼を避けるやうに命じた。併し彼女にとつてはその男に對する愛を動かして、次々に現れ來る求婚者に轉ずる

ことは不可能であつた。彼女の愛してゐる男は文壇の一員であつたが、彼が何處かで講演をする場合には彼女は必ずその聽衆の內に混つてゐた。彼女もまた遠くから彼に見られないやうにして彼を見るあらゆる他の機會を捉へた。私はその前日にその敎授が或る音樂會へ行かうとしてゐること、彼女もそこへ行つて彼を見て樂まうとしてゐることを私に語り聽かせた事を思ひ出した。これは夢の日のことで、音樂會は彼女が私に夢を語り聞かせたその日に催されることになつてゐた。私は今は容易に正しい說明を知ることが出來た。そこで、私は彼女に、小さいオットーの死後に起つた何かの事件を考へることは出來ないかと尋ねた。彼女は立ちどころに答へた。『出來ますとも、敎授が永い間他へ行つてゐて歸つて來た時です。さうして妾は再び、小さなオットーの棺桶の側に彼を見たのです。』それは正に私が豫期してゐた通りであつた。私はその夢を次のやうに解釋した。――『もし今度他の子供が死ぬとすれば、同じことが繰合されるでせう。貴女は姉さんと共に一日を送るでせう。敎授は悔みを述べるために來るでせう。そして貴女はこの前の時と同じやうな事情の下に彼に會ふことになるでせう。この夢は貴女が心の內ではそれと戰ひつゝあるところの、彼を再び見たいとの貴女のその願望に外ならないのです。貴女は今日の音樂會の切符をバッグの中に持つてゐられるのでせう。貴女の夢は待ち焦れの夢です。それは數時間の後に起るべき會合の豫想であります。』

彼女の願望を扮裝するために、彼女はさう云ふ願望が普通には禁壓せらるゝ場合――戀愛などは考へられないほど悲嘆に滿ちてゐる場合――を明かに選んだのである。然しながら、一層可愛がつてゐる第二兒の棺の側に於ける實際の場合（それを夢は如實に寫してゐるが）に於いてすらも、彼女が永い間會ひたくて會へなかつた來訪者への愛情を禁壓出來なかつたと云ふことは、如何にも甚だありさうなことである。」

今一人の婦人患者の同樣な夢の場合に於いて、また別の說明を下すことが出來た。彼女は幼年時代に機智縱橫と快活な態度とで人目を惹いたが、今日でもなほそれ等の性質を少くとも心持の中には示してゐる、さうしてそれ等の性質は治療の道程の中に彼女に現れて來た一つのもつと長い夢の中で、この婦人は自分の十五歲になる娘が死んで自分の前に箱の中に橫たはつてゐるところを見たやうに思つた。彼女はこの夢の影像を以て願望充足說への反證にしようとの强い意向を持つてゐた。併し彼女自身はこの箱の細部がその夢に就いて他の考へに導かざるを得ないのではないかと思へた。こ分析の道程の內に、その前夜に寄合つて話してゐた時、偶々英語の box と云ふ語が話題に上り、それがドイツ語で箱、劇場の桝、筥、耳の上を毆ることその他にいろ〳〵に飜譯されることが語られた事を思ひ出した。同じ夢の他の組成要素からして、今はかういふ事を附加するのが可能となつた。卽ち、その

婦人は英語の box と云ふ語とドイツ語の Buechse（ビュクゼ）との間に關係あることを察知し、またそれから Buechse（のみならず box も）卑俗な言葉では婦人の性器を表すために用ゐられてゐると云ふ記憶が仄かに甦つて來た。(二) それ故に、彼女が地方的な解剖稱呼の題目に就いて考へを持つてゐた事を多少容認すれば、箱の中の子供と云ふのは母の胎内に於ける子供と云ふ意味にとる事が出來たのである。この段階まで說明して來た時には、彼女は最早その夢の繪が實際彼女の願望の一つに協つてゐる事を否定はしなかつた。多くの他の若い婦人と同じやうに、彼女も姙娠した時には決して嬉しくはなかつた。さうして一再ならず、彼女の子供が生れる前に死ねばよいとの願望を私に白狀した。彼女の夫と立廻りを演じた後の怒りの發作の中に、彼女は拳を以て下腹を打ち、内なる子供を叩かうとしたことさへあつた。死んだ子供は、それ故に、實際願望の充足であつたのだ。併し十五年間忘れられてゐた願望で、その願望が充足せられても、それほどの間融があるので、最早認識されなかつたのは、敢へて驚くまでもない事である。何となれば、その間に幾多の變化が生じて來てゐるからである。

【註】（一）晩餐延期の夢に現れた燻製の鮭に多少似たところがある。

（二）九州の薩摩地方でも、女性器のみならず若い女のことを俗に『はこ』といふさうである。（譯者）

右に擧げた二つの例が屬する夢の群は、入懇の親戚の死を内容としてゐるが、これ等は『典型的な

夢』の條下に再び考察することにしよう。その時には私は新たな實例に依つて、總てこれ等の夢は、願はしからぬ內容を有してはゐるが、やはり願望充足として解釋せられねばならぬと云ふことを明示することが出來よう。次の夢はまた、夢は願望なりとの輕率な一般化から私を救はうとて私に示されたものであるが、これに對しては私は患者に負ふと云ふよりは私の知人たる頭のいゝ法律家に負ふものである。わが報告者は私に語つて曰く『私はわが家の前を一婦人に腕を貸しつゝ歩いてゐるところを夢に見てゐる。そこに閉された四輪馬車が待つてゐて、一紳士が私の方へ進み寄り、警察官としての證據を示して、私に同行を求めた。私はたゞ、萬端の準備をするため暫時待つて呉れと賴んだ。これは私が捕縛されたいとの願望であると想定することが出來ますか。』『勿論、出來ません』と私は云はざるを得なかつた『併しどう云ふ廉で捕縛されたか、それは分らなかつたものでせうか。』『左樣、嬰兒殺しのためであつたと信じます。』『嬰兒殺し？ 併しそれはたゞ母親が新たに生れた子供に對して犯し得る罪ではありませんか。』『成程さうですね。』『さうしてどう云ふ事情の下で貴方は夢を見られましたか。その前夜にどう云ふ出來事がありましたか。』『それはどうも申上げ兼ねます。それは微妙な問題でして――。』『併し、それは是非承らねばなりません。でないと夢判斷はやめにしなければなりません。』『では申上げませう。その夜は家には宿らなかつたのです。私が懵からず思つてゐる

婦人の家に宿つたのです。翌朝、眼の醒めた時に、私たちはまた或る事を行ひました。それから私はも一度眠りましたが、その時只今申上げました夢を見たのです。』『その婦人は有夫の人ですか。』『さうです。』『そして、貴方はその人が子供を孕まないことを願つてゐられるのですね。』『さうです、そんなことになれば、暴れてしまひます。』『では、貴方は普通の××をなさらなかつたのですね。』『私は××の前に××やうに氣を付けました。』『では失禮ながら云ひますが、貴方は夜中にさう云ふトリツクを數回行はれ、さうして朝の時にはうまく行つたかどうかあまり確かではなかつたのではないですか。』『さうであつたかも知れませんね。』『それなら、貴方の夢は願望の充足です。その夢に依つて貴方は子供を作らなかつたと事の、又はそれと同じ事になる、子供を殺したことの、確證を得てゐられるのです。私はわけなく繋りの環を證明することが出來ます。覺えてゐられますか、我々は數日前に、結婚（Ehenot）の不幸に就いて、また姙娠しない間は××を許しておきながら、卵と精蟲とが會して胎兒が出來てからの後の一切の犯行は罪惡として罰すると云ふのは甚だ辻褄が合はぬと云ふ事に就いて語り合ひましたね。これに關連して我々はまた、中世紀には靈魂が實際胎兒に宿る時の瞬間に就いて議論をしたが、それはその瞬間からして殺人の概念が成立するからであると云ふやうなことを回想したりしました。勿論、貴方もレーナウ Lenau (二) の物凄い詩を知つてゐられるでせう。彼の詩には

嬰兒殺しと生兒拒止とが同等に取扱つてあります。』『實際不思議なことに、私はその日の午後に不圖レーナウの事を考へてゐました。』『貴方の夢にはも一つ反響があります。で、私はこれから貴方の夢にも一つ從屬的な願望充足があることを證明しませう。貴方はお宅の前を、その婦人に腕を貸して歩いてゐます。で、貴方は實際に於いてはその婦人の家に一夜を過ごしたのですが、夢では彼女を家に連れて來てゐます。夢の本質であるところの願望充足がそのやうな不愉快な形で扮裝すると云ふ事は、恐らく一つ以上の理由のある事です。不安（アングスト）神經症の病源に關する私の論文を御覽になれば分るやうに、私は中絕性交が神經症的恐怖を進める諸要素の一つであると認めるのであります。今云つたやうな種類の同衾を繰返した後、貴方が不快な氣分に浸るとすれば、（その氣分が今や貴方の夢の一要素となつてゐる）以上述べたところと一致するわけでせう。貴方はまたこの不快な心持ちを以て願望の充足を隱してをります。更にまた、嬰兒殺しを云々したことの說明がついてゐない。何故、婦人に特有なこの罪惡が貴方に起つたのです?』『白狀しますが、私は數年前に、さう云ふ事件に捲き込まれたことがあります。私の失策からして、或る娘が私との浮氣（リエーゾン）の結果を防がうとして墮胎したことがありました。私はその計畫の遂行には何の手も下さなかつたのですが、併し私は長い間、その事件が發見されはせぬかと心配いたしました。』『分りました。この思ひ出が第二の理由となつて、貴方がトリックを描く

行つたと思つた事が貴方には苦痛であつたに相違ないのです。』

【註】（一）夢は屢々全部語つてしまはれないものである。さうして省略せられた部分の追懷はたゞ分析の間にのみ現れて來るものである。後になつてさし込んだこれ等の部分が、きまつて分析への鍵となるものである。以下、『夢の忘却』の條下參照。

（二）Nikolaus Lenau（1802—1850）ドイツ詩人。ヰインにて法律と醫學とを學ぶ。病的な詩的不滿を持ちそのために生涯は非常に不幸であつた。一八四四年、遂に發狂し、ヰイン近在の癲狂院に死す。彼の詩は短い抒情詩に最も優れたものが多いと云はれてゐる。發狂した位であるから、彼の無意識心理は深刻悲痛な發現をその文學の上に示してゐる。（譯者）

私の同僚のこの夢が話された時、聽いてゐた或る若い醫師はそれに捲込まれるやうな氣持になつたものと見えて、直ちに彼自身の夢の中にそれを模倣し、その考へ方を他の主題に適用した。その前日に彼は自分の收入の申告書を手交したが、それは全く正直な申告であつた。何となれば彼の申告は小額であつたから、彼の夢に、彼の一知人が收稅委員會の會合から歸つて來て、他の人々の收入申告は問題なく通過したが、彼自身のは一般の疑を惹起し、彼は重い罰金を以て罰せらるゝであらうといふことであつた。この夢は大收入ある醫師として知られたいとの、懸れにも匿された願望實現である。同樣に、これで思ひ出すのは、或る若い娘がその求婚者が短氣の男で結婚した後には毆つたりするに

きまつてゐるから、申込みを受けないやうにとの忠告をされた話である。

その娘の答へはかうであつた『妾はあの人が妾を打つてくれゝばよいと思ひます。』彼女の結婚したいとの願望は非常に強くて、結婚すれば屹度ひどい目に合ふと豫言されてゐるその事をも勘定の中に入れ、寧ろそれを願望にまで高めてしまつてゐる程なのである。

この種類の夢は甚だ屢々起るが、これ等は願望の否定、又は斷然願望せざる何等かの出來事が含まれてゐると云ふ點で、平たく見れば私の說に撞着するものゝ如くではあるが、もしこれ等を『逆願望の夢』と云ふ稱呼の下に總括するならば、これ等は總て二つの原理に委することが出來ると私は考へるのである。その二原理の一つはまだ言及した事はないのであるが、實は人類の夢に於いて大きな役割を演じてゐるものなのである。これ等の夢を誘發する動機の一つは、私が間違つた事になればよいとの願望である。かう云ふ夢は、もし患者が私に對して抵抗を示すと、分析取扱の道程中に屹度現れるのである。で、私は、夢は願望充足であるとの私の說を患者に一度說明した後には、相當高度の確實さを以て、そのやうな夢の起きることを期待する事が出來るのである。この單に私が間違へばよいとの願望を滿たすだけにでも、一つの夢の中でこれが起きることをすら私は期待することが出來るのである。分析取扱の道程中に起つた夢の間から最後に私が述べる夢が、また實にこの事を明かにするの

である。或る若い娘が私の分析取扱を受けたものかどうか親戚や目上の者に相談して、受けろと云はれたに拘らず私の取扱を受けることにひどく反抗したが、次のやうな夢を見てゐる。彼女は家で、もう私のところへ行く事を禁ぜられてゐる。彼女はそれから私が、もし必要ならば無料で取扱ひをしてあげようと云つた約束を私に思ひ出させてゐる。それで私は彼女に云つた『私は金錢問題には重きをおくことが出來ない』と。

【註】（一）同樣な『逆願望の夢』は、この數年間に私の門弟たちから頻々と報告されて來る。かくして彼等は『夢の願望說』に始めて出會した時の事を思ひ出すのである。

この場合には願望の充足を證明することはさうやさしくはない。併し總てかう云ふ種類の場合にはそこに第二の問題があつて、それの解決がまた第一の問題の解決に資するのである。私が口にしたやうにした言葉は何處から彼女が得て來たのであるか。勿論、私は嘗てそのやうなことを彼女に云つたことはない。併し彼女の兄の內に彼女に最も大きな感化を及ぼしてゐる一人があつて、その人が親切にも私のことをさう云つて吳れたのである。そこで、この兄の云ふ事は正しいと云ふのがこの夢の目的である。而も彼女はこの兄を單に夢の中で是認しようと試みるのではない。それは彼女の人生の目的であり、また彼女が病氣になつた動機である。

逆願望の夢への他の動機はあまりに明かで、それをつい見逃しさうなほどである。私自身の場合に於いても或る時分にはさうであつたのである。多くの人々の性組織にはマゾヒズムの要素があるが、それは攻擊的な、サディズム的要素がその反對なものに轉變してそこまで高まつたものである。そのやうな人が、もし彼等に加へらるゝ肉體的苦痛に快樂を求めず、精神の卑下と膺懲とに快樂を求めるならば、彼等は『理想的の』マゾヒストと云はれる。そのやうな人は、逆願望の夢と不愉快な夢とを見ることは明かであるが、併しそれ等の夢は彼等のマゾヒスト的傾向に滿足を與ふるところの願望充足に外ならないのである。こゝにそのやうな夢がある。或る若い男が小さい時分に多少の同性愛を抱いてゐた兄をいぢめた事があつたが、併し今は全然性格が一變してしまつてゐる。彼は次のやうな夢を見たが、それは三つの部分から成立つてゐる。(一)彼は兄に『侮辱』された。(二)二人の成人が同性愛的欲求を以て相互に抱擁し合つてゐる。(三)彼の兄が或る企業を賣つていしまつたが、その企業の經營はその若者が彼自身の將來のために保留しておいたものである。彼は最後に擧げた夢から醒めて甚だ不愉快な感情を持つたが、しかもそれはマゾヒスト的の願望の夢であつて、その意を譯して見ればかうである。兄が私の手から受けた一切の惡虐への懲罰として、私の利益を無視して賣却したとすれば、私にとつては當然の事であらう。

以上の論述や實例に依つて、苦痛な內容を持つた夢でさへも願望の充足として分析せらるべきだと云ふ事が信ぜられ得べきものとなるならば――更により以上進んだ反對說の生じ來るまでは――幸である。また夢判斷の道程の中に於いて、人々が常に自ら語り又は思ふことを好まぬ題目に逢着するといふことも、偶然の事とは思はれぬであらう。そのやうな夢が惹起す不快な感覺は、そのやうな題目を取扱つたり論究したりすることから我々を抑制しようと努める――首尾よく抑制し了せるのが普通である――反感と、畢竟するに同一物であつて、そのやうな反感は、もしその不愉快に拘らずその問題を取扱はねばならぬ必要を認めるならば、是非とも我々の總てが克服しなければならないものである。この不愉快な感覺はまた夢の中でも起るが、それは併し願望の存在を妨げるものではない。何人でも他人に語ることを好まないやうな願望を、自分自身にすら容認することを欲しないやうな願望を持つてゐるものである。我々は他の根據からして當然、總てこれ等の夢の不愉快な性質を夢の形が崩される事實と結付ける事が出來、又これ等の夢は歪められてをり、それ等の中の願望充足はそれと認めることが不可能な程までに扮裝されてゐると結論することが出來るのである。それと認めることの不可能な理由は外でもない、嫌惡が、禁壓の意志が、夢の主題に關係して、又は夢が造る願望に關係して、存在するからである。夢の形の崩される事は、そこで、實際に於いて、檢閲の行爲であること

になるのである。不愉快な夢を分析することに依つて明にされた一切のものを考慮に入れて、我々の定理を再言して見れば、次のやうになる。――夢は（禁壓された、抑壓された）願望の（扮裝せられた）充足である。

さて、苦痛な内容を持つた夢の一つの特殊な種類として、不安（アングスト）の夢がまだ殘つてゐるが、これを願望の夢の下に包含せしむることは、まだ精神分析學を始めない人には殆んど受容れられない事であらう。併し私は不安の夢の問題は甚だ簡單な方法で片付けることが出來るのである。何となれば、それ等の夢が顯示しさうなものは夢の問題としては別に新樣相ではないからである。それは一般的に神經症的不安を理解するに就いてのそれ等の夢の場合に於ける一問題である。吾人が夢の中で經驗する恐怖は、夢の内容に依つてたゞさもありげに説明せらるゝだけである。もし我々が夢の内容を分析にかけるならば、我々は夢の恐怖が夢の内容に依つて正認せられないことは、恐怖症（フオビア）に於ける恐怖が恐怖症の根據となつてゐる觀念に依つて正認せられないのと一般であることが分つて來る。例へば、窓からは落ちることが出來ると云ふのは本當である、だから窓邊へ近付けば多少の注意をしなければならぬと云ふのも本當である。併し、それに呼應する恐怖症に於ける不安が何故にそのやうに大きいか、また何故にその恐怖が恐怖に囚はれた人間を襲うてそれほど甚だしく、その恐怖の起源が必要とする

より遥かに大きいのであるかは、說明の限りでない。して見れば、恐怖症に適用せらるゝ同じ說明はまた不安の夢にも適用する事が出來る。兩者の場合に於いて、不安はそれに伴うてはゐるが、而も他の源泉から來てゐる觀念に、たゞ皮層的にも、歸せられてゐるのである。

夢の恐怖は神經症的恐怖と密接の關係があるのであるから、前者に就いて論議する以上は後者に就いても私は論及しなければならないのである。『不安神經症(アングストノイローゼ)』こに關する私の一小論文中に於いて、私は神經症的恐怖がその起源を性的生活に有し、またリビドーがその對象を離れて而もなほ適用の途を見出してをらぬ場合に起ると論じておいた。この定理はそれ以來愈々その妥當性あることを明かにして來たが、この定理から演繹して吾人は不安の夢の內容は性的性質のものであり、その內容に屬するリビドーは恐怖に變形されてゐるのであると結論することが出來よう。

【註】(1) ブリル氏 A. A. Brill 英譯 *Selected Papers on Hysteria and other Psychoneuroses*, p. 133 (*Journal of Nervous and Mental Diseases*, Monograph Series) 參照。

第五章

夢に於ける性

吾々が夢の解決に專心すればするほど　吾々は成人の夢の大多數が性的材料を取扱ひ、また色情的願望に表現を與へるものであることを甘んじて承認せざるを得なくなるのである。實際に夢の分析をしてゐる者のみが、つまり、夢の顯在內容から潛在的な夢の思想にまで押し進んで來た者のみが、この主題に關して一つの意見をまとめることが出來るのである。その顯在內容だけを記錄して滿足してゐるやうな人（例へば、性的な夢に關する著述を書いたネッケ Näcke の如き）は、決して出來ないのである。この事實は敢へて恠むに足ることではなく、夢の說明の基本的假定と完全に調和するものであることを、我々は直ちに承認しようではないか。多くの構成分子から成つてゐる性的衝動ほど、子供時分から甚だしい禁壓を受けて來た衝動は他にないのである。如何なる他の衝動からも、これほど多くの、これほど激しい無意識的願望が、生殘つて來たものはないのである。さうしてそれ等の願望は今や睡眠狀態に於いて夢を生み出すやうな方法で活動してゐるのである。夢の註釋に於いて、この

性的コムプレックス(一)の意義は決して忘れられてはならないが、併し勿論、專らそればかりであると云ふ風に誇張して考へられてもならないのである。

【註】(一) Komplex (獨)、complex (英)、從來『錯綜』と直譯せられて來たが、それでは意義不十分であると云ふので、精神分析學研究所では『結情』と譯してはと云ふ說も出たが、さうしてそれは『錯綜』よりはよいと云ふ事にはなつたが、結局『コムプレツクス』と、原名をそのまゝ採用することに決定した。一言にして盡せば、無意識の情操(センチメント)の復合したものである。(譯者)

多くの夢に就いてこれを注意深く解釋して見ると、これ等の夢は兩性的とさへ見るべきだと云ふ事が確に出來るのである。何となれば、大抵の夢は第一次的解釋に於いては異性愛的であつても、第二次的解釋では同性愛的感情を實現してゐることが明にされて、それが到底論駁出來ないからである。この同性愛的感情なるものは、夢見る人の常態(ノルマル)な性的活動に共通なものである。併し、一切の夢を兩性的に解釋することは、私にはあまり證明出來さうにない、あまり本當らしくない一般化であるやうに思へて、私はそれを支持することを好まない。就中、私には空腹、渴、便利、その他の夢の如き、色情的必要――最も廣い意味に於いての――以外の必要を滿たす夢があると云ふ明々白々な事實を如何に處理すべきかゞ分らないのである。同樣に、『一切の夢の背後に我々は死の意味を見出す』(ステーケル Stekel)とか、一切の夢は『女性的意味から男性的意味への連續』を示す(アードラー Adler)

とか、凡そこれに似た斷定は、夢の註釋に於いて容認せらるべきことより遙かに出すぎてゐると思はれるのである。

吾人は既に他のところで、目立つて無邪氣な夢は必ず生硬な色情的願望の體現だとしておいたが、吾人は又これを數多く新たな實例に依つて確認したいと思ふ。併し他意なき如く見え、また何等特殊の意義がありさうにも見えないやうな多くの夢は、分析して見ると、間違ひなく性的願望の感情に、屢々思ひもかけないやうな性的願望の感情に辿ることが出來るのである。例へば、次の夢に於いて、註釋を下して見るまで誰が性的願望があらうなどと思はう。その夢を見た人の曰く――二つの嚴めしい宮殿の間に、いさゝか退つて、一つの小さな家が立つてゐる。その家の扉は閉まつてゐる。私の妻が街に添うて少し私を導き、その家まで連れて行く。さうして扉の中に押込む。そこで私は直ぐにわけもなく中庭へと滑り込む。その中庭は斜に上の方へ傾斜してゐる。

夢の意を譯解した經驗のある者ならば誰でも、勿論直ちに、狹い場所へ這入り込んだり、錠前の下りた扉を開けたりすることが、最も普通の性的象徴に屬することを知るであらうし、またこの夢に於いては背後から(婦人の肉體の二つの嚴めしい臀部の間から)試みられた性交の表象を容易に見出すであらう。狹い、斜になつた通路とは勿論、膣(ワギナ)である。夢を見た人の妻が與へたとされてゐる幇助は、

實際は妻君への思惑に過ぎない――妻君への思惑をすれば、そのやうな試みから抑留することが出來るから――と解釋することが必要である。それのみならず、調べて見ると、その前日に若い娘が夢の本人の家庭に這入つて來て、その娘が彼の氣に入つたことが分つたのである。彼女はかう云ふ種類の近づきに全然反對するものでないらしいとの印象を彼に與へたのである。二つの宮殿の間の小さな家はプラーグ Prag に於けるフラーヂン(この追憶から來てゐるのである。さうしてこれがまたこの娘に關係があつて、その娘はこの市の出身であるのだ。

【註】(一) Hradschin. プラーグ市内の區又は方面の名。(譯者)

私の患者に對して、貴君はエディポス型の夢――母と性交をすることの――を屢々見るであらうと云ふと、私は『そのやうな夢を思ひ出すことが出來ません』との答へを得る。ところが直ぐその後から、一つの扮裝せられた、無關心の夢が思ひ出されて來る。その夢はその患者が繰返し〳〵見て來た夢であるが、分析して見ると、これと同じ内容――つまり、今一つのエディポス型――の夢であることが分る。母と性交する夢にして扮裝せられたものは、同樣な效果を目指す露骨なものよりは、遙かに遙かに頻繁であることを、私は讀者に確證することが出來る。

風景や地域に關する夢にして、その中で『私は以前にこゝにゐたことがある』との確證に常に力點

が強く置かれてゐるものがあるが、この場合に於いては、その地域と云ふは常に母の性器である。實際、その人が『以前にそこに居たことがある』と云ふほどの慥かさを以て斷言するのだから他の場所でないことは分るのである。

屢々恐怖に滿ちた夢の多くは、而も狹い場所を通過するとか、水の中に浸つてゐるとか云ふやうな夢は、胎兒生活や、母の胎内にゐた時分のことや、出産の行爲などに關する空想に基いてゐる。次に擧げたのは或る青年の夢であるが、彼は旣に胎兒時代から空想の中で、兩親の性交を窺知する機會を持つてゐたのである。

『彼は或る深い鑛穴の中にゐる。その鑛穴には、ゼムメリング Semmering の隧道(このやうに、窓が開いてゐる。始めの内は、彼はこの窓から何もない景色を眺めてゐたが、やがて彼はそれを一つの繪に仕立てる。直ぐにそれが近くにあつて、空いた場所に一杯になつてゐる。その繪は畑の繪で、畑は農具ですつかり耕されてゐる。さうして空氣は心持よく、激しく働いたと云ふ考へがそこに伴つてゐる。さうして青黝い土くれが氣持のよい印象を與へる。彼はやがて描き進んでゐる内に、小學校が始まつてゐるのが見える。……さうして彼はそこでは子供の性的感情に對して甚だ多くの注意が拂はれてゐるのを見て驚く。そのために彼は私のことを思ひ出した。

【註】（一）オーストリ、イタリーの間のアルプスの隧道。（譯者）

こゝには或る婦人患者の美しい水の夢がある。その夢は分析治療の道程中に異常な話に變つてしまつた。

……湖畔にある彼女の避暑地で、彼女は暗い水の中へ身を投げた。投身の場所には蒼白い月が水に映じてゐた。

この種の夢は出産の夢である。それ等への解釋は、夢の顯在內容中に報ぜられてゐる事實を逆轉させて見れば出來上るのである。であるから、『水中に身を投じる』の代りに『水の中から出て來る』、つまり『生れる』と讀み直せばよいのである。人々が生れて來る場所は、フランス語の『月』"la lune" の惡い意味を考へて見れば分るのである。蒼白い月は、かくて、白い『底』（Popo）となる。それは子供が自分の出て來たところとして直ぐに認識する場所である。さて、その患者がその避暑地で生れたいとの願望を持つたといふ、その意味は何であるか。私はその事を夢の本人に訊いて見たが、本人は何の躊躇もなくかう答へた。『治療を受けたゝめに、妾は生れ變つたやうになつたでは御座いませんか』と。このやうにして、その夢は、この避暑地で治療を續けることの招待となつてゐる。つまり、彼女をその地に訪問する事の招待となつてゐる。多分、それはまた彼女自身が母となりたいとの願望

の甚だ面はゆい暗示をも含んでゐるのである。

【註】（一）私が胎内生活に關する空想や無意識思想の意義に價値を認めるやうになつたのは、ほんの近頃の事である。非常に多くの人間が生きながら埋葬せらるゝと云ふ不思議な恐怖を感じたり死後の生活を信ずることに對して最も深い無意識的理由を感じたりすることの説明は、それ等の空想や無意識思想中に含まれてゐるのである。死後の生活を信ずることは出産前のこの神祕的な生活を未來に投射することを意味する以外の何物でもないのである。それのみならず、出産の行爲は恐怖を伴ふ最初の經驗である。從つてまたそれは恐怖の情緒の源泉となり、模範となるのである。

今一つの出産の夢を、それに就いての註釋もろともに、私はアーネスト・ジョーンズ E. Jones の著書中から借りて來る。『彼女は濱邊に立つて、多分自分の子供であるらしい小さな男の兒がボチャボチャ水の中へ這入つて行くのを眺めてゐた。遂に水が子供をかくし、水面に近く子供の頭がブカブカしてゐるのが見える頃まで眺め續けてゐた。場面はやがて一變して、或るホテルの大廣間となり、そこに多數の人々が集つてゐた。夫は彼女をあとにして何處かへ行き、彼女は或る見知らぬ人と「會話に這入つて行つた」。』この夢の後半は、分析してゐる中に、夫から逃避し或る第三者と親密な關係に入ることを表はしてゐる事が發見せられた。その第三者と云ふのは、その背後に、前の夢に出て來るX氏の兄弟が示されてゐることは明かであつた。この夢の前半は可成り明白な出産ファンタジー（一）であ

る。夢の中に於いては、神話中に於けると同じで、子供を羊水中から出すことは、子供が水の中へ這入ることに歪められて表はされるのが普通である。他にも澤山あるが、就中アドーニス Adonis, オシリス Osiris, モーゼズ Moses, 並びにバッカス Bacchus の出産は誰でも知つてゐるが、立派にこれの例になるものである。水中に頭のブカ〳〵してゐることは、唯一度の姙娠中に經驗した胎動の感覺を直ちに彼女に思ひ出させた。水中に這入つて行く子供を思うてゐる内に、彼女はその子供を水から救ひ出し子供部屋へ連れ込み、洗つてやつたり、着物を着せたり、家庭の中に置いてやつたりしてゐる自分を妄想してゐた。

【註】（一）Phantasie（獨）Phantasy（英）擬想、瞑想、空想などと直譯すべきか。併し直譯は何れも適切ならず、故に原名を用ふ。或る事實の無意識心理內に於いて象徵化せられたものを云ふ。（譯者）

この夢の後半は、それ故に、驅落に關する考へを表はしてゐる。その考へは潛在內容の前半に屬してゐる。夢の前半は潛在內容たる出產ファンタジーの後半に呼應してゐる。かう云ふ風に順序に於ける轉倒があるばかりでなく、更にその夢の各半に於いて轉倒が起つてゐる。前半に於いては、子供が水に這入り、さうして彼の頭がブカ〳〵してゐた。潛在する夢の思想に於いては、まづ胎動が起り、それから子供が水を離れた。（二重の轉倒である。）後半に於いては、彼女の夫が彼女を離れた。夢の

思想に於いては、彼女が夫を離れた。

も一つ出産の夢はアブラハム Abraham に依つて述べられてゐる。それは或る若い女が最初の産褥に就く日を待つてゐる時の夢である。家の床にある或る個所から、地下水道が直接に海中へと導いてゐる（出産道、羊水）。彼女は床の中の上げ蓋を上げると、そこから直ぐに茶色の毛織物を纏うた殆ど海豹に似たやうな生物が現れる。この生物が夢見た本人の弟に變つて來る。その弟に對しては、彼女は常に母親のやうな關係に立つてゐるのである。

『救助』の夢は出産の夢に關係してゐる。救ふこと、殊に水中から救ふことは、女が夢に見た場合には、出産することに等しいのである。この意味は、併し、男が夢に見た場合には變つて來る。

泥棒、夜中の强盜、幽靈などは、我々が寢所に入るまへに恐れるものであるが、さうしてまた時々には我々の睡眠を脅すものであるが、その起源は一つで、同じこの子供時分の追懷にあるのである。彼等泥棒たちは夜中に訪れて來ては子供を起して憚りへ立たせ、夜尿をさせないやうにする者である。或は蒲團をめくつて見て、子供が眠つてゐる間に手をどんなに組んでゐるかをはつきりと見る者である。私はこれ等の不安の夢を二三分析して見て、このやうな夜中の訪問者の思ひ出を引出すことが出來たのである。泥棒はいつも父であつた。幽靈は、どちらかと云へば、白い夜衣を纏うた女性の人物

に相應しいものである。

夢に於いては性的材料を表すために象徵を無暗に用ゐることが分つて來ると、吾々は自然とかう云ふ疑問を起すやうになる。一體これ等の象徵の內には、速記術に於ける記號のやうに、いつもチヤンときまつた意義を持つて現れるものが澤山にあるのではあるまいかと。さうして暗號法に則つて、一つの新しい夢の本を編んで見たくなるのである。この問題に就いては、この象徵は特に夢に現れるのではなく、それは寧ろ無意識的の思想に、殊に群集の無意識的思想に屬するものであると云ふことが出來る。さうしてこの象徵は一國民の夢の中よりはその民間傳承の中に、神話の中に、傳說の中に、言葉の表はし方の中に、諺の中に、妙言佳句の中に、もつと完全な形をとつて見出されるものである。

夢は、その潛在思想を扮裝して表すために、この象徵を利用するのである。このやうな風にして用ゐらるゝ象徵のうちには、勿論、いつもきまつて、或は殆んどいつもきまつて、同じことを意味するものが澤山にある。たゞ忘れてはならないことは、精神的材料なるものが不思議に屈伸自在であるといふことである。時々は、夢の內容中にある一つの象徵は象徵的に解釋せずに、それの實際の意味に從つて解釋しなければならないかも知れない。また別の場合には、夢見た本人は、思ひ出したものが特殊な一群であるがために、何でもかんでも——普通にはさう云ふ風には用ゐられないものを——性

的象徴として用ゐる權利を自分自身で拵へるかも知れない。また最も屢々用ゐられる性的象徴がいつも〳〵意味明白だと云ふわけでもないのである。

これだけの限定と保留とをしておいて後に、私は次の事に注意を呼んでもよからう。――皇帝と皇后（王と女王）とは、多くの場合に於いて、實は夢見た人の兩親である。夢見た本人は男ならば皇子女ならば皇女となつて現れる。總て長くなつたもの、例へば、ステッキ、木の幹、竝びに洋傘（延びてゐることが起つてゐる事に比較され得るがために）、總て長くなり鋭くなつてゐる武器、例へばナイフ、短刀、竝びに槍は男性の一片を表はさうとするものである。同樣な目的のために屢々用ゐられるが、甚だ解し易くはない象徴はネール・ファイル（こである。（こすつたり、ひつ搔いたりするためか？）小さな容器、箱、筥、戸棚、ストーヴ等は女性の一部に相當する。錠前と鍵の象徴は、ウーランド（ミに依つて『グラーフ・エーベルシュタイン』に就いての詩の中で、普通の猥褻な冗談であることを、甚だ優美に用ゐられてゐる。幾つも竝んでゐる室を通り拔ける夢は遊女屋又は閨房の夢である。階段、梯子、又はこれ等を攀づることは昇降の別なく、性行爲の象徴的表現である。滑かな壁を攀づること家屋の正面に腰を下してゐること、而もそこに屢々非常な不安が伴ふ場合、それ等の壁や家は起上つた人體に相當し、さうして多分小兒がその兩親又は養父母の上に攀登つた事を夢の回想の中で繰返し、

てゐるのである。『滑らかな』壁は人間である。屢々、不安の夢の中で、吾々は家の中から何か突出たものに確乎としがみついてゐる。テイブル、組テイブル、板などは婦人である、恐らくは體軀に抵抗を與へるためであらう。『寝臺と食卓』(mensa et thorus)とは結婚の構成であるから、夢の中では前者は屢々後者に置換へられる。また實行し得る限りでは性的影像のコムプレックスは食的コムプレックスに轉置せらるゝのである。衣類の內では婦人の帽子は屢々男性器として確定的に解釋せらるゝ。人間の夢を見た場合には、襟飾(クラヴァト)は男性器(ペニス)の象徵であることが屢々である。これは實は、襟飾が長く垂れ下つてをり、また男性特殊のものであるためばかりでなく、また好き勝手に選擇が出來るからである。さう云ふ自由は本性上、その象徵の本體には禁ぜられてゐる。夢の中でかう云ふ象徵を用ゐる人物は、襟飾に無暗に贅を盡す人で、襟飾を規則的に蒐集してゐる人である。總て込入つた機械や裝置は、夢では、大抵は性器である。それ等を記述することにかけては夢の象徵は機智の活動と同じやうに疲れるところを知らないものであることを示してゐる。同樣に、夢の中での多くの風景は、殊に橋があつたり木の茂つた山があつたりする風景は、直ぐに性器の寫しであることが認められる。最後に云つておくが、譯の分らない新語が出て來た場合には、それは何か性的意味のある成分から成つてゐる結合であると思つてよい。子供はまた夢の中では性器である。それは大人が好んで自分の性器を『娘』と云つ

たり『息子』と云つたりするやうなものである。男性器の甚だ近頃の象徴としては飛行の器械を擧げることが出來る。これをその象徴として用ゐるやうになつたのは、それの飛行に對する關係からでありまたその形からも來てゐる。子供と遊んでゐたり、小さい者をたゝいたりするのは、夢では屢々自慰の表象である。その他若干の象徴は、部分的には十分に證明されてはゐないが、ステーケルに依つて與へられてゐる。彼はそれ等の象徴を實例に依つて示してゐる。右と左とは、彼に依れば、夢に於いては論理的な意味に考へらるべきだ。『右方は常に正への道であり、左は罪への道である。かくて左は同性愛、近親相姦、變態性慾を意味するが、右は結婚を、娼婦との關係等を意味する。夢の意味は常に、夢見る人の個人的な、道德的見地に依つて決定される。』夢に現れた肉親は、大抵は性器の役割を演ずる。汽車に乘りそこねることは、年齡が違つて合はないのを殘念がることであるとステーケルは解釋してゐる。旅行の時に携行する手荷物は、我々が壓へられてゐる罪の重荷である。夢の中に屢々現れる數字はまた、一定の象徴的意味があるとステーケルは云ふ。併しこれ等の解釋は十分に證明されてもゐないし、また一般的に妥當するものとも思へない。固より個々の場合に於ける解釋は槪して、眞實らしいものとして認められ得るではあらうが……。ステーケルに依つて近頃公にせられた書物『夢の言葉』"Die Sprache des Traumes"は、私は參考することは出來なかつたが、この書物の

中には最も普通な性的象徴の表がある。その表の目的は、總ての性的象徴が兩性的に用ゐられ得ると云ふことを證明するにあるのである。彼はかう云つてゐる『一つの象徴にして（もしそれが如何なる風にもせよ、ファンタジーに依つて認許されてゐる場合には）それが同時に男性的な意味にも女性的な意味にも用ゐられないものがあるであらうか！』と。惜に、括弧の中の句はこの斷定の絶對性を甚だしく剝滅する。何となれば、これはファンタジーに依つては全然認許されないことだからである。併しながら、私は自分の經驗に於いて、ステーケルの大體の論述が、もつと進んだ多樣性の認識となて來なければならぬと云つたとしても、餘計なことではないと思ふのである。男性器の象徴となると同樣に、屢々女性器のともなるそれ等の象徴の他に、主として、又は殆ど專らに、一つだけの性を示すものがある。が、また更にその他たゞその男性的又は女性的意義だけしか知られてゐないものもある。長いカッチリとした物體や武器を女性器の象徴として用ゐたり、凹んだ物體（筥、袋など）男性器の象徴として用ゐたりすることは、實際に於いて我々の氣持の許さないところである。

（註）（一）釘を並べて木片に打つけて造つた新聞綴込用の道具、又はそれに類したもの。（譯者）

（二）Johann Ludwig Uhland （1787—1852），ドイツの詩人にして評論家。譯者序文參照。（同）

夢や無意識に於いては性的象徴を兩性的に用ゐる傾向があるといふことは、昔の、今は廢絕してゐ

る筈の趨勢が馬脚を露したものに相違はない。何となれば、子供時代に於いては、性器の相違といふことは知られてゐない、さうして同じ性器が兩方の性に歸せらるゝからである。

以上述べ來つたところは甚だ不完全な暗示ではあるが、これでも大方を刺戟して一層注意深い蒐集に向はしむるには足るかも知れない。

私は茲に、夢に於いて左のやうな象徴が適用せられてゐる類例を附加しておかう。これ等に就いて見ると、夢の象徴を考慮に入れることなしには夢を解釋することが如何に不可能となり、また夢の象徴が多くの場合に於いて如何に權柄づくに侵入して來てゐるかといふことを知るに足るであらう。

一、帽子が男（男性器）の象徴となる。（誘惑の恐怖のために外出恐怖症（アゴラフオビヤ）に罹つてゐる或る若い女の夢の一斷片。）

『妾は夏の街を歩いてゐる、妾は特殊な形の藁帽を被つてゐる、その帽子の眞中の部分が上の方へ向ひ、それの側面の部分が下に垂れてゐる（形の說明はこゝで妨げられたのである）、さうしてその下り方は一方が高く他方が低くなつてゐる。妾は元氣がよくて、自信のあるやうな氣分になつてゐる。さうして一團の若い士官たちの側を通る時、妾は獨りでかう思つた――貴郞方は誰も妾にからかふことは出來ますまいと。』

彼女は帽子に就いて何の聯想も持つ事が出來なかつたので、私は云つた。『その帽子は實は男性器である。だから眞中の部分が高く上り、側面の二つの部分が垂れさがつてゐるのである。側面の二つの部分が不平等に垂れ下つてゐることに關しては、私はそのやうな細いことまで註釋するのを、故意に控へた。實はそのやうな特色ある點が註釋に導きを與へるのではあるが――。私は更に續けて云つた。もし彼女にそのやうな勇ましい性器を持つた男さへあつたならば、士官たちを怖れることはなかつたらう、つまり士官たちに何も望むところはなかつたであらう、何となれば彼女は主として誘惑の空想あるがために庇護と同伴なくして外出が出來難ねるのだからである。彼女の恐怖をかう說明することは、今までにも既に他の材料に基いて何度も私が與へ得たところであつたのだ。

ところが非常に面白いのは、かう云ふ解釋を聽いて後の、本人の態度である。彼女は帽子に就いて云つた事を撤回し、二つの側面部分が垂れ下つてゐたなどとは云はなかつたと云ふのである。併し私は一度慥かに聞いたことを何と云はれても誤魔化されはしない、私は頑張つたのである。彼女は暫く默つてゐたが、やがて勇を得て、何故彼女の夫の睾丸の一つが高く一つのが低いのであるか、一體男のそれは同じになつてゐるものなのかと尋ねて來た。そこで特色ある帽子の細部の說明がついて、彼女は全體の解釋を受容れた。帽子の象徵はこの患者がこの夢の話をする遙か以前に、私に知れてゐた。

他の、も少しハッキリしない二三の場合からして、帽子がまた女性器の象徵と解せられると云ふ事を私は信じてゐた。

二、子供は性器の象徵――轢かれることは性交の象徵（同じ外出恐怖症患者の他の夢）

『彼女の母は彼女の娘を出してやつてしまつた。それで彼女は娘を連れずに行かなければならない。彼女は母と一緒に汽車に乘つて行く。すると彼女の娘は線路の上を眞直に歩いてゐる。で、轢かれるのを避けることが出來ない。彼女は骨のボキ〱音するのを聽く。（これを聽いて彼女はいやな氣持はするが、別に實際上の激動は受けない。）彼女はそれから、身體の部分が殘つてはゐないかと覗いて見る。彼女はそこで、母が娘を一人で出してやつたものだからと云つて批難する。』分析――この夢の註釋を完全にするのは容易なことではない。これは一團になつてゐる澤山の夢の一部分であつて、他の部分と關係させて見なければ十分に理解出來ない。何となれば、象徵を證明するために、孤立してゐる材料を必要なだけ十分に獲ることは容易でないからである。この婦人患者はまづその鐵道旅行とは、以前に神經症療養所から出掛けて行つた時のことを暗示するものであることを發見した。その療養所の監督とは彼女は自然に戀愛に陷つてゐた。彼女の母は彼女をこの場所から引離して了つた。さうしてその醫者は停車場まで見送りに來て花束を彼女に手渡しゝた。彼女の母がこの光景を見てゐ

たので、彼女は具合が悪かつた。こゝでは、だから、母親は情事の邪魔をする者として現れてゐる。實際、この嚴格な母親は娘の未婚時代にさう云ふ役割を演じて來たのだ。その次に我々の考へは『彼女は、それから、身體の部分が殘つてゐないかと車の窓から覗いて見る』といふ文章に移る。夢を正面から見ると、勿論、轢かれ碎かれた小さな娘の部分と云ふ風に考へざるを得ない。併しながら、思想はこゝで全く別の方向に向ふのである。彼女は嘗て父が浴室中で裸になつてゐるのを背後から見たことがあるのを思ひ起した。それから彼女は性の相違に就いて話し始める。さうして男は性器が背後から見て見えるが、女は見えないと云ふ。そこまで來て、彼女は子供とは性器であり、自分の娘（彼女は四歳になる娘を持つてゐる）とは彼女自身の性器であるとの解釋を自分で提出して來た。彼女が母親を批難するのは、母親が彼女に宛も性器なしに生きることを望むことに對してゞある。さうして彼女はこの批難を、この夢を始めに說明した文章の中で認めてゐる。――母親は彼女の娘を一人で出してやり、そのために彼女は一人で行かなければならない。彼女のファンタジーに於いては、街上を一人で行くとは男なく、性的關係（Coire ＝一緒に行く）なく暮すことを意味する。さうして彼女はそれを好まないのである。彼女の語るところの總てに依ると、彼女は娘時代に母親の嫉妬に惱んだと云ふのである、何となれば彼女は父親の方が好きであることを示したからである。

『子供』が男性器又は女性器の象徴であることはステーケルに依つて認められたが、彼はかう云ふ方面の言葉が隨分廣く用ゐられてゐるのを參照することが出來るのである。

この夢をも少し深く註釋するには、同じ夜に見たも一つの夢に依らねばならぬ。その夢の中で本人は自分をその兄と同一化してゐるのである。彼女は『跳ねつ返り』で、いつも一層男の子に生れたらと云はれてゐた。この兄との同一化は、特殊の明白さを以て、『子供』が性器を意味することを示してゐる。母は去勢を以て彼（彼女）を脅した。この事はたゞ部分（性器）を持遊ぶことに對する懲罰とするより外には理解出來ない。であるから、この同一化は彼女自身が子供の時分に自慰したことを示してゐるのである。尤も、この事實は彼女が今ではたゞ兄に關する記憶の中にのみ保持してゐるものではあるが――。男性器に關する知識を夙く得てゐて、後に彼女はそれを失つたが、その知識は、この第二の夢の示すところに依ると、この時分に得たのであつた。それのみならず、第二の夢は、女兒は男兒の去勢されたものと云ふ嬰兒的性觀を示してゐる。子供時分のこの信念のことを話すと、彼女は直ちに一つの話しを以てそれに相槌を打つた。その話は、或る男兒が女兒に『切られちやつたの？』と訊いたに對し、女兒が『いゝえ、前からかうなの』と答へたと云ふのである。

第一の夢に於いて、子供を、性器を、出してやつたことは、それ故に又去勢の脅しに關係がある。

ゐるのである。

最後に、彼女は母が自分を男兒に生んでくれなかつたことを批難する。『櫟かれる』ことが性交を意味することはこの夢からは明でないが、他の多くの材料から確になつてゐるのである。

三、建物、階段、棒などが性器を表はすこと。(父コムプレックスに囚はれてゐる或る若者の夢)。『彼は父と一緒に散歩してゐる。場所はプラーテル(一)らしいのである。何故ならば、ロトゥンダが見え、それの前には小さな櫓一があつて、それに繫留輕氣球がつないである。輕氣球は、併し、全然萎んでしまつてゐるやうに見える。彼の父は、これは一體何にするのだと彼に訊ねる。彼もそれを不審に思ふが、併し彼はそれを父に說明する。彼等は庭に來ると、そこに大きな錫が敷いてある。彼の父はそれの大きな片を拔取りたいと思ふが、併しまづ誰か看てゐないかとあたりを見廻す。凡そ彼のすべきことは番人に斷ることである、それから彼は何の苦もなく欲しいだけ取ることが出來ると父に云ふ。この庭から梯子が坑の中に導いてゐる。その坑の壁面は、革の手帳に多少似たやうに、柔かく被はれてゐる。この坑のおしまひになつたところに、もつと長い土壇があつて、それからまた別の坑が始まる……。』

【註】(一) Prater, ギイン市の一端、ドナウ河畔の公園地、わが淺草の如き場所。Rotunda は屋根の圓い大きな

建物。多分、劇場ならむ。(譯者)

分析――かう云ふ夢は、治療法から云ふとあまり面白くない患者の夢である。彼等は或る點までは別に何の抵抗も示さずに分析の中へ跟いて來る。併しその一點から先へは彼等は殆ど近付くべからざるものとなる。この夢は彼は殆ど自分で分析した。彼は云ふ『ロートゥンダは私の性器である。前なる繋留輕氣球は私の男性器(ペニス)である。私はこれの弱さに惱んでゐるのである。併しながら、我々はもつと〳〵細かく解釋しなければならぬ。ロトゥンダは臀部であつて、子供等は臀部と云ふと直ぐ性器を聯想する。前の小さな櫓は陰嚢である。夢の中で彼の父はこれ等は一體何にするのだと彼に訊く。つまり、父は彼に性器の目的と用途とを訊いたのである。これは主客顚倒であることは明かで、彼の方が質問者にならなければならない筈である。父の方からそんな事を訊くと云ふ事は現實にはあり得ないことであるから、我々はこの夢の思想を一つの願望と考へなければならぬ。又は條件付きで次のやうに解釋せねばならぬ。――『父さんに性的知識をさづけてくれと頼みさへすればなア……』と。この考への續きへは、直ぐまた別のところでぶつつかる。

錫の薄片を以て張りつめた庭と云ふのは、まづ第一歩として象徴的に考へてはならない。それは寧ろ彼の父の業務の場所から發(き)てゐるのである。錫と書いたのは私が勝手な理由で加へたので、彼の父

が商賣上扱つてゐるのは別の材料である。併し夢の言葉の表現には何の變化も與へはしなかつた。夢の本人は彼の父の業務に入つてゐたが、儲けの主なる基となつてゐる怪しげな仕事を恐ろしく嫌つてゐた。そこで（『父さんに……賴みさへすればなア……』）といふ右の夢の思想の續きは、『父は顧客を欺いてゐるやうに、私をも欺いてゐることであらう』となるだらう。何となれば、拔取るといふは商賣上の不正を表はすに役立つが、夢の本人が第二の說明を——卽ち、自慰(オナニー)を——下してゐる。これは我々には知れ切つてゐるばかりでなく、また自慰の祕密がその反對（『どうして我々はそれを全く公然となし得よう』）に依つて表はされてゐるといふ事實とも甚だよく一致してゐるのである。そればかりでなくまた、自慰的の行爲がまた父に轉嫁せられてゐる（夢の第一の場面に於いて質問が父に轉嫁せられたと丁度同じやうに）のでないかとの我々の期待にも全然一致する。坑の內壁が柔い皮で張つてあるところから見ると、これは膣であると彼は直ちに解釋した。膣の中での媾合の行爲が普通には昇ることゝして記述されるが、こゝではその代りに降ることゝして記述されてゐるが、これも正しいことは他の實例で私は發見してゐるのである。

【註】（一）Zentralblatt für Psychoanalyse, 1 參照。

第一の坑の終りのところに土壇があつて、それから新たな坑が始まると云ふ細かい說明は、彼が自

分で見て來たやうにしてゐるのである。彼は暫くの間二三の女と性的交渉をして來たが、併し禁斷を受けたのと、分析治療の助けに依つてそれをまた始めることが出來るといふ望みがあつたゝめに、廢めてしまつた。併しこの夢は終りの方になつて判然して來る。さうして經驗の積んだ註釋者にとつては、この夢の第二の場面に於いては、別の主題の影響が現れ來始めてゐることが分るのである。この場面に於いて、彼の父の業務と不正な仕事とは、坑として現れてゐる第一の膣を意味してゐる。で、それは母の事を云つてゐると我々は思ふのである。

四、人體が男性器を、風景が女性器を象徴すること。

(亭主は番人をしてゐる或る下層階級の女の夢。ダットナー B. Dattner の報告)。

……やがて誰かゞ家の中へ飛込んで來て、さうして番人に向つて心配さうに呼ばはつた。併し彼は二人の無頼漢と諜し合せて教會(一)へ行つた。そこへは長い階段(二)が導いてゐた。教會の背後には山(三)があり、山の頂には深い森(四)があつた。番人はヘルメットを被り、喉當てをつけ、外套(五)を纏うてゐた。おとなしく番人と一緒に行く二人の暴漢は、腰のあたりに袋のやうな前垂(六)をかけてゐた。教會から山へは路がついてゐた。この路は兩側に草叢や木立が生ひ茂り、山嶺に達するに從つて愈々深くなつて行つた。頂上ではすつかり森になつてゐた。

【註】（一）又は禮拜堂、――膣。

（二）性交の象徴。

（三）Mons veris, 陰阜。

（四）Crines pubis 恥毛。

（五）外套や僧帽を被うた惡魔は、この方面の主題に通曉した或る人の說明に依ると、性殖器の性質を帶びてゐる。

（六）陰囊の兩半。

五、子供の見た去勢の夢。

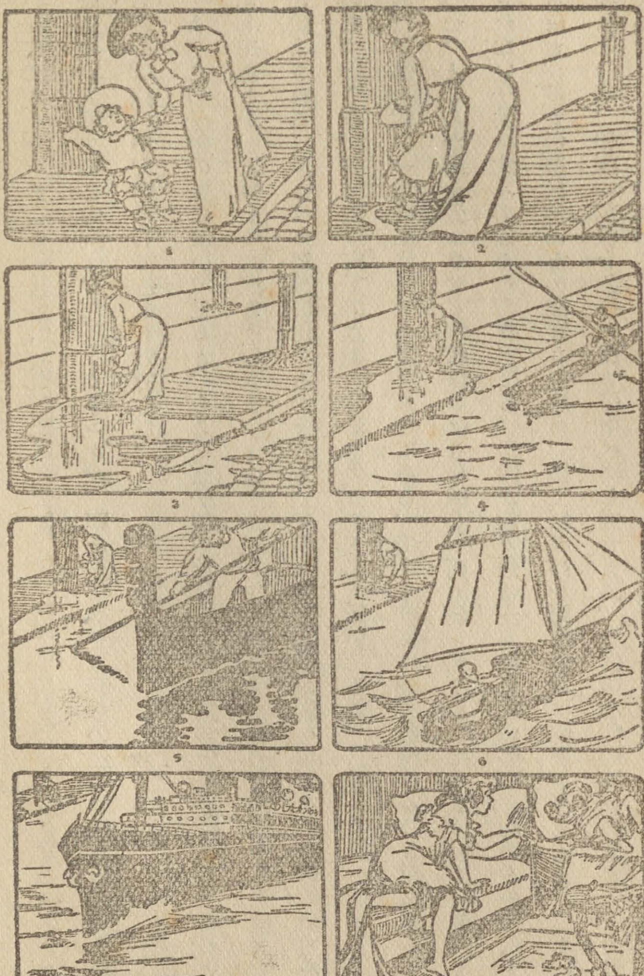
（a）三年と五ヶ月になる或る男の子は畑から父の歸るのを眼に見えて喜ばなかつたが、或る朝非常に面喰つた亢奮した面持で眼を覺まし、繰返し〳〵かう云つて訊いた。『何故、父ちやんは自分の首を皿に載せて持つて來たの？　今日の晚には父ちやんは自分の首を皿に載つけて持つて來たよ。』と。

（b）目下重い强迫神經症に惱んでゐる或る學生が、七歲の時に次のやうな夢を繰返し見た事を思ひ出した。彼が散髮するために床屋へ行くと、丈夫な縫條を持つた大女が彼の側へ來て、彼の首を斬つてしまつた。その大女は母親であることを彼は知つた。

六、放尿の象徴の夢。

こゝに掲げた畫はハンガリーの漫畫雜誌(〔,,Fidibusz"〕)に出てゐた澤山の畫の內から採つたもので、それ等はフエレンチ Ferenczi が、夢の說の挿畫に用ゐられ得ると認めたものである。『フランスの乳母の夢』と題するこの畫は、オットー・ランクが、眼を覺まさせる夢その他に於ける象徵の分類に關する彼の著述の中で利用してゐるものである。

まづこの最後の畫に就いて見ると、そこには子供の泣聲のために乳母の眼を覺ましてゐるところが示してあるが、上の七つは或る夢のさま〴〵の姿が現してあることが分る。最初の畫を見ると遂に眼を覺まされるに至るべき刺戟の何たるかゞ分る。子供は或る必要を訴へて、そのための助力を求めてゐる。ところが夢は寢室內での立場を散步中の立場として描いてゐる。二番目の畫を見ると、彼女は既に子供を街の一角に立たせて小便をさせてゐる、で——彼女は眠りを續けることが出來ることになつた。ところが眼を覺まさせる刺戟はなほも繼續し、而も益々強くなつて來る。いくら泣いても頓着されない子供は愈々力強くわめき立てる。子供が愈々迫るやうに乳母の覺醒と助力とを要求すればするほど、彼女の夢は益々その確實さを進め、總ては秩序を得て彼女は起きなくともよいことになる。夢はその時、覺醒の刺戟を象徵の廣さの中に移してしまふ。子供の小便の流れはます〳〵力強くなり第四番目の畫に於いては、此の流れは一つの小舟を浮かせてゐる。それからゴンドラ、次に帆掛舟、


1
2
3
4
5
6

遂には大きな蒸汽船である！　我儘な眠りを貪らうとの慾望と執拗な覺醒の刺戟との間の鬪爭は、ここに飄輕な漫畫家の靈筆に依つて立派に畫にされてゐるのである。

七、階段の夢。

（オットー・ランク Otto Rank の報告及び註釋）

次の明かに遺精の夢は、私に齒の刺戟の夢を供したその同僚が報告してくれたものである。

『私は或る少女を追蒐けて階段を驅け下りてゐる。その少女が私に何かしたので、私は彼女を懲らさうと思つてゐるのである。階段の下で誰かゞ（成人した女？）私のためにその子を捉へてくれた。私は彼女を鷲掴みにしたが、併し打つたかどうか知らない。と云ふのは、私は忽ち階段の中程のところにゐてその子と（まるで宙に浮いたやうにして）性交してゐる自分を見出したのだから。それは實は性交ではなく、私はたゞ自分の性器を彼女の性器の外部にあてゝ磨つてゐるだけである。さうしてゐながら私は彼女の性器を甚だ判然と見てゐるのである。宛も横ざまに倒れてゐる彼女の頭部を判然と見てゐるのと同じ程にである。性行爲の間に私は自分の左の上方に（これまた宙に浮いて）二つの繪、草の上に家のある風景畫の懸つてゐるのを見る。小さい方の繪には畫家の名のあるべきところに私の姓が書いてある。それは私の誕生日の贈物にするためであるやうに思はれた。小さな看板が二枚の繪

の前に懸つてゐて、もつと安い繪がよければお望み通り御覽に入れると云ふやうな意味が書いてある。私はそれから自分が寢床の中に横たはつてゐるのが甚だ朧氣に見える。丁度、階段の麓で自分を見た時と同じやうにである。その時、私は遺精から來る濕つぽい感じで眼が醒めた。

註釋――夢見た本人はその夢の日の夕方に或る本屋にゐた。そこで待つてゐる間に、彼は陳列してある二三の畫を眺めてゐた。その主題は夢の中の繪のと似てゐた。彼は特に氣に入つた、とある小さな畫の方へ歩み寄つて畫家の名前を見たが、併しその名は彼の全く知らない名であつた。

同じ夕方遲く、ある會合の席で、彼はあるボヘミヤの女中の話を聞いた。彼女は自分の私生兒を『階段の上で作つた』ことを得意にしてゐるのであつた。夢の本人はこの變つた出來事を根掘り葉掘り訊いて、その若い女中が自分の情夫を自分の兩親の家へ連れて來たが、そこでは性的關係の機會がないものであるから、男は亢奮して階段の上で遂げてしまつた事を知つた。酒喰ひの姦淫者をあざける機智に滿ちた惡ふざけをそのまゝ適用して、夢の本人は云つた『それこそ本當に窖(この梯子で出來した子だ。』と。

【註】(一) 西洋の酒(ワイン)は窖に貯藏せられてゐるからであらう。(譯者)

かうした晝間の經驗は夢の內容中に目立つてゐるが、夢の中に再現せられたのである。併し彼は同

樣直ちに嬰兒期の回想の舊い一斷片を再製し、これまた夢に依つて利用せられてゐる。この階段のある家は彼が子供時代の大部分を暮した家であり、さうしてこの家で彼は始めて性問題を知るやうになつたのである。この家で彼は、就中、階段の欄子に跨がつて滑り下りることを始終やつてゐて、それで性的亢奮を知るやうになつた。夢の中でも彼は階段を急いで驅け降りてゐる――彼自身が明白に云つたところに依れば、個々の段には殆ど觸れずに、我々がいつも云つてゐたやうに『飛び降り』た、又は『滑り降り』たのであつた。この子供時分の經驗に關係して、この夢の始めの方は、性的亢奮の素因を表してゐるやうに思へる。同じ家で、また近所の家で、夢の本人はその邊の子供等と喧嘩遊びをしてゐた。その喧嘩や遊戲の間に、彼は夢の中で得たやうな滿足を得てゐたのである。

性的象徵に關するフロイドの研究(この中にある、夢の中では階段や階段を昇ることは殆どきまつて性交を象徵するといふことを想起するならば、この夢は明かになる。この夢の動機となつた力、遺精となつて現れてゐるこの夢の效果、共に純粹にリビドー的の性質を帶びたものである。性的亢奮は睡眠狀態の間に惹起され(夢に於いてはこれは階段を驅降りる、又は滑り降りることに依つて表はされてゐる)、さうしてこの中にあるサディスト的威嚇は、あの喧嘩遊びを基礎としてをり、この女の子を追蒐けて捉へることの內に示されてゐる。リビドーの亢奮は高められ、性行爲へと進んで行く(夢の中で

は、女の子を捉へて階段の眞中まで連れて行くことに依つて表象されてゐる)。この點まではこの夢は純粹に性的象徵の夢と思はれようし、また未熟の解釋者にとつては分りにくからう。併しこの象徵での滿足は、安眠を保障したではあらうが、力強いリビドーの亢奮を惹起すには足りなかつた。この亢奮は一つの激烈な機能亢進(オルガズム)へと導き、かくて階段象徵の全體は性交の代償であることが暴露せられる。私は、兩行動に律動的性質あることを强調し、これを以て、階段の象徵が性的に利用されてゐる理由の一つとする。さうして、この夢は殊にこの事を信ぜしめるやうに思へる。何となれば、夢の本人の明白に斷定するところに依ると、性行爲の律動がこの夢の全體に於いて最も明白な特長であつたから——。

【註】(一) Zentralblatt für Psychoanalyse, Vol. 1., p. 2 を見よ。
(二) libido, 精神分析獨特の用語。性的慾望又は本能的エネルギー變といふほどの意。これに一次型と二次型とあり、前者は本原的のもの、後者は一度出てまた抑壓されたもの。適當の譯語なければ、原語をそのまゝ採用す。(譯者)

二つの繪に就いて、なほもう少し云つておかなければならぬ。これ等の繪はその實際上の意味とは別に、また『女の繪』„Weibsbilder"(直譯すれば『女の繪』であるが、慣用的には『女』である)。

これは夢に大小二つの繪が現れてゐる事實に依つて明かになる。丁度、夢の內容に大(成人した)小二人の娘が出て來るのと一致してゐる。安い繪も賣らうと云ふのは、娼婦コムプレックスであつて、丁度夢の本人の名や、彼の誕生日の贈物にすると云ふ考へが親へのコムプレックス(階段上で生まれる——性交に依つて孕まれる)を指示してゐるのと一致してゐる。

この判然せぬ最後の場景で、夢の本人は階段の踊り場で寢臺に横たはり濕つぽい感じになつてゐるといふことは、子供時代に返り、嬰兒の自慰よりももつと逆轉してゐる。さうしてその原型が明かに夜尿の、同じく快い場景に存してゐるのである。

六、階段の夢の一變種。

母親にその思ひが掛つて、さうしてまた屢々母親と共に階段に昇る夢を見る、性慾を禁斷してゐる或る神經質な患者に對して、私は嘗て、適宜の自慰は無理な禁斷よりも弊害が少いと云つた。この影響が次の夢となつて現れた。——

『彼のピアノの教師は彼があまりピアノを彈かず、モシェレース Moscheles の『習作(エチウド)』やクレメンティ Clementi のパルナス山上の高段 "Gradus ad Parnassum" を練習せぬとて批難する。』これに關して彼は Gradus とは要するに階段であり、ピアノそれ自身も音の階があつて、要するに階段だと云ふ。

凡そ一聯の表象にして性的事實の表現にまで適用せられないものはないと云ふことが出來る。

九、現實感情と反覆の表現。

只今三十五歳になる人が四歳の時に見てよく忘れずにゐた夢がある。――或る公證人のところに父の遺言書が預けてあつた。父は彼が三歳の時に死んだ。その公證人が彼のところに大きな梨を二つ持つて來、その一つを彼が食べてもよいことになつた。他の一つは部屋の窓板においてあつた。彼は夢に見たことは本當であると信じて眼をさまし、母に二つ目の梨が窓邊にある筈だから寄越せと剛情に要求した。母は笑つて相手にならなかつた。

分析――その公證人は快活な老紳士で、彼の記憶に依ると、その公證人は嘗て實際に梨を持つて來てくれたことがあつた。窓板は彼が夢で見た通りであつた。他の事はもう思ひ當らなかつた。たゞ母親が簡單に一つの夢を物語つたことがあつた。彼女の頭の上に二羽の鳥がとまつてゐる、何時飛んで行くのだらうと思つたが、なかなか飛んで行きさうにない。却つてその内の一つは彼女の口のところへ飛んで來て、そこから乳を吸つた。

夢見た人が何も思ひ當ることがないと云ふからには、我々は象徴として註釋してもよいことになる。二つの梨――pommes ou poires（林檎又は梨）――は彼を育てた母の乳房である。窓板は胸の突出た

ところである。家の夢でのバルコンに似てゐる。眼が覺めて後に現實感情のあるのは當然である。何となれば、母は實際に彼に乳を與へ、而も普通よりも長く與へ、さうして母の乳房はいつでも持つことが出來ようといふものだからだ。で、この夢はかう註釋すべきだ。——母さん、も一度私にお乳を見せて下さい、前に私の飲んだお乳を。『前に』といふのは一つの梨を喰べたことで表されてゐる。『も一度』は二つの目の梨を欲しがることで出てゐる。同一行爲の時を隔てゝの反覆は、夢に於いては必ず、同一對象の數の增加となる。

四歳になる子供の夢に於いて旣に象徵が役割を果すといふは驚くべきことであるが、併しこれは別に珍しいことではなく、普通の事である。この夢を見た人は昔ながらの象徵を用ゐたに過ぎないのだと云ふことが出來る。

如何に夙く人間が、夢以外に於いても、象徵的表現を用ゐるかと云ふことは、只今二十七歳になる或る婦人の次のやうな、別に何の影響を受けたのでもない思ひ出に依つて知ることが出來る。——彼女が三四歳の頃であつた。子守娘は彼女と、十一ケ月だけ下の弟と、年齢は二人の間にある從妹と三人を便所へ連れて行つた。散步に出る前に小用を果させるためである。彼女は最年長であつたので、大便所の方へ上り、あとの二人は小便所へ這入つた。彼女は從妹に尋ねた、あんたも巾着を持つてゐ

るの？　弟のヴルテルは小ちやい腸詰を持つてゐるの、妾は巾着よ。(二)すると從妹は答へた、えゝ妾も巾着よ。子守娘は笑つて聽いてゐたが、その會話を母親に告げた。母親はそんなことを云ふものでないと鋭くたしなめた。

【註】(一)『姐さん前なる、天鵞絨の巾着だ。借りたいものだ。長くは貸せない。二日三日だえ。エッサ〳〵。』(千葉縣九十九里地曳唄の一つ。)なほ本書一四〇頁「天鵞絨」云々の條參照(譯者)

こゝにまた夢の本人の説明に俟つて立派に象徴の註釋のついた夢があるから、述べておく。

十、『健康者の夢に於ける象徴の問題に就いて』(Afred Robitsek im Zentralblatt f. Ps.-A. II, 1911, p. 340)

『精神分析の反對者に依つて屢々――近頃ではまたハヴロック・エリス(二)に依つて――持出される抗議は、夢の象徴が多分神經症的精神の所産であつて常態者には妥當せぬものであると云ふに在る。ところが常態と變態との精神生活を精神分析的に探究して見ると、何等原則的の區別はなく、たゞ限定的な區別だけしか分らないのであるが、さて夢を分析して見ると、(その夢には、實は、健康者に於いても病者に於いても同樣に、押除けられたコムプレックス(結情)が效果を現してゐる)夢の機構も象徴も全く同一であることが分るのである。實際、健康者の何物にも囚はれざる夢に於いては、病者

のそれに於けるよりは屢々遙かに單純な、透明な、特色ある象徵を見ることが出來るのである。神經症患者に於いては、夢の象徵は一層猛威を振ふ檢閲のために、從つてまたそこから結果する廣汎な夢の歪みのために、それを註釋することは屢々難澁になるのである。次に報告せられてゐる夢はこの事實を說明するに役立つものである。これはまだ神經症には罹らぬ、どちらかと云へば愼み深い、內氣な娘の夢である。話しをしてゐる內に、私は彼女には許嫁の男があり、而もその男との結婚には故障が這入り、その故障を彼女が憤つてゐる事が分つたのである。彼女は自分から次のやうな夢を物語つたのである。

【註】（一） Havelock Ellis, 英國の有名な性慾學者。こゝでは『夢の世界』" The world of Dreams," London 1911, p. 168. のことを云ふ。

"I arrange the centre of a table with flowers for a birthday." (『私は或る誕生日のために卓子の中央に花をしつらへる。』) 訊いて見ると、夢の中では彼女は自分の家庭にゐたと云ふのであるが、その家庭は彼女はまだ持つてゐない。さうして或る幸福な感情を味つた。

『一般的になつてゐる象徵に依つて、私はこの夢を一人で飜譯して見ることにした。この夢は花嫁の願望の表現である。眞中に花を裝つた卓子と云ふのは彼女自身竝びにその性器を象徵する。彼女は自

分の將來の願望の充足を表はして、また既に子供の生れることの思ひにもいそしんでゐる。結婚はこのやうに夙に濟んでゐる。

『私は彼女に「卓子の眞中」といふのは普通でないと云つたら、彼女もそれは承認したが、それ以上立入つて訊くことは勿論出來なかつた。私は象徴の意味を彼女に暗示することを細心に避けたのである。さうしてたゞ夢の個々の部分で彼女の思ひ當る節だけを尋ねた。內氣な彼女も、分析を進めてゐる內に、段々註釋に興味を示し、また開放的になつてゐた。會話の眞劍さがさうさせたのだ。――その花とはどんな花であつたかとの私の問ひに對して、彼女は直ちに答へた。'Expensive flowers; one has to pay for them,'(「高價な花です、お金を出さねば買へない花です」)と。さうしてその花は'lilies of the valley, violets and pinks or carnations'(「谷間の百合、菫、それから石竹」)であつた。彼女私は百合と云ふ言葉はこの夢では一般的な意味での純潔貞操の象徴として現れてゐると考へた。彼女はこの考へを肯定し、「百合」は「純粹(ピユリチ)」であると思ひ當つた。'Valley'、卽ち「谷」は屢々女の夢の象徴である。で、谷間の百合に偶然合致してゐる二つの象徴は彼女の高價なる處女性の強調となつてゐる。――expensive flowers, one has to pay for them ――男はこれを尊重することを知らねばならぬとの期待の表白となつてゐる。「高價な花」云々の注意は、各々の花の象徴に於いてまた別の意味を

持つてゐるのだが、それはやがて明になる。

『一見まことに非性慾的な「菫」'violets' の祕めたる意味を——これは自分ながら鋭いと思つてゐるが——私はフランス語の 'viol' との無意識的關係を以て說明しようとしたのである。驚いたことには夢の本人は「暴行」の英語に當る 'violate' を聯想してゐるのである。'violet' と 'violate' とが偶然ながら言葉として非常に似てゐる——英語の發音としては最後のシラブルのアクセントが違つてゐるだけである——ことが夢に利用せられてゐるが、これは「花に依つて」破瓜（デフロレーション）(破花)(これまた花の象徵を用ゐてゐる)の强要と云ふ考へを、更にまた多分この娘の被虐性（マゾヒスチック）の特長を、表すためなのである。無意識への行手に懸る、まことに美しい言葉の橋である。「金を支拂はねばならぬ」と云ふのは、彼女が妻たり母たるために拂はねばならぬ生活と云ふ意味である。

『「石竹（ピンク）」を彼女は 'Carnations'（カーネーション） と云つたが、それに就いて私はこの言葉と「肉體的」との關係に思ひ當つた。彼女の思ひ當るのは、併し 'colour'(色) であつた。更に彼女は、カーネーションこそは彼女の許嫁の男から度々澤山に贈られるものであると付加へた。會話の終りに彼女は突然自發的にかう告白した、自分は本當の事を云はなかつた、自分が思當つたのは 'colour' ではなくて 'incarnation'(肉體化)であつたと。この言葉を私は期待してゐたのだ。ところがまた 'colour' といふ語も思ひ當り

として必ずしも偶然でないのだ。それはカーネーションから肉體色といふ意味があり、コムプレックスに依つて決定されてゐるのだ。この不正直は、抵抗が事情に應じてこのところで最も大きかつたこと、象徴はこゝで一番透明であり、リビドーとこの性器問題の壓迫との鬪爭が最も熾烈であつたことを示してゐる。この花は婚約者から屢々贈られたものだとの言葉は、カーネーションの二重の意味以外に、夢の中での彼女の性器の意味に更に交渉がある。花の贈物の晝間の原因が利用されて、性的贈物とその返禮の思ひを表すことになつてゐる。彼女はその處女性を贈物にし、それに對して豐かな愛の生活を期待してゐる。こゝでもまたかの「高價な花、金を支拂はねばならぬ花」といふのは一つの――實際、財政上の――意味を持つてゐることになる。夢の中の花はこのやうに、處女的・女性的、男性的の象徴と强制的破瓜とを示してゐる、これに依つて見ると、花の性的象徴化（これは他の場合でも廣く行亙つてゐるが）、卽ち人間の性器を植物の性器たる花に依つて象徴化することが分る。愛する者同志の間で花を贈り合ふことは、多分抑々この無意識的意味があるのだ。

『彼女の夢の中に出て來た誕生日は恐らく子供の生れたことを意味する。彼女は自分を花婿に同化し彼女が子を生んだことを賞め、さうして性交したものとして彼を代表してゐる。潜在思想はかうであらう、妾が彼であるなら待つてなどゐないで、許嫁の許しなどきかずに破瓜し、强要したであらうに

――。實際 violate はその意味である。であるから、また加虐性のリビドー要素も出て來てゐるのである。――

『夢の深い層では 'I arrange etc.'（妾はしつらへる云々）は一つの自己色情的な、從つて嬰兒的な意味を持つてゐる筈である。

『彼女はまた自分の肉體上の不滿足に就いて、夢の中でのみ可能な認識を持つてゐる。彼女は自分を板のやうに平べつたいと見てゐる。そこで愈々「眞中」卽ち彼女の處女性の高價さが高められるのである。また卓子の平面であることも象徵の一要素となつてゐる。――夢の集注が注意に價する。一物も餘計なものはない。一々の語が象徵である。

『彼女は後になつて夢に附加へた。'I decorate the flowers with green crinkled paper'（「私は綠色の縮み紙でその花を飾る。」）更に彼女は云ひ添へた、それは人が普通の花瓶を包むに用ゐる飾り紙であつたと。その上かう云つた。'to hide untidy things, whatever was to be seen, which was not pretty to the eye; there is a gap, a little space in the flowers!'（「何でも眼に見て綺麗でないものはみんな匿すために。花と花との間には小さな隙があいてゐました。」）'The paper looks like velvet or moss'（「紙は天鵞絨か蘚のやうに見えてゐます。」）'decorate'（「飾る」）は、私の期待した通り、'decorum'

（「禮節」）に聯想が行つてゐるのだ。綠色は重大のやうであるが、これに "Hope"（「希望」）を聯想してゐるのだ。――夢のこの部分では、男との同一化は重要でなくて、羞恥と公明との考へが出てゐる。彼女は彼のために自分を美しくし、自分の身體の缺點を告白し、それを恥ぢ、それを矯正しようと試みてゐる。天鵞絨や蘚が思ひ浮んだと云ふのは crines pubis（恥毛）のことなんである。（一）

【註】（一）本書一三四頁註參照。（譯者）

『この夢は、覺醒時の娘の考へでは思ひも寄らぬ思想の表現である。感覺的の愛やその機關に關係した考へ。彼女は「或る誕生日の準備をする、即ち性交する。破瓜の恐怖、多分また快樂の强調せられた苦痛の恐怖が表れてゐる。彼女は自分の身體の缺點を告白してゐるが、自分の處女性の價値の誇張を以てその償ひとしてゐる。彼女の羞恥は、子供を目的とすると云ふ事を以て、自己露出的の肉感性の償ひとしてゐる。また愛人たちの迂遠である物質的商量と云ふことも表れてゐる。この單純な夢の感動――幸福感――で見ると、こゝで强い感情のコムプレックスがその滿足を見出してゐることが分る。』

フェレンチ Ferenczi は『思ひ懸けないこの夢』の象徵の意義や全體の意味を解くことは易々たるのみと云つてゐるが、それは至當である。（Int. Zeitschr. f. Psych. IV, 1916/17）

こゝにまた近代の歴史上の人物の夢の分析を一枚加へておくが、その中の一對象が添へられた定義に依つて最も明かに男根象徴として認められるやうになつてゐる。乗馬鞭が『無限に長くなること』は勃起以外の何物をも意味しない。それのみならずこの夢は、眞面目な、性的には縁遠さうな思想が、嬰兒性慾的の材料に依つて表現へ持出されると云ふことを示す一つの立派な實例である。

十一、ビスマルクの夢（ハンス・ザックス博士(一)の論）

【註】（一） Dr. Hanns Sachs, フロイドの高弟の一人。『夢の表現技巧に就いて』その他、重要の論文多數あり。（譯者）

『ビスマルクはその著「思索と追憶」（第二卷）の中で、彼が一八八一年にカイゼル・ギルヘルムに宛てた書翰のことを報じてゐるが、その手紙には次のやうな箇所がある。「陛下のお報に依りまして、私も一つ夢の話を申上げようと云ふ氣になりました。それは一八六三年の春、人力を以てしては如何とも脱出出來さうもない非常な苦艱の内に陷つた時に見たものであります。私は夢を見て翌朝直ぐに私の家内やその他に證人に話しました。私はアルプスの或る小さな山路を馬に乘つて進んでゐた。右は深淵であり左は岩壁である。路は愈々狹くなり馬は云ふことをきかず、さりとて場所のないために引返すことも下馬することも不可能である。そこで私は左手に持つた鞭を擧げて滑らかな岩壁を叩き、

さうして神よと叫びました。鞭は無限に長くなり、岩壁は畫き割りのやうに碎れ去つて廣やかな道は前にひらけ、而もボヘミヤのやうな山谷森林は眼前に展開し、そこには軍旗を捧げたプロシアの軍隊がそこにをります。私はなほ夢の中で考へました。如何にしてこれを即刻陛下に御報申上ぐべきかを……。夢はこれで終り、私は喜ばしく元氣よく眼を醒ましました。』

『この夢の筋は二つの部分に分れてゐる第一部はビスマルクが陷つた困難の話であり、第二は彼がそこから不思議な方法で脫出する話である。人馬が共に陷つた困難な立場は、この政治家の危機的地位の夢に現れたものであることは、容易に知られる。この危機的地位を、彼は、夢の前夜に、彼の政策問題を熟考してゐる內に、特に痛切に感じたものに相違ない。譬喩的に表現することに依つて、ビスマルク自身は、上に引用した手紙の個所の中で、當時に於ける彼の立場の如何に不安なものであつたかを描き出してゐる。で、それは如何にもすら〳〵と、わけなく書かれてゐる。それに、これはまたジルベレル Silberer の所謂『機能的現象』の好實例を我々に示すものである。ビスマルクが彼の一切の思索を傾けて解決を試みてなほ打破し得ないでゐる時、而もなほそれ等の問題に軼掌することをやめ得ない、またやめたくないと思つてゐる時、その時の彼の精神中の樣子は、進退茲に谷まつてゐる馬上の人に於いていみぢくも表はされてゐる。降參や退却を思ふことを禁ずる彼の矜持は、夢の中で

は『引返すことも、下馬することも……不可能』との言葉で表はれてゐる。他人の幸福のために憂へ常に斷乎たる實行家であつたビスマルクとしては、自分を馬に譬へることは如何にも自然で、彼はまたこれをさま〴〵な機會に於いてなしてゐるのである。例へば、彼の名高い言葉に『忠實なる馬はその頸輪の中に死す』といふのがある。「馬は云ふことをきかず」との言葉は、あまりに疲れたるものは現在の配慮から退くことの必要を感じ、また別の云ひ方をすれば、彼は現實の羈絆を眠りと夢とを以て解放する事を知つてゐるとの意であることは明かである。それから第二の部分に於いて非常にはつきりと言葉に出てゐる願望充足はこゝでも旣に『アルプス山路』といふ言葉で豫想せられてゐる。ビスマルクは當時旣に、彼の次の賜暇をアルプスに——即ち、ガスタインに——送るであらうといふことを知つてゐた。彼をそこへ移してしまつた夢は一擧にして彼を一切の煩はしい政務から解放してゐたのであつた。

『第二の部分に於いては、ビスマルクの願望は二重に——露骨に分り易く、併しなほ象徴的に——充足せられたものとして表現せられてゐる。象徴的にと云ふのは、遮斷する岩壁の消失すること、さうしてその代りに廣やかな道の現れることである。露骨にと云ふのは、前進するプロシアの軍隊を見ることである。我々はこのやうな豫言的幻想の說明には何も神祕的な關係を立てるには及ばないのだ。

フロイドの願望充足說で澤山なのだ。ビスマルクは當時プロシア國內の葛藤を脫却するにはオースタリーと一戰して大勝を博するに限ると思うてゐた。もしプロシアの軍隊がボヘミヤに、即ち敵國內に、軍旗を翻へすのを見れば、即ち彼の願望は充足せられたものとして表れる。それはフロイドの要件として定めた通りである。たゞ、我々が只今問題にしてゐるこの夢の本人が、夢の充足では滿足せず現實をもまた獲得する事を知つてゐた事だけは明かである。凡そ精神分析の註釋法を知つてゐる者には誰にでも思ひ當ることは『無限に長く』なると云ふ乘馬鞭でなければならぬ。鞭、杖、鎗、その他これに類似したものは男根象徵として我々には旣に知られてゐるものである。併しもしこの鞭が男根としての驚くべき性質、伸長性を持つてゐるとすれば、もう何の疑ふ餘地もない。伸長に依つて現象を『無限』にまで誇張することは、嬰兒期に移ることを意味するものゝ如くである。鞭を手にとることは明かに手淫を指示してゐる。併しそれは勿論、夢の本人の實際上の狀態を記憶するのではなく、遙かに昔の幼兒的快樂を想起するものである。こゝに於いてか、非常に價値を生じて來るのはステーケル博士に依つて發見せられた註釋である。この註釋に依れば、夢に於いては左方は不正、禁斷、罪障を意味し、それは禁斷に反して行はれた子供の自慰には甚だよく適用せらるゝものであらう。このやうな深い嬰兒的の層と、政治家の日々の計畫に執掌してゐる層との間には、なほも一つ中間的の層があつて

それが他の兩方に關係を有つのである。神に助けを呼び岩を打つことに依つて或る困難から不思議に遁れると云ふ事の全體は、直ちに聖書中の或る場景を思ひ出させる。卽ち、モーゼが渴けるイスラエルの民のために岩から水を出してやつたといふことである。ビスマルクが如何に聖書を信奉したプロテスタントの家庭から生れたかを思へば、彼がこの個所を熟知してゐたことは直ちに承認出來るのである。民を救はんとして却つて民から反抗と憎惡と忘恩とを以て報いられたモーゼには、ビスマルクはその困難の秋に際して、容易に自分を比較することが出來たであらう。これに依つてまた實際的願望への支持も與へられたことにならう。他方に、また、この聖書の個所は自慰のファンタジーに利用される甚だ澤山の點を持つてゐるのである。神の命にそむいてモーゼは杖を摑み、この背反のために主は彼を罰し、約束の地を踏むことなしに彼は死なねばならぬであらうと告げる。夢に於いては明白に男根であるところの杖を、禁ぜられてゐるに拘らず摑むこと、その杖を以て打つことに依つて水を獲ること、死の脅迫など——總てこれ等は嬰兒的自慰の主要契機を竭すものである。

『嬰兒的の自慰のファンタジーの中に禁斷の動機は表れてゐるが、その自慰ファンタジーの歸結として、我々は、子供が、自分等の周圍の年長者たちにそれを知られないやうにと願望するやうになるものと思はざるを得まい。この夢に於いてはこの願望は、その反對のもの、卽ち起（おこ）つたことを直ちに王

に報告しようとの願望に依つて置換へられてゐる。この逆轉は、併し、顯著にまた全く自然に、夢の思想の最上層及び夢の顯在内容の一部分に展開されてゐる勝利のファンタジーに參加してゐる。そのやうな勝利の夢、征服の夢は屢々一つの色慾的征服願望の外飾（デックマンテル）である。この夢の個々の特長、例へば山路を登り來るものに障害が立ちふさがること、併し自ら長くなる鞭をこれにあてれば廣やかな道が開けることなどは、そこから一定の、この夢を貫通する、思想及び願望の根柢を定めて來ようとするには、どうしてもその征服願望まで觸れなければならなかつたのだが、そこまでは達しなかつた。我々はこゝで全然成功した夢の歪みの模範例を見る。突當りさうなものはよく修理せられて、その上に庇護の被ひとして整へられた織物の何處からも頭を突出さないやうにしてある。その結果は一切の不安を生むものがあとに追ひ遣られるやうになるといふことだ。これは檢閲に傷けられることなしに願望を充足するに成功した理想的な場合である。であればこそ夢の本人がその夢から喜ばしく元氣よく眼覺めたのを尤と思ふのである。

さて私はこゝに

十二、或る化學者の夢

を揚げて本章を終ることにする。即ち或る若い化學者が婦人との性交を以て置換へることに依つて自

慰の習慣を廢絶しようとしたのである。

豫備的說明――夢の前日に、彼は或る學生にグリグナードの反應に就いて敎へた。酸化マグネシウムはヨジウムの接觸作用の下に於いては、絕對純粹なエーテルの中に溶解すると敎へたのである。二日前に、同じ反應の途中に、爆發があつて、その時實驗者は手を燒傷した。

夢の一。彼はフェニルマグネシウムブロミド phenylmagnesiumbromid を作らうとしてゐる。彼には裝置が特殊の明瞭さを以て見えてゐる。併し彼は自分をマグネシウムの代理にしてゐる。彼は今不思議な傾きかゝつたやうな態度になつてゐる。彼は獨り言を云ひ續けてゐる。『これは正しい事だ。仕事は始まつてゐる。私の足は融け始めてゐる。私の膝は柔くなつて來てゐる。』それから彼は手を下にやつて足を搜る。やがて(どうやつてだか彼にも分らないが)彼は坩堝の中から自分の脚を取出して來る。それからまた彼は獨り言を云ふ『そんな事はあり得ない……さうだ、それはさうなければならないのだ、それで正しく行つたのだ。』と。それから彼は半ば眼醒め、夢を獨りで繰返してゐる。何となれば、彼はそれを私に云はうと思つてゐるから――。彼は明かに夢の分析を恐れてゐる。彼はこの半睡狀態の間に非常に亢奮し、さうして『フェニル、フェニル』と續けさまに云つてゐた。

夢の二。彼はその全家族と……してゐる。七時半である。彼は或る婦人と媾曳するためにシュッテ

ントールへ行つてゐる筈であるが、十二時半まで眼が醒めない。彼は獨り言を云ふ『今はもう遲れてしまつた。むかうへ着けばもう一時半になつてしまふ。』と。次の瞬間に、全家族が卓子の周りに集つてゐるのを見る。――彼の母とスープ皿を持つてゐる若い女中とは特にはつきりと見える。その時、彼は獨り言を云ふ、『さて、もう食事になつたとすると、慥に俺は出ることが出來ない。』と。

分析――彼は第一の夢も嬦叟の相手の婦人に關係のある（この夢は期待せられた會合の前夜に見たものである）事を慥に感じてゐる。彼が教へてやつた學生は妙に不快な奴である。學生は化學者に云つた、マグネシウムはまだ影響を受けてゐないから『それは間違つてゐる・慥に間違つてゐる』と。化學者はまるでそんなことは頓着せぬかのやうに、何とも答へなかつた。彼自身はこの學生でなければならぬ。彼がその分析に無頓着であること、學生がその綜合に無頓着であるのと同じである。併しながら、夢の中の彼は實驗を仕上げるので、私自身である。首尾よく成功してゐるに對して彼が無頓着であるところから見ると、如何にも彼が面白くなく思つてゐると私は考へざるを得ないではないか！』

更にまた、彼は分析（綜合）のなさるゝ材料である。何となれば、それは分析治療の成功の問題である。夢の中の脚は前夜の印象を想起せしむる。彼はダンス稽古場で或る婦人に會ひ、彼女を物にした

いと思つた。彼は女をあまり強く抱きしめたので、一度彼女は聲を立てたことがあつた。彼女の脚を押してやるのをやめると、今度は彼の方が下腿の邊に、膝の上のところまで、丁度夢の中で出たあたりが、女から強く應酬的に押されてゐるのを感じた。この狀態で、女は蒸溜器の中のマグネシウムになつてゐる。それが遂に働いてゐるのである。彼は私に對しては女となり、その婦人に對しては男となるのである。もしそれが女で働くとすれば、分析治療も同じく働くのである。膝のあたりで自分自身を感じ知ると云ふことは、自慰に關係がある。さうして前日の疲れに呼應してゐるのである。……嫌曳は實際は十二時半に定めてあつたのである。彼が寢過したい、平常の性的對象（つまり、自慰）と共にありたいとの願望は、抵抗となつて現れてゐるのである。

第六章

夢の忘却

吾人が註釋しようと思ふ夢は實は我々に知れるものではない、或はも少し精しく云へば、實際夢が起つた通りそのまゝに知る事が出來るとの確證はないと云ふ反對があちこちから起つて來る。吾人が夢に就いて思ひ出すものや、我々の註釋法に附するものは、まづ我々のあてにならぬ記憶に依つて歪められてゐる。その記憶なるものが夢を保持するに特に不適當であり、また夢の內容の最も重要な部分を多分落してしまつてゐるかも知れない。何となれば我々が夢に注意を向ける時には、我々はいつも覺えてゐるよりはもつと澤山夢に見たのに、たつたこれだけしか覺えてゐない、而かもこれが私には甚だ不確だと卿つ原因を發見するのが屢々だからだ。他方に於いて、我々の記憶は夢を部分的に再寫するばかりでなくまた妄りに伴つて再寫することがいろんな事に依つて確められるのだ。宛も一方我々は夢に見た材料が實際我々が覺えてゐるほどそれほど無關係であり混亂してゐたかと疑ふことが出來ると共に、他方また夢は我々が述べるやうにそんなに連絡があつたかと疑ふことも出來る。再寫

の試みに際し我々は既に存在してゐた空隙を、或は忘れたゝめに出來た空隙を、勝手に撰んだ新材料でうめ合せたりはしなかつたか。我々はその夢を飾りたて、みがき立て、眞の內容に關する判斷を總て不可能にして了ひはしなかつたか。實際、或る學者(Spitta, Foucault, Tannery.)は、總て秩序あり連絡あるものは我々が思ひ出さうと試みてゐる內に夢の中へまで投入したものであると云つてゐるやうだ。それでは、吾人がその價値を決定しようと企てゝゐるその主題そのものを我々の手から奪つてしまふやうなものである。

今まで夢の註釋にはかう云ふ警告は全く無視して來たが、實際、註釋の必要は、これに反して、最も小さい、最も重要ならぬ、且つ最も不確實な、夢の內容の一斷片の方に、判然確實な部分に含まれてゐるものに劣らず、見出さるゝのである。イルマの注射の夢に於いては、『私は急いでM博士を呼入れた。』とあつた。で、我々はこの一小項目と雖も、もし特別の引懸りがなければ、この夢の中へは這入つて來なかつたらうと云ふ事を斷じたのであつた。かくて、我々はこの不幸な患者の歷史に思ひ至つたのであつたが、彼女の寢臺のところへ私は『急いで』昔からの同僚を呼入れたのであつた。五十一と五十六との差を『忘れられた重大事』quantité negligeable として問題にしてゐた一見矛盾した夢に於いて、五十一と云ふ數字は繰返しく出て來た。これが自明の事か下らぬことかを發見する代りに

夢の潛在內容に於ける第二の思想列を推論したが、それが五十一の方に導いて行つた。この手懸りを傳つて行つて、吾人は人生の極限を五十一とする恐怖に達したのであつた。これが、高慢にも人生には極限なしとする、優勢な思想列に最も著しく對立してゐるのだ。"Non Vixit" の夢に於いては、私は始め無意味なものが這入つてゐると思つて見落したほどであつたが、かう云ふ文意を發見した。『Pが彼を理解せぬから、Eが私に尋ねてゐる』云々と。註釋が行詰つたので、私はその句に戻つて行つた。さうしてそれに依つて嬰兒時代の空想に這入つて行つた。この空想が夢の思想に於いて結合の中間點となつてゐるのだ。これは詩人の次のやうな句に依つて這入つて來たのだ。

『滅多にお前は理解せぬ

滅多に私も理解せぬ、

共に泥田に落込めば・

その時二人は理解しよう。』

如何に夢の最も重要ならぬ特徴が分析に缺くべからざるものであるか、また如何に注意が最初その方へ向けられないために仕事の濟むのが遲れるかは分析が實例に依つて證明してゐる。それと同じで、吾人は夢の註釋に際して、夢の中に出て來る言葉のあらゆる陰影（ニユアンス）を尊重した。實際、もし我々が

本來の姿で夢を語らうと思つて、而かもやりそこなつた無意味な、不手際な言葉があつたとすれば、我々はそのやうな表現上の缺點をすらも大いに尊重したのである。簡單に云へば、諸學者が急いで場當りに作つた出鱈目の即興作だと考へたやうなものでも、我々は神聖な本文として取扱つたのである。この矛盾には多少の説明を要する。

その説明に依ると、諸學者たちは別に不都合はないが、我々の方に風向きがよいのである。夢の起源に關して我々が新たに獲得した理解の見地からすると、矛盾は矛盾でないのである。成程、我々は夢を再現しようと企てるに當つて多少歪める事は事實である。またこの點に於いて、我々は今一つさう云つたものゝある事を發見する。それは常態時（覺醒時）の思想の感化に依つて夢が、屢々誤解せられた第二次の仕上げといふものを受けることである。併し、この歪みなるものは、夢の思想が必ず夢の檢閲に依つて加へらるゝ仕上げのほんの一部分に過ぎないものだ。諸學者はこゝの所に、夢の仕事が最も著しく働く部分のある事を洞察し、又は觀取してゐる。我々にとつてはこの事は大して重要でないのだ。何となれば、一寸分りにくゝはあるが、もつと結果の著しい歪みの仕事が、匿れた思想の中からその對象として既に夢を擇んでゐる事を吾人は知つてゐるからである。諸學者は夢の變革が、思ひ出され言葉に寫されてゐる間だけ出鱈目であり解釋すべからざるものであり、從つて我々をして

夢の註釋に際し誤らしむるものだと考へてゐる點だけが、間違つてゐるのだ。彼等は精神に於ける決定作用をあまり見縊り過ぎてゐる。精神には出鱈目なものなどはない。第二の思想列は第一の思想列が未決定のまゝに放擲した要素の決定に直ちに取掛るのである。例へば、私は或る數を全く任意に考へて見ようと思ふ。が、併し、これは不可能だ。私が思ひ出す數なるものは定命的に、必然的に、私の一瞬間の意向からは遙かに遠い、私の內なる思想に依つて、決定されてゐるのだ。(一) 丁度、夢が覺醒狀態の校訂に依つて受ける變改が出鱈目でないやうなものである。これ等の變革は依然內容と聯想上の關係があるのだ、(その內容の代りになつてゐるのだ)、さうして我々にその內容に至るの道を指示するものだ。而かもその內容そのものが、また或る他のものゝ代償であるのだ。

【註】(一)『日常生活の精神病理』參照。本全集中に包含せられてゐる。(譯者)

患者と共に夢の分析をして、私はこのやうな主張をいつも次のやうに證明して來たが、嘗て不成功に終つたことはない。夢の報告が始め理解し難く思へたならば、私は本人にも一度繰返して貰ふのである。ところがこれを本人は同じ言葉で行ることは稀である。表現が變つてゐる個所は夢の扮裝の弱點であるなと私に分る。丁度、ジーグフリードの着物の飾りを縫ひつけた個所の弱點である事がハーゲンに分つたのと同じに……。(二) 分析はこれ等の點から出發することが出來る。私がその夢を解決す

るのに特に骨折ると云ふと、夢を話す人は警戒して抵抗の衝動を起し、夢の扮裝の弱點を庇護して、裏切の言葉の代りにもつと縁遠いものを以て答へる。彼はかくて彼の落した表現へと私の注意を呼ぶ。夢の解釋に對する防備の努力の中からも亦、私は夢の着物が如何に注意深く縫ふてあるかの結論を引出すことが出來るのだ。

【註】（一） ジーグフリードはドイツの傳說『ニイベルンゲンの歌』の主人公。嘗て龍血に浴して不死身となつたが只一ヶ所背部に木葉の落ちた點だけ龍血に染まなかつたゝめに刀の傷を受ける。そこを知るために、クリームヒルデの兄グンテルの重臣ハーゲンは、ジーグフリードの妃クリームヒルデを欺いて着物に印を縫はせて置き、出獵の時油斷を見すまして投鎗を以て殺す。（譯者）

併し、夢を述べさせる際に我等の出會す疑ひをあれほど大袈裟に云ひ立てたのは、諸學者の方に道理は少い。成程この疑ひは知的の確證に就いての缺陷を露はすことは本當であるが、併し我々の記憶は實は、證據なるものを知らないのである。而かも我々は、客觀的に明かにせらるゝよりももつと屢屢、記憶の陳述に信を貸すことの必要に降つてしまふのである。夢やその個々の項を正しく思ひ浮べることが出來るかとの疑ひは、これまた檢閱の分局に過ぎない。つまり夢の思想が意識へ出て來る事に對する抵抗の分化である。此の抵抗は轉位と代償とを作つたゞけでなくなつてしまはない。それ故

に、通過させたものにまで懷疑となつてつき纏ふてゐるのだ。この疑ひが夢の强烈な要素を攻擊しようとしないで、たゞ弱い判然せぬ要素だけを攻めようとする事實を見ると、この疑ひを知ることが一層容易になる。何となれば、既に我々の論じたやうに、總ての精神的價値の轉換は夢の思想と夢との間に起るのだから……。このやうな歪みはたゞ價値の變更に依つてのみ可能となつたのだ。歪みはきまつてこんな形で現れ、時としてこのまゝで滿足してしまふ。もし疑ひが夢の內容の判明せぬ要素に膠着するならば、吾人は前の暗示に從つて、この要素の中に、追放せられた夢の思想の一つからの直接的分化を認めることが出來る。その有樣は丁度、古代又はルネサンスの一つの國家の大革命のやうな風である。以前の貴族で、有力な支配階級が今は追放せられ、總ての高位は成上り者共に占められ、市中にはたゞ甚だ貧困な、無力な市民、又は敗れた黨派の退けられた者等だけが、入ることを許される。が、彼等とても市民權を十分に享受するわけではなく、猜疑の眼を以て監視されてゐる。これに比して只今の場合では、猜疑の代りに懷疑がある。それ故に、私は、夢の分析に於いては我々は信賴し得べきものだけを尊重すると云つたやうな考へ方は全然卒業しなければならないと主張する。で、もし夢の中にこれか或はあれかゞ起つたと云つたやうな可能性が多少でもあるならば、その可能性は全然確實なものとして取扱はねばならぬ。(こ　そのやうな懸念は捨てゝしまつて夢の要素を追及するや

面白からぬ考へは彼の心中に何の思想をも惹起することはないとの事實となつて、その精神的效果を示すのである。このやうな效果は本來、自明なものではない。或る人がもし『夢の中でこれが起つたかあれが起つたか、私は知らない。併しかう云ふ考へが夢の中で起きた』と云つたとしても、矛盾とは云へまい。併し人々は決してかう云ふ風な云ひ方はしない。で、正にこのやうな懷疑のまぜつ返しが分析中にあるがために、精神的抵抗の分身であり道具であるとの刻印がそれに打たれるのだ。精神分析は當然猜疑的である。その規則の一つに曰く、凡そ仕事の繼續を妨げるものはみな抵抗であると。

【註】（一）本書二六頁及び四〇頁參照（譯者）

夢の忘却はまた、その說明に於いて精神的檢閲の力を考へない間は、見當のつかないものである。實は、人々が夜の中に隨分澤山夢を見たのにその內の僅かしか覺えてゐないと云ふ感じのすることが既に多くの場合に於いてまた別の意味のあることなのだ。それは恐らく、夢の仕事は夜中ありありと續いてゐたのに、僅かにこのやうな短い夢しか殘つてゐないとの意味であらう。併しながら、夢は眼の覺めた時にずんずん忘れてしまふものであることも疑ふべくもない。夢を覺えてゐようと思つて隨分骨を折つても、やはり忘れてしまふのが始終である。併し我々は概して忘却の範圍をあまりに、大

きく思ひ過ぎるやうに、また夢に起つた空隙から判斷して、我々の覺えてゐるところの少いことを大袈裟に考へ過ぎてゐるものであると私は信じてゐる。夢の內容で忘却に依つて失はれた總ては屢々分析に依つて回復される。少くとも總ての場合に於いて、單一の殘存斷片からして慥に夢ではなく（それは大した重要のものではない）夢の思想の總てを發見することが出來るのである。分析に際しては一層多量の注意と克己とが必要である。それつきりであるが併しさりとて、夢の忘却には敵對意志がなきにしもあらずと云ふことは、同時にそこに示唆されてゐるのである。〔二〕

【註】（一）このあたりの適例は「精神分析入門」の內にある。

夢の忘却が抵抗を助けるための故意的性質を帶びたものである事の確證は、分析に際し忘却の豫備的段階を檢べて見れば捉へることが出來る。〔二〕註釋の仕事の最中に、夢の省略せられた斷片が急に表面に出て來ることが屢々ある。忘却の中から奪還せられた夢のこのやうな部分はいつでも最も重要な部分である。それは夢の解決の最捷徑上に橫たはつてゐるのだ。で、その理由のために抵抗には最も目ざはりな物であつたのだ。この論に關して私が蒐集した夢の實例の中で、私は嘗てそのやうな夢の內容の一片を後で挿入しなければならなくなつたことがあつた。それはあまり美しくない婦人の旅の伴侶に復讐をする、旅行の夢であつた。その夢はあまり生々しくきたないものであるから分析せずに

殆どその儘にして放つておいたのであつた。その省略せられた部分にかうあつた。『私はシルレルの或る著書に就いて云つた、'It is from ……' 併し自分で訂正した、自分で自分の間違ひを氣付いたからだ。,It is by ……' と。かう云ふとその男は彼の妹を顧みて云つた。「さうだ、この方の云はれる通りだ」と。』(三)

【註】(一)『忘却の精神的機能』と題する論文に精しいが、この論文は『日常生活の精神病理』の中に收められてゐる。

(二) 夢の中でこのやうに外國語の使ひ方を正すことは稀でない。

夢の中で自分で正すことは、或る學者には非常に不思議に思はれてゐるらしいが、我々にとつては大して問題にするほどのことではない。私は寧ろ私の記憶からして、夢の中の文法上の誤りの標本を示さうと思ふ。私は十九歳の時に始めて英國に渡つてアイルランドの海岸で一夜を過した。私は固より波打際に捨てられてゐる海の動物を捕へることを興がつたが、殊にひとで（夢は Holthurn-Holothurienで始まつてゐる）に夢中になつてゐた。その時一人の美しい少女が私の側へ來て尋ねた。『それはひとでですか、生きとりますの？』私は答へた。『えゝ彼は生きてをります。』"Yes, he is alive." 併し自分の間違を恥ぢて、その文章を正して反覆した。その時の私の文法上の間違ひの代りに、夢はドイ

ツ語で最も普通な別の誤りを持つて來た。『この書物はシルレルの著だ』"Das Buch ist von Schiller"は the book is from と譯すべきではなく、the book is by と譯すべきだ。夢の仕事がこのやうな代償を作つたのは、from と云ふ語がドイツ語の形容詞 fromm（敬虔なる、熱誠なる）と同音なるに依つて著しい凝縮を可能ならしめたのだといふ事は、夢の仕事の目的やそれが作用の手段を擇ばぬことなどに就いて既に多くを知つて居る我々としては、別に驚くほどの事ではない。併しこの夢に關して海岸に就いての無邪な思ひ出が浮んだのはどう云ふ意味か。それは私が間違つた性を用ゐたといふ甚だ無邪氣な實例に依つて說明がつく。卽ち、私は性又は性的なものを表はす『彼』"he" なる言葉を用うべきところでない所へ用ゐたことに依つて說明がつく。これは僅に夢の解釋への鍵の一つだ。誰でも『物質と運動』"Matter and Motion"（Molière in Malade Imaginaire" La matière est-elle laudable? —— a motion of the bowels）といふ本の表題を聞いたことのあるものは、その人はその缺けた部分の何であるかを容易に斷ずることが出來よう。

それのみならず、私は夢に於ける忘却は大部分は抵抗の活動に職由するものであることを、demonstratia ad oculos（實證を目前において）證明することが出來る。或る患者が私に云つた、私は夢を見たのだが、何も起らなかつたかのやうに痕跡もなく夢は消えてしまつたと。併しながら、私たちは分析

の仕事を續ける。私は一つの抵抗に打つかつてそれを患者に明かにしてやる。彼を勵ましたり促したりして何等かの面白からぬ思想に堪へるやうにしてやる。さうして私が無事に仕事を成し遂げるや否や、患者は叫ぶのである、『私は夢に見たことを思ひ出せるやうになりましたよ。』と。分析の仕事に際して邪魔をした同じ抵抗が、また彼をして夢を忘れさせたのだ。この抵抗を征服することに依つて私は夢を記憶に齎したのだ。

同樣にして患者はまた、分析の仕事が或る部分に達した時には、三日、四日又はそれよりも以前に起つて、その間中忘却の內に沈んでゐた夢を想起することも出來る。(一)

【註】(一) アーネスト・ジョーンズはこれに似た屢々起る場合を說明してゐるが、一つの夢を分析してゐると同夜の第二の夢が思ひ出される。その夢はそれまで忘れられてをり、否、思ひもよらなかつたものでさへあるのだ。

精神分析の經驗に依つて吾人は夢の忘却が、諸學者の信じたやうに、覺醒狀態と睡眠狀態との無緣に因るといふよりは、抵抗に依るといふ事實の今一つの證據を得たのである。私にも他の分析者にも、また分析治療を受ける患者にも屢々起ることであるが、我々が(好んでいつも云ふやうに)夢に由つて眠りから覺めると、直ぐにそのあとで、まだ心の活動を全部保有してゐる內に、我々は夢を註釋し始

めるのだ。そのやうな場合には、私はその夢を全部理解してしまふまでは安心しないのが屢々だ。而かも眼が覺めて後、慥に自分が夢を見、それを註釋したことを知つてをりながら、その夢の內容と合はせて註釋の仕事も忘れてしまふことさへ毎々起るのだ。夢が註釋の仕事の結果を忘却の中へ引込んでしまふことの方が、心的活動が夢を記憶の內に留めておくよりは一層屢々である。併し、註釋の仕事と覺醒時の思想との間には、かの諸學者たちがそれに依つてのみ夢の忘却を說明したがつてゐるかの精神的空隙などはないのである。モートン・プリンス(一)は夢の忘却に就いての私の說明に反對してゐるがその論據は、それがたゞ、二つの無連絡な狀態（dissociated states）に對する健忘の特殊な實例に過ぎないといふのと、私の說を他の型の健忘と調和させることが出來ないために他の目的に對してはまた價値がないと云ふにある。かくて彼はその說を讀むものをして、これ等二つの連絡なき狀態の記述をなすに際し、彼はまだこれ等の現象の動的說明を發見しようと試みてゐないのではないかと思はしむるのである。何となれば、もし彼がそれをしてゐたならば、彼は慥かに、抑壓（とそれに依つて生ずる抵抗と）は『この無連絡の原因であると共に、またその心的內容に對する健忘の原因でもある』ことを發見したであらうからだ。

【註】（一） Morton Prince, The Mechanism and Interpretation of Dreams, The Journal of abnorm. Psych.

Oct.—Nov. 1910.

夢は他の精神的行動と同じやうに忘れられないものであり、他の精神的活動と同じやうに確乎と記憶にこびり付いてゐるものであることは、私がこの原稿を書いてゐる内に試みることの出來た或る實驗に依つて證明せられた。私は自分の手帳に私自身の夢を澤山に書き留めてあるが、それ等の夢を私はその當時何等かの理由で完全に分析出來なかつたが、或は全然分析出來なかつたのである。私の斷定を明示する材料を得るために、一年か二年の後に、その内の或るものを分析して見ようとした。私は一つ殘らず分析に成功したのだ。實は私は、註釋がこのやうな後になつて却つて當時夢がまだ最近の出來事であつた頃に於いてよりは、一層容易に行つたとさへ云ふことが出來る。この事實に對する有り得べき説明として、私は夢を見た當時には私を惑はした抵抗を幾分私が乘越えたゝめであると云ひたいのである。そのやうな後からの註釋に於いて、私は夢の思想の過去の結果を大抵もつと豐富になつてゐる現在のに比べて見て、さうして過去の結果を何等の變化なく現在の結果の内に必ず發見したのである。併しながら私は大分以前から、患者が時々前夜の夢でゝもあるかのやうに話した數年前の夢を同じ方法を以て註釋し、同じ成功を得て來てゐる事を思つて、直ぐにこれは驚くには當らぬことだと思つたのである。私は危惧の夢を論ずるところで、そのやうな遲れた夢の註釋の二つの實例を

報告するであらう。私が始めてこの實驗を試みた時には、私は當然ながら、夢がこの點に關しては神經症の徵候と同じやうに働くものであらうと思つてゐた。何となれば、私が精神分析に依つて神經症を、多分ヒステリーを取扱ふ時に、私は、そのために私のところへその患者が來るやうになつた後の頃の病徵に就いてと同樣に、長い間忘れられてゐた病徵の始めの頃のものに就いても說明を發見しなければならないからである。さうして私は今日の一層さしせまつたものよりも、以前の問題の方が解決するに一層容易であることを發見するからである。夙く旣に一八九五年に出版した拙著『ヒステリー研究』"Studien über Hysterie"(一)に於いて、私は今日四十歲以上になつてゐる婦人患者が十五歲當時に經驗した危惧の始めてのヒステリー發病に就いての說明を報告することが出來た。

【註】(一)ブリルの英譯では "Selected Papers on Hysteria" となつてゐるもの。

さて私はこれから別に何の連絡もつけずに、夢の註釋に關してなほ多少の事を述べておかう。それは自分自身の夢を註釋することに依つて私の論を試みて見ようと云ふ讀者には、恐らく多少の役には立たうと思はれる。

自分の夢の註釋など誰にでもわけなく出來るものだと思つたら大間違ひである。普通の注意で引出すことの出來る感覺的現象の知覺すら實習が必要である。而もこれ等の知覺の群は何等の精神的動機

に依つても反對を受けてをらぬものである。『望ましからぬ表象』を完全に把握することは一層困難でなければならぬ。これをなさうと思ふ人は、本論に陳べてある要件を協へねばならぬ。こゝに與へられた規則に從つて、その人は、仕事の間、一切の批判を、一切の先入見を、一切の感情的又は知力的の一面性を己れの內に制しなければならぬ。我々は常にクロード・ベルナールが生理學實驗室での實驗者に與へた格言を忘れないやうにしなければならぬ。その格言とは『動物の如く仕事せよ』と云ふのだが、その意は、孜々として然しながら結果に頓着することなくせよと云ふにある。これ等の忠言に從ふ者には慥に最早この仕事はむづかしくはないであらう。夢の註釋はいつでも一回きりでは完成するものでない。連續したさまぐ＼な思想を辿つて行つて、諸君の分析力はもう竭きたと感ずることも屢々あらう。夢はその日にはもうこれ以上何も語らないであらうから、もうやめて次の日に仕事に歸る方がよい。やがてその夢の他の部分が諸君の注意をひく。このやうにして諸君は夢の思想の新層への入口を發見する。吾人はこれを夢の『斷片的』註釋と呼ぶことが出來る。

夢の註釋の初歩者に、彼が夢の創意あり連結あり夢の諸要素を總て說明する完全な註釋を持つたからとて、彼の仕事はまだ完了したものでないとの事實を認めさせるやうにするのは非常に困難である。これの他に、また別の、彼の見遁してゐた、も一つ上からの註釋が可能であるかも知れない。我

我の心の中で表現を求むる澤山な無意識的思想の流れの何たるかを知り、夢の仕事が云はゞそれ獨特の二股かけての表現法を以て、まるでお伽噺の仕立屋小僧のやうに、一撃よく七匹の蠅を殺す底の巧妙さを持つてゐるのを信ずることは、實際容易なことでない。讀者は絶えず、著者が自分の才を無用に浪費しつゝあることを難ずるであらうが、併し自分で經驗したことのあるものは、もつとよく分るであらう。

どの夢でも註釋出來るかと云ふ問題に對しては否定的な答へを以てすることが出來る。註釋の仕事に於いては、我々は夢の歪みの責任者たる精神的諸勢力と抗爭しなければならないことを忘れてはならぬ。我々が自分の知力的興味、克己力、心理上の知識、夢の註釋の實習などに依つて內部の抵抗を支配することが出來るやうになるかどうかは、勢力の優劣の問題となる。多少の進歩をすることは常に可能である。夢は一つの創意に滿ちた構造であつて概してその意味を摑むことの十分に出來るものであると、少くとも、云ふ事が出來る。第一の夢に下した註釋を第二の夢が確め、また續けることも非常に屢々ある。幾週も幾月も續く夢の聯りの全體は共通の基礎に依るのであるから、關係させて註釋せねばならぬ。互に續合ふ夢に於いては、如何に一つの夢が、次の夢の周邊としてのみ暗示されてゐるものを中心點としてとつてゐるか、またその反對かを觀察することが出來る、かくて二つは互ひ

に註釋に於いて補ひ合ふ。同じ晩の別々の夢は、註釋に於いては必ずきまつて一全體として取扱ふべきで、それは私が實例に就いて示した通りである。

最もよく註釋せられた夢に於いては、我々は屢々一つの部分を不明のまゝに殘しておかねばならぬことがある。何となれば、我々は註釋に於いて、その部分が、どうしても解明出來ないが、而も夢の內容に何等新しい寄與をしてゐないところの夢の思想の錯雜の始まりを代表してゐることを知るからである。だからこれが要石(かなめいし)であつて、こゝからして夢は未知の世界へ上り行くのだ。何となれば、我我が註釋に際して出會す夢の思想は大抵は端(はて)しもなく存してゐるもので、我々の思想の世界の中に網のやうにこんがらかつて四方八方に這入り込んでゐるものである。このやうな網の目のいさゝか込み入つた部分からして、夢の願望は菌絲から菌が生えるやうに、起つて來るものである。

さてこれから夢の忘却の事實に返らう。吾人は實際、それ等の事實から重要な結論を引出すことをなほざりにしてゐたから……。もし覺醒狀態が、夜中に結ばれた夢を全體として覺醒直後にか、或は晝間の內に少しづつか忘れようとの意向を間違ひなく示すものとすれば、またもし我々がこの忘却の主要參與者として、既に夜中夢に反對してその役目を一度果してゐる抵抗をそれと認めるとすれば、そこで問題は起る、一體そのやうな抵抗に反對して何が實際に夢を結ばせたのであるか。夢が起きな

かつたかのやうに覺醒生活が全然それを消し飛ばしてしまつた最も驚くべき場合を考察して見よう。精神の諸勢力の張合を考究して見ると、我々は、もし抵抗が晝間のやうに夜中も勢力を張つてゐたならば、夢は決して起きないであらうとの斷定を下さゞるを得ないのである。そこで我々は、抵抗が夜中にはその勢力の幾分を失ふものであると結論する。抵抗が夢の歪みを作るために夢の形成に關心を繫いでゐることは證明したのであるから、我々はそれの消滅してをらぬことを知つてゐるのである。そこで我々は、抵抗が夜中に弛緩し、抵抗弛緩のために夢の形成が可能となつたことを承認せざるを得なかつたのである。で、我々は、覺醒と共に抵抗がその全力を恢復し、弛緩の間に許容せざるを得なかつたものを直ちに彈ね除けたのであることを即時に理解するのである。記述的の心理學では、夢の形成の主要決定者は心の睡眠狀態であると教へてゐる。我々はそこへ次の説明を附加することが出來る。——睡眠狀態は內面的檢閲を減殺することに依つて夢の形成を可能ならしめると。

我々はこの結論を夢の忘却の事實から抽き出し得る唯一可能のものと考へようとの誘惑を慥に受ける。またこの結論からして、睡眠狀態及び覺醒狀態に於ける勢力の釣合に關する立入つた推論を發展させようとの誘惑を受ける。が、今のところこの邊で我々はやめておかう。我々が夢の心理に多少深く這入つた時には、夢の構成の起源がまた別樣に考へられ得ることを知るであらう。夢の思想が意識

に入り來るのを妨げようとして働いてゐる抵抗は、よしんばそれ自身減少することはなくとも、これを回避することも多分出來るのである。また夢の形成に好都合な二つの素因たる、抵抗の減少と回避とは、睡眠狀態に依つて同時に可能になることも本當らしい。併し我々はこゝでやめておいて、またこの方面の思想は後に續けることにしよう。

我々の夢の註釋法に對してまた別方面の反對說がある、それを研究して見よう。實は、我々はこの註釋に於いては、他の場合ならば反省を掌る目的表象なるものを、全然落してしまつて行つてゐる、我々は注意を個々の要素に向ける、さうしてこれに關して好ましからぬ思想が我々の方に起きて來る事を氣付くのである。それから、我々は夢の次の構成要素をとりあげる。さうしてそれに對して同じ扱ひを繰返す。それから、思想が我々をどう云ふ方面へ連れて行くかは頓着なしに、思想の導くまゝに放任しておくと、一つの主題から他の主題へとさ迷ひ行くのである。同時に、我々は、かうして別に努力しないでゐる內に、遂に、我々の夢が發源し來つた夢の思想に行き當るであらうといふ祕かな期待を抱いてゐるのである。これに對して批難者は次のやうな反對を持出す。――我々が夢の個々の要素から出發して何處かに行き着くことが出來るといふのは別に何も不思議なことではない。如何なる觀念にでも何等かの聯想的關係があり得る。たゞこのやうなあてもなく出鱈目な思想の散步をやつ

てゐて、それで美事に夢の思想に打つかるといふのが不思議なだけである。それは多分、自己欺瞞である。夢を檢べる人は一つの要素から聯想の鎖に從つて行き、何等かの理由でその鎖が切れるまで跟いてゐるが、その時また別の要素を摑む。かう云ふ次第で、本來限界のない聯想が今は狹くなつて來るのは自然である。彼は心中に以前の聯想の鎖を保有してゐる。それ故に彼は、分析に於いて、最初の鎖からの思想と何等かの共通物を持つてゐる或る思想に、容易に打つかるであらう。彼はそれで、夢の二要素間の結合を表はすところの一つの思想を發見したやうに想像する。それのみならず、彼は思想結合の一切の自由を許すが故に、（たゞ常態思想に於いて見られるやうな、一觀念から他觀念への推移を除いて）一聯の『中間思想』からして夢の思想と彼が呼ぶところの何物かを捏上げ來ることは彼にとつては困難でない。而も何等の證據もなく（その證據もこれ以外では知りやうがないから）彼はこれ等の思想を夢の精神的代償物として誤魔化すのである。併しこれ等總ては出鱈目の手續きと、あまりに器用な符合の利用とに滿ちてゐる。誰でもこのやうな無用な煩勞をやつて見ようと云ふ人があるならば、かうしてどんな夢に對してなりと、何なりとお望みの註釋をお下しなさることが出來ませう。

もしそのやうな反對が吾人に對して向けられてゐるならば、吾人は自己防衞として、吾人の夢の註

釋の如何なるものであるかを、別々の特殊の表象を辿るうちに現れ來る他の夢の要素と如何に驚くべき關係のあるかを、また吾人の夢の註釋のやうにそれほど完全に夢を說明し盡し被ひ盡すものが、豫め確立せられた精神的關係に從ふことなしに得られるといふことの如何にあり得べからざる事であるかを、改めて云つてもよい。吾人はまた、夢の分析の方法がヒステリー徵候解除の方法と同一であつて、そこではその方法の正しさは病徵の消えてなくなることに依つて證せられてゐるのだ――つまり本文を挿畫に依つて說明することが證據になるやうなものである――との事實を擧げて、吾人の正しい事を明かにし得るのだ。けれども吾人は、その問題――如何にして我々はこのやうに任意に無目的に、思想の鎖を辿り行くことに依つて豫定の目的に到達することが出來るかとの――を避けることには何の意味もないのである。何となれば、吾人はその問題を解決することは出來ないが、併しそれを全然放擲することは出來るからである。

吾人が例へば夢の註釋をしてゐる場合の如き、我々の反省を捨て望ましからぬ觀念の表面に浮び出て來るまゝにしてゐる時には、無目的な思想道程に身を捨てゝゐるのだと云ふのは慥に不當で不正である。我々はたゞかの我々に親熟してゐる目的表象(目的觀)を拒けるだけであり、またこれ等の目的表象が停るや否や、未知の――或はもつと正しく云へば、無意識的の――目的表象が直ちに出動し來

り、さうして望ましからぬ表象の道を決定する事は、これを明示することが出來る。目的觀念（目的觀）のない考へ方は、我々が如何なる影響を我々の心的生活の上に加へることが出來ても、慥にあり得ないことだ。また私は、そのやうな考へ方の存在し得るやうな、さう云ふ精神破綻の如何なる狀態をも知らない。(二) 精神病醫はこの方面に於いて、あまりに早く精神構造の堅固さを思ひ切つてしまつてゐる。私は、目的表象を缺いた不制規の思想の流れが、ヒステリーや痴呆症に於いても、夢の結成や分解に於けるほどしか起らないと云ふことを知つてゐる。多分それは內發的の精神感動に於いては全然現れないものであるが、錯亂でさへも、リウレ Leuret の聰明なる洞察に依れば、意味の十分（ジンフォル）にあるもので、たゞ省略をするために我々に分らなくなるのである。で、私は機會ある度に至る所で云つて來たのと同じ確信に到達して來た。錯亂は檢閱が最早その勢力を匿さうとの努力をしなくなつた仕業であつて、檢閱は最早お氣に觸らなくなつた改變に支持を與へる代りに、反對して來た當のものを無茶苦茶に塗りつぶし、かくてその物を無連絡に見せるのである。この檢閱は丁度ロシアの國境に於ける檢閱のやうな風で、ロシアの檢閱は自分の保護してゐる讀者の手には、黑鉛筆の下を通過した外國雜誌だけを渡すのである。

【註】（一）私は後になつて他から注意されたのだが、ハルトマンもこの心理學上重要な點に於いて、私と同じ考

へを代表してゐるさうである。(『無意識の哲學』"Philos. d. Unbew. Bd. I, Abschn. B. Kap. V.)

表面的聯想の勢力を得ることに對する正しい説明は檢閲の壓迫である。目的表象の禁壓ではない。表面的聯想は、檢閲が常態的の結合道を通過させなくした場合には何時でも、深層の聯想に取つて代るのである。それは丁度山嶽地方で出水などのために運輸が一般に阻止され、長く廣い道路が通過出來なくなり、平常ならば獵師ぐらゐしか通らない不便な嶮しい山路を通つて運輸がなされねばならなくなつたやうなものである。

我々はこゝで二つの場合を區別することが出來るが、それ等は併しながら、本質的には一つであるのだ。第一の場合に於いては、檢閲は二つの思想の結合に對してのみさし向けられてをる。その場合二つの結合が離れゝば反對は受けなくなるのだ。二つの思想は順々に意識に入り來るのだ。彼等の結合は匿されたまゝになつてゐるが、併しその代りに、他の場合には思ひも寄らないやうな、二つの間の表面的結合が我々に生ずる。さうしてそれは概して、禁壓された併し本質的な結合を起すものと結合する代りに、表象錯綜の他の一角と結合する。また第二の場合に於いては、二つの思想はその內容の故に檢閲に屈伏するのである。兩方ともそれ自身の正しい姿でなく變更した代償的の形で現れる。さうして二つの代償せられた思想は、彼等が代理してゐるもの等の間に存した本質的關係、表面的聯

想に依つて現れるやうな風に擇ばれる。檢閲の壓迫の下に、常態的本質的の聯想が表面的な一見矛盾したものに依つて轉位せらるゝことが、このやうに、兩方の場合に起つてゐるのである。我々はこの轉位を知つてゐるが故に、夢の分析に於いて我々は躊躇なく、表面的聯想にさへ信頼するのである。

神經症の精神分析は二つの命題を有効に用ふる。第一は、意識的目的表象を放棄すると共に、表象列の支配が匿れたる目的表象に移ること、第二は、表面的聯想が禁壓された一層深い聯想の代償的轉位に過ぎないこと。實際、精神分析はこれ等二つの命題をその技術の大黑柱とするものである。私が患者に向つて、一切の反省を捨てよ、何なりと心に浮ぶまゝに報告せよと乞ふ場合には、私は患者が分析取扱の目的觀をふり落し得ないだらうとの豫想にしかと賴つてゐるわけである。また患者の報告するものは如何に無難に如何に出鱈目に見えようとも、彼の病的狀態と關係があると論定して差支へないと私は感じてゐるのである。私自身の人格は自ら別個の目的觀であつて、患者の覘ひ知るべからざるものである。これ等二つの說明の十分なる鑑賞は、その細々した證明と共に、それ故に、療病法としての精神分析的技術の表示となるのである。これで我々が夢の註釋の問題を終らうとするために取上げることにした附加問題の一つに達したわけである。(二)

【註】（一）右の文は、それを書いた當時にはをかしいと思はれたが、その後ユング Jung 竝びにその門弟の『診斷法的聯想研究』の實驗に依つて正しいことが分つた。

總ての反對の內で唯一つだけが正しい、さうして今も殘つてゐる。卽ち我々が、註釋の仕事の一切の考付きを夜の夢の仕事に置換へるには及ばぬといふことだ。覺醒狀態中の註釋に於いては我々は夢の要素から夢の思想へと逆流の道をとりつゝあるのだ。夢の仕事はその反對の方向に進んだのだ。さうしてこれ等の道が反對の方向に於いても同樣に通過出來るかどうかは分らないことだ。その反對に晝間に於いては、新しい思想結合に依つて我々が作つた道が、中間思想と別々の場所にある夢の思想とを動かすといふことが分つてゐる。我々は、如何に晝間の近頃の思想材料が註釋の群の中でその代りとなり、さうして多分また夜中に現るゝ附加的抵抗を强要して新しい進んだ回り路をさせるかをも知ることが出來る。併し我々がこのやうに晝間に編む附隨物の數と形とは心理上では全然無視してよい。もしそれが望ましい夢の思想への道を導きさへするならば——。

第七章　退行

さて、長い間そのために準備をして來た一層深い心理的探究へと入るに先立ち、我々はこれまで探究して來たその主要結果を摘錄しておかう。夢は瞬間的の精神的行爲である。その動機力は如何なる時でも願望の充足である。願望として認知し難いこと、その特徵、その矛盾は夢の形成の間にそれが受ける精神的檢閱の勢力に職由する。(イ)この檢閱から遁れようとの必要以外に、夢の形成には次の諸項が役割を果す、(ロ)精神材料を凝縮せしめようとの强い傾向、(ハ)感覺影像として戯曲化せんとの顧慮、それから――いつもさうといふわけではないが――(ニ)夢の構造に合理的な、理解し得べき外見を與へんとの顧慮。これ等諸命題の總てからして、道は更に心理學上の要件や假定に導いて行く。かくて、願望動機と四つの條件との相互關係、竝にこれ等諸條件間の關係を探究せねばならぬ。さうして夢はこの精神生活と關係があるのである。

さきに吾人は、まだ解決出來てゐない謎を思ひ出すために、一つの夢を引用したことがあつた。火

傷をしてゐる子供の夢の註釋は、我々の只今の意味で完全になされたのではなかつたが、さして困難ではなかつた。一體父親が眼を覺まさずに夢を見たといふのはどう云ふ必要からであつたかを我々は問題にした。さうして子供を生きてゐるものとして表象することの願望を夢の唯一の動機として認めた。これに就いてはまた別の願望がそこに働いてゐる事は、これからの論議で明かになるであらう。只今のところでは、それ故に、願望充足のために睡眠の心的過程が夢に變形せられたのだと云つておかう。

もし願望の實現が逆行的になされるとすれば、精神的出來事の二つの種類を相互に區分するものとしては、唯一つの性質だけが殘るわけである。夢の思想の方はかう云ふ意味になるかも知れない『私は遺骸の置いてある室から來る輝きを見る。多分、蠟燭が倒れてゐるのであらう、さうして子供は火傷をしてゐるのだらう。』夢ではかう云ふ考への結果が變らずに現れてゐる。併し現在起つてゐるやうな風に、而も覺醒狀態に於ける經驗のやうに、感覺に依つて把握出來るやうな風に、現れてゐる。これは、併しながら、夢の最も普通な、最も著しい精神的特質であるのだ。一つの思想は――普通には、願望せられた一つの思想は――夢に於いては客觀化せられ、一場景として、又は、我々の信ずるところに依れば、經驗せられたものとして、表象せらるゝのである。

併し、さて、我々は如何にして、夢の仕事のこの特徴を說明すべきか。或はもつとおだやかに云ふならば、如何にしてこれを精神的諸現象と關係させるべきか。

仔細に檢覈して見ると、夢の顯現形式には二つの互に相獨立した特質のあることが明かになる。その一つは『多分』ぬきの現在的立場としての表象であり、他は思想を變形して視覺的影像とし、また言葉とすることである。

夢の思想が、その內に表現せられてゐる期待を現在に移すことに依つて受ける變形は、この夢に於いては多分あまり著しい方ではなからう。これは恐らくこの夢に於ける願望充足の特別な、又は寧ろ副的な役割と脈絡があるのである。吾人は、夢の願望が睡眠中に於いて、覺醒思想の連續から離れないやうな別の夢を採つて見よう。卽ちイルマの注射の夢である。(二)

【註】(一)『豫備的說明――一八九五年の夏、私(フロイド)は私竝びに私に近しい者等と親交のあつた或る若い婦人を分析取扱してゐた。そのやうな込入つた關係は醫師にとつては、殊に精神醫師にとつては、さまざまな感情の源であつたことは容易に理解出來よう。醫師の個人的興味はより大に、彼の權威はより小になるものである。失敗をするとその患者の親族との友情に打擊を及ぼすことになる。治療は部分的に成功した。患者はヒステリー的恐怖をなくしたが、彼女の肉體的病徵はなほ悉く消え去らなかつた。私はその當時に於いては、ヒステリーの場合を窮極的に決定する標準に就いてまだ確信がなかつ

た。さうして彼女には容認出來かねるやうな事を容認するやうに期待した。このやうに、兩方の者への合はないまゝで、夏休みになつたゝめに、取扱を切上げてしまつた。或る日、私の親友の一人である年若の同僚が、例の患者――イルマ――竝びにその家族を田舍の家に訪れて後に、私のところへ立寄つた。私は彼女をどう思ふと訊いた。するとその答へはかうであつた。『大分よくなつたが、まだすつかりとはゆかないね。』わが友オットーのそれ等の言葉、竝びにその言葉を云つた聲音が私を怒らせたことを、私を知つてゐる。私はそれ等の言葉の內に、多分私があまりに多くを約束したといふやうな意味の批難を聞いた。そしてそれが正しいか正しくないかは知らぬがとにかく、私はオットーが私の反對側に味方するらしいのは、嘗て私の取扱ひを賛成しなかつた、患者の親族の入智慧からだと思つた。それからまた、私の不快の印象は私に明白にならなかつたし、それを口外もしなかつた。その同じ夕方、私はイルマの病狀經過を書いた。當時私の相互の友であると同時に我々仲間の主要人物であつたM博士に、あだかも自分の是認を求むるための如く、それを手交するためであつた。その夕方に次ぐ夜中に（多分寧ろ朝がたになつて）私は次のやうな夢を見て、それを直ちに書き留めておいた。

一八九五年七月二十三――二十四日の夢。

大廣間――來訪された澤山の客人――その內にイルマがゐる。彼女を直ぐに小脇へ呼ぶ。彼女の手紙に對し、彼女が『註釋』を容認しないのを難ずるためであるらしい。私は彼女に向つていふ。『まだ苦痛があるとすれば、それは實はたゞお前の自分の咎なのだ。』彼女は答へる。『妾の頸や胃や腹が只今どんなに痛むかを貴方が知つて下さりさへするなら――。妾は息がとまりさうです。』私は驚いて彼

女を見る。彼女は蒼脹れになつてゐる。私は自分が何か機關を見落してゐるのに違ひないと思つて、彼女を窓邊へ連れて行つて、咽喉を覗く彼女は義齒をはめた婦人でゝもあるかのやうにこれを拒む。それにも及ぶまいと私は獨りで考へる。口は實際困難なく開くのだ。さうして私は右の方には大きな白い斑點を見付け、他の個所には一見鼻貝のやうな形をした、著しく捲縮した物象の上に擴がつてゐる痂(かさぶた)を見た。――私は直ちにM博士を喚んだが、彼は繰返しく調べて見た。……M博士は平常とは全然様子が違ひ、非常に蒼白で、軟弱で、顎には鬚がなかつた。……わが友オットーも今はまた彼女の次に立つてゐる。また私の友人レオポルドは彼女の小柄な身體を打診し、さうして云ふ。『左方の下部に多少鈍い音がする。』さうして左肩の皮膚の浸潤個所に注意をする、(彼がさうした時私は衣服の上からながらそれを感じた)。……Mは云ふ、『疑ひもなく傳染病だが、大したことはない。赤痢にもなる、さうして毒は排泄せられるであらう。我々はまた感染の起源を直ちに知つてゐる。私の友人オットーは彼女が近頃病氣になつた時、プロピル裝置を以て注射した。Propylen….Propionsäure……Trimethylamin(この式が私の目前に太い活字で印刷されてあるのが見える)……そんな注射はさう手輕に出來るものではない。……多分、注射器も清潔でなかつたやうだ。』(„Die Traumdeutung,"
S. 74)(譯者)

こゝで表象化されてゐる夢の思想は願意を示してゐる。『もしイルマの病氣はオットーがいけないのだとなつたらば!』夢は願意を禁壓して、單純な現在を以てそれに置換へてゐる。『さうだ、イルマの病氣はオットーがいけないのだ。』これこそは、だから、なほ歪められざる夢が夢の思想と共に企つる

最初の變化である。併し我々は夢のこの最初の特殊性で長く停滯しようとは思はぬ。その表象內容を以て働く點ではこれと同樣な意識的空想、卽ち白日夢にそれを參照すればその特殊性などは撥無されてしまふ。ドーデー Daudet のヂョアイアーズ氏は職業を持つて事務所に行つてゐるものと娘が信じてゐるのに、自分は仕事がなくてパリの街上を徘徊てゐたが、その間に彼は同樣に、自分に庇護を供すべき事情を現在に於いて夢想してゐた。夢はそれ故に、白晝夢と同じやり方で、また同じ權利で、現在を用ゐるものである。現在は、願望が充足せられたものとして表象せらるゝところの時稱である。

併し、第二の特性は白晝夢と全然別なものとしての夢に特殊なものである。卽ち、表象內容が考へられずに、感覺的の影像に變化せられ、それに我々は信を與へ、それを我々は經驗してゐるつもりでゐるのである。併し吾人は、總ての夢がこのやうに表象を感覺的の影像に變形させるのではないといふことを附加へておかう。中には夢の實質さを、夢の故にとて否定せざるを得ないやうな、思想のみから成つてゐるやうな夢もある。私の夢『Autodidasker――N教授との白日空想』はその一つだ。そこには私が、白日にその內容を考へたとしても、殆どこれ位だと思はれるより以上には感覺的の要素が含まれてない。それればかりでなく、總て長い夢は、認識され得るものとなるやうな變化を經驗しなかつた要素を、我々が覺醒狀態に於いて常々考へたり知つたりすると同じやうに考へたり知つたりす

るところの要素を、包含してゐる。我々がまたこゝで思ひ出すことは、そのやうに思想が感覺的の影像に變化されるのは、單に夢に於いてばかりではなく、また錯覺や幻覺に於いてもであるといふことだ。錯覺や幻覺は多分健康者に於いても自發的に起るし、精神神經症者に於いても病徵として起るのである。簡單に云へば、我々がこゝで調べてゐる關係は別にとりたてた關係ではない。併しながら、夢のこの特性が起るところでは、それは我々には最も注意に價するものとして現れる、であるから我我はそれを夢の生活と切離して考へることは出來ない、といふ事實は殘るのである。併しながらそれの說明をするには、甚だ細かい論議が必要になつて來る。

夢の理論に關する意見を述べた權威者の中でも、一人だけを私は論及に價するものと思ふ。かの偉大なるフェヒネル(一)は夢に關する論の中で、夢の舞臺は覺醒時の表象生活のそれとは違つたところにあるとの信念を表白してゐる。(Psychophysik, II Teil, P. 520) これ以外の說は夢の生活の特殊性を我々に考へさせない。

【註】(一) Gustav Theodor Fechner (1801—87) ドイツの心理學者、實驗的科學的美學の祖。こゝに言及されてゐるのは彼の主著『精神物理學原論』„Elemente der Psychophysik“(1860). である。(譯者)

我々の自由になる觀念は精神の位置に關する觀念である。我々がこゝで取扱ひつゝある精神的裝置

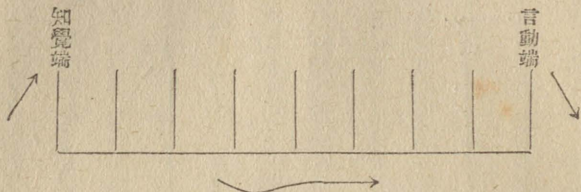
はまた解剖的の機構として我々の呑込んでゐるものだが、そんな考へは全然放擲しよう。さうして我我は精神の位置を何とか解剖的に決定したがることも、注意して避けようと思ふ。我々は飽くまで心理學的立場に卽して、心理的活動に資する道具を、いさゝか復合的の顯微鏡、寫眞機、その他これに類した裝置に眞似て考へるやうにだけしたいと思ふ。精神の位置は、して見れば、さう云つた裝置の一つの內部の一個所に相當するわけだ。そこで影像の前階の一つが生れて來る個所に相當するわけだ。誰でも知つてゐる通り、顯微鏡や望遠鏡には、この裝置の觸知し得るやうな部分の置いてないやうな、幾分空想的な位置や場所があるものである。この圖解の、またこれに似た總ての圖解の缺點を辯解するのは、餘計なことであると思ふ。このやうな比較は、精神活動をとり壞し、それの個々の活動を裝置の個々の合成部分に歸することに依つて、錯雜なる精神活動を明かにしようとの我々の試みを助ける限りに於いて考案せられたものである。私の知つてゐる限りでは何人も嘗てそのやうな解剖に依つて精神の道具の構成を發見しようと試みたものはなかつた。我々が冷靜な判斷を失はず、足場を本建築と取違へない限りは、我々の假定を自由に振舞はせてもよいと私は信じてゐる。我々は未知の題目に始めて近付くには、たゞ補助的な考へだけあればよいので、それ以外は必要がないのであるから、我々は最も大まかな、最も觸知し易い假定が何よりも大いに結構であると思ふ。

それ故に、我々は精神裝置を一つの合成的道具であると考へる。その合成部分を我々は、個所(インスタンツエン)または、分りよくするために、區劃(システーメ)（組織）と呼ばうと思ふ。さうして見ると、これ等の區劃(システーメ)が相互に連續的の空間的關係を保持することは、宛も望遠鏡のレンズの各區劃が一つ一つ竝んでゐるのと同樣であらうとの期待を我々は持つのである。嚴密に云ふならば、精神區劃が實際、空間的に配列されてゐるやうに假定する必要はないのである。たゞ、或る精神上の現象に於いては、亢奮が一定の時間的秩序を追ふてその區劃を通過する事實に依つて、もし確實な連續が樹立されるならば、それで我々としては澤山なのである。この連續は、他の現象に於いてはまた變化するかも知れないのだから、それだけの用意はしておきたいと思ふ。簡單にするために、これからはこの裝置の合成部分を『Ψ區劃(プシシステーメ)』と呼ぶことにしよう。

まづ最初に我々に思ひ當ることは、Ψ區劃に合成されてゐる裝置は一つの方向を持つてゐるといふことだ。總て我等の精神活動は（內的又は外的の）刺戟から起つて神經作用に終るものである。そこで我我はこの裝置には感覺的の端・竝びに言動的の端があるとするのである。感覺的の端には知覺を受容れる區劃があり言動的の端には言動の口を開く區劃がある。精神現象は大抵は知覺端から言動端へと進んで行くものである。であるから、精神裝置の最も普通の形を圖示して見るとかうなる。——（第一圖）

併しこれはたゞ、精神裝置が反射裝置のやうに組立てられてゐなければならないとの、我々に久しく親熱して來た要求に應じたものに過ぎないのである。反射現象はやはり一切の精神活動の原態(モデル)となつてゐるものである。

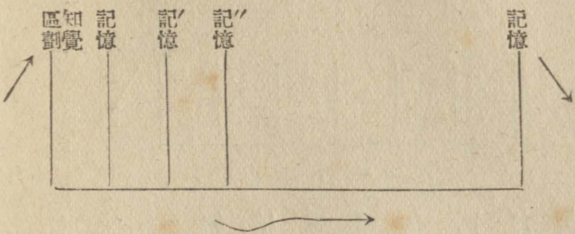
第一圖



さて我々は感覺端に最初の分化の來る理由を承認するだけの根據がある。知覺は我々に近付き來つて我々の精神裝置に一つの痕跡を殘す。それを我々は『記憶の痕跡(エリンネルングスプール)』と呼ぶことが出來る。この記憶の痕跡に關係する機能を我我は記憶と呼ぶ。精神過程をこれ等の區劃に結合しようとの我等の決心を眞面目に株守するならば、記憶の痕跡はこれ等區劃の諸要素の繼續的變化にのみ存し得る事になる。併し、他で既に明かにしておいたやうに、もし同一の區劃がその要素に於ける變化を忠實に保存し、而も變化の新動機を受容するだけに生鮮であり力ありとすれば、明かに厄介なことになつて來る。我々の企てを導く原則に從つて、吾人はこれ等二つの活動を二つの別々の區劃間に分配することにしよう。吾人はこの裝置の第一の區劃は知覺の刺戟を採上げるが、併しその刺戟から何物をも保留しない――つまり、それは記憶を持た

ないのである。さうしてその背後には第二の區劃があつて、それは第一の區劃の瞬間的亢奮を繼續的痕跡に變形する。で、我々の精神的裝置を圖示するとかうなる。（第二圖）

第二圖



知覺區劃に働きかける知覺からして、內容それ自身と同樣に存續する他の何物かを我々が保留するといふことは分つてゐる。我々のさまぐな知覺は記憶の中で相互に結合せられるものであるが、殊にそれ等が同時にさうなつた場合には一層然りである。吾人はこれを聯想の事實と呼ぶ。そこでもし知覺區劃が全然記憶を缺いてゐる場合には、この區劃は僅かに聯想のための痕跡を保存し得ないといふことは明となる。個々の知覺要素は、もし以前の關係の殘物がその勢力をなほ存して新來の知覺を妨げるとすると、その機能を堪へ難いまでに邪魔せらるゝであらう。であるから、我々は記憶區劃が聯想の基礎であると考へざるを得ないのである。そこで、聯想の事實はこれに存する——卽ち、抵抗が減り、記憶要素の一つからの道が滑らかになる結果として、亢奮は第三の記憶區劃よりは寧ろ第二の記憶區劃に移り行くことに……。

更に探究を進めて行くと、我々はそのやうな記憶區劃をたゞ一つでなく、もつと澤山に假定することの必要が分つて來る。その中で、知覺要素に依つて増殖せられたその亢奮がさまぐな定着を經驗するやうな、さう云ふ記憶區劃を澤山に假定することの必要が分つて來る。これ等の記憶區劃の第一のは、同時性に依る聯想の定着を如何なる場合にも、包含するであらう。然るにもつと離れてゐる區劃に於いては、この同じ亢奮材料が他形式の同時性に依つて整へられ、類似その他の關係が多分これ等の後の方の區劃に依つて表はされるやうになるほどである。で、そのやうな區劃の心理的意義を言葉で表はさうとするのは餘計なことである。それの特質は、記憶の生硬材料（素材）の要素に對するそれの關係が密接であることに存する。つまり、(もし我々がもつと深い理論を示さうと思ふならば)これ等諸要素の方へ導くことへの抵抗が漸次加はり來ることに存する。

吾人はこゝで、重要な何物かに多分關係ある一般的性質のことを云ひ添へておかう。變化を保存する能力なく、從つて何等記憶のない知覺區劃は、感覺的諸性質の全多樣性を我々の意識に向つて供する。然るに我々の記憶は、それ自身に於いて無意識である。非常に深く印象された記憶とても例外ではない。それ等を意識的にすることは出來るが、併しそれ等は一切のその勢力を無意識狀態の内に發展させることは疑ふべくもない。吾人が我々の性格と呼ぶところのものは、慥に我等の印象の記憶痕

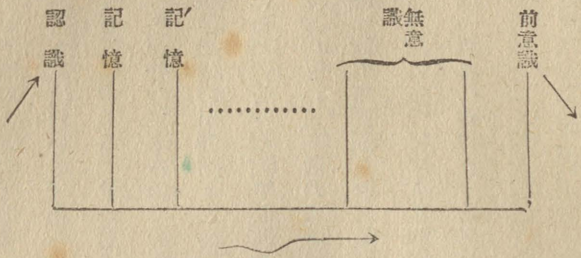
跡に基礎を置いてゐる。即ち、我々を最も強く感動させてゐるところの印象、我々の初期青年時代の印象、つまり決して意識的とはならぬところの印象に基礎をおいてゐる。併し記憶が再び意識的となる時には、それ等の記憶は何等感覺的性質を示さず、或は知覺に比較して甚だ僅かの感覺的性質を示すに過ぎないのである。さて、もし記憶と性質とは、Ψ區劃に於ける意識に關係ある限りでは、互に排斥することが確かであるならば、神經亢奮の決定に於いて甚だ有望な洞察が我々に見えて來る。

吾人が今まで感覺端に於ける精神裝置の構造に關して假定して來たことは、夢並びに夢から引出された心理的說明には關係なく、なされたものである。併しながら、この裝置の他の部分を知るためには、夢は我々にとつて證明の源泉である。我々は二つの精神的個所を敢へて假定するのでなければ、夢の構造を說明することが不可能になつたことを知つたのであつた。その個所の一つが他の個所の活動を批判者に附し、その結果として意識から排除せらるゝことゝなつたのであつた。

吾人は、批判の個所は批判せらるゝ個所よりは、意識と密接な關係を有することを知つたのであつた。批判する個所は批判せらるゝ個所と意識との中間に屏風のやうに立つてゐる。それのみならず、吾人はその批判する個所が、我々の覺醒生活を指導し、我々の有意的意識的行動を決定するものと同一であるとすることの本質的な理由を發見したのであつた。さてもし我々がこれ等の個所（インスタンツ）を、我々

の定めたやうな意味で、區劃(システーム)と置換へるならば、批判する區劃は、さきに述べた事實からして、言動端に歸せらるべきである。我々は今や我々の精神裝置圖式に於いてこれ等二つの區劃を包含せしめ、またそれ等に名稱を與ふることに依つて意識に對する彼等の關係を表はすものである。

第三圖



言動端に於ける最後の區劃を、吾人は前意識と呼ぶ。それは、この區劃に於ける亢奮現象はこれから停滯することなくして意識に到達し得るといふことを示すためである。到達し得るが、但し或る他の條件——例へば、或る激しさを獲得すること、吾人が注意と呼ぶべき機能が多少分配されること、その他——が滿たされねばならぬ。これはまた同時に有意的言動への鍵を有する區劃でもある。これの背後にある區劃を無意識と呼ぶ。何となれば、それは前意識を通るのでなければ、意識に近づくことは出來ないからである。併し前意識を通るに就いては、それの亢奮は多少の變化を受けねばならない。

さて、これ等の區劃の何れに、我々は夢構成の衝動を置いたものであ

らうか。簡單に云つてしまへば、無意識區劃にである。併しこれは、實は後の議論で分ることだが、全然正しくはないのである。夢の構成は、前意識區劃に屬する夢の思想と結合することを餘儀なくされてゐるのである。けれども夢の願望を取扱ふやうになると、夢の原動力は無意識から供せられてゐることが分つて來るのである。で、夢の原動力が無意識から供せられるからして、我々は無意識區劃を夢の構成の出發點と定めるのである。この夢の衝動は、他の一切の思想構成と同樣に今や前意識の中にそれ自身を繼續させるやうと努め、それからまた意識の中へ這入つて行かうとするのである。

經驗の敎ふるところに依れば、前意識から意識に通ずる道は、檢閲の抵抗に依つて、晝間には夢の思想に對して閉鎖されてゐる。夜になつて夢の思想は意識中に入り來ることを許されるが、併し如何なる方法に依つて、また如何なる變化をして、と云ふことが問題になる。もしこの許可が無意識前意識間の境界に張番する抵抗が夜になつて沈むといふ事實に依つて可能になつたものとすれば、只今我我の興味を牽く錯覺的性質を示さなかつた我々の表象を材料として夢を見たであらうに——。

無意識前意識二區劃間の檢閲が沈むことは“Autodidasker”のやうな夢を說明し得るのみである。我我がこの探究の始めに問題にした火傷する死兒の夢の如きは說明が出來ない。

錯覺的の夢に於いて起るものは、亢奮が逆行的道程をとるのだと云ふより外に說明の途がない。そ

れは精神裝置の言動端に留らずして感覺端に留る。さうして遂ひには知覺の區劃に達するのである。もし、精神現象が無意識から覺醒狀態に續いて行く方向を前進的と呼ぶならば、我々はこの夢を退行的性質(二)を帶びたものと云ふことが出來る。

【註】(一) 初めて退行の契機を暗示したものはアルベルトス・マグノス Albertus Magnus である。但し彼はこれをイマヂナチオと呼んだ。

この退行(レグレッション)は慥かに、夢の現象の最も重要な特殊性の一つである。併し我々は、それが夢にばかり屬するものでないことを忘れてはならぬ。故意的の追憶の如き我々の常態の思想現象はまた、精神裝置に於いて、錯雜した表象行爲からその基礎にある記憶痕跡の生硬材料へと逆行することを要求する。併し覺醒狀態にある間はこの逆行は記憶影像より向うへは達しない。逆行は知覺影像の錯覺的生彩を生むことは出來ない。何故にこれは夢に於いては違ふか。我々が夢の凝縮作用を論じた時に我々は、各表象にまつはつてゐる激しさは一から他に、夢の仕事に依つて悉く移されるものだとの假定を避けることが出來なかつた。このやうな變化が以前の精神過程に生ずるがために、多分、知覺區劃は十分な感覺的生彩を以て思想の方とは反對の方向に纒綿することが出來るのである。

只今我々の論議してゐることは實際有意義なことであつてほしいものである。吾人は一つの說明す

べからざる現象に就いて、たゞ名前を與へて來たゞけで、それ以上何もしなかつた。夢の中の表象が嘗てその發源して來た感覺的影像（ビルド）へと逆變した場合には、その現象を退行と呼ぶのである。併しこれだけでも辯明を要するのである。吾人に何等新知識を與へないものとすれば、何のための名稱ぞ。併しながら私は信ずる、『退行』てふ名は、我々に親熟してゐる事實を、一定の方向を持てる精神裝置の圖式に結びつけるだけの役には立つのである。この點に於いて、そのやうな圖式を組立てるの勞が始めて價値を生ずるのである。

何となれば、この圖式の力に俟つて、夢の構成の如何なる他の特殊性も、新しく考へて見ずとも我に明かになるからである。もし吾人が夢を、吾人の假定した精神裝置に於ける退行過程と見なすならば、（夢の各思想の一切の心的關係は夢の仕事の際に埋沒してしまふか、或はたゞ困難しつゝ漸く表現へ出て來ることが出來るか何れかだとの）經驗的に證明されてゐる事實を我々は直ちに理解することが出來る。我々の圖式に依れば、これ等の心的關係は最初の記憶區劃には含まれてゐないで、前からずつと這入つたところの區劃に含まれてゐるもので、また退行に際しては知覺影像が出るまでは已れを表現出來ないものである。夢の思想の構造は、退行に際しては、その素材に分解されてしまふ。併し如何なる變化が、晝間は不可能であるこの退行を可能ならしめるのか。こゝでは我々はたゞ假

定だけで滿足しておかう。個々の區劃に屬するエネルギーの纒綿が、退行に依り多少の變化を明かに生じて、そのために個々の區劃を亢奮が通過出來るやうになる。併し、そのやうな裝置の何れに於いても、亢奮の道程に對する同一の效果は、一種以上のそのやうな變化に依つて齎されねばならぬ。この事は自ら我々に、睡眠狀態、竝びにこの狀態が裝置の感覺端の生ずるエネルギーの多くの變化を思出させる。晝間は知覺のΨ區劃から言動の方へと不斷に進む流れがある。この流れは夜になると停り、最早反對の方角に於ける亢奮の流れの進行を妨げはしない。これは——或る學者の說では夢の心理學的性質を說明するものとされてゐるところの所謂『外界からの隔絕』であるやうに見えるかも知れない。併しながら、夢の退行の說明には、我々は病的な覺醒狀態の間に發生する他の諸退行を考慮に入れねばならぬ。これ等の諸退行は只今與へた說明では何とも致方がない。退行は感覺的の流れが遮られずに前進してゐても起るものである。

ヒステリーや痴呆症の幻覺、竝びに常態精神の人の幻想は、實際、退行に呼應して生じたものとして私は說明することが出來る。事實上、それ等は影像に變形せられた思想だからだ。また禁壓された、或は無意識的の回想と密接な關係にあるやうな思想のみがこの變形を受けるのだ。一例として、私のところへ來た一番年若な患者の一人を擧げて見よう。それは十二歲の少年で、彼は『綠面赤眼』

のために脅かされて眠ることが出來ないのだ。こんなもの丶見える源（もと）は、或る少年の禁壓された、併し嘗ては意識的であつた記憶である。この少年を彼は四年の間屢々見、また數々の少年惡癖の恐ろしい有様を見せられたのであつた。その惡癖の一つに自慰（オナニイ）があつて、それが彼の只今の自責の主題をなしてゐるのである。彼の母親はその時分、その躾けの惡い子供の顏色が綠で、眼が赤（卽ち、眼の緣が赤）であると云つたことがあつた。そこでかう云ふ恐ろしい幻が起きて、それが絶えず母親の警告――そのやうな少年は馬鹿になる、學校で成績がよくない、早く死んでしまふなど丶云ふ――を思ひ出させるに役立つたのである。この警告の一部分はこの少年患者の場合に於いては本當になつて來たのであつた。彼は高等の學校に首尾よく進むことが出來なかつた。また彼がその氣もなく思ひ及んだところを調べて見ると、この豫言の第二の部分を非常に恐れてゐたらしいのである。併しながら、ほんの短期間分析治療しただけで成功して、この少年は睡眠を恢復し、恐怖を忘れ、好成績を以て學校時代を終了したのであつた。

私はまたこ丶に、四十歳になるヒステリー患者が、彼女の常態生活に起つたと云つて物語つた幻の註釋を、云ひ添へておかう。或る朝眼を開けて見ると、瘋狂院に入れてある筈の弟の姿がその部屋に見えたのである。彼女の小さな息子が自分の側に眠つてゐた。子供が叔父さんを見て可迫（こは）がつて痙攣

を起したりしてはいけないと思つて、蒲團（ベッドデッケ）を子供の上に掛けた。その時、幻は消えてしまつた。この幻は彼女の嬰兒時代の回想の再寫である。この回想は勿論意識的ではあるが、彼女の心中のあらゆる無意識的材料と非常に密接な關係にあるのだ。彼女の乳母の語るところに依ると、彼女がまだ一歲半の時に若死にした母親は癲癇性の又はヒステリー性の痙攣に惱んでゐたが、その病氣の源は彼女の兄弟（患者の叔父）が蒲團を頭から被つて幽靈の眞似をして彼女の方へ現れたのに發してゐるといふことであつた。この幻はこの回想と同じ要素を含んでゐる。卽ち、兄弟の出現すること、蒲團、恐怖、その效果など。これ等の要素は、併しながら、別の關係にあてはめられ、また他の人物に轉嫁せられてゐる。この幻の明かな動機は、またこの幻に依つて置換へられた思想は、叔父に生寫しの息子が叔父のやうな運命に會ひはせぬかとの心配である。

こゝに擧げた二つの實例は眠りに全然無關係ではなく、從つて私の斷定の證明として用ゐたのは不適當であるかも知れない。であるから、私は或る幻覺的痴呆症に對する私の分析と、精神神經症の心理に關する未發表の研究とに言及しておかうと思ふ。それは、これ等の退行的思想變形の場合に於いては、禁壓された、卽ち無意識的の回想（これが大低の場合に嬰兒的性質を帶びたものだ）の力を看過してはならないといふことを强調するためである。この回想はそれの結びついてゐる思想を、——

つまり回想それ自身が精神內に存在する時のまゝの表象の形では檢閱のために表現を許されない思想を——云はゞ退行の中へ引きづり込むのである。私はこゝで私のヒステリー研究の結果を述べておかうと思ふ。即ちもし我々が嬰兒的場景(それは回想であらうと空想であらうと)を首尾よく意識に復活させれば、それ等の場景は幻覺として見える、さうしてたゞそれと数へられてその性質がなくなる。また最も早期の嬰兒的記憶は感覺的生彩を後年までも、(平常は記憶が視覺的でない人に於いてすらも、)保留してゐるものだといふことも分つてゐる。

さてもし我々が、夢の思想に於いて嬰兒的回想又はそれに基く空想が如何なる役割を演ずるかといふことを、如何に屢々これ等回想の斷片が夢の內容の中に混入するかといふことを、また如何に屢々彼等が夢の願望に起源を與へるかといふことを、承知してゐるならば、我々は、夢に於いてもまた思想が視覺的影像に變形せらるゝといふことが、視覺的に表象せられた復活を願ふ回想の、意識から切離され表現へと跪く思想を、牽きつける結果であるかも知れぬといふことを否定出來ないのである。この考へに從へば、我々は更に夢を說明して、近頃の材料に轉嫁する事に依つて出來上つた嬰兒時代の場景の變形せられた代償であるとすることが出來るのである。嬰兒的場景はその更新を强行することが出來ない。それ故に夢となつて歸り來ることに滿足せねばならないのである。

このやうに嬰兒的場景が（又はその空想的反覆が）何等かの方法で、夢の內容の手本としての意義を持つものだといふことが分ると、亢奮の內的源泉に關するシェルネル（こ一派の立言は無用となる。シェルネルは夢が視覺的要素の特殊の生彩又は特別の豐富を示す場合には、視覺機關內に於ける內的亢奮について『視覺亢奮（ザンジヒツライツ）』狀態なるものを假定する。吾人はその假定には反對するには及ばず、視覺機關だけの心理的知覺區劃に對してそのやうな亢奮狀態を立てることで滿足出來るのである。併しながら我々は、この亢奮狀態は記憶を通じて形成せられ、また單に以前の實際的の視覺的亢奮の更新であることを斷定するであらう。私は、私自身の經驗からは、そのやうな嬰兒的回想の勢力を示す好例を示すことは出來ない。私自身の夢は、他人の夢がさうだと思ふほどには感覺的要素に於いて慥に豐富でない。併し私の後年の最も美しく最も生彩ある夢に於いては、夢の內容の幻覺的判然さを近頃受けた印象にまで辿ることが出來る。私は嘗て夢の中で、水の暗碧色、船の煙突から出る煙の褐色、私の見た建物の暗褐色や紅が深く長い印象を與へたことを云つた。この夢は、どちらかと云へば、視覺的亢奮に歸せられねばならぬ。併し、何が私の視覺機關をこのやうな亢奮狀態に齎したか。それは近頃の印象が一聯の以前の印象と結び付いたものであつたのだ。私の見た色は、夢の前日に自家の子供等が私に譽められようとて、大きな建物を造つた積木細工の色であつたのだ。その暗紅色は大きな積

木の色であり、同じ碧や褐色は小さい積木のそれであつた。これ等に關聯してゐるのは私がこの前イタリーへ行つた時の色彩印象――イソンゾやラグーンの魅力ある碧色、アルプス地方の褐色――であつた。夢の中で見たそれ等の美しい色は記憶中に見られるものゝ單なる反覆であつたのだ。

【註】（一）R. A. Scherner は『夢の生活』,,Das Leben des Traumes" Berlin, 1861）の著者。第二頁參照。

夢がその思想内容を變形して造形影像とするに就いて示すこの特殊性に關して我々は學び來つたがそれを纏めて見よう。吾人は夢の仕事のこの特質を説明もしなければ、心理學上明かになつてゐる法則にまで辿ることもしなかつた。たゞ未知の關係に向ふものとしてそれを採出し、『退行』的性質の名を以つてそれを呼んだゞけである。どこでもこの退行が起つたところでは、吾人はそれを常態的に意識へと向ふ思想の進行に反對する抵抗の結果と考へたり、また現在の生彩ある記憶がその上に振ふ同時的牽引の結果であると考へたりして來た。退行は多分、晝間の内に感覺機關から出づる前進的流れが停止するために、夢の中では容易になるのであらう。この補助的契機は別形式の退行に際しては他の退行動機を强めることに依つて償はれねばならぬ。我々はまた、病理的な退行の場合には、夢に於ける如く、エネルギー轉嫁の現象は、常態的精神生活の退行の場合とは違つたものでなければならぬといふ事を忘れないやうにしておきたい。何となればそのために知覺區劃は悉く幻覺の占領するとこ

ろとなるからである。夢の仕事の解剖に際して、我々が『戯曲化し得るやうにとの顧慮（リユツクジヒト・アウフ・ダルステルバルカイト）』と云つたものは、夢の思想に依つて觸發せられ、視覺的に思ひ出された場景の選擇的採取（牽引）と關係があると云ふことが出來る。

退行に關してなほ吾人の述べておきたく思ふのは、退行が夢の理論に於けるにも劣らず、神經症の徵候構成の理論に於いても重要な役割を果すといふことだ。そこで我々は退行に三種の別を設ける。（a）こゝに述べて來たやうなΨ區劃の圖式の意味に於ける局所的退行。（b）昔の精神的構成に返つてこれを把握する限りに於いて時間的の退行。（c）原始的の表現方法が普通の表現方法に代つた場合の形式的退行。併し三種の退行は總て根柢に於いては一つであり、また多くの場合に合致するものである。何となれば時間的に古いものは同時に形式的に原始的なものであり、また精神上の局所に於いては知覺端に近いものだからである。

夢を心理的に取扱ふ我々のこの最初の書が我々をさへ滿足させないことは當然のことである。併しながら、我々は暗中に家を建てるべく餘儀なくされたものだといふことを思へば、なほ慰むるに足るものがある。もし我等が正路を全然踏外してないならば、我々は慥に他の出發點からも略々同じ地域に達するであらう。さうしてその後、恐らくはもつとよく我々の道を見ることが出來るであらう。

第八章　夢に於ける願望充足

さきに擧げた火傷した死兒の夢(一)は、願望充足說が如何なる困難に逢着するかを示すものとして歡迎すべき機會である。夢が願望の充足でなければならぬとは、慥に我々總てに不思議に思へる。併し不思議なのはそればかりではない、不安の夢とも矛盾するからである。

【註】（1） "Die Traumdeutung", Kap. 7. "Zur Psychologie der Traumvorgänge" に引例してある夢。

『或る父親がその子の病床に幾日も幾夜もつき添うてゐた。その子が死んだので、父親は隣室へ行つて休んだが、自分の寢室から、子供の屍骸が數々の大きな蠟燭に取卷かれつゝ横たはつてゐる室を見る事が出來るやうに、扉を開けておいた。一人の老人に番をさせておいたが、彼は遺骸の側に坐してぶつ〳〵祈りを上げてゐた。二三時眠つた後に、かの父親は夢を見た。子供が枕頭に立つて彼の腕を摑み、なじるやうに囁くのであつた。「お父さん、私が火傷をしてゐるのに御存知ないの？」彼は眼を醒ましました。遺骸の室からは煌々たる灯の光が眼に入つた。急いで行つて見ると、老人は寢込んでしまひ一本の蠟燭は倒れて、いとしい遺骸の一本の腕と蒲團とは燒けてゐた。』本書一七七頁參照。（譯者）

夢には意味があり精神的の妥當性があるといふことを、最初の分析的説明に依つて知つて後に、その意味の定義がそのやうに簡單なものであらうとは我々も期待しなかつたことである。アリストテレースの正確な、併し簡明な定義に依れば、夢は思想が睡眠（してゐるものとして）の中に續いて入つたものである。晝間には我々の思想はあんなにもさまざまな心理的活動——判斷、結論、抗論、期待、意欲など——を生むのに、何故我々の睡眠時の思想は願望を生むことだけに局限せられなければならないのか。それどころか、夢の形で一つの異つた精神活動を、例へば配慮を、示す澤山の夢があるではないか。かの父親が死んだ子供の枕頭の蠟燭が倒れて遺骸を燒いてゐると夢見て、隣室から起きて行つて見ると、果して蠟燭は倒れてゐたといふ夢などは、丁度この性質の夢ではないか。睡眠中に自分の眼に落ちて來た光の輝きから、父は蠟燭が倒れて遺骸を燒いたかも知れないとの配慮を引き出して來たのである。かうした考へに、現在行はれてゐる感覺的の狀態を被せて、一つの夢に仕立てたのである。この夢に於いて、願望充足は如何なる役割を演じてゐるか。また、覺醒狀態から引續いて來た思想が主になつてゐるか、或は新しい感覺的印象に依つて搔立てられた思想が主になつてゐるか、我々はどちらを眞とすべきか。

總てこれ等の思考は當然であつて、又我々は、願望實現が夢の中で如何なる役割を演じてゐるか、

眠りの中に引繼がれたる覺醒思想の意義は何であるか、などの問題に一層深く入らざるを得ないのである。

夢を分つて二群とするやう既に我々を導いたものは、實は願望充足であるのだ。我々は明白に願望充足であるところの二三の夢を知つてゐる。またその他、そこに願望充足は認識されず、凡そ用ゐ得べきあらゆる手段に依つて屢々匿されてゐるものもある。この後の方の種類の夢には、夢の檢閲の影響が認められる。扮裝せられざる願望の夢は、主として子供の夢に多かつたが、併しチラとした、開けつ放しな、願望の夢は、また成人に於いても起ると思はれた。(私は故意にこの語を强調する。)

吾人は今や、夢に於いて充足せられたその願望なるものは何處から出て來たのかと尋ねよう。併し、『何處から』と云つて見たところで、それと對向したり違つたりする場所なるものが、何處にあるのか。それは意識的な日常生活と、たゞ夜中にのみ注意せらるゝ無意識の精神活動との中間に對向してゐると私は思ふのである。私はかくて願望の起源となり得るものは三つばかりあると考へる。第一に、願望は晝間に刺戟されてゐて、外的事情のために充足せらるゝに至らず、かくて夜になつて、承認されてはゐるが充足されない願望となつて殘つたのかも知れない。第二に、願望は晝間に表面へ出て來るが、拒けられて、充足せられざる、禁壓された願望となつて殘つたのかも知れない。或は第三に、願

望は晝間の生活には何の關係もなく、夜になつて禁壓の底から擡頭する諸々の願望に屬するのかも知れない。さて、精神裝置に關する我々の圖式(一)に從へば、我々は第一類の願望を前意識界に置く事が出來る。第二類の願望は前意識界から無意識界に押返されたもので、この無意識界に於いてのみこの願望は安住することが出來るものである。然るに第三類の願望感情は無意識界を全然離れることが出來ないものであると我々は考へる。そこで問題となるのは、これ等別々の源泉から湧き出て來た諸々の願望が、夢に對して同一の價値を有するものであるか、また一つの夢を惹起すに就いて同樣の力を有するかと云ふことである。

【註】(一) フロイドに依れば、我々の精神裝置(心理機構)には三つの分野があつて、第一は意識界であつて、これは我々の日常生活の全内容をなしてゐるものであり、第二は前意識界であつて、第一は直ちに近付き得べき記憶、第二は非常な努力の後に漸く意識せられ得べき記憶である。第三の分野は無意識界である。これは從來の心理學では殆ど問題にしなかつたものである。さて、それ等三つの分野の通路には門衞が立つてゐて、一々そこを通過するものを取調べるのである。これフロイドの所謂檢閲なるものである。意識界と前意識界との中間にあるものはいさゝか弱い檢閲であるが、前意識界と無意識界との中間に立つものは甚だ峻嚴な檢閲である。本書二九〇頁參照(譯者)

この問題に答へるために、我々が持合せてゐる夢を調べて見るに當つて、我々は直ちに、夢中の願

望の第四の源泉として、夜中に起る實際的な願望刺戟、例へば渇や性慾の類を加へる氣になるのである。ところが、夢中の願望の源泉なるものは、夢を起す願望の力には關係を及ぼさぬことが分つて來るのである。晝間禁壓された願望が夢となつて現れて來ることは、甚だ多くの實例に依つて示され得るのである。この類の甚だ單純な一例を擧げて見よう。いさゝか皮肉屋の若い婦人があつて、彼女よりも年若な一友に婚約がまとまつたに就いて、彼女は一日中知人から、その許婚の人を知つてゐるかその人のことをどう思ふと云つて訊かれるのであつた。彼女は無條件の賞讃を以てこれに答へ、かくて彼女自身の判斷を抑へてしまつた。彼女は寧ろ、なに俗人（Dutzenmensch）ですよと正直なところを答へたかつたのである。その晩に彼女は同じ質問を受けて、次のやうな定つた文句で答へた夢を見た。『次の御注文の時にはたゞ番號を云つて下されば十分です。』と。最後に、我々は數多くの分析からして、歪みに委せられて來た總ての夢の中の願望は無意識から引出されたことを、覺醒狀態に於いては知覺にまで來得なかつたことを、知つたのである。そこで、總ての願望は夢の構成に對して同じ價値と力とを持つてゐることが分ると思ふ。

私は今のところでは、それ〴〵事情が違つてゐるとは證明出來ないのである。寧ろ私は夢中の願望が強く迫まつて決定するものであると論ぜざるを得ないのである。子供の夢に就いて云へば、晝間の

充足せられざる願望が夢を惹起すらしいことは、殆ど疑ひの餘地がない。併しそれは、要するに、子供の願望であつて、また子供の力だけの願望感情であることを、我々は忘れてはならない。晝間からの充足せられざる願望が成人に於いて夢を作るに足るかどうか、私は甚だ疑はしいと思つてゐる。寧ろ、我々は知的活動に依つて我々の衝動を支配することを學ぶにつれて、我々は愈々益々そのやうな子供らしい激しい願望の構成又は保留を無駄として拒けるらしく思へるのである。この點に關しては、併し、個人に依つて區々であらう。或る人は他の人よりは多く精神過程の嬰兒型を保留するであらう。この相違は、始めは判然してゐた視覺的想像を漸次に拒否する場合の相違と同じである。

併し、一般的には、私は晝間の充足せられざる願望が成人に於いては夢を作るに足りないと云ふ意見である。前意識に發芽する願望の促進が同樣に夢を惹起す力があると云ふ事は私は直ちに容認するが、併しそれだけが多分總てゞある。夢は、もし前意識的願望が他の源泉から援助されなかつたならば、起るまい。

その源泉と云ふのは無意識である。意識的願望が夢を惹起すのは、たゞそれが已れを後援する同樣な無意識的願望を惹起すことに成功する場合に於いてのみであると私は信じてゐる。神經症の精神分析をして得た暗示に從つて、私は、これ等の無意識願望が常に活動してをつて、意識生活からの情緒

と結合する機會を捕へた時には何時でも直ぐに出て來るものであり、また意識生活からの情緒の弱きに自分の強さを移し加へるものであることを信じてゐる。こそれだから意識的願望ばかりが夢の中で實現されたやうに見えるのかも知れない。併しこの夢がいさゝか妙な風に出來上つてゐるために、我我は無意識からの有力な助力者の方へとたどらざるを得ないのである。これ等の不斷に活動してゐる云はゞ不朽の無意識的願望は、傳說中のティターンたちを思ひ起させる。彼等は勝利を得た神々が嘗て彼等の上に投下した重い山を大昔から支へてゐる。さうしてその山は今でも時々、彼等の力強い四肢の痙攣のために顫へるのである。抑壓の內に見らるゝこれ等の願望は、神經症を精神上から探究して見て知つたところに依ると、嬰兒時代からのものである事が分るのである。それ故に、私は何處から夢中の願望が起源してゐるかは重要でないと以前に云つたが、その意見は撤回して、次のやうな別の意見を以てこれに置き換へよう。——夢の中に現れた願望は嬰兒的のものでなければならない。成人に於いては願望は無意識に起源してゐるが、子供はまだ前意識と無意識との區別がないし、またあるにしても形成の過程中にあるだけであるからして、彼等に於いては覺醒狀態からの充足せられざる、而も抑壓せられざる願望である。この考へは一般的には證明の出來ないものであることは私も知つてゐる。併し、それは思ひも寄らない場合にも證明される事もあるのだから、一般的には論駁出來ない

ものであると私は主張するのである。

【註】（一）無意識的願望は、眞に無意識的なる一切の精神的行動と共に――つまり無意識界にのみ屬する精神的行動と共に――破壞すべからざるものとしての性質を碩前してゐる。これ等の道は不斷に開かれ、決して不用に歸することはない。これ等の道は亢奮現象が無意識の亢奮の力を借りる度毎にいつでも通過を許すのである。譬喩的に云ふならば、これ等はオディッシイに於ける下界の靈界と同じやうな形の寂滅の運命を受けてゐるのである。その靈らは血を飲めばまたその瞬間に新しい生命に眼覺めるのである。前意識界に依屬する諸々の現象を破壞するにはまた別の方法を以てしなければならない。このやうに別の方法を以てするところに神經症の精神治療法の基礎があるのである。

意識的な覺醒狀態とは離れた願望感情は、それ故に、夢の構成の背景に關係があるのである。夢の內容の中で彼等の演ずる役割は、睡眠中に實際の感覺の材料が演ずるのと同じ役割だけであると私は思ふ。もし今、私が、覺醒狀態とは離れた、而も願望に非ざる、他の精神的刺戟を問題にするとすれば、私はこの思想の進展の示す線だけを辿らうと思ふ。我々は睡眠しようと決心することに依つて、我々の覺醒時の思想の全エネルギーを暫くは停めることが出來よう。かう云ふことの出來る人が、眠り巧者な人である。ナポレオン一世はこの種の人の一模範であつた。併し、我々はいつもさううまくは出來ないし、またさう完全にも行くものではない。解決せざる問題、氣の揉める心配事、强大な外

的刺戟などが、我々の所謂前意識界にある精神的過程を動かして、睡眠中と雖も思想活動を繼續するのである。睡眠の中まで繼續する心的過程は、次の諸群に分類することが出來よう。――（一）晝間は偶然的な原因でその完了を妨げられてゐたもの。（二）我々の心の力の一時的麻痺のために未了に、即ち未解決に、終つたもの。（三）晝間は拒けられ、禁壓せられてゐたもの。これと聯合してゐる强力な一群は、（四）晝間、前意識の働きに依つて無意識界に喚覺めさせられてゐるものである。最後に、我我は、（五）問題にならなかつた、それ故に決着してをらぬ晝間の印象から成つてゐる一群を加へることが出來る。

覺醒生活のこれ等殘存物に依つて睡眠の中に導入せられた强烈な精神活動は、殊に未解決な群から發するものは、なか〳〵馬鹿にならないのである。これ等の亢奮は惱に夜までその努力を續けて表現を求めるのである。で、我々は、睡眠狀態のために、前意識中にある亢奮が平常のやうに連續することが不可能になり、又それが意識化することに依つて亢奮を終熄せしむる事が不可能になるのだと、同樣の確かさを以て斷定することが出來るのである。我々の心的過程を、夜中に於いてすらも、平常通り意識することが出來る限り、その限り我々は眠つてはゐないのである。私は睡眠狀態に依つて如何なる變化が前意識界に生ずるかを述べようとは敢へて思はない。併し睡眠の心理的性質がこの前意

識界そのものに存することは疑ふべくもない。このエネルギーの變化如何に職由することは疑ふべくもない。このエネルゼーはまた、睡眠中は痲痺してゐる言語動作の進路を支配してゐるのである。これとは正反對に、夢の心理の中には、夢が無意識界の狀態中に何等かの、第二次的の變化を生ずるとの假定を保障すべき何物もないらしく思はれる。それ故に、前意識內の夜の亢奮にとつては無意識からの願望亢奮が辿る道以外には道はないのである。前意識の亢奮は無意識からの助力を求め、無意識的亢奮の方の道を迂廻しなければならない。併し、前意識にある晝間の殘物の夢に對する關係はどうであるか。それ等の殘物はどん〳〵夢の中に侵入し、夢の內容を利用して夜中と雖も意識界に闖入し來ることは疑ふべくもない。事實、それ等の殘物は時々は夢の內容を支配することさへあり、また夢の內容を勵まして晝間の仕事を續けさせることもある。また、晝間の殘物が願望の性質とは違つた何等かの性質を持つであらうことも慥である。併し、それ等の願望が夢の中に受容せらるゝためには、如何なる條件に願望が應じなければならないかを知るのは、願望充足說にとつては甚だ爲めになることでもあり、また決定的なことでさへもあるのだ。

實例として前に擧げた夢の一つを採り出して見よう。卽ち、わが友オットーがその中でバゼドー病の徵候を示してゐるらしく思はれる夢である。わが友オットーが來たゝめに、私はその日多少のこだ

わりが出來てゐた。さうしてこの煩ひは、この人物に關する他の一切の事の如く、私の心持を亂した。私はまた、これ等の感情が私に跟いて夢の中まで這入つて來たやうに思ふ。私は多分、彼がどうしたのかを知らうと決心してゐたらしい。夜中に、私の煩ひは夢となつて現れて來た。その內容は全く無意味であるばかりでなく、また何等の願望充足をも示してはならぬ。併し、私は晝間に感じた配慮がこのやうに支離滅裂な表現をとつたその根源を探究し始めた。さうして分析に依つて這般の關係が明かになつた。私はわが友オットーをLと云ふ男爵と同一化し、私自身をRと云ふ教授と同一化してゐたのだ。私が晝間の思想に對してこのやうな代償を擇ぶやうになるに就いては、たつた一つの說明があつた。私は常に無意識の中で自分をR教授と同一化しようとの心組みをしてゐたに違ひない。それは、偉大になりたいとの不朽の嬰兒的願望の實現を意味したからである。わが友に關する反撥的の考へは、覺醒狀態に於いては慥に拒けられて來たであらうが、夢の中に這入り込む機會を捉へた。併し、晝間の煩ひも同樣に、夢の內容中の一代償に依つて何等かの表現の形を見出した。晝間の思想は、それ自身としては決して願望でなく寧ろ煩ひであつたが、何等かの方途で、かの嬰兒的な今では無意識的となり、禁壓されてゐる願望と結合する事となり、かくしてその結合に依つて思想が（本來既に用意は出來てはゐるのだが）意識面へと『出て來る（エントステーヘン）』のである。この煩ひが勢ひ旺んになればなるほど、

成立すべき結合は愈々力強くなるのである。願望の內容と煩ひの內容との間には、何の結合もなくていゝのである。また我等の實例の何れにもさう云ふ結合はなかつたのである。

こゝまで分ると、我々は無意識的願望の夢に對する意義を明瞭に定めることが出來る。成程、晝間の生活の殘物から主として、又は專ら、その刺戟を得てゐる夢の一類があることは容認出來よう。で、私には、わが友の健康に關する煩悶がまだ活躍してゐなかつたならば、いつか將來に『非凡の教授』にならうとの年來の宿望に依つてあの夜は安眠出來たであらうと信じてゐる。併しこの煩悶だけでは夢は出て來なかつたであらう。夢が必要とする原動力は一つの願望に依つて寄與せられなければならなかつた。併しそのやうな夢の原動力としての願望をそれ自身のために作り出すと云ふことは煩はしいことである。譬喩的に云ふならば、晝間の思想が夢の中で『企業家』“entrepreneur”の役割を演ずることは、全然不可能ではない。併しその企業家がどう云ふ考へを持つてゐようと、また如何にその仕事を行りたがつてゐようとも、資本がなくては何も出來ないことは分りきつてゐる。彼は必要な費用を支出してくれる資本家に賴らなければならない。さうして夢の精神的費用を供するこの資本家は、必ず、勿論、無意識からの願望でなければならない。覺醒時の思想が、如何なる性質のものであらうとも——。

また別の場合には、資本家自身が夢の企業家となる。この方が、實は、もつと普通の場合であるのだ。晝間の仕事に依つて一つの無意識的願望が作られ、その無意識的願望がまた今度は夢を作るのである。更にまた、夢の現象は、こゝでは一つの説明として用ゐられてゐるあの經濟的關係の、他の一切の場合を悉く演ずるものであるのだ。であるから、その企業家は自分でも多少の資本を寄與するであらうし、二三の企業家連が同一資本家の助力を仰ぐこともあらうし、また數名の資本家が合同して、請負師の要求する資本を支給してやることもあらう。このやうにして、一つ以上の夢の願望に依つて生れる夢もあるし、またそれ等に似て多少變化したものも澤山にあるが、それ等は別に論究しないでおく。また我々には最早興味のないことでもある。夢の願望に關するこの論究に於ける未濟の問題は、また後章に於いて發展させることが出來ようと思ふ。

只今用ゐた比較での『相似點』"tertium comparationis" ――即ち、分配せられた量に於いて、我々の自由に處理出來る總額――は、夢の構造の説明のためには、なほ細かく適用することが出來る。我我は大抵の夢に於いて、知覺出來るだけの激しさを特別に具へた中心點を認識することが出來る。これは大抵必ず、願望充足の直接的表象である。何となれば、もし我々が逆行の過程に依つて夢の仕事の轉位をほぐして行くならば、夢の思想中の諸要素の精神的の激しさは夢の内容中の諸要素の激しさ

に依つて置換へられてゐることを見出すからである。願望充足に附隨する諸要素は願望充足の意味とは屢々何の關係もなく、寧ろ願望には反對する苦痛な思想の後裔であることが分る。併しそれ等の諸要素は中心要素と屢々不自然に結合する事に依つて、それ等は表現となつて出て來るに足るだけの激しさを獲得してゐるのである。かくて、願望充足の表現力は結合の或る分野の上に分布せられ、その分野の中に於いては、願望充足の表現力は一切の要素(それ自身としては無力な要素をも含めて)を表現出來るまで高めるのである。澤山の强い願望を持つてゐる夢に於いては、我々は直ちに、個々の願望充足の分野をそれぞれに分離することが出來る。また夢の中の切れ目は、屢々それ等の境界線であることが理解出來る。

右に述べて來たところでは、晝間の殘物の夢に對する意義は甚だしく限定されてをるけれども、それ等殘物に多少の注意を拂ふことも、やはり無價値ではないのだ。何となれば、それ等の殘物は夢の構成に於いて必要なる分子でなければならないからである。經驗の示すところに依れば、總ての夢はその內容として、最近日の何等かの印象、而も屢々最も重要ならぬ種類の印象との結合を有してゐることを示すと云ふ驚くべき事實が判明してゐるのである。これまでのところでは、夢の混合に就いてこれだけの事を附加すべき何等の必要をも認めることは出來なかつたのである。この必要が現れるの

は無意識的願望が演ずる役割を仔細に調べ、かくて神經症の心理に關する知識を求める場合になつてである。かくて我々は、無意識的觀念なるものは、そのものとしては前意識中に全然這入ることが出來ないものであり、無意識的觀念がそこに於いて勢力を振ふのは既に前意識に屬する無難なる觀念と結合して、それに己れの激しさを移し、その下に己れを匿してゞあるといふことを知らねばならない。これこそは轉嫁の事實であつて、これに依つて神經症の精神狀態中に起る非常に多くの驚くべき事實の說明がつくのである。

かくの如くにして身分不相應に多量の激しさを獲得してゐる前意識出身の觀念は、轉嫁のためには別に何の變化も被らないで、そのまゝになつてゐるのである。でなかつたならば、轉嫁をする觀念の內容からの變化が、前意識出身の觀念の上に押しつけられたであらう。私は日常生活からの比較を無暗に好むやうであるが、讀者諸氏はお許し下さることゝ信ずる。併し、被抑壓觀念のために存する諸關係は、アメリカ齒科醫のためにオースターに存する立場に似てゐると云ひたいやうな感じする。アメリカの齒科醫たちは正規の醫師から許可を得て彼の名をその看板に用ゐ、かくて法律上の要件を濟すのでなければ、仕事するのを禁ぜられてゐるのである。更にまた、齒醫者とそのやうな關係を結ぶのは最も忙しい醫者ではないが、丁度そのやうに、精神生活に於いても、たゞそのやうな前意識的又

は意識的觀念だけが、前意識中に働いてゐる注意を牽かないものであるから、被抑壓觀念を陰蔽するに擇ばれてゐるのである。無意識の觀念は、何でもないものとして注意されずにゐた種々な印象や前意識出の諸觀念と好んで結合するか、或は拒否に依つて直ちにさう云ふ注意を奪はれた印象や觀念と結合するかである。一方面に密接な關係を結んでゐる觀念は、別方面の一切關係には殆ど否定的な態度をとると云ふことは、聯想研究から得た、而もあらゆる經驗に徵して確な、周知の事實である。この原則に照して、私は嘗て、ヒステリー的痲痺に對する一學說を樹てようと試みたことがある。

吾人は被抑壓觀念が轉嫁せられるの必要を神經症の分析に依つて知るやうになつたが、もしその同じ必要を夢もまた同樣に感ずるものとするならば、吾人は一擧に、夢に關する二つの謎を說明することが出來る。卽ち、一切の夢はこれを分析して見ると最近の印象が織込まれてゐることが分ると云ふことゝ、この最近の要素は屢々最も重要ならぬ性質のものである事とだ。なほ、他のところで旣に論じたことを附加するならば、これ等の最近の、重要ならぬ要素は最深底にある夢の思想の一代償として夢の內容中に非常に屢々這入つて來るものである。その理由は、彼等が檢閱の拒否を殆ど恐れなくともよいからである。併し、この檢閱の眼を免れると云ふことは、下らない要素を好むと云ふことの說明にしかならなくて、始終最近の要素が出て來てゐると云ふことはそこに轉嫁の必要があると云ふ

事實を指示してゐるのである。二群の印象が、まだ結合してをらぬ材料を求めてゐる被抑壓者の要求を滿すのである。重要ならぬ印象は結合を擴げて行くことをしないため、また最近の印象は結合を擴げて行くやうな暇が十分にないため――。

そこで我々には、かう云ふことが分る。晝間の殘物（その中には我々は今や、夢の構成に參與してゐる、重要ならぬ印象を含めてもよい）は、被抑壓願望の自由になる原動力を無意識から借りるばかりでなく、また無意識に對して必要缺くべからざる或るものを、つまり轉嫁に必要な附屬物を、供給するのである、もし我々がこゝで精神的現象の中へも少し深く這入らうとするならば、我々はまづ前意識と無意識との中間に於ける亢奮の働きをも少し明白に知つておかねばならない。これを知ることは、實は、神經症の研究からして我々もその必要に迫られたのであるが、併し夢を研究したのでは、この點に關しては、何の助けにもならないのである。

ほんのもう一言、晝間の殘物に就いて云つておかう。晝間の殘物は眠りを實際に攪亂するものである事は疑ふまでもなく、夢が攪亂するのではない。夢は、その反對に、眠りを守らうとするものである。併しこの點には我々は後に返つて行かう。

我々は今まで夢の中の願望を論じて來たのである。我々はそれを無意識まで跡づけて行つたのであ

る。さうして晝間の殘物に對するそれの關係を分析したのである。その殘物の方は、或は願望であつたり、何等かの種類の精神的亢奮であつたり、或は單に最近の印象であつたりするのである。我々の考へ進んで來たところに準據するならば、夢が晝間の仕事の繼續者として幸福な結論を齎したり、覺醒狀態の未解決問題を齎したりするやうな極端な場合すらも說明することは、我々には、必ずしも不可能ではないのである。併しながら、我々は、前意識の活動力に結合することに依つて前意識の力を首尾よく强める嬰兒的、又は被抑壓的の願望の源泉を、それの分析に依つて闡明し得るやうな、さう云ふ實例は持合せてをらぬのである。併し我々は、何故に無意識がたゞ睡眠中にばかり願望實現に力を借すことが出來るか、といふ謎の解決には一步近づいてをらぬだらうか。この問題への答へが出來れば、願望の心理的性質も明になつて來なければならない。で、それを一つ、精神裝置（機構）の圖式の力に俟つて、明かにして見よう。

我々はこのやうな精神裝置でさへも、永い間の發展の道程を經て、現在の完全に到達したことは疑はない。この精神裝置がその活動力の極初期にはどんなであつたかを考へて見よう。さまざまな假定（それは又他の方法で基礎づけるが）からして、我々はこの裝置が始めには、出來るだけ亢奮しないやうに勉めたことが分る。それ故に、その最初の形式に於いては反射裝置の形をとり、外部からの如

何なる感覺的刺戟でも、言動の道に依つて直ちに發出することが出來たのである。併しこの簡單な裝置は生活の必要（ベデユルフニス）のために攪亂せられ、またその必要のために更らに裝置の發達を見るやうになつたのである。生活の必要はまづ偉大な物理的必要の形をとつて現れて來た。內的必要のために惹起された亢奮は言動の方面に出口を求める。これは『內的變化』又は『情緒の表現』と呼ぶことが出來る。腹の空いた子供はたまらなさうに泣いたり跪いたりするが、併し子供の位置は少しも變らない。何となれば、內的必要から來る亢奮は一瞬間の爆發を要求せずして、連續的に働く力を要求するからである。何等かの方途で滿足の感情が經驗せられ――子供の場合では、それは外部からの助力に依つて經驗せられ――內的亢奮の除かれる場合にのみ、變化は起り得るのである。この經驗の本質的組成分子は、或る知覺物（この實例では食物）の現れることである。この經驗の記憶がこれ以後、必要の亢奮の記憶の名殘と結合して殘つてゐるのである。

この關係が出來上つてゐるお蔭で、次にこの必要が現れた場合には一つの感情が結果し來り、その感情が以前の知覺物の記憶を復活させて來る。かくてまた以前の知覺物そのものをも復活させて來る。つまり、最初の滿足の狀態を實際に再現させて來るのである。吾人はそのやうな感情を願望と呼ぶのである。知覺物の再出現は願望充足を組成する。かくて必要の亢奮が知覺物を完全に復活させること

が願望充足への最捷徑をなすのである。假りに我々は精神裝置の原始狀態をとつて見てもよい。原始狀態に於いては、實際この道をとつてゐたのである。つまり、そこでは願望は錯覺の中へ沒入してゐたのである。この最初の精神的活動は、それ故に、知覺物の同一化を目指してゐるのである。つまりそれは必要の充足と結合してゐるかの知覺物の再現を目指してゐるのである。

この原始的な心的活動は苦々しい實踐的經驗に會つて、變化を受け、もつと適切な、第二次の活動になつて來たのである。精神裝置の範圍內に於いて、退行的捷徑に依つて知覺物の同一化を確立したところで、外部から同じ知覺物を復活させてそれに必然的に伴ふやうな結果は伴ひはしない。滿足は生ぜずして、而も必要は存續する。エネルギーの內部纏綿を外部纏綿と等價にするためには、內部纏綿が不斷に支持されてゐなければならない。それは丁度、錯覺的精神症に於いて、また願望せられた對象に執着して精神力をすりへらす飢渴の妄想に於いて、實際に現はるゝ如くである。精神力をもつと適宜に用ふるためには、あまりに退行し過ぎて精神力が記憶の影像の彼方までも行つてしまはないやうに、さうして精神力が、必要な同一化を遂に外界から確立するやうな他の道を擇び得るやうに、退行を禁止することが必要になつて來る。このやうに禁止すること、竝びにその結果として亢奮から逸することゝは、有意的言動を掌る第二區劃の仕事となる。つまり、第二區劃の活動に依つて、言動

力の使用は今や、以前に思ひ起した目的へと差向けられる。併し、記憶影像から外界よりの知覺物同一化に至るまでの間を働く、この込入つた、心的活動の全體は、單に、經驗のために强要せられた願望充足への迂廻の道を表してゐるに過ぎない。(二) 思想は、實は、錯覺的願望の代償物たるに外ならぬ。而ももし夢が願望充足と呼ばれる以上は、この事は自明となる。何となれば、願望以外の何物も我々の精神裝置を活動にまで驅ることは出來ないからである。夢はその願望を充足するに當つて退行的の捷徑を辿るものであるが、そのために、今では不適切として棄てられた精神裝置の原始形式の唯一實證を我々に殘して吳れてゐるのである。嘗て心理生活がなほ若くて不適當であつた時分に覺醒狀態を支配してゐたものが、今では睡眠狀態の中に追込まれてゐるらしいのである。あだかも、成長した人類の捨てた原始的武器たる弓矢を、我々が再び子供部屋に見出すやうなものである。夢は子供のいいいいい精神生活の棄てられた一斷片である。精神病に於いては、精神裝置のこれ等の働き方が(常態の覺醒狀態に於いては、禁壓されてゐるが)再び擡頭し、かくて外界に於いては、それ等の働き方では我等の願望を滿足させることの出來ないことを呈露するのである。

【註】(一) ル・ローレン Le Lorrain は夢の願望充足を賞讚して曰く『大した疲勞もなく、折角追及した快樂を侵蝕する長く執拗な苦鬪から恢復する必要もなく……』と。

無意識的の願望感情は明かに晝間でも已れを主張しようと努める。さうして轉嫁の事實と精神病とに就いて見ると、無意識的願望感情は前意識界を貫通する道に依つて、意識に透入し言動を支配しようと努めるものであることが分る。で、我々の精神的健康の張番人として我々が認識し尊崇しなければならないのは、無意識と前意識との中間に横たはる檢閲である。夢に依つて見ると、この檢閲のあることは、我々もこれを假定するより外はないのである。併しこの張番を夜中にゆるめ、無意識の被禁壓感情に表現を許し、かくて再び錯覺的退行を可能ならしむるとは、この檢閲としては甚だ手ぬかりなことではなからうか。私はさうは思はない。何となれば、このやかましやの番人が休んでゐる間には——彼は休んでも熟睡してゐるわけでない事は我々にも證明がつく——彼は言動への門戸を閉すことを怠つてゐないからである、それ以外では禁止せられてゐる無意識から如何なる感情が舞臺上に出て來ようとも、何の干涉をすることもないのである。それ等の感情は無難である。何となれば、それ等は言動裝置を運轉させる力はないからである。而もその言動裝置のみが外界を變更させるやうな勢力を振ひ得るのだからである。睡眠の間は、番せられてゐる城砦の安全は保障せられてゐる。ところが、前意識はエネルギーに充ち、言動への道が開かれてゐる間に、諸勢力の轉位が、嚴ましい檢閲の働きの夜になつて弛むことに依つてゞはなく、檢閲の病的薄弱化又は無意識亢奮の病的强力化に依

つて生じた場合には、狀態はなか〳〵無難どころではなくなるのである。番人はやがて克服せられ、無意識亢奮は前意識を征服する。前意識を通じて無意識的亢奮は我等の言語動作を支配し、或は幻覺的退行を强要し、かくて我等の精神的エネルギーの分配の上に知覺が及ぼす牽引力に依つて、本來はそれ等のためにしつらへられたのではない裝置を支配するのである。吾人はこの狀態を精神症と呼ぶのである。

我々は今や我々の精神構造を完成するに最もよい位置に來たのである。今までは、無意識、前意識二界の紹介のためにそれを遮られてゐたのである。併しながら、吾人は夢に於ける唯一の精神的原動力としての願望に對して、立入つた考慮を施すべき理由を十分に持つてゐるのである。夢は如何なる場合にも何故に願望實現であるかと云へば、それは無意識の所產であり、無意識は願望充足以外にその活動の目的を知らず、またそれは願望感情以外には自由に處理出來る力を持合せないからであると云ふことは、吾人が旣に說明し來つたところである。吾人が更にも少し、夢の註釋からしてこのやうな立入つた心理學的思辨を細かくするの權利に執したければ、吾人は當然、夢を他の精神組織をも含むやうな一つの關係に引入れつゝある事を明かにしておく義務があるのだ。もし無意識界と云ふやうな區劃――又は、我々の論究の目的からして十分それに近似した何物か――があるとすれば、夢はそ

の區劃の唯一の顯現ではあり得ないのである。一切の夢は願望充足であるかも知れない。併しまた夢と云ふ形式以外に、他の形式の變態的の願望充足がなければならない。實際、一切の精神神經症の徴候に就いての學說は、畢竟するにそれ等徴候がまた無意識の願望充足と解せられざるを得ないと云ふに盡きてゐるのである。我々の說明では夢を、精神病醫師に對して最も重要な一群のたゞ最初の一員としてゐるのである。この事を理解するのは、精神病醫學上の問題の純粹に心理學的部分の解決を意味するのである。併し願望充足のこの群の他の諸員、例へばヒステリー的徴候には、私が今迄のところでは、夢の中で見出し得なかつた一つの本質的な性質を認識する。さう云ふ次第であるから、この論文中で屢々言及した探究からして、ヒステリー徴候の構成には我々の精神生活の二つの流れの結合が必要になる事を我々は知るのである。その徴候は單に實現せられた無意識願望の表現であるばかりでなく、またそれは前意識からの別の願望と合一してゐなくてはならない。その別の願望はその同じ徴候に依つて充足せらるゝのである。そこで、その徴候は少くとも二重に決定されてゐるのである。相抗爭する二界の各々に依つて一度づつ——。丁度、夢に於ける如く病徴に於いても、もつと過度決定するに何の限界もない。無意識から出たでない決定は、私の知る限りでは、必ず無意識願望に反對する思想の流れ、卽ち自己懲罰である。そこで私は、一般的に、から云つてよからう——ヒステリーの

徴候は、それぐヽ違つた精神區劃に源泉を持つところの、二つの相對比する願望充足が、一つの表現となつて結合し得る場合にのみ生ずると。（ヒルシュフェルド Hirschfeld その他に依つて公刊せられてゐる『性慾學雜誌』„Zeitschrift für Sexualwissenschaft“に、一九〇八年中に載つた余の一論中に、ヒステリー徴候の起源に關する最近の定式を示しておいたが、それと比較せられたい。）この點に關しては實例を擧げたのでは、何の役にも立たない。問題になつてゐる錯雜狀態を完全に闡明するのでなければ、人を信ぜしむることは斷然出來ないのである。私は、それで、單に斷定を與へるだけで滿足し、實例を示しはするが、それはそれに依つて人々に信じさせようためでなく、たゞ說明のためにしようと思ふ。或る婦人患者のヒステリー的の嘔吐は、一方に於いては、彼女が絕えず姙娠してゐたい、さうして澤山の子供を持ちたいとの思春期時代からの無意識的空想であることが分つたのである。さうしてこの空想が後になつて、出來るだけ澤山の男に依つて子供を得たいと云ふ願望と結び付いたのである。このおだやかならぬ願望に對して、そこに一つの强力な防禦衝動が起つた。併し、嘔吐は患者の容姿と美とを損うて、從つて彼女は人々の眼に愛顧を見出さなくなるであらうからして、その徴候はそれ故に、彼女の懲罰的な方面の思想と一致してゐる。で、このやうに兩方面から容認されて、それは一つの現實となることを許されたのである。これはパルチアこの女王が三執政の一人クラッソ

スに對して採つたのと同じ遣口の、願望充足になびき方である。クラッソスは黃金慾のために戰爭を企てたと信じて、彼女は屍骸の咽喉に鎔解した金を注入させた。『さア、これでそなたの望み通りで御座らうな。』今の所、吾人は夢が無意識の願望充足を表はすことだけを知つてゐるのである。さうして、支配力のある前意識は願望に何等かの歪みを與へた後でなければこれを許さないらしいのである。我々は實は、夢中の願望に反對する思想の流れにして、夢の酷似物中に於けるやうに、夢の中で實現せらるゝものを一々證明すべき位置にはないのである。たゞ時々我々は夢の中で、反應構成の跡を見出して來たのである。例へば『叔父の夢』に於ける友人Rに對する優しさの如きである。併し前意識からの寄與はこゝでは見られないが、他の場所では見出され得るのだ。支配力ある(前意識)界が眠りの願望へと引退つてゐる間に、夢は無意識界から幾多の歪みを受けた一つの願望を表現にまで齎して來、さうして精神裝置內で願望に可能なるエネルギーの變化を生ずることに依つてこの願望を實現する。さうして最後まで、眠りの續いてゐる間中、この願望を保持してゐるのである。

【註】(一) Parthia, 西曆紀元前二五〇年頃、カスピアン海の東南に位した。アジアの一國。(譯者)

(二) この思想はリエボールト Liébault の『眠りの學說』"The Theory of Sleep" から借りて來てゐるのである。リエボールトは現代に於いて、催眠術的考查を復活させてゐる。(Du Sommeil provoqué, etc.; Paris, 1889.)

前意識一般の方にこれほど執拗な眠りの願望があるので、夢の構成も容易になるわけである。例の死人の室から洩れた光の輝きで、屍體が燃えてゐると考へた父親の夢を參考して見よう。父親が光りの輝きで眼を醒まさずに、その代りに屍體が燃えてゐると考へるやうになつたその決定的な精神力の一つは、夢の中で見た子供の生命を一瞬間でも延しておきたいとの願望であつたことは、吾人が既に示しておいたところだ。被抑壓物から出て來てゐる他の諸願望は、多分我々も見遁してゐるであらう。何となれば、我々はこの夢を分析することが出來ないからである。併し、夢の第二の動機力として我我は父の眠りの慾望を擧げることが出來よう。何となれば、子供の生命と同樣に、父の眠りは夢に依つて一瞬間引延ばされてゐるからである。根柢をなす動機はかうである。――夢は進んで吳れ、でないと私は起きなくてはならないから。この夢に於いてもさうだが、他のあらゆる夢に於いてもまた、睡眠の願望はその支持力を無意識的願望に貸し與へるものである。吾人は明かに便利の夢である夢を報告しておいた。〔〕併し、實を云へば、總ての夢は便利の夢と呼んで支障へないのである。眠りを續けたいとの願望が有效であることは、眼の覺めかゝつてゐる時の夢に於いて最も容易に認めることが出來る。眼覺めかゝつてゐる時の夢は、客觀的の感覺的刺戟を變形して眠りの繼續と兩立し得るやうにする。さう云ふ夢はこの刺戟を夢と織りまぜ、その刺戟が外界への注意を促す力を奪つてしまふや

うにする。併しこの、眠りを續けたいとの願望は、たゞ内部から睡眠狀態を攪亂するやうな總ての他の夢の形成にもまた與つてゐなくてはならない。『まア、いゝから、まだ眠り續けていゝのだ。なアにこれはほんの夢なんだからね。』――これが夢のあまりにやりすぎた時に、多くの場合、前意識から意識へ與へる示唆である。ところでこれはまた、我々の支配的な精神活動が夢に對してとる態度を全く一般的に示すものである。尤もその場合は、思想の方は暗默の狀態にあるのであるが――。で、私はかう結論しなければならない、我々が睡眠狀態にある間中、我々は自分が眠つてゐる事を確に知つてゐると丁度同じやうに、我々は自分が夢見てゐる事を確に知つてゐるのであると。この結論に對して、我々の意識は後者を知るやうには決して向けられたことはなく、また我々の意識が前者を知るやうに差向けられるのは、たゞ檢閲がふとした事で驚いたと云ふやうな特別の機會にだけであると云ふ反對説が出るが、さう云ふ説は無視せざるを得ない。この反對説に對しては我々は、人によると自分の眠りや夢を悉く承知して居り、彼等の夢の生活を指導する意識的能力を明かに具へてゐる者のあることを云つておかう。そのやうな夢巧者な人は、夢の筋が面白くないと思ふと、眼を醒ますことなしにその筋を壞して別のやり口で夢を續けるやうに出直すのである。まるで通俗作家が注文に應じて自分の芝居をめでたし／＼に終らせるやうな風である。また別の時には、もし夢で性的に亢奮した狀態

におかれると、彼は眠りの中でかう思ふ、『私はこの夢を續けて、遺精で自分を疲らせようとは思はない。私は現實の立場を思うて、寧ろこの夢は延期しておきたい』と。

【註】（一）本書二十――二十一頁、及び六十九頁參照。

第九章

夢の機能(一)

我々は前意識が夜中には眠りの願望のために働きを休めてゐることを知つてゐるので、我々は夢の現象を分りよく追究して行くことが出來る。併し、我々はまづ、この現象に就いて我々の今までに得た知識を總合計しておかう。我々はかう云ふことを明かにしておいた、覺醒時の活動は晝間の殘物をあとに殘し、その殘物からはエネルギー纒綿(三)は全部引取ることは出來ないこと、即ち覺醒時の活動は晝間に無意識的願望の一つを復活させる、即ち二つの條件は同時的に起る、吾人は起り得べき多くの變化を既に發見した。無意識的願望は、晝間の中か或はとにかく眠りの始めか何れかに於いて、晝間の殘物の方へ既に進んでをり、さうしてそれに轉嫁を及ぼしてゐる。かくして最近の材料に轉嫁せられた一願望が出來上る、即ち、禁壓せられた最近の願望が無意識からの援助に依つて再び生き返つて來る。この願望は今や、心的過程の常態的道程をとり、前意識を通つて意識へと進まうと努める。(この前意識に、實は、この願望はその構成要素の一つに依り所屬してゐる。)ところがその願望は、

まだ活躍してゐる檢閱に出會して、その勢力の前に伏してしまふ。そこで願望は歪みをとることになるが、その歪みをとるに就いては、既に最近の材料に願望の轉嫁がなされてゐるのだから、その用意は出來てゐるわけである。こゝまでは願望は强迫觀念、妄念、その他これに似た何物か――卽ち、轉嫁によつて强められ、表現時に檢閱に依つて歪められた思想――となる道程にあるのだ。が、これ以後の進路は前意識の睡眠狀態に依つて阻まれてゐるのだ。この前意識界はその亢奮を滅却することに依つて、侵入に對する自己防衛をなしてゐるらしいのである。夢の現象は、それ故に、睡眠狀態の特殊性に依つて、今や開かれてゐる退行的道程をとる。さうして、かくすることに依つて、記憶群が夢の現象の上に振ふ牽引力に從つて行くのである。その記憶群それ自身は一部分は單に視覺的エネルギーとして、(後の區劃の記號に譯せられたものとしてゞなく)存在するのである。退行の途上に於いて夢は戲曲化の形をとる。壓縮の問題に就いては、後章に述べるであらう。夢の現象は今やそれの幾度も妨げられた道程の後半を終つたのである。その前半は無意識的場景又は想像から前意識へと前進的に擴がり來り、後半は檢閱の限界以後は再び知覺へ出ようと努める。併し夢の現象が知覺の內容となる時には、夢の現象は、云はゞ、檢閱及び睡眠狀態に依つて前意識內にしつらへられた障碍をすりぬけて了ふ。夢の現象は首尾よく己自身に注意を牽き、意識に依つて注意せられるやうになる。何とな

れは、意識は我々にとつては精神的諸性受容の感覺的機關であるのだが、その意識は二つの源泉から刺戟されることが出來るからである。その二つとは、第一は全裝置の周邊から、即ち知覺區劃から。第二は、裝置內部のエネルギーの變形に際して、唯一の精神性として生ずる快不快の刺戟からである。Ψ區劃に於ける他の總ての現象は、前意識界に於ける現象もさうであるが、何等の精神性をも具へてはゐない。またその故に、知覺に對する快不快を意識に供しない限りは意識の對象ではないのである。そこで我々はかう假定を下さなければならない、それ等快不快苦の解放は、自動的に纒綿現象の出口を規定してゐると。併し、もつと微妙な機能を可能ならしむるためには、表象の道程を苦痛の顯現からもつと獨立させることの必要であることが、後になつて分つて來た。この目的のためには前意識は意識を牽付け得るやうな、それ自身の性質を必要とし、またそれを、多分どうやら前意識現象と言語記號の（性質を缺いてゐない）記憶區劃とを結合させることに依つて受け取つたのである。この記憶區劃の性質に依つて、これまでは知覺に對してのみの感覺的機關であつたところの意識は、今やまた我々の心的現象の一部分に對する感覺的機關ともなるのである。かくて今や我々は、云はば、二つの感覺的表面を持つことゝなる、その一つは知覺に向けられ、他は前意識の心的現象に向けられてゐるのである。

【註】（一）正しくは「夢に由る覺醒、夢の機能、不安の夢」（譯者）
（二）Besetzung（獨）cathexis（希）、エネルギーの放射。感情を觀念に被せて意味あらしめること。對象纏綿、リビドー纏綿、自我纏綿などの術語あり。（譯者）

前意識に向けられた意識の感覺的表面は、知覺區劃に向けられたものよりは、眠りに依つて充奮が少くなると私は考へざるを得ぬ。夜の心的現象に對する興味を放棄することも目的に協ふのである。何物も心を擾き亂してはならない。前意識は眠りたがつてゐるのである。併し、一度、夢が知覺となると、それはかくして得たる性質に依つて意識を充奮させることが出來るやうになる。この感覺的刺戟はそれが本來の機能とするものを行ふ。卽ちそれは、前意識の自由になるエネルギーの一部分を、刺戟物への注意と云ふ形でさしむける。それ故に我々は、夢が必ず眼覺めさせることを、前意識の休める力の一部を活動へおびき出すことを、容認しなくてはならない。この休める力が夢に與へる影響こそは吾人が結合及び理解し易くするための第二次的仕上げと名付けたものである。この事は、夢が知覺の他の何れの內容とも同樣に、この力に取扱はれることを意味してゐる。夢は、少くともその材料が許す限りは、同じ期待の觀念に從つてゐる。夢の現象のこの第三部に於いて發出の方向が問題となる限りでは、こゝでもまた運動は前進的である。

誤解を避けるために、これ等の夢の對象の一時的（假の）特質に就いて數語を費しておくも、不當ではあるまい。マウリ Maury の謎のやうなギロチンの夢に示唆されたらしい、非常に面白い論文の中で、ゴブロット Goblot は夢が睡眠と覺醒との過渡期以外の時は要求しないと云ふことを證明しようとした。眼が覺めるには相當の時間を要する、その間に夢は起るのである。夢の最終の場景は非常に強くて、そのために眼が覺めるのだと云ふ風に、人々は考へてゐる。併し事實に於いて、この場景が強いのは、夢の本人が既に眼覺めかゝつてゐて、その時その夢が現れるからに過ぎないのである。

"Un rêve c'est un réveil qui commence." 『夢は眼覺めの始まりである。』

これに對して、既にデウガス Dugas はゴブロットが自分の説を一般的にするために多くの事實を曲げてゐると力説したのである。それのみならず、我々が眼覺めることのない夢がある。即ち、我々が夢見てゐると夢見てゐる夢である。夢の仕事に就いて我々の知つてゐるところからしても、それ等の夢が覺醒の時期をわづかに越ゆるに過ぎぬとは決して容認出來ない。それどころか、吾人は夢の仕事の最初の部分は、前意識のなほ優勢である晝間の內に始まるらしいと考へざるを得ないのである。夢の仕事の第二の部分、つまり檢閲に因る變化、無意識の場景に依る牽引、知覺への浸透などは、夜もすがら連續してゐる筈である。であるから、我々は、何を夢見てゐたかは云へないまでも、夜の間

中夢を見てゐたやうに感ずるものだと云ふ事は、恐らくいつも正しいやうである。併し、私は、意識の覺める時まで夢の現象は、私が既に説明しておいた一時的の連續を實際に辿るものであると考へる必要はないと思ふ。つまり、そこには、まづ轉嫁せられた夢の願望があり、それから檢閲の歪みがあり、それからその結果、退行への方向變化などがあるのである。吾人は説明（記述）のためにそのやうな風に繼起するものゝ如く形作らなければならなかつたが、併し實際に於いては、多分寧ろ同時的にあの道この道と試みるものであり、あちこちと動搖する情緒であり、最後に合目的々な配分に依つて一つの特殊な群が出來上り、さうしてそれが存續するのである。或る個人的な經驗からして、私は夢の仕事がその結果を生むためには一日一夜より以上を屢々要するものであると信じたいのである。もしこれが眞であるとすれば、夢の構成に於いて示さるゝ異常な技術はその驚異の一切を喪失することゝなる。私の意見では、知覺の出來事としての理解し易くしようとの顧慮さへもが、夢が意識を己れに牽付ける以前に、效果を現はすものだと思ふのである。これから後はこの現象は加速度を受ける、何となれば夢はこれからは他の何等かの知覺せられたものと同樣の取扱ひを受けるからである。それは準備に幾時間も要して一瞬間に發火してしまふ花火のやうなものである。

夢の仕事に依つて夢の現象は今や意識を己れに牽付け、眠りの時や深さに關係なく前意識を醒まさ

せるに足るだけの激しさを獲得するか、或はその激しさが不足して覺醒直前に動き始める注意力に出會ふまで待つてゐなければならないか、何れかである。大抵の夢は比較的僅かな精神的激しさで惹起されるものらしい、と云ふのは、夢は覺醒を待つてゐるからである。この事は併しまた、我々が急に熟睡から搖り起された時に、夢見てゐた何物かを大概は知覺すると云ふ事實を說明する。このやうな場合には、自分で眼の醒めた場合と同樣、第一瞥では夢の仕事の作つた知覺內容を認め、次の一瞥では外部から與へられた知覺內容を認めるのである。

併し、睡眠の最中に我々を眼覺めさせることの出來るやうな夢は、理論的には一層興味が深い。他の點ではあまねく證明せられ得べき合目的性があるのに、何故に夢卽ち無意識的願望が睡眠卽ち前意識的願望の充足を攪亂するの力があるのであるか、吾人はそれを自問して見るべきである。これは恐らくエネルギーの或る關係に因るのであらうが、それに就いては我々に洞察の力がない。もし吾人がそのやうな洞察力を持つてゐたならば、吾人は多分、夢が自由であることゝ夢に對して若干量の注意が用ゐられてゐることゝは、無意識が晝間と同樣夜間にも閉込められてあらねばならぬ事を思うて、エネルギーの經濟化が圖られてゐるのだといふことが分つたであらう。經驗の示すところに依ると、夢が同じ夜の中に繰返し眠りを妨げる場合にでも、なほも眠りと兩立し得るものであることが分る。

我々は一瞬間眼をさますが、また直ちに眠りに陷る。それは睡眠中に蠅を追ふのに似てゐる。我々はそのためには眼を覺ますが、やがて再び寢入つた時には、氣持の亂れは去つてゐる。乳母の眠りなどによくある例に依つて證明されてゐるやうに、睡眠願望の充足は一定方向に若干量の注意を保留しておくことゝ全然兩立し得るのである。

ところがこゝで、無意識現象をもつとよく知つた上での反對があつて、吾人はそれを無視するわけに行かない。吾人は無意識的願望が常に能動的であると說いて來たに拘らず、而も吾人はそれ等が晝間に自分等を知覺せしむるに足るほど強くはないと斷定して來たのであつた。併し我々が眠り、無意識的願望が夢を作るの力を示すと共に前意識を眼覺めしめる力を示した時に、何故にこの力は、夢が知られた後に、竭きてしまふのであらうか。夢は常に已れを新たにして來さうなものではないか、恰も厄介な蠅が追はれた時に、又しても又しても戾つて來たがるやうなものではなからうか。夢が眠りの攪亂を取除くとの吾人の斷定は、何に依つて是認せらるゝか。

無意識的願望が常に能動的であるといふことは、全然正しいのである。無意識的願望は一定量の亢奮がそれ等を利用する場合には何時でも通ることの出來る道である。それのみならず、無意識的現象の著しい特性は、それ等がどうしても打壞すことの出來ないものであるといふことだ。無意識に於い

ては何物も結末に來ることはない。何物も終熄したり忘却されたりすることはない。かう云ふことは神經症を、殊にヒステリーを研究して、明白に分つたのである。無意識思想の路は突發的に放射するもので、亢奮が十分に集積せらるゝや否や、再び通過出來るやうになる。三十年前に受けた外傷は、一度この無意識的な感情源泉に達して了ふと、その三十年の間中まるで眞新しい外傷のやうに疼くのである。何時でもその記憶に觸れると、それは復活し、亢奮がそれに纒綿して來る、さうしてその亢奮に依つて突發的に原動的の運撥力が供せられる。玆に於いてか精神療法の役目は始まるのであつてその任務は無意識過程を調節し忘却せしむるに在るのである。實際、記憶の薄らぎや感動の弱まりを我々は自明の事とし、また時の心に對する第一の影響として說明する傾きがあるけれども、實は非常に骨を折つて爲し得る第二次的の變化であるのだ。この仕事をなし遂げるのは前意識である。さうして精神療法の採り得る唯一の方途は無意識を前意識の支配下に降伏せしむることである。

であるから、個々の無意識的の亢奮（情緒）現象にとつては二つの出口があるわけである、この現象は獨りで放任しておかれることがある、その場合には何處かを破つて出てその亢奮が發して言動となるやうにする。或はまたこの現象は前意識の勢力に靡いて、その亢奮が發する代りにこの勢力に依つて閉込められることがある。夢の中で起るのは、この後の現象である。知覺となつてゐる夢に向つ

て進み來る前意識からのエネルギーは、それが意識的亢奮に依つて導かれる事實の故に、夢の無意識的亢奮を制限して、それを攪亂者としては無難なものにしてしまふ。夢を見てゐる人が一瞬間眼を覺ました場合には、彼の眠りを攪亂するために襲うて來た蠅は、事實上既に追拂うて了つてゐるのである。であるから、無意識的願望を十分に延し、それが退行の道を開いてやり、さうして夢を結ばせてやり、前意識の勢力を僅かに用ゐてこの夢を制限し、調節することは、無意識を眠りの間中拘束してをるよりは、遙かに合目的々であり經濟的であるやうに思はれるのである。實際夢は本來合目的々な現象ではないけれども、精神生活の諸勢力の演戲に於いて何等かの機能を獲得するだらうといふ事は、我々は期待せねばならぬ。さてその機能とは何か、我々はそれを見るのである。夢は無意識の自由となつた亢奮を前意識の支配下に返すのをその任としてゐる。かくて夢は無意識の亢奮を解放し、それに對して安全瓣としての働きをする。さうして同時に覺醒狀態をいさゝか犧牲にして前意識の睡眠を保障する。このやうに、夢はそれと同じ仲間の他の精神的形成と同樣に、兩方の願望が相互に兩立し得る限りは、兩方の願望を充足させることに依つて、同時に兩界に事へる妥協として已自身を提供する。ローベルトこの『排除說』を一瞥したゞけでも、彼の主眼點、卽ち夢の機能の決定には、我々も贊同せざるを得ないことが分る。尤も、我々の假定や我々の夢の過程の取扱方に於いては彼とは一致

しないが――。

【註】（一） W. Robert.『自然必然性としての夢』"Der Traum als Naturnotwendigkeit erklärt"(Hamburg 1886)の著者。彼の『排除說』は夢を『肉體的排除過程』として說明したもので、『その過程は精神的に反動として現れて認識に達する』とせらるゝ。つまり、夢は芽の内に息をとめられた思想の排除であるとせらるゝ。夢は重荷に壓せられてゐる頭腦に對して安全瓣の役目を果す。即ち、治癒的な、解放的な力を持つと云ふのである。(譯者)

右のやうな限定――二つの願望が相互に兩立し得る限りでは――あるところを見ると、夢の機能が果されなくなるやうな場合のある事が察せられるのである。夢の現象はまづ第一に、無意識の願望充足として容認せられたのであるが、併しもしこの試驗的の願望充足が前意識を攪亂して安靜してゐられないほどにまでなると、その時夢は妥協を破り、その任務の第二の部分を果すことが出來なくなるのである。その時、忽ち夢は破れて、完全な覺醒がこれに代る。この場合とてもまた、それは實は、夢の咎ではないのである。よしんば、普通には眠りの守護者であるのに、こゝでは眠りの攪亂者として現れることを餘儀なくされてゐようとも――。また我々は、このために夢の效能を疑つたりもしないのである。有機組織に於いて普通ならば有效な機關が、その起源の條件に於いて何等かの要素が變化するや否や、效力を失ひ攪亂的となることは、何もこの夢の場合ばかりではない。この攪亂はその

時には少くとも、その變化を報告し、その變化に對してその有機組織の調整の手段を動かすと云ふ新しい目的に奉ずるのである。こゝで私は勿論、不安の夢の場合を思ひ出してゐるのである。またかの願望充足說への抗議に何處で出會さうとそれを避けようと試みるやうに思はれまいために、私は少くとも若干の示唆を供しつゝ不安の夢の說明を試みて見よう。

不安を進めるやうな精神過程でもやはり願望充足であり得ると云ふ事は、旣に〳〵我々には矛盾ではなくなつてゐるのである。吾人はこの出來事を說明するには、望願が一つの界（無意識）に屬し、而も他の界（前意識）に依つてこの願望が拒否せられ禁壓せらるゝと云ふ事實を以てすることが出來よう。⁽²⁾前意識に依る無意識の征服は、完全に健康な精神に於いても十分ではない。この禁壓の量が我々の精神の常態の度を示してゐる。神經症の徵候は、二界の間に葛藤のあることを示すのである。徵候はこの葛藤の妥協の結果であつて、これに由り一時的にその葛藤を終熄せしむるものである。一方に於いて、それ等の徵候は無意識に對して亢奮發散の出口を供し、また突進路の役目を果し、他方に於いて、前意識に對してそれ等は、或る程度まで無意識を支配する力を與へるのである。例へばヒステリー的恐怖症又は外出恐怖症の意義を考へて見ると、甚だ學ぶところが多い。現に、或る神經症患者は一人で街路を橫斷することが出來ない、これは正に一つの『病徵』（又は『徵候』）と呼ばるべき

ものである。我々はこの病徴を除くために、その患者が自分で出來さうもないと思ふやうなことを强ひようと試みる。その結果は、不安の襲撃となつて現れて來るであらう。恰も街上に於ける不安の襲撃は、屢々外出恐怖症發生の源因となつたのと一般である。そこで吾人には、病徴が不安の勃發に對して自衛するために成生してゐることが分るのである。恐怖症の不安に對するは、恰も城砦の國境に對するが如きものである。

【註】（一）素人が大抵看過してゐる、第二の、遙かに重要な、深い契機に次の如きことである。願望實現は確かに快樂を齎すに相違はない。併し誰に齎すのかと云ふ事が問題になる。勿論、願望を抱いた當人に齎すのである。ところが私たちは夢見た人がそれの夢に對する態度は特殊なものだといふことを知つてゐる。彼はその願望を非難し、檢閲する。約言すれば、彼はそれを好まないのだ。であるから、この願望を充足させることは、何等の快樂を齎し得ない。寧ろ、たゞその反對のものを齎すだけである。この反對のものゝ事はまだこれから說明するが、經驗の示すところに依ると、不安の形をとつて現れて來る。であるから、夢見た人の自分の夢の願望に對する態度から云へば、夢見た人は二人の別人の合體に譬へられる。而も二人はある重要な共通點で結び付いてゐるのである。これを進んで細かく說明する代りに、私は一つの有名な童話を物語ることにする。その童話の中にはこれと同じ關係が發見せらるゝであらう。――親切な魔法使が一組の貧乏人夫婦に三つの願望を協へてやらうと約束した。夫婦は雀躍して、十分愼重にこの三つの願望を選擇しようと決心した。ところが妻は隣の家で炙いゝ

ゐる腸詰の香ひに迷はされて、あゝあんな腸詰を一對欲しいなと思つた。忽ち腸詰が目前に現れた。これで第一の願望が實現されたのである。これを見て夫は立腹して憤怒のあまり、こんな腸詰など女房の鼻先にぶら下れと願つた。その願望は實現されて腸詰は女房の鼻先から落ちなかつた。これは第二の願望充足で、併しこれは亭主の願望であつて女房としてはこの願望充足は甚だ不快である。それからこの童話はどうなるか、誰でもよく知つてゐる。二人は結局、夫婦として一體であるのだから、腸詰が女房の鼻先からとれる事を第三に願望したに相違ない。我々はこの童話をいろ〳〵な意味で利用したいのであるが、こゝではたゞ、二人が互に一致しない場合には、一人の願望充足は他方の不快となり得るものだといふことの說明として役立たしめておく。』(„Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse,“ XIV)

これ等の現象に於いて感情基礎(アッフェクト)が如何なる役割を果すかを明かにしなければ、我々はこの論を續け得ない。併しそれを明にすることは、こゝではあまり十分にやつてはをられない。であるから、我々はかう云ふ命題を與へておく。――無意識の禁壓が絕對的に必要になるのは、表象の發出を放任しておくと無意識の中に一つの感情の基礎を生ぜしめるからであつて、その感情の基礎は元來快(ルスト)の性質を帶びてゐたものであるが、抑壓の現れて以來不快(ウンルスト)の性質を帶びてゐるのである。禁壓の目的はこの不快の生ずるのを遏むるにあるのだが、而もまたさう云ふ結果にもなつてゐるのである。禁壓は無意識

感情基礎發展の性質は原動的な祕奥な活動と見られるが、無意識表象に於ける神經作用の鍵はそこに存するのである。前意識側の支配力のために、これ等の表象は、云はゞ首をしめられ、感情基礎發生の衝動の出口に於いて禁止せらるゝのである。それ故に、前意識がエネルギーの纒綿を中止した場合の危險は、無意識的亢奮が——前に起つてゐる抑壓の歸結として——不快として、不安としてのみ認識され得るやうな感情基礎を解放すると

いふ事實に存するのである。

この危險は夢の現象を放任することに依つて、野に放たれる。この危險の實現の條件は、抑壓が起つてゐること、さうして禁壓されてゐる願望感情が十分に強くなりさうだと云ふに存する。このやうにそれ等の條件は夢の構造の精神領域以外に立つてゐる。もし我々の主題が、唯一つの契機（即ち睡眠中の無意識解放）を通じて、不安發生の主題に關係してゐなかつたならば、我々はこのやうな不安の夢などゝ云ふ論議は廢めにして、かくてこれに關聯した一切の不明な問題を避けることも出來たであらう。

私が今まで屢々繰返して來たやうに、不安の夢の理論は神經症の心理學に屬するのである。私は夢

の中の不安は夢の問題ではなくて不安の問題だと云ひたい。我々は夢の中の不安が夢の現象の主題と交渉する點を一度證明したならば、それからはもうこの不安は我々の問題にはならないのだ。たゞ私のなすべきことは一つだけ殘つてゐる。私は神經症的不安は性的源泉に發すると斷定しておいたのだから、私は不安の夢を分析に附してそこに性的材料の存在を證明することが出來るのである。

私自身としては不安の夢は幾十年來見たことはないのである。私が七つか八つの頃に見た夢にさう云ふのがあつて、それを三十年もたつてから註釋して見た。その夢は非常に躍如としてゐて、そこにいかにもなつかしい母が出て來る。母は特別に靜かな寢顏を見せ、鳥の嘴を持つた二人（或は三人）の人間に舁がれて寢臺のまゝで部屋に這入つて來る。私は泣き叫びつゝ眼を醒まし、兩親を起してしまつた。嘴を持つた非常に背の高い、奇妙な服裝をした形象は、私はフィリップスンの聖書の挿畫から採つて來たのであつた。その挿畫にはエヂプトの墓場の浮彫から來たハイ鷹の頭を持つた神々が描いてあつたと思ふ。分析に依つてまた或る腕白な門番の子供の追憶が出て來た。彼は我々子供と一緒に家の前でいつも遊んでゐた。而も彼の名前がフィリップであつた。私はこの少年から始めて――敎育ある者の間ではラテン語の“coitus”を以て置換へられてゐるところの――性交を意味する卑しい言葉を聞いたやうな氣がする。併しこの性交への暗示は、夢が鳥の首を擇んだことに依つて明かに示されてゐ

る。私はその言葉に性的意義の有る事を、このませた先生の顏つきに依つて感知したに相違ない。夢の中での私の母の相貌は私の祖父の顏からとつたもので、この祖父の顏を私は彼が死の數日前に嗜眠狀態で鼾をかいてゐるのを見たのであつた。それ故に、夢に於ける第二次的の仕上げを註釋すれば、母は死んでゐると云ふことなのだ。さうなれば墓場の浮彫も利いて來る。私は不安のあまり眼を覺まし、兩親を起さないと氣持が靜まらなかつた。私は母と顏を見合せて、彼女の生きてゐることの確證を得たかの如く忽ち安心したことを覺えてゐる。併し夢のこの第二次的の註釋は、旣に發展した不安の影響の下に起つてゐたのだ。母が死んだ夢を見たから不安になつたのではなくて、私が旣にさう云ふ不安に襲はれてゐたから、夢を前意識的仕上げでさう云ふ風に註釋したのだ。併しながら、この不安は抑壓に依つて一つの仄暗い、確かに性的な慾望にまで辿ることが出來る。さうしてその慾望が夢の視覺內容に於いてそのよい表現を見出したのであつた。

二十七歲になる男で、この一年ほど大病を煩つて來た人が、十一歲と十三歲の間に數々の恐ろしい夢を見た。斧を持つた男が彼を追掛けて來る、彼は逃げようと思ふが痺れたやうになつてその場を動けない。これは甚だ普通の、一見したところでは性的には無關係な不安の夢のよき一例證と見られるかも知れない。併し分析に當つて、夢の本人はまづ彼が叔父から聽いた話を思ひ出したのである。その

話は時間的にはその夢よりは後で、彼が夜或る怪しげな人間に襲はれたといふのである。この事からして彼は夢の時に既にそれと似たやうな話を聞いてゐたに相違ないと自分で信ずるやうになつた。斧のことに關しては、彼はその生涯のその時期に於いて、嘗て木を割つてゐる内に手を怪我したことを思ひ出した。この事からして直ぐ弟のことが思ひ出された。彼は始終この弟をいぢめたり毆り倒したりしてゐた。殊に彼は或る時、弟の頭を長靴で蹴飛ばして血を出した事を思ひ出した。母はその時、『あの子はいつかは弟を殺すのぢやないかしら……』と云つた。この暴行の事を考へてゐるらしく見えてゐた彼は、突然九歳の時の思ひ出が甦つて來た。兩親は夜遲く家に歸り、彼が假寢をしてゐる内に、二人は寢床へ這入つた。彼には直ちに喘ぎやその他の彼にも不思議な騷音が聞えて來た。さうしてまた寢床の中の兩人の位置も察することが出來た。彼の聯想は更に進んで、彼の兩親の間の關係は彼の弟に對する關係と同じだと思つた。彼は兩親の間の出來事を『はたし合ひ、負かし合ひ』といふ概念で理解し、かくして、子供が屢々さう考へるやうに、性行爲を加虐性的なものと解するやうになつた。この了解への確證として、彼は屢々母の寢床に血を見たのであつた。

成人の性交がそれを見る子供等に不思議であり、また彼等に恐怖を惹起すことは、私は敢へて云ふが、毎日のやうに經驗する事實である。私はこの恐怖を說明するに、性的亢奮が彼等の腑に落ちず、

また彼等の兩親がその亢奮に罹つてゐるといふのが恐らく首肯し兼ねるのだといふ事實を以てした。同じ理由でこの亢奮は恐怖に轉換される。人生のもつと夙い時期に於いては、異性親に向けられた性的感情は、抑壓を受けずして自由に表現せらるゝことは、既に述べた通りである。(二)

【註】(一)『……子供の性的願望——このやうな發芽的狀態に於けるものが、この名に價するならば——は甚だ夙く眼覺めるものであり、また娘の最初の傾きは父に、男兒の最初の嬰兒的慾望は母に、向けられるものであることが分るのである。……』云々。(„Die Traumdentung." s. 178)

錯覺を伴ふ夜驚症(pavor nocturnus)は屢々子供に於いて發見せらるゝが、これに對しても私は躊躇なく同じ說明を與へようと思ふ。これもまた憶に首肯し難ねて拒否せられた性的感情であらう。もしこの感情を注意して見るならば、恐らく一時的の週期性を示すやうになるであらう。何となれば、性的リビドーの高まりは自發的な漸層的な發展過程にも依るが、また同樣に一時的の亢奮的印象に依つても生み出されるからである。

私にはこの說明を爲し徹すに必要なだけの觀察的材料が缺けてゐる。而もまた小兒科醫の方では一定の見地を持合せてゐないらしいのである。この一定の見地があつてこそ、肉體的の側からにせよ、精神的の側からにせよ、これ等の現象の全分野を理解することが出來るのである。神話的醫學の眼か

くしを掛けた人が右に述べたやうな場合を如何に理解し得ないものであるかを具體的に説明し得る滑稽な一例證として、ドバッカー Debacker 1881 (p. 66) の『夜驚症』に關する一論を述べて見よう。十三歳になる蒲柳の質の一少年が不安になり夢想的になり始めた。彼の眠りは落着きがなくなり、一週間に一度は錯覺を伴つた恐怖に襲はれて眠られないことがあつた。これ等の夢の記憶は必ず非常に判然たるものであつた。彼はかうその夢を語つてゐる。惡魔が彼に向つて叫ぶ『さァ、捉へるぞ。さァ捉へるぞ。』さうしてそれに次いで硫黄の匂ひがする。火が彼の皮膚を燒く。この夢のために恐怖に打たれて彼は眼がさめてしまふ。彼は始めは叫ぶことが出來なかつた。やがて聲が出るやうになると彼は判然とかう云ふ。『いゝえ、いゝえ、私ぢやありません。どうしてゞす、私は何もいたしません。』とか、或は『どうぞもう御免、これからは決して致しません。』時々にはまた彼はかう云つた、『アルベールはそんなことはしません。』と。その後では彼は着物を脱ぐことを避ける。何故ならば、火は彼が着物を脱いだ時に襲うて來るからだと云ふ。これ等の惡夢のために彼は健康を損うたが、その間に彼は田舍に行つて、そこで一年半の間に健康を復した。併し十五歳の時に、彼は嘗て告白した。"Je n'osais pa l'avoner, mais j'éprouvais continuellment des picotements et des surexcitations aux *parties*; à la fin, cela m'enervait tant que plusieurs fois, j'ai pensé me jeter par la fenêtre au dortoir." (『私は敢

へて告白するが、私は絶えず局部(バルティ)に痛みと極度の亢奮とを覺えた。遂に私はあまりに神經がたかぶつて寢室の窓から身を投げようと思つたほどであつた。』)

【註】(一) フロイドはこの語を特別の組方にさせてゐるが、さうしてなくとも誤解される事はないと脚註の中で云つてゐる。(譯者)

これは次のやうな推察を下すことは困難でない。一、この少年は以前に手淫を行つたに相違ない。多分それを否定したであらう。さうしてこの間違つた行ひのために激烈な懲罰を以て脅されたのである。(彼の告白を見よ。『これからは決して致しません。』彼の否定に曰く『アルベールはそんなことはいたしません』) 二、思春期の壓迫の下に、性器をいぢくることから自慰の誘惑が再發した。三、併し今日では抑壓の苦鬪が彼の內に起り、リビドーを禁壓してこれを恐怖に變ぜしめた。さうしてこの恐怖が次に懲罰の形をとり、この懲罰に依つて彼は脅かされたのである。

併しながら、我々はドバッカーの結論を引用しよう。右のやうな觀察から、かう云ふことが分るといふのである。

一、蒲柳の質の少年に於いては、思春期の影響は極端な衰弱を齎し、また甚だ著しい大腦破綻(ここ)に導くものである。

二、この大腦の破綻は性格の變化と惡魔狂的錯覺、夜間並びに、恐らくは晝間の不安狀態を生ぜしめる。

三、惡魔狂と晝間の自己苛責とは、患者が少年として受けた宗教教育の影響にその原因を辿ることが出來る。

四、一切の病的顯現は、田舍に長く行つてゐたこと、體育を行つたこと、思春期の終熄と共に體力の復活して來たことなどの結果として消失した。

五、該少年の大腦狀態の生起する先天性的勢力は、遺傳並びに父親の漫性黴毒に歸し得よう。

同著者は結論としてかう云つてゐる。"Nous avons fait entrer cette observation dans le cadre des délires apyrétiques d'inanition, car c'est à l'ischémie cérébrale que nous rattachons cet état particulier." 『吾人はこれ等の觀察を營養不良の無熱錯亂の限界内に入れておく、何となれば、吾人はこの特殊なる狀態を大腦の血行閉止に歸するからである。』

【註】（一）圈點はフロイドの付したもの。なほ二四四頁の鳥の夢に關してはドイツ語で鳥を Vogel と云ひ、それが卑しい言葉の Vöglen の起源となつたとブリル氏は註してゐる事を附言しておく。（譯者）

第十章

第一次的及び第二次的現象——抑壓

夢の現象の心理學に一層深く侵入しようとの試みを敢てして、私は一つの困難な仕事を企てたものである。私の記述力では及びさうにもない。言葉の繼起に依る記述を以てしてこれほど錯綜した事柄の連續の同時性を再現したり、またさうするに就いて何れを書く時にも何の成心もないやうに現はさうとしたりする事は、私の力にはあまりに重荷であらう。私は夢の心理を記述するに際し、私の見解の歴史的發展に從ふことは出來なかつたといふ事實を、玆に謝さねばならぬ。夢に就いての私の考への見地は神經症の心理を夙い頃研究してゐた間に到達したもので、その見地の事はこゝでは言及すべきでないのだが、併しそれへ私は屢々言及しなければならないのである。寧ろ私は反對の方向に進んで、夢から出發して神經症の心理との關係を確立したいと思ふてゐるのであるが——。この困難からして、讀者にとつては多くの不便が生じ來ることは私もよく承知してゐるが、併し私はその不便を回避するの途を知らないのである。

から云ふ有樣では困るからして、私は寧ろ別の見地を問題にしようと思ふ。その方が私の努力の價値を高めるやうに思はれる。第一章（『補說』の）の序に示しておいた通り、私は權威的諸學者の側に於いて鋭い矛盾を示してゐる問題に逢着したのであつた。夢の問題を細かく調べて見て、これ等の矛盾の多くには容認すべき餘地あることを發見した。併しながら吾人は、言明せられてゐる二つの見解だけは決定的な例外としなければならなかつた。卽ち、夢は無意味なものだといふことゝ、夢は身體的な現象だとすることゝだ。それ以外では吾人は錯雜した議論のあちこちに於ける矛盾した見解を總て受容れねばならなかつたし、また吾人はそれ等の見解が何等かの正しいものを發見してゐるのを證明することが出來た。夢は覺醒時の刺戟と興味とを持續すると云ふことは、夢の潛在思想の發見に依つて全然一般的に確認せられた。これ等の潛在思想は重要と思はれるもの、またその瞬間我々に興味あるものゝみに關心する。夢は決してつまらないものに拘泥しない。併し吾人はまた、夢が晝間のつまらない殘物を搔き集める、また夢は覺醒活動から如何樣にか引退がるまでは晝間の大きな問題を取上げ得ないものだ、といふやうな反對の見解にも贊成した。吾人はまた、夢の思想に歪みを與へることに依つてその表現を變へる夢の內容に就いても、この事があてはまるのを知つた。聯想の機構からして、夢の現象は、覺醒時の心的活動にまだ取上げられない、最近の又は重要ならぬ材料を一層容易

に捉へるものであると云つた。また檢閲なるものがあるために、夢は精神的激しさを重要な、併し不快な材料から重要ならぬ材料へと移すのである。夢のヒペルムネシィ（變態的に鋭い記憶）のあることゝ嬰兒的な材料に依據することゝが吾人の說の主要な支持點となつて來たのだ。吾人の夢の說では嬰兒期に發源する願望に夢の構成の缺くべからざる原動を歸したのである。外界からの感覺的刺戟の睡眠中の意義は實驗的に證明せられたもので、吾人は勿論それを疑はうなどとは考へることは出來なかつた。併し吾人はこの材料を、夢の願望に對しては、覺醒時の活動からの思想殘物と同じ關係においたのであつた。夢が客觀的の感覺刺戟を解釋するのは錯覺のやり方と同じだといふ事は論議の必要がない。併し吾人は諸學者に解決のつかないまゝになつてゐた動機をこの解釋に供したのであつた。その解釋では、知覺せられた對象は、眠りの攪亂には無害に、願望の充足には有用であるといふことになつた。睡眠中に於ける感覺機關の主觀的亢奮狀態は、トルムブル・ラッドこの證明したところであるやうだが、吾人はやはりそれを特別な夢の源泉とは考へない。吾人は寧ろそれを、夢の背後に働く亢奮が退行して生彩を放つたものとして說明することが出來るのである。內的有機的の感覺は夢の說明の主眼點と好んでせらるゝが、これとても我々の考へではあまり大した役割は果さない。これ等――墜落、飛行又は阻止の感覺――は、夢の仕事が必要の起る度に、夢の思想を表現するために用ふ

る不斷のとつときの材料である。

〔註〕（一） Ladd, Contribution to the Psychology of visual dreams Mind, April 1892.

夢の現象は迅速な、瞬間的なものだとのことは、既に出來上つた夢の内容を意識に依つて知覺する時には、眞であるやうだ。夢の現象の先行的な部分は、多分徐々として波動的な道程をとる。あまりにも豐富な夢の内容が一瞬間の内に壓縮せられるのは、殆ど完全に出來上つてゐる構造を精神生活の中から摑み出して來るからだと說明する事に依つて、吾人はこの謎を解いたのである。夢が記憶に依つて變形せられ歪められるといふは正しいが、別に面倒ではないことを我々は知つてゐる。何となれば、これは夢の仕事の始めから働いて來た歪みの仕事の中で最後に顯現する業であるに過ぎぬからである。精神生活は夜中に眠るか、或は晝間と同じやうに全てのその能力を用ふることが出來るか何れかといふ困つた、調停し難く見える反對說に於いては、吾人は兩方に贊成して來たのであるが、併し何れとも全然一致するといふわけではなかつた。吾人は夢の思想が精神裝置の供する殆ど一切の手段を用ゐて最も錯雜した知的活動を表すといふことの證明を發見したが、而もこれ等の夢の思想が晝間の内に發源してゐる事は否定出來ないし、また精神生活の睡眠狀態なるものがあることもどうしても假定しなければならぬ。かくて部分的睡眠說と云つたやうなものすら出て來たのであるが、併し睡眠

狀態の特質は精神的事情の破綻の中に見出されるのではなくて、晝間支配してゐた精神組織が眠りの慾望を起してその働きを中止することに見出されるのである。外界からの撤退といふこともまた我々として考へて見るだけの意義がある。固より唯一の素因ではないが、それもやはり退行を助けて夢の表象を可能ならしむるものである。表象の道程を勝手に導かないやうにすることも問題にする餘地はない。併し精神生活はそのために無目的にはならない。何となれば吾人が旣に見て來たやうに、意志せられた目的表象が捨てられると、意志せられない目的表象が勢力を占めるからである。緊密ならぬ聯想關係が夢にある事は、吾人これを否定しないのみならず、却つて吾人は人の思ふより以上に廣大な領域をその支配下に指定したのである。吾人は、併しながら、それが他の正當な有意味なもの丶單なる表面的代償であることを發見したのである。慥かに吾人はまた、夢を矛盾したものと云つたが、併しいろ〳〵な實例に就いて見るに、夢が矛盾を裝ふ時にも實はなか〳〵賢いものだといふことを吾人は知ることが出來たのである。夢には種々な機能があるといはれてゐるが、吾人はどれも否定はせぬ。夢が安全瓣のやうに心を解放することや、ローベルトの云ふやうに、夢が一切の有害な材料を表象に依つて無害にするといふ事は、夢には二重の願望充足があるとする我々の說と正に一致するばかりでなく、また、彼の言葉のまゝでも、ローベルトに對してよりは我々に對して一層分りよくさへな

るのである。心がその能力の自由な發揮に耽ることは、我々に於いては、前意識の活動の側が、夢に何の干渉もしないことの形で現れる。『精神生活が夢に於いて胎兒狀態に還る』ことや、ハヴロック・エリスの所謂『廣汎な感情や不完全な思想の古き世界』などは、晝間は禁壓されてゐる仕事の原始的方法が夢の形式に與るのだとの我々の論を、喜ばしくも豫想するものゝ如く思はれる。またスッリーの『夢は我々の以前に順々に發展した人格を再現し、我々の昔の姿を、事物を見せ、以前に我々を支配した衝動や反動を示す』との說は、そつくりそのまゝ我々の說とすることが出來る。ドラーデも云つてゐる通り、我々も『抑壓せられたもの』を夢の主要源泉とするものである。

【註】（一）J. Sully, Delage 共に現代のフランス心理學者。夢の硏究論文多し。（譯者）

夢の空想の果す役割だとシェルネルのしたところ、並びに彼の註釋法、共に吾人はそつくりそのまゝ承認するのだが、併し我々はこれを、云はゞ、この問題の他の方面へ導いて行かなければならないのである。夢が空想（ファンタジー）を造るのではなくして、無意識的の空想活動が夢の思想の造られるに就いて大きな役割を持つのである。シェルネルが夢の思想の源泉を暗示して吳れたことは我々も大いにお蔭を被つてゐるのだが、併し彼が夢の仕事に歸してゐる殆ど總てのものは無意識の活動に歸することが出來るのだ。この活動は晝間も仕事をしてゐるし、またこれは夢に亢奮を供するばかりでなく、神經症的

徴候に對しても同樣に供するのである。吾人は夢の仕事をこの活動から、全然違つた或るものとしてまた遙かに制限せられたものとして、區別しなければならなかつた。最後に云つておくが、吾人は夢と心の攪亂との關係を決して棄てたのではなく、寧ろその反對に、吾人は新立場に於ける一層堅固な基礎をそれに與へたのである。

このやうに吾人の說の新材料に依つて、宛も新統一に依つてのやうに、纏め上げられて、諸學者間の非常にまち〳〵な非常に矛盾した結論が、或るものは別の構造を具へ、たゞ少數のものが全然排棄せられて、總て我々の建造の內に適用せられてゐるのを見るのである。けれども我々の建造とてもまだ完成してはゐない。何となれば、心理の暗路に進み入るに當つて我々の必然的に逢着した數々の不明なものを度外視した爲めに、我々は今や一見、新たな矛盾に面喰つてゐるのである。一方、吾人は夢の思想を、完全に常態(ノルマール)な心の働きから出づるものとしておきながら、他方に於いて吾人は全然變態(アブノルム)的な心的現象を夢の思想の中に、ひいてはまた夢の內容の中に、發見したのであつた。そこで我々はそれを夢の註釋に於いて繰返しておいたのである。吾人が『夢の仕事』と名付けたものは、吾人が正しと認めた精神的現象からは非常に緣遠くて、夢の低い精神活動に關する諸學者の最も峻嚴な判斷が吾人には非常に根柢があるやうに見えるほどである。

もつとよく教へたり助力したりするのは、多分も少し進歩してからのことであらう。私は夢の形成に導く觀念群座(コンステラチオンネン)の一つを取出して見よう。

【註】(一) Konstellation, 直譯すれば『星座』といふ語であるが、こゝではコムプレクスが意識面に出てゐる時の狀態を云ふ。情緖の纏はつてゐる、意識面の觀念群であると云つてよからう。(譯者)

吾人は夢が、完全に論理的に形成せられてゐる(晝間の生活から引出されて來た)多くの思想を置換へることを知つてゐる。それ故に、吾人はこれ等の思想が吾人の常態(ノルマール)の心的生活から發源して來たものであることを疑ひ得ない。吾人が心の働きの中で尊重する總ての性質、それあるが故に心の働きが一層高等な錯雜した活動として認められるところの總ての性質が、夢の思想の中に繰返されてゐるのを吾人は發見する。併しながら、この心の働きが眠りの中に行はれるのだと考へる必要はない。それではこれまで吾人が睡眠の精神狀態に關して固執して來た考へが臺なしになつてしまふ。これ等の思想は正に晝間から發源したものであり、また始めから我々の意識にこそ氣付かれね、その發展を續けて遂に眠りの始まるところで完成するのである。このやうな事情からして何事かを結論して來ようとならば、まづ大抵の錯綜した心の働きは意識の協働なくして可能だといふ位のことであらう。この事ならば吾人が旣に、ヒステリー患者や强迫觀念の人をいろ〳〵精神分析して見て、知つてゐたことで

ある。これ等の夢の思想は慥に意識的となる力はない。もしそれ等が晝間我々の意識に上らぬとすれば、それにはさま〴〵な理由がなければならない。意識狀態は或る精神的機能、即ち注意に懸つてゐる。注意は一定量だけさし向けられるらしく、また他の目的に依つて、問題の思想の流れから撤回せられたらしい。そのやうな思想の流れが意識から保留されてゐる道は次のやうである。——我々が意識的に反省するところに依れば、意識を働かしてゐる時には、我々は一定の道程を追及してゐるのである。けれども、もしその道程が批判者とその合はない觀念へ行き着くと、我々は注意を向けておくことを中止する。さて、このやうにして始まりこのやうにして棄てられた思想の流れは再び注意を牽くことなくして進んでゐるが、殊に著しく激しい個所にさしかゝるとまた注意が呼戾されて來るのである。心的行爲の實際目的には不正であるとか不適當であるとか云ふ理由で、判斷力に依つて始めに（多分意識を伴うて）拒否せられたことは、それ故に、心的現象が睡眠の始まるまで、意識に依つては注意せられることなしに續いてゐることの原因であるらしいのである。

要約すれば、そのやうな思想の流れを吾人は前意識と呼ぶ、吾人はそれを完全に正確だと信じてゐる、またそれは一層等閑に附せられた思想、又は阻止せられ、禁壓せられた思想であらう。吾人はまた如何にしてこの思想の流れを抱くやうになるかを述べて見よう。吾人が『纏綿エネルギー』と呼ん

でゐる若干量の亢奮は、かの目的表象に依つて擇ばれた聯想の道の間中、目的表象から轉位せられると吾人は信ずる。『等閑に附せられた』思想の流れはそのやうな纒綿を受けなかつた。また『禁壓せられた』思想や『拒否せられた』思想からはこの纒綿は撤回せられた。かくて兩者にはそれ自身の感情しか殘つてゐないことになつてゐるのである。目的の纒綿した思想の流れは、或る條件の下に於いては、意識の注意を己れの上に牽付けることが出來るやうになる。さうしてその意識の力に依つて『過剩纒綿（ユーベルベゼツツング）』を受けるのである。意識の本性及び活動に關する我々の考へを、少し後に明かにしておかなければならないやうになるであらう。

このやうにして前意識内に惹起された思想の流れは、自發的に消失したり持續したりすることが出來る。第一の場合はかうなると我々は考へてゐる——その思想は自分から派生するあらゆる聯想の路を通じてその亢奮を分散し、さうして觀念の鎖全體を亢奮狀態に投ずる。するとその亢奮狀態は暫時續いて後衰へ、やがてこの出口を求むる亢奮は靜まれるエネルギーにと變つて行く。この第一の成行きが濟んでしまへば、もうこの現象は夢の形成には何の意義も持たなくなるのである。けれども他の目的表象が我々の前意識中に潛んでゐる。この目的表象は我々の無意識の、また常に能動的な願望から發源してゐるのである。これ等の目的表象は、棄てられた思想の圈内にある亢奮を捉へ、それへ持

つて行つて無意識的願望に內具するエネルギーを移すことが出來る。さうしてこれからは、等閑に附せられた、或は禁壓せられた思想の流れはそれ自身を支持し得るやうになるが、併しこの强まりでは意識に近付く役には立たない。これまでの前意識的な思想の流れは無意識中へ引入れられたのだと、我々は云ふことが出來る。

夢の構成にあてられる他の觀念群座は、前意識的思想の流れが始めから無意識願望と結合してゐた場合であらう。さうしてその理由のために、勢力ある目的纏綿のために拒否せられた場合であらう。或は無意識的願望が他の——何等かの物的な（ソマチッシュ）——根據に依つて能動的となり、また妥協的でなく（前意識の纏綿しない）精神的殘物へと轉嫁を求めた場合である。總て三つの場合は結合して一つの成行きとなり、かくて前意識中に一つの思想の流れが出來上るやうになるのである。この思想の流れは前意識の纏綿に捨てられて、無意識的願望から纏綿を受けるやうになつたのである。

この思想の流れは、これからは、一聯の變形を受けるが、我々には最早これを常態（ノルマール）の精神現象とは認められないし、またこれは我々の驚くやうな結果を、即ち精神病的構成を、生ずるのである。我々はこれ等のことを明白にし、また類別して見よう。

一、個々の觀念の激しさがそれの極度に達すると發出することが出來るやうになり、一觀念から他

觀念へと進むで、やがて著しい激しさを持つた個々觀念を形作るやうになる。かう云ふ過程が幾度も繰返されてゐる内に、一つの全思想列の激しさが遂ひに一つの個々の觀念要素に集約せらるゝことがある。これが壓縮(コムプレッション)又は凝縮(フェルディヒツング)の事實であつて、吾人は既に『夢の仕事』のところでこれには馴染である。夢が不思議なのは主として凝縮のせゐである、何となれば、常態の精神生活に於いても、意識に近付き得る精神生活に於いても、これに似た何物も吾人は全然知らないからである。吾人はここでまた、全思想列の結帶として又は最終の結果(エンドエルゲーブニス)として、大きな精神的意義を有する觀念を有してゐるのであるが、併しこの價値あるものは内的に知覺され得るだけの顯著な性質を示してをらぬのである。であるから、その中に表象されてゐるものも一向激しさを增さぬのである。凝縮現象に於いては總ての精神的關係が表象内容の激しさに變形せられるやうになる。これは丁度書物の中で、本文の理解のために或る語を太く又はまばらに印刷させるのと同じである。口で云ふ時には、その同じ言葉は大きな聲で云つたり、故意的に云つたり、力を込めて云つたりするであらう。最初の比較は直ぐに『夢の仕事』のところでの一例に我々を導いて行く。(イルマの注射の中のトリメシラミン。)美術史家の教ふるところに依ると、大抵の古代の物語的彫刻に於いては、表現上これと似た原則に基き、人間の階級を像の大小に依つて示してゐるといふ事實がある。王はその臣下又は征服せられた敵の二三倍

の大きさに作られてゐる。然るにローマ時代の或る美術作品は、同じ目的を果すためにもつと精巧な手段を用ゐてゐる。皇帝の姿は中央に確乎と、眞直に、据ゑてある。特別な注意を拂つて王の姿は寫してある。彼の敵はその脚下に伏してゐる。併し王はもう矮人の中の巨人のやうには表はされてはゐない。併しながら、下級の者が高級の者に頭を下げるのは昔の表象原則の反響たるに過ぎない。

夢の凝縮がとる方向は、一方に於いては夢の思想の正しい前意識的諸關係に依つて定められ、他方また無意識に於ける視覺的記憶の牽きつける力に依つて定められる。凝縮の仕事が成功すると、知覺區劃に侵入するに是非要求せらるゝところの激しさを生ずるのである。

二、更にまた、このやうに激しさが自由に轉嫁され得るが爲めに、また凝縮のお蔭もあつて、中間(ミッテル)表象(フオルステルンゲン)――云はゞ妥協――が作られるのだ。(多くの實例參照)。これは同様に、常態の表象道程に於いては聞いたためしのないことで、常態の道程に於いてはこの事は、何よりも『正當(リヒチッヒ)』の表象要素の選擇及び確保の問題である。他方に於いて、混合的、妥協的の形成は、我々が前意識的思想のために言語上の表現を發見しようと試みてゐる時に、異常に屢々起るものである。これが『口すべり』と云はれるものである。

三、相互に激しさを移し合ふ表象はその結合が甚だ緊密でなく、また我々の眞面目な思想の中には

入れられず、機智の效果を生ずるためにのみ用ゐられるやうな形式の聯想に依つて結ばれてゐる。これ等の內には我々は特に、和音の聯想及び語音の聯想を發見するのである。

四、相矛盾する思想は相互に排濟し合はないで、竝存してゐる。彼等は屢々結合して凝縮を生み、そこに宛も何等の矛盾が存在せぬかの如くである。或は彼等は妥協をし合うてゐるが、我々はそれを思想上では決して許容しないが、我々の行動上では屢々認許してゐるのである。

これ等の現象は、さきに合理的に作上げられた夢の思想が、夢の仕事の進む內に從ふところの變態的現象の內、最も顯著な二三である。纒綿するエネルギーを動かし發出せしめる事實に一切の價値が與へられてゐることに、吾人はこれ等の現象の主要特長を認める。これ等のエネルギーの纒綿する精神的要素の內容及び固有の意義は、第二義的重要さのことゝなる。凝縮及び妥協は退行を俟つて始めて結果するやうに人々は思ふでもあらうが(何となれば、その時思想は影像と變ずるから)、併し、夢を分析して見ると、いや(一層判然する場合をとれば)綜合して見ると(その時は勿論、影像への退行はない)、例へば Autodidasker の夢の如きを綜合して見ると、他と同樣に轉位と凝縮との現象は現れるのである。

それ故に、吾人は、二種の本質的に相違した精神現象が夢の形成に參與するといふことを看取しな

いわけに行かない。一は常態的思想に相當するところの、完全に正しい夢の思想を作り、他はこれ等の思想を非常に驚くべき、且つ不正確なやり方で取扱ふのである。後者の現象を吾人は既に本來の夢の仕事として特別扱ひにしておいたのである。この後者の精神現象に關しては、吾人は只今何を更に云ふべきか？

吾人がもし、神經症、殊にヒステリーの心理に對して深い洞察を持つてゐなかつたならば、吾人はこの問題には答へることは出來なかつたらう。この事からして吾人は、この同じ不正確な精神現象が――數へ上げなかつた他の諸現象も同樣に――ヒステリー病徵の構成を支配するといふことを知るのである。ヒステリーに於いてもまた、吾人の意識的思想に相當する完全に正確な一聯の思想を、吾人は直ちに發見するのである。併しそれがそのやうな形で存在することは、吾人も何等經驗し得ないところで、たゞ後から組立てるだけのことである。もしそれ等の思想が我等の知覺の中の何處かに這入り込んで來たならば、出來上つた病徵を分析して、吾人は、これ等の常態的思想が變態的取扱ひを受け、凝縮と妥協形成とに依り、表面的な聯想に由り、矛盾の假面を被り、その上退行の途を通つて、病徵にまで變形せられたのだといふことを發見する。夢の仕事と、精神神經症的徵候を形作る精神的活動とは全然同一であるところを見ると、吾人はヒステリーに就いて下さゞるを得なかつた結論を、

夢にも及ぼして當然のやうな氣がするのである。

ヒステリーの理論からして吾人は、次のやうな命題を借りて來る。——常態の思想が（嬰兒生活から發源し、さうして抑壓の狀態に現存する）無意識的願望の轉嫁のために用ゐられた時にのみ、常態の思想列はそのやうに變態的仕上げを受けるのだ。幸にしてこの命題があるので、吾人はこれを應用して、夢の願望は必ず無意識から發してゐるとの假定に基いて、夢の說を樹てたのだ。この假定は、吾人が既に容認したやうに、一般的に證明することは出來ないが、而も否定することは出來ないのである。併し今まであまり勝手に用ゐて來た『抑壓（フエルドレングング）』の何たるかを說き得るためには、我々は自分等の心理學的構造に多少の增築をせねばならないであらう。

吾人はさきに原始的精神裝置を假定しそれを詮鑿したが、その裝置の働きは、亢奮の集まることを避け出來るだけ無亢奮でゐようとの努力に制せられてゐるのである。この理由のために、それは反射裝置の圖式に倣つて建造せられ、元來內的肉體的變化に對する道であるところの言動は、原始的精神裝置の自由に發出し得る道をなしたのだ。吾人は次いで、滿足經驗の精神的結果を論じ、同時に第二の假定を紹介することも出來たのであつた。卽ち、亢奮の集積は——我々には無關係な何等かの法式に從つて——不快と知覺せられ、その裝置を動かして滿足の感情を生み、かくて亢奮が削減されるの

が快感と知覺せられると。この裝置に於けるそのやうな、不快から出發して快樂に向つて、進む流れを、吾人は願望と呼ぶのである。吾人が云つた通り、願望以外の何ものもこの裝置を動かすことは出來ない、またこの裝置に於ける亢奮の發出は、快不快の知覺に依つて自動的に制せられてゐる。最初の願望は滿足記憶の幻覺的纒綿であつたに違ひない。けれどもこの幻覺は、盡きるまで保持せられてゐないと、慾望を終らせ得ないことが、從つてまた滿足に伴ふ歡びを得る力のないことが、明かとなるのである。

かくてそこに第二の活動が――吾人の術語では、第二區劃の活動が――必要となつた。記憶纒綿を知覺にまで押遣らず、またそこから精神力を制限せしめず、寧ろ必要の刺戟から出づる亢奮を、(任意の言動を通つて外的世界を變へ、かくて滿足の對象を眞に知覺せしむるやうな)迂路に導くところの第二の活動が必要となつた。こゝまでは吾人は精神裝置の圖式を細かく調べて來たのだ。これ等二つの區劃は、十分に發達した裝置にはあるとしておいた無意識と前意識との發芽である。

言動に依つて外的世界を合目的性に變へるためには、記憶區劃に於ける幾多經驗の集積と、さまざまな目的表象に依つてこの記憶材料の中に喚込まれるところの諸關係の多種多樣な定着とが必要になる。吾人は今や吾人の假定を進める。多種多樣に探りを入れるやうな、纒綿(エネルギー)を送出してはまた引込む

この第二區劃の活動は、一方に於いてあらゆる記憶材料を完全に支配するが、併し他方に於いて、個個の心の路にエネルギーの大量を送ることは、それにとつては餘計な費えであらう。かくてはこのエネルギーは無駄に流れ去り、外的世界の變形のために用ゐらるゝ量を減ずるからである。私はそれ故合目的性のために、第二區劃が纒綿エネルギーの大部分を睡眠狀態に於いてうまく維持し、また轉位の目的のためにはほんの一小量しか用ゐないやうにしてゐるのだと假定する。これ等諸現象の機構は私には全然分らない。これ等の觀念を追及しようと欲する者は何人でも、物的類似を發見しようと試み、また神經の亢奮に際し運動の現象が生ずることを證明するために、道を開かねばならぬ。私はたゞ第一のΨ區劃の活動は亢奮量の自由なる流出に向けられてゐるし、また第二區劃はそれから出づるエネルギーに依つてこの流出を阻止する、つまりそれは多分水準を高めることに依つて睡眠エネルギーへの變形を生ずるのだ、と云ふ考へを持つてゐるだけである。私はそれ故に、第二區劃の支配下にあつては、亢奮の道程は第一區劃の支配下にあるのとは全然異つた機構的條件に結びつけられると考へる。第二區劃がその試驗的な心的仕事を終ると、亢奮の阻止と過多もやまり、これ等の亢奮は言動の方へと流れて行く。

我々がもしこの第二區劃に依る發出の阻止が不快原則に依る制約に對して持つ關係を考へるならば

そこに興味ある一聯の思想が現れて來る。で、第一次的の滿足感情の反對のもの、即ち外部的恐怖の感情を探つて見よう。知覺的刺戟は原始的裝置の上に働きかけて、不快感の源泉となる。これに續いてやがて不規則的な原動の顯現があり、遂にこの裝置を知覺から撤回し、同時に不快からも撤回する、併し知覺が再出現した時にはこの顯現は直ちに已れを反覆し(多分逃避の運動として)遂に知覺は再び消失するまで續けてゐる。併し、幻覺又はその他の形で苦痛の源泉の知覺に再び纏綿する傾向は何等こゝに殘りはしないであらう。他方に於いて、第一次の裝置に於いては、不快な記憶影像が如何樣にか眼覺めるや否や、それを放棄する傾向があるであらう。それの亢奮の奔逸は慥に不快を生ずる(一層正確に云へば、生じ始める)であらうからだ。記憶から逸脫することは――それは以前に知覺から逃避したことの繰返しに過ぎないが――記憶が、知覺とは違つて、意識を亢奮させるに足るだけの性質を持たず、從つてまた自分に新しいエネルギーを牽付けるだけの性質を持たないといふ事實に依つてもまた便利になつてゐるのだ。精神現象が以前の不快な記憶からこのやうに容易に、且つ規則的に逸脫すると云ふことは、吾人に對して精神的抑壓の模範と第一例を示すものである。一般に知られてゐるやうに、不快からこのやうに逸脫することの多くは、駝鳥式處世術の多くは、覺醒者の常態的精神生活に於いてさへも證明することが出來る。

かくて、不快(逃避の)原則の結果として、第一Ψ區劃は何等かの不快なものを心的關係の中に導入することは出來ない。この區劃は願望し得るだけだ。もしこのまゝならば、經驗に依つて貯藏せられた一切の記憶を自由にすべき第二區劃の心的活動は妨げられるであらう。併し、今や二つの道が開けてゐる。第二區劃の仕事は、不快原則から完全に己れを解放し不快な追憶に全然注意を拂はないやうにするか、或は不快を解放しないやうな風に不快な記憶に纒綿するかだ。第一の方は不可能だと云ひ得る、何となれば不快原則はまた第二區劃の感情發出の制約者としても現れるからである。そこで我我は第二の方が可能であらうと向つて行く、この區劃は追憶の發出を阻止するやうな風に追憶に纒綿する、そこで、また不快の發展に對して原動神經作用に比較し得るやうな發出を禁壓するのである。このやうに、二つの點からして、吾人は第二區劃を通じての纒綿は同時に感情發出に對する禁壓であるとの假定に導かれるのである。卽ち、第一の點は、苦痛逃避を考慮することからであり、第二は神經作用を最も少く用ゐる事の原則からである。併しながら、我々としてはこの事實を忘れないやうにしておかねばならぬ――これが抑壓說への鍵鑰である――卽ち、第二區劃は或る觀念から出て來る不快の發展を禁壓し得る場合にのみ、その觀念を占有(纒綿)することが出來ると。この禁壓を遁れるものはまた第二區劃に對して近付くべからざるものとして殘る。さうして直ぐに不快逃避の原則に從つ

て棄てられる。併しながら、不快の禁壓に徹底的であるには及ばぬ。それの始まりは許しておかねばならぬ、何となれば、さうしておけば記憶の性質も、心の求むる目的に適用して損失の行くことも、第二區劃に知れるからである。

第一區劃に依つてのみ許容される精神現象を私は第一次的現象と呼ぶ。さうして第二區劃の禁壓から結果し來るものを私は第二次現象と呼ぶ。私は第二區劃が何の目的のために第一次現象を是正しなければならないかを、別の點で示すことが出來る。第一次現象が亢奮の發出を努めるのは、かくして集められた亢奮の總量に依つて知覺同一化を確立したいからである。第二區劃はこの意向を捨てゝその代りに思想同一化を齎らさうとした。一切の思想は一つの目的表象としてとられた滿足記憶から、(言動經驗の途上で再び到達せらるべき)同じ記憶の同一化的纏綿に到るまでの迂路に過ぎぬ。思想は諸々の表象の激しさには迷はされることなしに、それ等表象間を結びつける道に興味を持たなければならぬ。併し、表象中に起る凝縮と、中間的又は妥協的形成とがこの同一化の目的達成に妨げとなる事は明かである。一觀念を他觀念に置代へるために、當然ならば本來の觀念から續いて來た道から逸脫する。そのやうな過程はそれ故に、第二次思想に於いては注意深く避けられてゐる。また不快逃避の原則も思想同一化を求める心的過程の進みを阻む事(當り前ならば、それは心的現象に最も重要な

出發點を供するのだが）も、これを理解するにさして困難でない。思想の傾向は、不快逃避の原則に依つて專ら制約せらるゝ事から愈々己れを自由にする方へ、また心の働きに依つて感情發展を記號として必要な最小限度にまで制限する方へ、行かねばならない。このやうな活動の洗練は、意識に依つてエネルギーが最近に纏綿したために到達せられたに相違ない。けれども吾人は、このやうな洗練が最も常態の精神生活に於いてさへも、完全に成功することは稀であり、またわれ〳〵の思想は不快逃避の原則の干渉のためにいつも僞に近付き得るものであることを承知してゐる。

併しながら、この事は我々の精神裝置の機能的能力の破綻ではない。この能力に依つて第二次的の心の働きの材料をなす思想が、第一次的精神現象に入ることが出來るのだ。この定式を以つて吾人は今や、夢やヒステリー徵候に導く仕事を記述することが出來る。このやうな不十分の場合は我々の發展の歷史からの二つの要素の結合から結果してゐる。その一つは精神裝置にのみ屬し、さうして二區劃の關係に對して決定的な勢力を及ぼしてゐる。然るに他方はその働きが動搖定まりなく、精神生活に有機的起源の動機的勢力を導入する。兩者ともに嬰兒生活に發源し、我々の精神的、生理的の有機體が嬰兒時代以來受けて來た變化から結果してゐる。

神經症の理論は十分な確實さを以てかう斷定してゐる――嬰兒生活からの性的願望感情のみが、兒

童の發達期間中に抑壓（感情變形）を經驗する。これ等の願望感情は發達の後期に於いて活動に復歸し、やがて復活させられる力を持つやうになる。それは或は、本來の兩性狀態から形作られてゐる性的組織の歸結としてゞあるか、或は性生活の不幸な感化の歸結としてゞあるか、何れかだ。かくて彼等はこのやうにして一切の神經症的徵候構成のために原動力を供するのである。このやうな性的勢力を假定する事に依つてのみ、今なほ抑壓說の中に存する空隙を充すことが出來るのだ。私は、性的又は嬰兒的を假定することが、また夢の說に對しても斷定せられ得るかどうかは決定しないでおかうと思ふ。私がこれを玆で未決のまゝにしておくのは、夢の願望が必ず無意識から發するとの假定に於いて、證明し得べきもの以上に一歩を踏出してゐるからである。（一）

【註】（一）こゝばかりでなく、他の所でも、この問題の取扱ひに空隙があつたが私はわざとそれをそのまゝにしておいた。何となれば、それを充たすことは、一方あまりに大きな努力を要すると共に、他方夢には無關係な材料に廣く言及せねばならないからである。それで私は『抑壓』と云ふ言葉よりも『禁壓』と云ふ言葉にまた別の意味を附すべきか否かを述べるのを避けておいたのだ。たゞ後者の方が前者よりも無意識に對しての關係を強調するといふ事だけを明かにしておいたのだ。私はこれと似た問題で何故に夢の思想もまた、意識への前進的連續を棄てゝ退行への途を擇ぶ時に、檢閱のために歪みを受けるかと云ふ問題には這入らなかつた。私は何よりも、夢の仕事の分析を更に進めて行く內に打つか

の問題に興味を呼覺したい、また途上に於いてこれ等に出會す他の題目をも指示したいと思つたのだ。一體何處でその追及を打切るべきかと云ふことは、いつだつて容易ではなかつた。私が精神性慾的生活が夢の中で如何なる役割を果すかと云ふことを十分に取扱はなかつたことや、明かに性的內容の夢の註釋を避けたことは、讀者諸氏の思ひもよらぬ特殊な理由に因るのだ。惟に、神經病理に於いて私の代表してゐる原理からすれば、醫者や科學者が不問に附してゐる性的生活を『恥づべきこと』"pudendum"として考へることは甚だ遠いことである。私はまた、『夢の象徵』の中にある性的な夢に關する章を讀者に知らせないやうにした、Artemidoros of Daldis の飜譯者の道德的謹嚴は甚だ滑稽なものであると思ふ。私自身としては、性的な夢の說明をしてゐる內に、變態性慾や兩性感のなほ未解決の問題に深くはまり込んでしまふに相違ないとの信念にのみ則つて來た。で、その理由からして、私はこの材料を他の場合にとて保留しておく。

また私は更に、夢の形成やヒステリー徵候の形成に於ける各精神力の役割の相違が、何にあるかを探究することもしない。何となれば、これをするには我々は、比較さるべき各個に就いてもつと明白な知識を持たねばならぬからである。併し私は今一つの點を重要であると考へる。で、こゝでは、私が二つの精神上の區劃、それ等の働き具合、竝に抑壓に就いてこのやうに論述を試みて來たのは、實にこの點あるがためであることを告白しておきたい。何となれば、私が問題の心理的關係を殆ど正確

に近く考へてゐるか、或は（このやうなむつかしい問題に於いては有り勝ちなやうに）間違つた遣方、斷片的な遣方で考へてゐるかと云ふやうなことは、今はあまり重大ではないからである。精神的檢閱の解釋に於いて、夢の内容の正しい仕上げや變態的仕上げの解釋に於いて、どんな變化がなされやうとも、そのやうな現象が夢の形成に於いて活動し、またそれ等が本質的にヒステリー徵候の形成に見られる現象に酷似してゐるといふ事實だけは、依然として殘るのである。夢は病理的現象ではない。またその後に心的機能の衰弱を殘しはしない。私自身の夢や神經症患者の夢からは、健康者の夢に關する何等の推論も引出し得ないとの反對は、別に註釋を要せずして駁することが出來よう。それ故に吾人がこれ等の現象からそれ等の原動力に關する結論を引出して來るとすれば、神經症の用ゐてゐる精神的機能は精神生活の病的攪亂に依つて造られたものではなく、精神裝置そのもの丶常態的構造の内に既存してゐるものであることを知るのである。精神的區劃に二種あること、檢閱がその中間に蟠つてゐること、一つの活動が他の活動に依つて禁壓せられ被はれること、兩者が意識に關係あること――それともこれ等の代りに、實際事情のもつと正確な註釋を示してもよい――總てこれ等は我々の精神上の道具の常態的構造に屬するものであつて、さうして夢はこの構造を知るに至るべき道の一つを我々に示すものである。もし我々が今まで知つて來た事の上に、完全に確立されてゐる最小限度を

加へようとならば、吾人はこれだけのことを云つておかう。――夢は禁壓された材料が常態的な人間に於いてさへも存在し、且つ精神的活動をなし得るものだとのことを我々に證明するものであると。夢それ自身はこの禁壓された材料の顯現の一つである。理論的に云へば、これは總ての場合に眞である。具體的な經驗から云へば、少くとも、夢の生活の著しい特徴を最も明かに示す如き大多數に於いて眞である。禁壓せられたる材料はそれとは矛盾するものゝ反對に依つて、覺醒狀態に於いては表現から妨げられ、内的知覺からは切斷されてゐるが、夜になると妥協形成の支配下にかくれて意識の上に進出する手段と方途とを發見するのだ。

『われもし天界を屈服せしめ得ずんば、下界を動亂に導かむ。』

„Flectere si nequeo Superos, Acheronta Movebo.“ Vergil Aen. 7. 312.

併しながら、夢の註釋は精神生活に於ける無意識を知る鍵である。

夢の分析を進める内に、吾人はこの最も驚くべき、最も神祕的な道具の構造の洞察へと多少の進歩をなしたのであつた。慥に吾人はあまり大した深入りはしなかつたが、併し他の、所謂病理的形成から進んで更に無意識の分析に入ることを許すに足る初歩だけは試みたのであつた。何となれば、病氣――少くとも、機能的と正しくも名付けられてゐるもの――はこの裝置を破壞するものではない。こ

の裝置の內部に新たな割目を作るものである。それは寧ろさまぐ＼な力の合成の强くなつたり弱くなつたりする事を以て動的に說明すべきである。この力の働きのために非常に多くの活動が、機能の常態的である間は、匿されてゐるのだ。吾人は他のところで如何に、二つの區劃からの裝置が合するために單一の區劃だけでは不可能なやうな（常態的活動の）微妙さが生れてゐるかな明かにしておいた。（二）

【註】（一）夢は、心理學に依る精神病理學に基礎を供した唯一の現象ではない。『忘却の精神機構に就いて』（一八九八年）や『思ひ違ひ論』（一八九九年）は未完成の小論であるが、それ等の論文中に於いて、同じ考への支持として、私は日常生活の中からの一群の精神的顯現を註釋しようと試みてゐる。『忘却』や『ロすべり』に關するこれ等の論やその他の論は拙著『日常生活の精神病理』（一九〇四年）中に收められてゐる。

第十一章

無意識と意識—現實

なほ仔細に檢べて見ると、前章の心理學的討議に於いて說明したのは、精神裝置の言動端に近く二區劃が存在することの假定ではなく、感情發動の過程又は方法に二種類あることの假定であることが分る。が、これは我々にとつては別の事ではない。何となれば、我々は未知の實在を一層よく解する觀念を以て補助的觀念に置換へるべき位置に來れば、何時でもその補助的觀念を放棄するだけの用意がなければならないからである。さて吾人は二つの區劃を、最も生硬な最も明白な意味に於いて、精神裝置內の二つの位置と解する（その名殘りは『抑壓』だの『侵入』だのと云ふ言葉に見えてゐる）限り、誤つて抱懷せらるべき二三の見解を是正しておかう。このやうに、無意識的觀念がやがては意識界に侵入せんとて、轉嫁のために前意識界へと努力すると我々が云ふ場合には、第二の觀念が出來上つて新しい位置に宛も行間書入れのやうに据ゑられ、それの近くに原のが依然存續してゐると云ふ意味ではない。また吾人が意識界への侵入を云々したからとて、吾人は位置の變更と云つたやうな觀念

は注意深く避けたいと思つてゐる。前意識的觀念が抑壓を受け、やがて無意識界に沒入すると云へば、領域占領と云つた風な觀念から借りたこれ等の形容に依つて吾人は、一つの秩序が實際一つの精神的位置に破れて新しい秩序が別の位置に置換へられたと云つた風に假定したくなるのである。かう云ふ比較の代りに、一つのエネルギー纒綿が或る秩序へ轉位せられ、又はそれから撤回せられ、そのために精神的構成が或る區劃(界)の支配下に落ち、或はその區劃から撤回せられるのだと云へば、一層實狀を示すに近からうかと思はれる。こゝに於いても吾人はまた、位置(局所)的な考へ方に代ふるに動的な考へ方を以てするのである。吾人に動的なものと見えるのはその精神的構成ではなくして、それの神經作用である。

とは云へ、私はなほ姑くこの二界の圖解的の見方に從つておくのが、目的にも協ひまた正當であると思ふものである。もし我々が表象、思想、竝びに精神的構成が概して神經組織の有機的要素の中に置かるべきでなく、云はゞそれ等要素の間に(こゝに抵抗と道とがあつて、それ等の要素への相互關係をなしてゐる)置かるべきだといふことを忘れさへしなければ、右のやうな考へ方の誤用は避けられるであらう。我々の內的知覺の對象たり得る一切のものは、光線の通過に依つて望遠鏡中に生ずる影像のやうに、假りのものである。けれども、その組織は何等精神的なものをその內に有せず、また

決して我々の精神的知覺に近付くことが出來ず、影像の工風をする望遠鏡のレンズに相當するものであるからして、その存在を假定することはいけなくはないのである。もし我々がこの比較を續けるならば、二界の間の檢閲は光線が別の導體へと通過する間のその屈折に相當するといふ事が出來よう。

こゝまでは自分の腕一つで心理學を叩き上げて來たが、さてこゝらで現代の心理學界の理論上の意見を顧み、それ等と自説との關係を調べて見よう。心理學に於ける無意識の問題は、斯界の權威リップス(この言に依れば、心理學上の問題といふよりは心理學の問題である。『心理的』とは『意識的』の義であり、『無意識的心理現象』などと云ふは自明的に矛盾であるなどと、言葉の上だけで、この問題を心理學が片付けてゐた間は、醫者が變態的心理狀態から得來つた觀察を心理學から尊重することは妨げられてゐた。醫者と哲學者(心理學者)とは、兩者が無意識的心理現象が『既定の事實に對する適切にして至當なる言葉』であることを認める時に始めて一致するのである。醫者としては『意識は心理の缺くべからざる特質なり』などゝ云ふ斷定は、眉を顰めて拒けざるを得ないのである。醫者としては、もし彼が哲學者の言をなほ尊敬し得るならば、自分と彼等とは同一主題を取扱ふものでなく、同一科學を追及するものでないと考へることであらう。現に、神經症患者の心理生活をたゞ一度知的に觀察したゞけでも、また夢を唯一度分析したゞけでも、何人も心理現象の名を拒み得ないところの

非常に錯雜した、正確な心的過程が、何等本人の意識を惹起すことなしに生ずるとの變らぬ信念を强ひられざるを得ないのである。成程、醫者としても、これ等の無意識的現象が意識に對して交通と觀察とを許すやうな效果を與へなかつたならば、その存在を知るべくもない。併し、このやうな意識の效果は無意識的現象とは遙かに違つた心理的性質を示し、內的知覺では一を他の代償として認識することが殆ど不可能なほどである。醫者は推論の過程に依つて、意識上の效果から進んで無意識心理現象へと侵入すべき權利を自分のために保有しておかねばならぬ。醫者はこのやうにして、意識上の效果が無意識的現象のたゞ緣遠い心理的成果に過ぎず、後者はそのまゝで意識となつたのではなく、また如何樣にしてか意識となつて現れない內にも存在し活躍しつゝあつたことを知るのである。

【註】（一）リップス Theodor Lippsはドイツに於ける心理派の美學者。わが國に紹介せられて既に久しい。『美學』上下二卷の譯は稻垣末松氏に依つて、『倫理學の根本問題』の譯は藤井健次郞博士に依つてなされてゐる。こゝに言及してあるのは一八九七年ミュンヘンに開催せられた第三回國際心理學會席上での演說『心理學に於ける無意識の槪念』のことである。最後の項に關しては、フロイドの原著にその脚註があるのである。（譯者）

意識の性質を買被り過ぎることからの反動が、精神の行動への何等かの正しい洞察を得るに就いての缺くべからざる豫備的條件となる。リップスの言に依れば、無意識は精神生活の一般的基礎として

受容せられなければならない。無意識は大圏であつて、その內に意識の小圏が含まれてゐる。一切の意識的なものは無意識の內に豫備的步みを持つが、無意識はこの步みを以て終ることも出來るが、而もなほ心理活動としての十分な價値を要求することが出來る。正しく云へば、無意識こそは眞に心理的なものであるのだ。それの內面性は我等に知られないことは、外的世界が我等に知られないのと正に同じである。さうしてそれが意識の材料を通じて我々に不完全に報告せられることは外的世界が感覺機關の指示に依つて不完全に報告せられるのと同じである。

意識生活と夢の生活との間の隙い反對が棄てられ、無意識心理がそれの本來の位置に指定せられる時には、昔の學者を強く捉へてゐたいろ／＼な夢の問題は問題にならなくなるであらう。かくて、我我がその所業に感服したところの活動の多くは、最早夢のものでなく、晝間にもまた働いてゐる無意識思想のものであるといふことになる。もしシェルネルの云ふやうに、夢が肉體の象徴的表象を弄するものゝ如くであるならば、それは恐らく性的感情に後から與へられた或る無意識的空想の仕業であり、またこれ等の空想は夢の中に現はれるばかりでなく、ヒステリー恐怖症その他の病徵にも現はれる事を、我々は知るのである。もし夢が晝間の仕事を受け繼ぎ、決着させ、また價値ある思ひ付きを光明に持出すことをさへするならば、我々はたゞその夢から夢の仕事の離れ業としての夢の扮裝を引

剝がし、また心の深みの中なる仄暗い諸々の力からの援助のしるしを引剝がさねばならない。（タルティニ Tartini のソナタの夢に於ける惡魔と比較せよ。）知的な仕事それ自身は、晝間にさう云ふ仕事を總てする同じ精神的諸勢力に歸せられねばならぬ。我々は智力的生産や藝術的生産に就いてさへも意識的性質を恐らくあまりに強く買被り過ぎる傾きがあらう。ゲーテやヘルムホルツのやうな非常に生產的な人々の云ふところに依ると、彼等の創作の最も本質的な獨創的な部分は落想（アインファル）の形で與へられ、また殆ど出來上つたまゝで彼等の知覺に達することが分る。それ以外の場合では一切の精神的諸勢力が力を合せるのであるから、意識の活動が援助に加はつたからとて別に不思議はない。併し意識の活動が參加したところではどこでも他の一切の活動を掩蔽してしまふことが許されると云ふのは、あまりに特權の濫用である。

夢の歷史的意識を特別の題目として採り上げることは、あまり價値のあることではあるまい。例へば一人の頭目が或る夢に促されて思ひ切つた企てに從ひ、それが成功して歷史が變化したと云つたやうな場合には、そこに新しい問題が生ずるとすれば、夢を外部からの力と考へて、他の一切の見馴れた精神的諸勢力と對比せしめる限りに於いてのみである。併し我々が夢を、晝間は抵抗に壓せられてゐる感情が、夜になつて深い情緖の源泉から援助を受けて發する形であると見なすならば、問題でな

くなるわけである。併し昔の人が夢を非常に尊重したのは心理上の推察としては正しい根據に立つてゐるのである。それは心の中にある征服し難いもの、打破し難いものに對し、また夢の願望を供するところの、さうして吾人もまた吾人の無意識の内に見出すところの惡鬼的（超自然的）なものに對して拂ふ尊敬である。

私が『吾人の無意識の内に』と云ふ言葉を用ゐるのは偶然ではないのだ。何となれば、我々がかく名付けるところのものは哲學者たちの無意識ともリップスの無意識とも符合しないからである。リップスの場合に於いては、たゞ意識の反對をのみ意味するために用ゐられてゐる。意識的現象の外にまた無意識心理的現象があるとの認識を、彼は熱烈に力強く守護したのである。リップスは更に、一切の精神的なものは無意識として存在するが、併しその内或るものはまた意識としても存在し得ると云つた。併し、この說を證明するために、吾人は夢やヒステリー徵候構成の現象を引張り出して來たのではない。常態的生活の觀察だけでもそれの正しく疑ひなきことを證するに充分である。我々が精神病徵構成の分析に依つて、いや、その仲間の隨一たる夢の分析に依つて知り得た新事實は、無意識的なものが――從つて精神的なものが――二つの別々の區劃の一機能として起るといふことである、またそれが常態の精神生活に於いてすらも起るといふことである。從つてそこに二種類の無意識がある。

それはまた心理學者たちの區別を知らないところのものである。兩者ともに心理學上の意味に於いては無意識であるが、併し吾人の意味に於いては、第一のもの(吾人の所謂無意識)はまた意識となり得ないが、併し第二のものは、その亢奮が、或る法則を遵奉すれば、勿論やはり檢閲を受けるが、無意識に逆戻りする心配はなしに、意識に達し得るもので、從つてこれを前意識と呼ぶのである。亢奮が意識に達するためには何とも變へやうのないいろ〲な目に會つたり、次々へとさま〲な個所を通つて來なければならないことは、檢閲に依つて變へられるために我々に分つたのであるが、それ等の事柄のために我々はそれを空間に比較するやうな氣持になつたのである。二區劃間の相互關係、竝びにそれ等の意識に對する關係を説明して、吾人は前意識が無意識界と意識界との中間にある屛風のやうなものであると云つた。前意識界は意識への近接を遮るのみならず、また有意的言動への侵入を支配し、また言動のエネルギーの總量(その一部分は注意として我々に馴染みのものである)を送り出すことが出來る。(一)

【註】(一) これに關しては余の『精神分析學に於ける無意識の概念について』,,Bemerkungen über den Begriff des Unbewussten in der Psychoanalyse‘‘ を參照。この論文の中に『無意識』てふ意義さま〲なる語が、記述的、動的、體系的な意味に於いて説明されてゐる。

吾人はまた精神神經症に關する最近の文獻中に優勢を占めて來た上部意識と下部意識との區別をも敬遠しておかねばならぬ。何となれば、そのやうな區別は心理と意識とが同一であることを强調してゐるらしいからである。

そこで、嘗てはあれほどの全能にして且つ全部を掩蔽する底の勢力を有した意識の役割はどうなつたか。精神的諸性質を知覺すべき感覺的機關の役割以外には何もない。我々が圖式を企てた根本的觀念に從へば、我々は意識知覺を一つの特別の區劃(卽ち意識)の獨自の活動としてのみ考へることが出來る。この區劃はその機構的特質に於いては知覺區劃と同じものであると考へる。それ故に性質に依つて亢奮せしむることを得るが、變化の痕跡を留めることは出來ない、卽ち記憶を缺いてゐる。知覺區劃の感覺機關を以て外界に對してゐる精神裝置は意識の感覺機關に對してはそれ自身外界である。これが目的論的に是認せらるゝのはこの關係に依る。吾人はこゝで再び、裝置の構造を支配するらしく思はれる個所の連續（インスタンツエンツーグ）の原則に直面する。亢奮せる材料は意識感覺機關に向けて二方面から流れて來る。一方は知覺區劃からであつて、諸性質に依つて條件づけられたその區劃の亢奮は意識知覺に來るまでに多分新たな仕上げを受けるらしいのである。第二の方は裝置それ自身の內面からであつて、それの量的諸現象はそれ等が或る變化を受けるや否や快不快の質的連續として知覺せられる。

正確な、さうして非常に込入つた思想の構造は意識の協力なくてすら可能であることを知つてゐる哲學者たちは、何等かの機能を意識に歸するの困難であることを承知してゐる。意識は彼等には完成された精神過程の餘分な反映と思はれたのである。我々の意識界は知覺區劃と類似してゐるが故に、我々はこのやうなまごつきから助かつてゐるのである。我々の感覺機關に依る知覺は結局入り來る感覺的亢奮がその上で分散する諸々の道へと注意の纒綿をさし向けるやうになる。知覺區劃の質的亢奮は精神裝置の言動量に事へてその發出の制規者となる。吾人は同様の機能を意識界の上側の感覺的機關に要求することが出來る。新しい諸性質を知覺することに依つて、その機關は言動の纒綿量の指導と適當な分布との方へと新たな寄與を供する。快と不快(苦痛)とを知覺することに依つてその機關は普通には無意識的に、また量の轉位に依つて働く精神裝置の内部に於いて、纒綿の道程に影響を及ぼすのである。始めは不快(逃避の)原則が纒綿の轉位を自動的に規制してゐるやうであるが、併しこれ等の性質が意識せられると第二のもつと精緻な規制が加はつて、それが第一のに反對をさへ爲し、不快の解放に關係してゐるものを纒綿し發展させようとの本來の工夫に反した位置に裝置を置くことに依つて、この裝置の働く力を完全にすることもあり得るのだ。吾人は神經症の心理からして、この裝置の機能的活動に於ける一つの重要な役割が、感覺機關の質的亢奮に依るそのやうな規則に與へられ

てゐる事を知るのである。不快逃避の第一次原則の自動的支配と、それに聯關する心的能力の制限とは、感覺的規制に依つて破られるが、この規制がまた自動的なのである。本來合目的々ではあるが、而かも結局は禁壓と心の支配とを有害にも拒けるところの抑壓なるものは、知覺に依るよりは追憶に依つて一層容易に完成される事を我々は知る、何となれば、追憶に於いては、精神的感覺機關の亢奮に依つて纏綿に何等の増加がないからである。拒けらるべき一觀念が、抑壓に降伏したゝめに、一度び意識的となり損ふと、他の機會に於いては、他の理由で意識知覺から撤回せられたがためにのみ抑壓され得るのである。これが、完成した抑壓を逆戻しするために療病法が用ゐてゐる暗示である。

意識感覺機關が言動量の上に及ぼす規制的感化に依つて生ずる過度纏綿の價値は、目的論的關係に於いては、新らしい一聯の性質を創造することに依つて、從つて人間をして動物の上に立たしむる新たな規制を創造することに依つて、最もよく證明せられる。何となれば、心的現象は、たゞそれ等の現象に隨伴する快苦の亢奮のあるまでは、それ自身に於いては無性質である。その亢奮は實は思想を攪亂し得るものとして、抑留しておかねばならないものである。それ等の心的現象に性質を賦與するために、人間に於いてはそれ等は言葉の記憶が聯想されてゐる。その記憶の質的殘物は意識の注意を己れの上に牽付けるに足り、その意識からしてまた新たな言動のエネルギーを思想の上に賦與するに

足るのである。

意識問題の全多樣性は、ヒステリーの心理現象を了解することに依つてのみ大觀することが出來る。すると、前意識から意識の纏綿へと移る時には、無意識と前意識との間の檢閱と同じやうな檢閱を受けねばならないやうな感じがあるのである。(二) この檢閱はまた或る量的限界に達した時にのみ始めて働き出すものであるから、あまり激しからぬ思想構成はこれを受けないのである。意識から抑止せらるゝものや、制限の下にあつて意識へ侵入するものゝ、ありとあらゆる場合は、精神神經症の現象の型箱の内に一まとめになつて含まれてゐる。あらゆる場合は、檢閱と意識との間の內面的な、二面的な關係に悉く向つてゐる。私はこれ等の心理學上の論議を、そのやうな二つの出來事の報告を以つて結ばうと思ふ。

【註】(一) 後に發展したフロイドの考へ、例へば『自我とエス』などに現れた考へに於いては、前意識、意識間の檢閱は假定せられないことになつてゐるやうである。本書二〇三頁參照。(譯者)

先年ある公會のあつた時、私は一人の利發さうな、こだはらないやうな風に見える娘に逢つた。女の身なりと云ふものは大抵一糸亂れぬものだが、彼女の服裝は大分變つてゐた。片方の靴足袋は垂れ下り、腰のボタンは二つばかりはづれてゐた。彼女は片脚が痛むと云つて、出して見せろと云はれも

せぬのに出して見せた。彼女の病苦の主要な點は、併し、彼女の云つたまゝだと、次のやうであつた――彼女は身體の中に何か刺されて、それが拔けたり突込まれたりするやうで、そのために身體中が震へるやうな感じがする。そのために時々全身が剛張る。これを聽いて、そこに居合せた私の同僚はチラと私の方を見た。彼にはかう云ふ病苦はすつかり分つてゐたのだ。我々二人には患者の母親がこの事に就いて、何も考へてをらぬのを不思議に思つたのであつた。勿論、彼女はその娘が話したやうな立場に幾度も出會したに相違ないのだ。娘の方はと云へば、自分の云つた言葉の意味は全く考へ及ばず、またそれを口外するやうな事は決してなかつた。こゝにおいては檢閲は非常にうまく欺かれてゐるのだ。そのために無邪氣な病苦の假面を被つてファンタシーは、當然ならば前意識に留まつてゐなければならないのだが、意識面へ出て來てゐるのである。

今一つの實例――筋肉痙攣（チック・コンヴルシフ）、ヒステリー的嘔吐、頭痛その他を惱んでゐる十四歳の少年を私は精神分析で取扱ひ始めた。私は彼に眼を閉ぢるといろんな影像が見えたり考へが浮んだりするだらうからそれを話して御覽と云つた。彼はそれに答へて影像を話した。彼が私のところへ來る前に受けた最後の印象が、彼の記憶の内にあり〳〵と浮んで來た。彼は叔父と將棋をさして來たので、今その將棋盤が眼前に彷彿した。彼は有利な、或は不利な、さま〴〵な位置や、かう動いては安全でないなどと評

釋した。

彼はやがて盤の上に短刀の横たはるのを見た。それは彼の父親のものであるが、彼の空想がそれをそこへ持つて來たのだ。その内に鎌が盤上に横たはつたが、次に大鎌がそこに加はつた。さうして最後に、一人の老農夫が彼の遠くの郷里の家の前で草を刈つてゐるやうなところが見えた。數日の後に私はこの一聯の影像の意味が分つた。不愉快な家族關係が彼を神經的にしたのだ。彼の場合は、父が喧しやで怒りつぽく、母との仲が惡い、さうしてその敎育法は威嚇であつた。父はおとなしくて優しい母を離別して、或る日新しい母として若い女を引張り込んだ。十四歳になる少年の病氣はその數日後に勃發した。彼が父親に對する憤りを抑へてゐたところから、あのやうな影像が理解し得べき暗示となつて現れたのである。その材料は神話からの回想に獲て來てゐる。鎌はツォイスがその父を去勢した時に用ゐたものだ。大鎌と農夫のやうなものはクロースを表してゐる。クロースは亂暴な老人でその子供をとつて喰うたゝめに、ツォイスが非常に不孝なことながら復讐したのであつた。父の結婚は、少年が以前に父から受けた批難と威嚇を返すべき機會を少年に與へた。彼が以前に叱られたのは、彼が性器（將棋盤、禁止せられた動き、人を殺すことの出來る短刀）を持遊んだためである。我々はこゝに、長く抑壓された記憶とその記憶の無意識的殘物が無意味な影像の假面を被つて、それ等に殘

し與へられてゐた迂路をとつて意識の中へ滑り込んで來たのを見るのである。

かう云ふ次第であるから、私は夢の研究の理論的價値を、心理學上の知識への貢獻や神經症理解の準備の中に求めよう。我々の現在の知識狀態でも治療し得べき形の精神神經症に幸福な療病上の影響を及ぼしてゐるのであるから、精神裝置の構造と活動とを充分に知悉したならば、その意義如何に大であるか、何人がそれを豫見し得よう。或る人は問ふかも知れない、そのやうな研究が、心靈上の知識に對して、個々人格の祕かな特殊性を發見することに對して、如何なる實際的價値があるかと。夢から分つた無意識的感情は、精神生活に於ける現實的勢力の價値を持たぬであらうか。今日では夢を創つてゐるが、何れの日か他のものを創るでもあらうところの、禁壓されてゐる願望の倫理的意義を我々は輕視してよいであらうか。

これ等の問題は私の答へるべき限りでないやうに思ふ。私は進んでこの方面にまで夢の問題を考へてをらぬのである。併しながら、とにかく私はローマの皇帝の臣下の一人が皇帝を殺した夢を見たからと云つてその臣下を處刑した皇帝を正しいとは信じない。その皇帝はまづその夢の意義を發見しようと努力すべきであつた。さうすればその夢は外から見たのとは非常に違つたものであつたに違ひないと思ふ。また別の內容を持つた一つの夢が聖上に對してこのやうな不敬の意味を持つてゐたにして

も、それはなほプラトーンの言葉——惡人が實際になすところを善人は夢で滿足する——を想ひ起して見るべき場合であらう。それ故に、私は夢には自由を與へるのが最上であるとの意見である。無意識的願望には何等かの現實性を、又如何なる意味に於いて、歸すべきか否か、それには卽座に答へる用意はない。總ての過渡的思想、中間的思想には、現實性は勿論否定せられねばならぬ。もし我々が最後の最も眞實なる表現に齎された無意識願望を持合せてゐるならば、吾人は、その精神的現實は一つの特殊な存在形式であつて、物質的現實と混同すべからざるものであると云はねばならぬ。して見れば人々が、自分達の夢の不道德性を引受けて苦悶することは甚だ間違つたことのやうに思へる。精神裝置の機能の働きの價値を認め、意識無意識間の關係を洞察することに依つて、我々の夢や空想生活の非倫理性の問題は消失する。

『夢が現在(現實)への關係に就いて我々に示したものを、我々はやがてまた意識の中に捜さうとする。さうして我々は、分析の擴大鏡の下に見た怪物を再び微生物として見たとて、そんなに仰天するほどのこともなからう』(ハンス・ザックス)

人間の性格判斷の實際の必要に對しては、大抵は行爲や意識的な自己表出の意向だけで充分である。就中、行爲は第一番に置かるべきもので、何となれば意識にまで出た多くの衝動は心的生活の實際の

力に依つて、行爲の衝動の中へ流入する前に止揚されてしまふからである。實際、衝動がその途上に於いて何等精神的の障碍に出會さないことの屢々であるのは、無意識が後になつて抵抗に會ふことが確かだからである。とにかく、我々の德がそこから誇りかに萠え出でた、その引搔きまはされた土壌を知つておくのは、ためになることである。四方八方に動的に進み行く錯雜した人間の性格は、我々の陳くなつた道德哲學の供し得るやうな單純な策を以てしては、決着を與へることは出來ない。

では、未來を豫知することに就いての夢の價値は如何。

それは吾人も何とも考へがない。かの禁ぜられた『祕奥（オツクルト）』の現象を科學的探究の範圍に持來さうとの努力を、我々が如何に謙讓に如何に公平に基礎づけようとも、我々はなほこの研究が我々のために二つのものを打開しないであらうとの期待を失はないであらう。即ち、死者がなほその存在を續けてゐるとの信念と、何とも計算のしようのない未來を認識するとの信念とである。我々はそれを、過去を知り得るとの信念と置換へたく思ふ。何となれば、夢は如何なる意味に於いても過去から發生するからである。慥に、昔の人が夢は未來を啓示すると信じたのは、全然眞理なきに非ずである。願望を充足せられたものとして表すことに依り、夢は慥に我々を未來に導く。併しこの未來は夢の本人にとつては現在であるから、打破し難い願望に依つて過去の俤に似させせられてゐるのである。

夢の註釋 終

夢と童話

始めて『國際精神分析雜誌』„Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse“ Bd. I (1913) に現れ、次いで『神經病學小論鈔』„Sammlung kleiner Schriften zur Neurosenlehre“ に收錄せらる。原書全集第三卷收載。

我々の國民童話が我々の兒童の精神生活に對して如何なる意義を持つて來たかを精神分析に依つて知ると云ふ事は何等不思議に思ふほどの事ではない。或る人々に於いては自分の好きな童話の記憶が自分自身の幼時記憶の代りになつてゐるのである。彼等に於いては童話が陰蔽記憶にまで高まつてゐるのである。

夢の中でのいろ〳〵な要素や立場が實は童話から來てゐると云ふ場合は決して少くはない。當面の個所を解釋するに當つて被分析者は、彼等にとつて重要なる童話を思ひ付くことがある。かう云ふ事實は屢々起るが、それ等の內から私はこゝに二つの實例を擧げて見よう。併し夢の本人の幼兒時代の物語や神經症に對して童話が如何なる關係を持つてゐるかは、たゞ暗示するに止めておく。分析者にとつて最も重大な關係を云ひ落す危險はあるが……。

一

或る若い婦人が夫の訪問を受けて、その二三日後に見た夢。――彼女は褐色づくめの室にゐる。一つの小さな戶口を通つて人が險しい階段を昇つて來るのである。さうしてこの階段を一人の妙な小人が昇つて部屋に這入つて來る。小さくて、白髮で、禿頭で、赤鼻で、その小人が部屋の中で彼女の周りで踊り步き、滑稽な身振をし、やがて再び階段の方へと下りて行く。彼は灰色の着物を着てゐたが

それの形はいろ／＼に見える。（訂正――彼は長い黒い上衣と灰色の腰着とを身につけてゐた。）

分析――小人の樣子からして小人は彼女の舅であることが、これ以上訂正變化させることなしに(一)分つた。ところが彼女は間もなくルムペルスティルツヘン „Rumpelstilzchen(一) の民話を思ひ付いた。ルムペルスティルツヘンも夢の中の小人のやうに滑稽に踊り廻つて、その時に自分の名前を女王に知られてしまふのであつた。そのために彼は女王の第一子を自分に貰ひ受ける約束をふいにし、憤りのあまり自分自身を二つに切裂くのであつた。(二)

註（一）頭髮が短いと云ふ點だけが違つてゐた。彼女の舅は髮を長くしてゐた。

（二）ドイツ民話の主人公。熱情的の醜い小人。或る水車小屋の娘が藁を紡いで金にせよと王に命ぜられる。彼女の第一子を貰ふと云ふ條件で小人がこれを彼女のためにしてやる。娘は王に嫁して第一子を擧げた時あまりに悲嘆してゐるので、小人も可愛さうになり三日以内に自分の名前を云ひあてたならば、約束を廢棄すると云ふ。二日の間いろ／＼考へあぐんだが空しく過ぎて、三日目に女王の一侍女が妙な歌を聞いた。その歌に曰く、

『女王さまには御存じないの

わたしの名前はルムペルスティルツヘンだのに……』

女王は侍女からこれを聞いて子供は救はれ、小人は憤りあまりに自身を眞二つにした。（譯者）

夢の日に彼女自身が夫に對して非常に怒り『あんな男、眞二つにしてくれたいわ』と云つたのであつた。

褐色の室と云ふのが、まづ困りものである。彼女の思ひ當るのはたゞ彼女の兩親の家の茶の間である。その室は板が張り回してあつて、その木の色が褐色であつた。次に彼女は寢臺の話をした。その寢臺では二人で眠るのは甚だ窮屈であつた。二三日前に他國の寢臺の話が出た時に、彼女は何か甚だヘマな事――大したことでもないんだと彼女は云ふ――を云つた。それでそこに居合せた人達は大笑ひをした。

こゝまで來れば夢はもう分る。あの褐色の室(一)と云ふは寢臺である。茶の間と關係のあるところを見ると新婚の寢臺である。(二)彼女はつまり、新婚の寢所にゐるわけである。這入つて來たのは彼女の若い夫でなければならない。彼は幾月もの間遠く離れてゐたが、新婚の寢所に於ける自分の役割を果すためには彼女の許に歸つて來たのである。ところがまづ其處へ這入つて來たのは夫の父親である。舅である。

註（一）木は人々の知る通り、屢々女又は母の象徵となる。(materia, Madeira)

（二）食卓と寢臺とは結婚を象徵してゐる。(大槻憲二譯『夢の註釋』一一一頁參照。)

この第一の分析解剖の背後に、人々は深いところにある純粋に性的な内容を瞥見するのである。室とは今や膣である。（室は彼女の内にある、夢ではそれが逆になつてゐる。）澁面を作つたり滑稽な樣子をしたりする小人は、男性器である。狹い戶口や嶮しい階段は、夢の中の立場が性交を表はしてゐることを確證してゐる。我々は平生、子供を男性器の象徵とする慣はしになつてゐる。倂しこの場合父親が男性器の代りになつてゐるとすれば、それに相當の意味のあることが理解されるであらう。

まだ保留されてゐる夢の殘部を解決して見るならば、分析解釋上我々は愈々確實になつて來る。透明の灰色の着衣とはコンドムであることが解つた。子供を防止することとの關心、夫のこの來訪が第二兒の胤を置いて行くのでないかとの心配がこの夢を惹起す力の一つになつてゐることを知ることが出來る。

黑衣、それは彼女の夫を立派に見せるのである。彼女は夫が平生の着物の代りに黑衣を着てゐるやうに云はうと思つてゐる。つまり黑衣を着てゐる時に夫は彼女に好ましく見える。黑の上衣と灰色の下衣とは二つの違つた、相互に重なり合ふ層である。着物はさう云ふ風になさい、そしたら私は貴方が好きと云ふわけ。

ルムペルスティルツヘンは夢の實際思想――晝間の殘物――と、一つの美しき反對關係に依つて結

付いてゐる。彼は童話に於いては女王から第一子を引取るため來るのである。夢に於いては小人は父となつて來る。何となれば第二兒を竊したからである。併しルムペルスティツヘンはまたもつと深い幼兒的な夢の思想層へと入る導きとなつてゐる。をどけた小さな奴さん、その名を人々は知りもせず、而もその秘密を人々の知りたがつてをり、さうしてその者は異常な藝當（童話に於いては藁を變じて金にする）を心得てをる。彼を人々が憤るのは、つまりその所有物を嫉妬するので、少女の男性器嫉妬(ペニスナイド)である。この要素こそは神經症の根源に關係のあるものであるが、前にも云つた通り、こゝではただこれだけを云ふに止めておく。夢の中の小人の髮のないことも恐らく去勢(カストラチオン)（男性器嫉妬）問題と多少の關係があらう。

もし人々が明白になつてゐる實例に就いて、夢の本人がその童話を如何に取扱ひ、また如何なる個所にそれを置いてゐるかを注意して見るならば、それに依つて人々は恐らくまだ判然してゐなかつた童話そのものゝ解釋を得ることになるのであらう。

二

或る若い男がその五歳當時に、兩親がそれまで持つてゐた田舍の土地を他の領地に換へた事情について或る幼時記憶を想起したが、その若者が最早期の夢（その夢はまだ始めの領地に居た頃の夢）を

次のやうに語つた。

『私は夢を見た。それは夜で、私は寝床に這入つてゐた。(私の寝臺は足の方を窓邊の方にして横たはつてゐた。その窓の前に二三の古い胡桃の木が立つてゐた。私の夢見た時分は冬で、さうして夜であつたことを私は知つてゐる。)急に窓が自然に開いて、窓の前の胡桃の老木の上に數頭の白い狼が居るのが見えて私は非常に驚いた。そこには六七頭はゐた。狼どもは全身白毛で、寧ろ狐か番羊犬のやうに見えた。何故ならば彼等は狐のやうな大きな尾を持ち、番羊犬が何かに聽耳を立てるやう耳を立てゝゐたからである。狼に喰はれると思つたせいか非常に不安になつて、私は悲鳴を擧げた……と眼が覺めた。私の守り女はどうしたのかと思つて急いで私の寝臺のところへ來た。暫くたつてからやつとのことで私はそれが夢であつたと解つた。それほどあり〱まざ〱と窓が開き木の上に狼のゐるところが眼に見えたのであつた。遂に私は落着いて、やうやく危難から遁れた思ひの内に再び眠りに陷つた。』

『夢の中に於ける唯一の活動は窓の開きであつた。何となれば狼たちは木の梢の上に微動だもせずに靜止して、幹の左右から私の方を見つめてゐたからである。彼等は全身の注意を私に傾けてゐたやうに見えた。――これが私の最初の恐怖の夢であつたと信じてゐる。當時私は三つか四つ、或はせい

〳〵五歳であつた。その時分から十一二歳の頃まで私は始終何か恐ろしいものを夢に見た。』なほその狼のとまつてゐたと云ふ木の畫があつたので、その木の様子が確になつた。夢を分析して見て、なほ次の材料が得られた。

彼にはこの夢と關係させて思ひ出される事があつた。それはその年頃に彼が或る童話の本の中の狼の畫に對して非常な恐怖を示したと云ふ事である。彼よりも甚だ優秀であつた姉はいつも何とか口實の下にその畫を彼につきつけては彼をいぢめてゐた。すると彼は驚天して泣き出すのであつた。この畫には狼は眞直に立ち、足を踏張り、手を延ばし、耳をそば立てゝゐた。彼の云ふところでは、この畫は『赤帽つ子』("Rotkäppchen," "Little Red-Ridinghood")の挿畫になつてゐたのだ。

狼が白いとなつてゐるのはどう云ふわけか。それについて思付くことは、彼の領地の近くに澤山に飼つてあつた羊である。彼は時々父親に連れられてこの羊の群を見に行つた。その時彼は非常に誇らしく幸福に感じた。その後――と云つてもこの夢の一寸前であつたことは確だ――この羊の群の間に悪疫が流行した。父親は Pasteurschüler（パストールシユラー）(一) を招いて種痘をして貰つたが、種痘の後にも相變らず澤山の羊が死んだ。

註（一）パストール Louis Pasteur (1822—1895) の學徒との意。パストールはフランスの化學者、黴菌學者。

家畜に於ける菌發生の豫防法を發見した人。その學徒と云ふので、こゝではたゞ家畜醫と云ふ意味であるが、殊にパストールの名を引合ひに出したのは、この個有名詞が同時にフランス語の『牧羊者』の意味を有することがこゝに重大な關係があるからであらう。(譯者)

どうして狼が木の上に居たのであらうか。それに就いては彼に思ひ當ることがあつた。それは彼が祖父からよく聞かされた話であつた。夢の以前であつたか以後であつたか思ひ出せなかつたが、夢の內容から見ると、慥に夢以前であつたことが分る。話はかうである。――或る裁縫師が部屋に坐して仕事をしてゐた。その時、窓が開いて一頭の狼が這入つて來た。裁縫師は物尺をおつ取つて、追蒐けた。いや（と彼は云ひ直した）狼の尻尾を捕へてこれを引拔いてしまつた。それで狼は驚いて逃げて行つた。暫く經つて後、裁縫師は森に行つた。その時忽ち一群の狼が近付いて來たので、彼は木の上に逃げた。狼どもは始めの程は施すに術がなかつたが、その內にゐた例の尻尾をとられた狼が裁縫師に復讐しようと云ふわけで、一匹々々と上に載つて行つて遂に裁縫師のところまで屆くやうにしようと提案した。彼自身は力強い老狼であつたので、自らこのピラミッドの土臺にならうと云つた。彼等はその通りにした。併し裁縫師は懲してやつた狼のゐるのを知つて突然前と同樣に叫んだ――憶病者の尻尾を摑へるぞ。尻尾のない狼は思ひ出して恐れをなして逃げ出した。他の狼どもゝ轉がるやうにし

て行つてしまつた。

この話の中には、夢の中で狼のとまつてゐた木が出てゐる。併しこの話はまた去勢コムプレクスに關係のあることも疑ひがない。老狼は裁縫師のために尻尾を切取られた。夢の中の狼が狐のやうな尻尾を持つてゐるのは、多分この尻尾のないことへの補償であらう。

何故に六七頭の狼がゐたのであるか。この問題に對しては、私が夢の中の恐ろしい狀景が『赤帽つ子(ロートケプシエン)』の童話に關係があるのではないかと疑ひを出して見るまでは答辯が出來なかつた。この童話を畫に描くとすれば、たゞ二つの場面しかない。一つは赤帽子が森の中で狼に會つてゐるところ、今一つは狼が婆さんの頭巾を被つて寢床に這入つてゐるところだ。であるからその、狀景の記憶の背復には他の童話が匿れてゐなければならなければならない。やがて彼はそれが狼と七頭の小羊の話であるに違ひないと感じた。この話の中には七の數がある。而も六の數字もある。何故ならば、狼は六頭の小羊を喰つて了ふが、一頭だけは時計の箱の中に匿れてゐた。また白と云ふ色もこの童話の中に出て來る。狼は最初に小羊の家を訪れた時、灰色の手をしてゐて小羊にそれと知られ、パン燒屋のところへ行つて手を白く塗つて貰つたからである。二つの童話にはまだ共通の點が澤山にある。兩方ともに狼に喰はれること、肚を裁切ること、喰はれた人間を肚から引張り出すこと、さうしてその代りに重い石を

入れておくこと、最後に惡い狼が出て來ることなど。小羊の童話に於いても木が出て來る。狼は喰つてしまつた後で木の下で横になり、鼾をかいてゐる。

この夢には特別な事情があるから、私はまた別の個所でこの夢を取扱ひ、一層深い解釋を評量とを與へることにする。(二)これは實は幼兒時代から記憶されてゐる恐怖の夢の最初の一つで、それの內容はこの夢の直ぐ後に見た他の夢と關聯して、また本人の子供時分の二三の出來事と關聯して、全然特殊な種類の興味を喚覺したのである。

註(一)『幼兒的神經症者の症狀史から』(原書全集、第八卷)

こゝでは我々は非常に共通點の多い二つの童話――『赤帽つ子』と『狼と七頭の小羊』――とこの夢との關係を論ずるに止めておく。この童話の印象はこの夢見た幼兒に於いては正しい動物恐怖となつて現れてゐる。この正しい動物恐怖は他の類似の場合と如何になる點が違つてゐるかと云ふに、それは恐怖の動物が平生容易に見ることの出來る動物(馬や犬の如き)でなく、たゞ物語や畫本からのみ知られ得る動物であると云ふ點である。

私はまた別の機會に、このやうな動物恐怖が如何なる說明を下すべきものであり、また如何なる意味を有するものであるかを明かにするであらう。たゞ豫めこゝにざつと云ふならば、夢の當人の後年

に於ける神經症が示すところの主要特質と動物恐怖の意義とが甚だ一致すると云ふ事である。父に對する恐怖と云ふことが夢の當人の神經病の最も力強い動機であつた。さうして一切の父代償に對する愛憎二元一如的感情（アムビバレンツ）が彼の生涯を支配してゐるのみならず、また分析取扱ひを受けるに際しての彼の態度を決定してゐるのである。

狼が私の患者に於いてはたゞ最初の父代償に過ぎなかつたとすれば、小羊を喰つた狼の童話、並び赤帽つ子の童話は父に對する幼兒的恐怖以外の何物かをその秘めたる内容として持つてゐるのでないかとの疑問が生ずる。(二)私の患者の父親は世の多くの父親と同じで、子供等に圍まれてゐる間に『優しき嘲罵』を彼等に加へ、息子を玩具にして遊んでゐる間に冗談半分に『坊やを喰べちやう』などゝ一再ならず云つたに相違ない。私の或る婦人患者は嘗て私に云つたことがある。彼女の二人の子供は決してお祖父さんに親しまない、それはお祖父さんが孫を遊ばせてゐた間に時々冗談にお腹を割いてやると云ふからである……と。

註　(一)本全集第五卷二〇〇頁參照。

附錄

精神分析學語彙

凡例

一、譯語は東京精神分析學研究所の決定に懸る。但し說明は譯者の責任である。

一、この語彙は假りに英語を主にしてある。

一、現在の歐洲語として共通的に用ゐられてゐる古典言語出身語は、別にその所屬を明かにしなかつた。

一、こゝに集められてゐる語は、總て本書中に發見せらるゝものゝみでない事は、勿論である。併し、務めて索引としての役目をも果させるやうにしておいたつもりである。

A

abasia　歩行不能症。

abolia　意志薄弱症。

abreaction（英）Abreaktion（獨）アブレアクション、（無意識に落された不快な經驗を分析を受ける内言語動作として再經驗することに依つて症狀を消散せしむること。）

adolescence（英）靑年期。

affect（英）Affekt（獨）感情基礎、

agoraphobia（希）Platzangst（獨）外出恐怖症、臨場恐怖症（本書一一五頁參照）

algolagnia　苦痛快感（苦痛を受授し亢奮すること、加虐被虐ともに云ふ）

allo-erotism（英）對他性感（自己性感の反對のもの）

ambivalence（英）Ambivalenz（獨）アムビヴレンツ（並存性とも譯すべきか。矛盾したものが同時に無意識中に存すること。例へば父に對する愛憎兩極の並存の如き。）

amnesia　健忘。

anaclitic type of love（英）Anlehnungstypus der Liebe（獨）（幼兒期性對象に靠れかゝつて保持された愛、ナルシサス型の愛と對比す。アナクリチックとは靠れるの意。）

anamnesia（健忘せしものを復活せしむること。）

anal erotism（英）肛門性感。

anesthesia　不感性（女性に云ふ。）

Angstneurose（獨）不安神經症。

anxiety（英）Angst（獨）危惧、恐怖、不安。

aphonia　失語症。

arc de cercle（佛）Hysterisches Bogen（獨）背反弓。

auto-erotism（英）自己性感（自戀以前のもの）

B

beating phantasy（英）打擲ファンタジー（人の打たるるを見て、或はそれに類する場面を想像して亢奮すること。）

bed-wetting（英）夜尿。

bipolarity（英）兩極性。

bisexual（英）兩性的。

blunder（英）失言。誤謬。

bulimia　多食症。

夢の註釋

C

castration（英）Entmannung（獨） 去勢。
catalepsy 强硬症狀（催眠術をかけられた狀態の如き）
catatonia 緊張症。
catharsis（希） 淨化（作用、アブレアクチョンに似たるもの。平たく云へば氣をぬくこと。）
cathexes,（希）Besetzung（獨） 纏綿（エネルギーの發出してまつはること、一つの觀念に感情をまつはらせて意義あらしむること。二三二頁參照。）
censor（英）Zensur（獨） 檢閱。
chimney-sweeping（英） 煙突掃除（精神分析獨特のアブレアクチョンの療法を云ふ。）
claustrophobia 密迫恐怖症（閉めた場所或は狹い場所を恐れる症。）
cleptomania 盜癖。
climacteric 更年期。
cloaca phantasy（英） クロアカ・フアンタシー、腸管出產擬想。
cloaca theory（英） 腸管出產說。（同前。）
cognition（英）Erkenntnis（獨） 認識。
coitus reservatus 中絕性交。
compensation（英） 補償。
complex（英）Komplex（獨） コムプレツクス、（結構、錯綜など、本書一〇二頁參照。）
component instinct（英） 部分本能（他のものと結合して完全な本能となるもの。例へばサデイズムのみては本能とならず、サドマゾヒズムにて本能となる。）
compression（英）Kompression（獨） 壓縮（凝縮に等し。本書二四頁、及び二六〇參照。）
compromise-formation（英）Kompromissbildung（獨） 互讓構成。妥協形成。
concealing-memory（英） 隱蔽記憶、思ひ違ひ（cover-mem. Deckerinnerung など〻同じ。）
condensation（英）Verdichtung（獨） 凝縮作用。
constellation（英）Konstellation（獨） 觀念群座（本書『抑壓』章二五八頁參照。）
contamination（英） 汚染。（言葉の）
contraceptives 避姙法。
contractures（hysterical）（英） 强直症狀。
conversion（英）（精神作用の肉體轉換、例へばヒステリ

ー又は癲癇の發作、麻痺、痙攣の如きもの。）

convulsions（英） 痙攣（tic 參照）

coprophilia 弄糞症。

counter-transference（英）Gegenübertragung（獨）逆轉嫁。

counter-will（英） 逆意志。

counter-wish-dream（英）Gegenwunschtraum（獨）逆願望の夢。（本書九五頁參照。）

cover-memory（英）Deckerinnerung（獨） 思ひ違ひ（無意識的願望による。concealing-mem. 參照。）

cryptamnesia 不完記憶症。

cunnilingus 吸核症。

cyclothymia 鬱躁狂。

D

day-dream（英）Träumerei（獨） 白日夢、白晝夢。

defaecation 排糞。

defence reaction（英） 防禦作用。

defloration（英） 破瓜（本書一三七頁參照。）

déjà vu（佛） 熟感、（一度住んだことがあるとの感、本書一〇五頁參照。）

delusion（英）Wahn（獨） 妄覺。

dementia paralytica 麻痺性痴呆症。

dementia paranoid 妄想性痴呆症。

dementia praecox 早發性痴呆症。

dementia senility 老耄性痴呆症。

demonomania 憑きもの（本書二五〇頁參照。）

desire（英）Begier（獨） 慾望。

disturbance（英）Störung（獨） 攪亂、邪魔、妨げ。

determinant（英） 決定要素。

determinism（英） 定命、定命觀。

diarrhoea 下痢。

dipsomania 酒癖。

displacement（英）Verschiebung（獨） 轉位。

distortion（英）Entstellung（獨） 歪み。

dramatization（英）Darstellbarkeit（獨） 戲曲化。劇化。

dromomania 放浪症。

dysphoria 憂愁。

dyspnoea 呼吸困難。

E

ego-cathexes（英） 自我纏綿。
ego-ideal（英） 理想我。
ego instinct（英） 自我本能（性本能以外の本能。）
Elektrakomplex（獨） エレクトラ・コムプレックス（女兒の母に對するエディポス的感情。）
emotion（英）（意識的）情緒。
empathy（英） 共感（精神分析學は無意識の學問なれば客觀的證明は十分になし難い場合あり、これなくして相互に會得し合ふは共感あるに依るといふ。）
energy（英）Energie（獨） エネルギー。
enuresis 尿遺症。
erogenous zone（英） 性的帶域。
erotomania 色情狂。
Erregung（獨） 亢奮。
erroneously carried-out action（英）（自動的のあてはづれ、無意識願望によるあてはづれ。）
es（獨）id（羅） エス（非人稱的の自我、何々のやうな氣がすると云ふその本體。）
euphoria 怡樂感（樂天狂の如きもの。）
exhibitionism（英） 露出症。
extraversion（英） 外向。

F

faulty act, action（英） 不全行爲、不全行動。
feeling（英）Gefühl（獨） 感情。
fellatio 吸莖症。
fetichism（英） 崇物症（愛する對象の一部分だけを得て性的の滿足を感ずること。）
fixation（英） 定着。
folio de toucher（佛） 接觸强迫症。
folk-lore（英）Volkskunde（獨）民間傳承。
foreboding（英）Ahnung（獨） 豫感。
foreconscious,the（英）Vorbewusste,das（獨） 前意識。
forepleasure（英） 豫備快感（性交などの。）
fractionary interpretation of dreams（英） 夢の斷片的註釋。（本書一六五頁參照。）
frigidity（英）die Kälte（獨） 冷感症（女性に云ふ。）
fugue（佛、英） 家出症、神かくし、放浪症。

function（英）Funktion（獨） 機能。

H

hallucination（英）Halluzination（獨） 幻覺（illusion 參照。）

hedonism（英）Hedonismus（獨） 快樂說。

hermaphrodites,（bisexual） 男女兩性具備。

heterosexuality（英） 異性愛。

homosexuality（英）Homosexualität（獨） 同性愛。

I

identification（英）Identifizierung（獨） 同一化。

idiogamist（一人以外には不能の男性症者）

illusion（英）Illusion（獨） 錯覺、（多少の客觀的根據あるもの、幻覺と比較のこと）

impotence（英）Impotenz（獨） 不能症（男性に云ふ）

incest（英）Inzest（獨） 骨肉姦、近親姦。

incest barrier（英） 近親相姦禁斷。

infantilism（英） 嬰兒症。

inhibition（英）Hemmung（獨） 禁制。

introjection（英） 攝取（同一化の如きもの）

introversion（英） 內向。

inversion（英）（狹義の）同性愛（これの廣義のものは perversion）

J

Jokaste ヨカステ（エディポスの母

jus primae noctis（羅） 初夜權。

L

lapses in reading（英） 讀落し。

lapsus calami 脫落行爲。

latency period（英） 潛伏期。

latent contents of dream（英） der lantenta Trauminhalt（獨） 夢の潛在內容（本書一三頁參照。）

libido（羅） リビドー、（本書一三〇頁參照。）

libidinal cathexes（英） リビドー纏綿。

M

megalomania 誇大妄想症。

manic-depression insanity（英） 憂鬱躁狂。

manifest contents（英） 顯在内容（本書一三頁參照。）

masochism（英）Masochismus（獨） マゾヒズム、被虐性。

masturbation（英）Onanie（獨） 自慰。

mechanism（英） 機制。

menopause 月經閉止期。

metapsychology（英）Metapsychologie（獨） メタプシヒヨロギー、超心理學、（動的見地と經濟的見地と區劃的見地と三つの見地を綜合した心理學、本書二八五頁脚註紹介の論文の内容はそれに關係あり。）

mixoscopia 性交偸視症。

motility（英）Motilität（獨） 言動、言語動作。

motivate（英） 發動させる。

N

narcissism（英）Narzissmus（獨） ナルチスムス（自惚、自己戀慕。ギリシア神話のナルシサスより來る。）

necrophilia 屍姦症。

neologism（英） 凝集語（個人的の無意識的新造語。）

neuralgia 神經痛。

neurasthenia 神經衰弱。

neurosis（英）Neurose（獨） 神經症。

neurotic（英） 神經症患者。

nosogenic method（英） 發病分類法（病氣の發する事情又は性質に依つて病氣を分類する法。）

nosophobia 恐病症（ヒポコンデリアの如き。）

nostalgia 鄉愁症。

O

Objektbesetzung（獨） 對象纏綿。

obsession（英）Zwang（獨） 強迫。

obsessional neurosis（英） 強迫神經症。

Oedipuskomplex（獨） エディポス・コムプレックス（母を愛し父を排斥するコムプレックス。本書一〇四頁參照。）

oniomania 濫買症。

ontogenesis 個體發達。

ophresiophilia 好臭症（嗅感機能より性的快感を得ること。）

oral erotism（英） 口唇性感。
over-determination（英） Überdeterminierung（獨） 過度決定（二つ以上の條件に依つて決定さるゝこと、本書三〇及び二二三頁參照。）
over-estimation（英） 過信、買被り。

P

paedophilia 愛童症。童姦症。
paralysis（英） 麻痺症。
paramnesia 假性健忘性。
paranoia, Verstandsverwirren（獨） 妄想症。
paranoiac 妄想症患者。
perception（英） Wahrnehmung（獨） 知覺。
perversion（英） 變態性慾（inversion に似たれど、この方は同性愛のみにて perversion はこれを含まず。）
phantasy（英） ファンタシー（本書一〇八頁參照。）
phobia 恐怖症。
phylogenesis（英） 種族發達。
pleasure and pain principle（英） Lust-und Unlust-prinzip（獨） 快（追及並びに）不快（逃避の）原則。
poriomania 徘徊症。
postgenital period（英） 性器後期（性器に性的亢奮の集まる以後の時期。）
post-hypnotic suggestion（英）（催眠術の覺醒後に及ぼす暗示、本書七九頁參照。）
preconscious, the（英） 前意識（foreconscious に同じ）
pregenital period（英） 性器前期。
projection（英） 投出。
pseudologia 虛言症。
psychic（英） 精神（從來の心理學の對象と特に區別した場合。）心理。
psychic apparatus（英） psychische Apparatus（獨） 精神裝置（機構。）
psychic impotence（英） 精神的不能症。
psychoneurotic（英） 神經症患者、精神神經症患者（物的(ソマチツク)の神經症と區別した場合。）
psychosis（英） 精神症。發狂。
puberty（英） Pubertät（獨） 思春期。
Ψ-System（獨） プシ區劃（本書『退行』章一八四頁以下參照。）

R

rationalization（英） 理屈づけ（無意識的動機の替玉を捏造すること、アーネスト・ジョーンズ氏の造語。）

reaction-formation（英） Reaktionsschöpfung（獨） 反應（反動）構成。

reality-testing faculty（英） 現實試驗力。

recollection（英） Erinnerung（獨） 追憶。

regression（英） Regression（獨） 退行（本書『退行』章參照。）

reminiscence（英） 回想。

repression（英） Verdrängung（獨） 抑壓。

reproduction（英） 再現、想起。

resistance（英） Widerstand（獨） 抵抗。

S

sadism（英） Sadismus（獨） サディズム、加虐性。

schizophrenia 早發性痴呆症（Jung, Bleuler の造語）

scoptophilia 偸視症。

screen-memory, cover-memory,（英） 思ひ違ひ（concealing-mem. Deckerinnerung 等參照。）

secondary elaboration（英） sekundäre Bearbeitung（獨） 第二次仕上げ。（本書二三二頁參照。）

sex（英） Geschlecht（獨） 性。

sexuality（英） Sexualität（獨） 性感。

skatologia 弄糞症。

slip of the ear（英） 聞きあやまり。

slip of the tongue（英） Versprechen（獨） 口すべり。（本書二六三頁參照。）

somatic（獨） 物的（精神的の反對、從來の醫學の見方はソマティックであつた。）

somnambulism（英） 夢遊病。

stage（英）（性感發達の時期を云ふ。この時期に四つあり、口唇、肛門、尿道、性器の四つなり。）

sublimation（英） 昇華（作用。）

substitute（英） Ersatz（獨） 代償。

super-ego（英） 超我、超自我、上位自我。

suppression（英） 禁壓。

surrogate（英） 代理（代償、名代、分身など。）

symptom（英） Symptom（獨） 徵候、病徵、症狀。（1

四〇頁參照。）
symptom-formation 徵候構成。
syndrome 症狀群。

T

taboo, tabu（獨） 忌。タブー。
tic チック、筋肉微動（本書二九〇頁參照。）
totem トーテム（『族靈』と譯する人もある。）
transference（英） Übertragung（獨） 轉嫁。
trauma 外傷（精神的のもの。）
topographical（英） 局所的。

U

Überbesetzung 過剩纏綿（本書二五九頁參照）
unconscious, the（英） Unbewusste, das（獨） 無意識。

V

vertigo（羅） Schwindel（獨） 眩暈。
voyeurs, 偸視症患者。

W

wish（英） Wunsch（獨） 願望。
woman with penis（英） 男性器を持てる女（觀音の持物、マリアの幼兒、辨天の琵琶の如きはペニスの象徵。）
dream-work（英） Traumarbeit（獨） 夢の仕事。
womb-phantasy（英） 胎內ファンタシー。
Wunscherfüllungstheorie（獨） 願望充足說。

Z

Zielvorstellung（獨） 目的表象（目的觀、本書『退行』章一六九頁以下參照。）
Zoophilia 獸姦。

昭和四年十二月二十八日印刷
昭和四年十二月三十一日發行
昭和十五年八月十日第七版發行

フロイド精神分析學全集

（夢の註釋）

定價金壹圓八十錢

譯者　大槻憲二
發行者　和田利彦
印刷者　龜谷良一

東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷所　日東印刷株式會社

發行所
東京市日本橋區通三丁目八番地
株式會社 春陽堂書店

振替東京一六一七・電話日本橋五一・一九四八番

フロイド精神分析學全集

（第一卷）　**夢の註釋**　・定價　貳　圓・　・送料　十二錢・　大槻憲二譯

第一章夢に意味あり、第二章夢の機構、第三章何故に夢は願望を扮裝するか、第四章夢の分析、第五章夢に於ける性、第六章夢の忘却、第七章退行、第八章夢に於ける願望充足、第九章夢の機能、第十章第一次的及び第二次的現象——抑壓　附錄、精神分析學語彙（說明付）

（第二卷）　**日常生活の精神分析**　・定價　貳　圓・　・送料　十二錢・　大槻憲二譯

第一章固有名の忘却、第二章外國語の忘却、第三章名稱の忘却と文句の忘却、第四章幼時記憶及び陰蔽記憶について、第五章云ひ損ひ、第六章讀み損ひと書き損ひ、第七章印象及び意圖の忘却、第八章行り損ひ、第九章症狀行爲と偶然行爲、第十章誤り、第十一章複合的行り損ひ、第十二章決定觀・偶然信仰と迷信・樣々の見地

（第三卷）　**社會・宗教・文明**　・定價　貳　圓・　・送料　十二錢・　長谷川誠也譯　大槻憲二譯

（原著者肖像六十六歲當時）

一、**羣衆心理と自我の分析**　第一章緒言、第二章ル・ボンの集團心理說、第三章その他の集團心理說、第四章暗示とリビドー、第五章人爲的集團（敎會と軍隊）、第六章爾餘の諸問題、第七章同一化、第八章惚れ込みと催眠狀態、第九章羣集本能、第十章集團と原始團體、第十一章自我の或る段階、第十二章追錄

二、**宗敎の將來**　第一章以下第十章まで

三、**文明と不滿**　第一章大海原のやうな感情、第二章宗敎は幸福を與へるか、第三章文明とは何か、第四章文明の缺陷、第五章攻擊慾と文明、第六章エロスと死の本能との鬪爭、第七章良心の起源、第八章餘論

フロイド精神分析學全集

夢の註釋

大槻憲二譯

精神分析學研究所

春陽堂

フロイド精神分析學

夢の註釋

精神分析學研究所

大槻憲二譯

フロイド
精神分析
学全集 L

夢の註釋



T・I・P・A・

精神分析学研究所

フロイド

夢の註釋

精神分析学研究所